

# 東方贖罪譚～3人目の覚妖怪～

黒犬51

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは1人の少年の贖罪譚。

感情がなく、それ故、慈悲も、殺意も、他人を思うことすら出来ない。生まれついたその時から利用され、罪を重ね続ける。それならば少年に生きる価値はあるのか。

もし、世界に感情があるとするならば、きっと世界は、彼が生まれる事を望んでいなかった。

注意

私は東方大好きです。

# 目次

## 第1章

### 感情のない少年

1話

洞くつ

1

2話

地獄

7

3話

地霊殿

17

4話

数か量か

22

5話

湯煙

30

6話

罪

36

7話

真実

42

8話

忌避

49

9話

許されざるは一体何か

56

10話

陽光の下へ

63

11話

新聞記者と案内者

69

12話

竹林に佇む館

75

13話

部屋に漂うは蝋燭の煙

81

14話

命知らずは命を捨てる

86

15話

人間とは常に愚鈍な豚である

91

16話

愚かな思想は来世に伝う

102

17話

供述

111

18話

断罪を

117

19話

罪人は日常を謳歌する

123

20話

人々は溢れ、金魚は泳ぐ

134

21話

作られた命

144

22話

罪人は罪状を想起する

153

23話

依存

162

48話	Under The Moon	382
47話	日常	371
46話	ケツイ	354
45話	黒いサードアイ	343
44話	異形	336
43話	平和	321
42話	贖罪譚	311
41話	選択	304
40話	こころ	293
39話	帰還した少年、寄り添う悪魔	283
38話	月下に踊る悪魔	273
37話	闇夜を舞う亡骸	262
36話	罪人と忌み子	252
35話	どこの世界も結局は	245
34話	拷問すらも機会へと	236
33話	それは依存か溺愛か	228
32話	全ては理解のできた事	222
31話	植えつけられた常識は消にくく	214
30話	罪人は救済を始める	207
29話	罪人に教えを請うとは如何なものか	199
28話	ある晴れた日の妖怪の山で	193
27話	上がる黒煙、咲き誇る血の花	187
26話	まるで傀儡か機械か	181
25話	感情のない花々	175
24話	戦い	168

エピソード	470
最終話 幕は降り、罪人は星を望む	461
56話 少年はやり直す	447
55話	442
54話 罰	434
53話 贖罪の果てに	422
52話 護るという事	414
51話 ??????	407
50話 Past	403
49話 chose	393

# 第1章 感情のない少年

## 1話 洞くつ

少年は暗い洞窟の中で目を覚ました。明かりはなく。ただ、時折聞こえる水滴の落下音以外は何もない。闇を溶かしたのかと思う程に暗い中、少年は立ち上がり。手を前に突き出しながら壁を探す。右に少し歩いた所で何かに手が触れた。冷たい感触、少し湿っているように手が濡れた。壁ということの間違いはないだろう。濡れた手を自らのズボンで軽く拭い、壁に手を当て歩き出す。

果てのない闇、出口はあるのだろうか？しかし、なぜこんな場所に自分がいるのかが理解できない。

「ああそうか」

少年は一人納得し、視線を上げ出口を探し、歩き続ける。暗闇の中では時間感覚も方向感覚も失われるため、ここからの脱出はもしかすると出来ないかも知れない。まずまず、歩いている方向が逆であれば二度と出ることにはかなわないかもしれない。だが、どうやって入ったかは覚えていないが、入ったということは出口もあるはずだ。そして、気の所為という可能性も捨てきれないが、背後から何かが追ってきている様な気配を感じた。早く出ることには越したことはないだろう。

「誰だ？」

結果は見えているが、声を掛けてみる。まずまず、この暗闇で俺のことを追ってこれている時点で、人間という可能性は限りなく低いだろう。まだ外が遠いのか、全くなにも見えない。だが、洞窟にいる生物ならば、超音波を使用し、大体の物の位置を把握できる。

「無視か……」

別に今は後をつけられているだけで危害は受けていない。こちらも無視しておいても良いだろう。蝙蝠程度なら別に恐れることもない。今はそれよりも早く出口を見つけなければ、ここで飢え死にしかねない。食料は一週間食べなくても問題ないが、水は三日で限界に達する。それに三日目にはもう碌に動くことはできないだろう。それに加えて先ほどよりも後をつけて来ている何かの気配が接近して来ている。

これはそろそろ策を練らなければいけない。情報の整理をしよう。相手の気配はある、しかし姿は今の所見えない。ここは洞窟、終わりはあるだろうが出られる保証はどこにもない。流星に、蝙蝠がここまですごく追ってくることはあり得るだろうか？それ以前に、蝙蝠は飛行する。飛行となれば音がするはずだ、だがそんな音は全くしない。あるのは少年の呼吸音と地面を踏みしめる音のみ。蝙蝠が音もたてずに歩いて追ってくることはあり得ないだろう。

そうなると人間が最も良い線をいくだろうが、わざわざ俺を追う意味がない。俺は自殺したのだから、死人の俺を追う意味もない。となると肉食獣に狙われているという線もあり得るが、洞窟に人を襲うほど大きな生物が洞窟にいるという事は聞いたことがない。

取り敢えず、少々、逃げた方が良さそうだ。外を目指し、湿った地面を勢いよく蹴りだす。

気配もあとを追って来ているようだ。足音ではなく、少し地面が揺れている事からまさかとは思うが。いや、さすがにそれはないだろうと直感的に否定する。足元は岩だ、モグラであっても掘り進むのは厳しいだろうし、壁に手をつけて歩いているとはいえ同速度で終えるだろうか。嫌な予感が体に走り。少年は護身の為にいつも身につけていた短剣を革製の鞘から取り出し右手に握り、夜の闇に包まれた洞窟内を正体不明から逃げるために走り続けた。

どれだけ走ったろうか、あまり体力も残っていない。暫くして正面に希望が光る。輝かしい太陽のものだろう。地上に出ればなんとか

なるかもしれない。少年はそんな理想を描きながら足を回す。幸運なこと正面から差し込む光が辛うじて足元を照らしてくれるため転ぶ事は少なくなつたはずだ。明かりに頼つて壁についていた左手を離し全速力で駆け出す。すぐに光は迫り、日光のもとに出る。

「地上では無い…？」

間違いなく明るい、上に太陽はなく青空も雲もない、かわりにところどころから突き出た石が。少年は視線光り輝いていた。明るければ、とりあえず良い。どうやら前方には村か街があるようだ。ただ、この距離では規模を把握する事は難しい。だが、小さくはない。ところでころから白煙が昇っているあたり、生活している人もいるはずだ。

距離的にも後方から追ってくるものを無視していくには少し遠すぎる。それに少し先は砂漠地帯のような物が広がっている。砂漠では走りにくい上に砂に足が取られ体力の消耗が非常に激しい。少年は息を吸い、短剣を握り、洞窟に向き直る。

少年を追っていた物が洞窟内から土煙を上げながら襲来。姿は見えない、まさか。最悪の事態が起こつた。ここはもうきつと俺の知る世界ではない。きつとこれは罪人の夢見る地獄。

数分ののらみ合いの後、轟音と共に出て来たのは光を浴び黒光りしながら蛇のように踊る胴体、彼の身長ものの2倍はありそうな触角、一本一本がまるで意思を持っているかの様に不規則に動く脚。

地面から現れたそれは全体が出ていないのにも関わらず、軽く少年の3倍はあつた。

「百足…？」

それは人間であるはずの彼にとっては最悪の相手だった。例えば、世界にいる生物を全て人間大にし、戦わせた場合、どの種族が最強か？その場合、最も強者に近づくものは昆虫であるとされる。硬い甲殻

を持ち、空を飛ぶものもあれば、地上を走るものもいる。自らの体重の何十倍もの重量を持上げ、群れを作るものもいれば、毒を持つものもいる。そんなものが人間大になり、人間と戦争を始めれば人間が勝つ事はほぼ、不可能だろう。硬い甲殻に銃弾は弾かれ、焼かれたとしてもあの生命力があればすぐに死ぬ事は無い。

人間と同サイズでそれなのだ。ここまで大きいと【ただの】人間では勝つことなど不可能に限りなく近い。

ここまで大きい昆虫に勝つにはどうすれば良いか。少年は素早く思考を回す。最悪、勝たなくても良い、取り敢えずこの場を凌げれば良い。逃走が可能になる程度に弱らせるというのがベストではある。だが、あの堅殻は短剣など通さないだろう。反動で逆にこちらがダメージを負いかねない。だが、そんなことに思案を巡らせる暇はなく、少年に対して百足は溶解液を吹きかける。当然喰らう訳にもいかない少年は大きく右にステップ。横目にその液を掛けられた場所を見て間違いなく喰らってはいけないと判断する。その液が掛けられた地面が黒く変色し異臭を立ち昇らせていた。これで、チャンスになったとしても、この攻撃を構えられた瞬間によれなくなつた。現状は最悪ではある。だが、ここで素直に殺されようとは思えない。これがこんなものが贖罪であるわけがないからだ。こんなもので俺の罪は償えない。更に重い。更に辛い。更に過酷な物に処されなければならぬ。まずは、こいつを止めるにはどうすれば良いか、こいつの特徴を掴まなくてはいけない。

百足は気味の悪い雄叫びをあげながら胴体でそんな少年を潰しに掛かる。少年は、一瞬にして短剣を逆手に構え、右に飛び、倒れて来た百足に合わせて体を捻り片方の触角を切り落とす。地面にその触角が落下、不気味にのたうち回った後に静止。だがこれといったダメージにはなっていない。もう一本おれば、とりあえずは楽になるが。そううまくいかないだろう。事実、百足は先ほどよりも警戒している。生物の第六感で何か危険だと判断したらしい。にらみ合いが続く、少年は右手に構えた短剣の角度を変える。それに気づいた百足が攻撃の予兆だと判断、全身が一瞬こわばった瞬間に後ろを向き

駆け出す。こんなもの今の装備では勝てるわけがない。あの溶解液  
での堅殻を溶かすことも考えたが、まずは放ってきている時点で自  
らに悪影響はないはずだ。口からこぼれることもあるはずだ、それで  
溶けてしまっただけはたまらない。それに生物はそんなにも愚かな進化  
は遂げない。

百足は少し遅れてはいるものの少年に追いつがる、町までの距離は  
1キロはありそうだ。迫ってくる振動の速度を計算するが、500  
メートルももちそうにない。一度停止、背後にいるはずの百足の姿は  
ない。やはり移動の際は潜るらしい、そしてそして振動を頼りに追っ  
てきているらしい。

少し先の砂漠を見て逃走不可と判断した少年は止まる。乾いた土  
煙を上げながら百足が再度姿を現す。即座に地面を蹴り、百足に急接  
近し左に流れる動作のままに左右に蠢く脚の関節を狙い、5本ほどま  
とめて切り落とす。脚を切れば多少の移動速度が落ちるかと期待し  
たのだが、少年の前に垂れた二本の触覚を見て希望は見事に砕かれ  
た。さき程切った触覚が再生していた。だが、少年は止まらずに足を  
切り落とし続ける。

だが、何も無茶苦茶に攻撃しているわけでは無い。目的はあった。  
再生には当然体力を使う筈。それを切らすことができれば、殺さずと  
も逃げることはできる。百足がその力を使い切るのが先か自分が逃  
げる分を残したスタミナ切れするのが先か、という賭けだ。だが、脚  
は当然触覚よりも作りが簡単だ。再生にも時間をそれほど要さない  
ようで、切つて数秒のうちに生え変わってしまう。それでも、次々と  
生える脚を短剣で百足の周囲を舞う様に動きながら切断して行く。  
百足も、無論ただ切らせるわけもなく身体を使い自らを斬る男を潰そ  
うと、脚でその男の体を貫こうとする。

然し、彼には当たらない。痛みで発狂寸前で思考が回らないとい  
うことなのかもしれないが、その全てを避け脚を切り落とされる。そし  
て隙があれば胴体にも斬撃を入れる。勿論、硬い甲殻を貫通できるわ  
けも無いので傷が入る程度だ。ただ、少年からすれば隙があれば殺す  
ことも考慮しているという意思表示のフェイクだが。それも、いい働

きをしていた。

全く終わりが見えない。切つても切つても疲労している様子が無い。どうやら、何か俺の常識の範囲外のこと起きているようだ。再生という時点であまり現実性はないのだが。なにせよ、体力を残しつつ、この百足の再生を中断させることはできないだろう。そういえば、この先には砂漠が広がっていた。この凶体だ、砂漠まで行ければ体がしずんで追ってこれない可能性はある。ただ、砂漠は砂に足を取られる為に相当動きにくい、そのためスタミナの消費も上がる。だが、百足からすれば岩よりも軽くなつたわけだから、今よりも早く動ける可能性がある。そうなれば、即座にまたこの岩場に戻るほかないが。それには裏を取らなければならない、そう簡単に行くだろうか。だが、やるしか無い。それしか生きるために残された選択は無いのだから。

再度後ろにステップ、全方に重心をずらし、一気に後ろに不安定な体制のまま体の軸をひねり、半ば地面に肉薄するかのような姿勢で背を向け、地面をけり、再度駆け出す。だが、今回はそれほど隙もつかなかった。その為、先ほどよりも近い場所から百足はスタート、この距離では百足は少年に追いつく。だが、少年は百足に追い抜かれても一心に砂漠をを目指す。当然百足は正面に回り、土煙を上げながら姿を現すが、少年はそのタイミングで加速。飛び出し始めた百足の頭部に足をかけ、勢いそのまま跳躍。百足の浮上力が加えられ。一気にマシンヨン数階分飛んだ少年は前方に短剣を投擲、短剣は砂漠に深く突き刺さり、そこに向かって衝撃を逃がすために前転しながら着地、突き刺さった短剣の柄をもち独楽の様に右足を軸にして百足に向き直り、短剣を構える。

百足は砂漠の手前で止まりこちらへは向かつてこない。百足は一つ悔しそうな雄叫びを上げ、暫くすると諦めたようで洞窟へと戻っていく。

「死なずに済んだか」

少年は一つため息をつき。焼けるよう暑さの先の砂漠の先にある村に向かい砂塵の中へと消えて行った。

## 2話

## 地獄

舞い上がる砂塵、吹き付けるは肌を焼くほどの風。彼はそんな中を平然と歩いていく。先ほどの百足を撃退してからそこまで時間は経っていない。水がないのはやはり危険だろうが、今からこのあの洞窟に戻って水を汲んでくるという事の方が危険だ。先程は避けられても、今回もそう上手く逃走できるとは思えない。あの百足とはそう何度も戦いたくはない。

運の良いことに、そこまで村と思われるものまでは遠く無さそう。それなりに歩きはしたが、あと百メートル程度だろうか。

今のうちに現状の整理をしなければ・・・死んだと仮定すれば、ここは地獄という事になる。だが、聞いていたものとは全く違う。三途の河を渡った覚えもなければ、鬼を見てすらいない。だが、それは全て人間の憶測であったはずだ。本当の地獄を見た人間などいない。現実はどうだったという事だろうか？

それならば、閻魔がいるかどうかも怪しいが、会えるかと思うだけでどっと楽になった。俺があちらで犯した罪を裁いてくれる。これで俺の罪が軽くなるのかは分からないが、きっとそうしたほうが良いんだろう。それが、一般的な常識だ。

あともう少しで村に着くというときに村から何者かが出てきた。

三途の川を渡してくれる死神だろうか？然し、だんだんと近づいて来るそれは角の生えた妖怪。おそろく鬼だ。

どうやらその鬼は俺の方に走って来ている。流石は鬼ということころだろうか？それほど待つこともなく、鬼が俺のところまで来た。まあ、距離も既に100メートルは無かった事もあるからそれほど速いとも思わなかったが、砂漠であったということを考えてれば十分速い。

「お前か？あの百足を倒したのは？」

敵対だろうか？本来はあそこで処理されるべきだったなら申し訳

ない。

「倒しては無い、逃げただけだ」

「覚妖怪がまだいたことも驚きだが、覚妖怪が大百足とやり合って無事とはな」

取り敢えず、敵対心は無いようだ。だがそれ以前に俺の事を覚妖怪とよんだ。この鬼から見ると俺は妖怪なのだろうか？どう考えても人間だろうに。いや、もしかすると鬼達の間では人間の事を覚妖怪というのかもしれない。だが、それではまだ居たのかと驚く理由にはならない。そんなにも地獄に人が落ちないわけがない。

「飲めるか？」

余りにも唐突すぎる発言に一瞬思考が停止する。しかし、直ぐに回転を始めた脳が最善手を探す。閻魔に使える鬼がこれから断罪される者に酒を進めるとは如何なものか。

「酒はまだ飲めない」

その鬼は残念そうにしたが直ぐに元気を取り戻したようだ。どうか何故いきなり飲ませようとしたのか。それ以前に、俺は見た目的にもまだ高校生だ。背も高くない為に稀に中学生と間違われる事もある。

拗ねた様に地面を向いた後、笑顔を浮かべながらこちらの顔を見る。

「まあ、それでも良いか。飲もう」

元気になったと思ったがそういう事か。なんて強引な鬼だ、

地獄でこれから裁かれるのにその前に居酒屋に行くなど愚かすぎる。罪を増やすわけにはいかないが、既に飲酒は仕事の関係上で何度かしている。

「いや、また今度で良いか？」

「ダメだ」

即答、恐ろしいぐらいの即答。鬼と言うだけあつてか、恐ろしいほどの力で腕を掴まれ、半ば引きずられる様に村に連れられ、店に入られる。そのまま、椅子に座らされてしまった。

店内は現代にもある少し古風な感じだ。ただ違うのは明らかな人が店主ということと客が全員人間では無いということだ。目が身体中に付いているもの、目が一つのもの。その全てが好奇の目で彼を見つめていた。

「何を飲む？今回は私のおごりだ」

おごりか、それはありがたいが本当に裁かれる前にこんな娯楽に近いものをして良いのか。普通に考えればダメだと思うのだが。

「オススメなのを」

やはり裁かれる前にはと思つたが、水。と言つたら隠語だなどと言つて酒を飲ませかねないだろう。足で逃げ切れるとも思えない。

それならば、まだ年齢的には本来飲めないがアルコールが入っているものを我慢して飲むことにした。砂漠を通つた事もあり、喉も渴いている。

仕事の関係上で耐性はついた事もあり、度数が50以上のものを割らずに大量に飲まされない限り大丈夫だと思う。

「やっぱりお前さん良いセンスしてるな。じゃあ、いつものアレを」

鬼はいかにも親しげな笑みを浮かべながら店長と思われる妖怪に注文をした。仲が良いのだろうか？店長もどうやら顔なじみの様だ。それでも無ければいつものアレと言われすぐに商品は出せない。

「ほい、勇儀さん。隣の君もかい？」

「そうらしい」

そう言うと店主は俺にも勇儀に出したものと同じであろうものを出してきた。どうやらこの鬼は勇儀というらしい。まあ、どうしても良いが。

酒を受け取り鼻元に近付けてみたが臭いはそこまでアルコール臭くない。

ちらつと横にいる鬼を見ると一気にいけ、とでも言いたげにこちらを見ていた。全く、まさか16で初めて仕事以外の他人と飲む酒が鬼と一緒に、いや、鬼は人では無いな。そんな事を思いつつ酒を口に付け一気に飲み干した。

臭いは強くなかったはずだがアルコールは割と強かった。30度ぐらいだろうか。

「良い飲みっぷりだね！飲み比べするかい？」

「いや、勝てる気しないし遠慮する」

あと10杯はいけるだろうが流石にそれ以上飲むと酔いそうだったので止めておく。勇儀はどれくらい行くのか分からないが。まあ、鬼なのでもっと飲めるだろう。

それにこれから裁かれにいくのに酔っていたら流石にマズイだろ

う。

「ところでそろそろ閻魔の所で裁かれないんだが？」

周囲から一斉に笑われる。一体何が面白いのか。

「ハハハ！なんの冗談だい？ここは旧地獄、もう閻魔はいないよ。まとめ役ならいるがな」

閻魔がいない？ああ、こいつはもう酔ってるのか。気付かぬうちに酒樽を近くに置いていた。とうるかその量を飲むつもりなのか、まさか飲みきったのか・・・？勝負をしなくて本当に良かった。

恐らく店員に持ってきてもらったんだろう。にしても全く気付かなかった。まさに神がかり、いや鬼がかり的なスピードだ。

「じゃあ、そのまとめ役に会わせてくれ」

ここにいても意味はない、それにいたところで何か良い結果を得られるわけでもないだろう。

「ここを出て右手に大きな屋敷がある。そのさとりと言う奴に会いな」

酒を啜っている勇儀に変わり店主が教えてくれた。軽く会釈をし、椅子を立つ、そのまま店を出ようとした時だった。

「そうだ、お前さん名前は？」

杯から口を離れた勇儀が問いかけてきた。

そういえば名前を言っていなかった気がする。

しかし、名前か、何を使おうか。まあ、本当の名前など無い

のだから生きていた時、最後に戸籍に登録されていた名前でもいいだろう。

「秦 空だ」

名前だけ言って店をあとにする。右を見ると確かに大きな館が見える。そこまでは水路を挟むように今ではあまり見ない木製の住居が並んでいた。そしてその道を行く異形の者たち。

そんな異質な光景を眺めながらその大きな建物へと歩き出す。人間がよほど珍しいのか周りを歩いている鬼たちは好奇の目でこちらを見ている。そんな視線を浴びながら歩いていると背後に何かの気配を感じた。振り向くが人外の通りが多いので誰がつけてきているかわからない。

そういつた時は裏道に入って追跡者を特定する。こう習った、なのでそれに従って裏道へと入る。少し裏道を歩いてから振り返る。そこにいたのは猫、黒地の毛に赤毛が混ざっている猫。どうやらこの猫だったようだ。

せつかくなので座って撫でる。しかし、直ぐに異常に気付いた。異常に死体臭い。匂いの強いもので体を洗っている様で物凄い芳香剤の様な匂いがするがその裏には死体の匂いがあった。それに、尾が二股に分かれている。

「お前、猫じゃ無いだろ」

一歩後ろに下がり、短剣に手をかける。

「ばれちゃったか、流石だね。1人であの大百足と戦うだけはある」

猫が喋っている。人を食べる類の妖怪だろうか？この世界では恐らく俺の常識は通用しない。予想もあてにならないだろう。

「大きな館に行くんでしょ？」

「ああ、そうだが？」

「案内しに来たんだよ」

案内か、この死体臭さはそうやって騙され殺された人間の物だろうか？警戒しない事に越した事ない。

「自己紹介でもしようか。私は火車の火焰猫 燐。お燐とでも呼んで」

いつの間にか姿が変わっている。猫ではなく人間？いや、近いが人間に耳は生えないし、尻尾は生えない。一部の人々はそれを付けて楽しんでいた気もしたが…… あれは別だ。まずまず、そういう人々も猫にはなれない。

「わかった。お燐、お前は随分と死体臭いが日常的に何をしているんだ？」

鎌をかけて見る事にした。このまま連れ去られて、この猫女の土俵で戦う事になれば、勝率は確実に今より低くなる。

「よく分かったね。そんなに臭い？」

「そこまででは無いが。何故そんな匂いがつく？」

まあ、あれをしていたのもあって、ある程度鼻も聞く様になっているから一般人にはわからないだろう。ただ、妖怪は知らないが。俺はあくまで人間目線でしか語れない。

「主に死体を運んで捨ててるからかな」

「なるほどな」

死体臭いわけだ。にしても、また妖怪。ここにきてから人間に一度も会っていない。

「取り敢えず案内するから付いてきて」

一応領いておいたので意思は通じたのかお燐はこの路地裏の奥へと進みだした。

「何故奥に行く？大通りから行くんじゃないのか？」

「裏道だよ」

裏道らしい。まあ途中で異変を感じれば逃げ切れるだろうし、今は付いて行っておくか。それに、本当に裏道だった場合楽になる。お燐はいつの間にか猫に戻った様で屋根の上を歩き奥に入っていく。

さつきから少し歩いたが、今の所異変は感じないので大丈夫だろう。どんな風に裏道を歩いたのか分からないが目の前が開けた。

そこに建っていたのは白い屋敷。どこも外では見た事ない様な白い石で作られている。しかし、驚いたのはその大きさ、あらゆる世界では見たことも無いサイズ。これを見てしまったらきつと城ぐらいしか大きく感じなくなるかもしれない。そう言う次元の大きさ。

「ようこそ、地霊殿へ」

門など無いらしく普通に中に入ることが出来た。この警備の甘さは問題だと思うが、口にしないでおく。中庭、というべきだろうか？そこには大きな噴水があり、その奥に館の入り口があった。

「でかいな。ここまで大きいものは初めて見る。何が住んでるんだ？  
ここまで大きいと巨人が住んでいてもおかしくなさそうだが」

「ここにはあたいの主人のさとり様とその妹のこいし様、そしてさと  
り様のペットが住んでるんだいるよ」

人間的な名前の方が2人しかいないのだが。まあ、今気にするべき  
はこの館に2人の人間と思われるものしか住んでいないという事。

これだけの大きな屋敷にたったの2人しかいない。という事はそ  
れだけその2人が大きいのだろうか？

まあ、それはあつてみればわかる事か。そんな事を考えているうち  
に入り口の前に着く。

ドアは非常に良くできていて綺麗な彫刻が施されていた。高価な  
物だろう。

中で待つて居たのは一人の可憐な少女、見た目はごくごく普通に  
そうな少女。ただ、違う事は3つ目の目がコードの様なもので体とつ  
ながっている事だ。

「こんにちはわ」

「こんにちはわ」

挨拶はされたら返す、それは常識だろう。その程度の常識はある。

「お憐、この人を私の部屋に連れてきて」

そう言い残しその少女はこのロビーと思われる空間にある階段を  
登っていく。

「ああ、そうですね。夕飯は作ってくださいお憐、私はこの人と少し話  
します。出来たら呼んでください」

「わかりました。さとり様」

今の会話に少し違和感を覚えつつ、このさとりという少女の後ろ姿を追う。

「付いてきて」

気付けばお燐が階段の上からこちらを呼んでいる。一応階段を駆け上りお燐の元に向かった。

階段を登りきると、外の明かりを利用したステンドグラスがはられている。そのステンドグラスは別に特別に凝った様な事はされていないがどれも非常に精巧に出来ていた。やけに照明も少ない事もあり、ステンドグラスからの光が映えている。

少し歩いた所でお燐は足を止めた。開ける、という事だろう。

やはりこの扉も精巧な細工がされていた。非常に綺麗に花が描かれている。蓮だろうか、確か花言葉は「神聖」「離れ行く恋」「清らかな心」

少年はその扉をゆっくりと押し開ける。

### 3話

### 地霊殿

扉を開けるとそこは1つの部屋になっており、奥の机には先程の少女が腰かけていた。

その背後には大きな書籍がある。正直、少女の身長的に上の本には届かないと思う。身長の方は俺も小さいので言えた事では無いが。

「こんにちわ」

「こんにちわ」

再度同じ言葉のやりとりが行われる。

「そこに座ってください」

言われるがままに手前にある向かい合ったソファアに座る。そのソファアには特に刺繍などはなく、ただ紅いというだけだ。

座り心地は悪く無い。どうやら何か言いたい様だが、俺が何か言ったところで意味はないので少し待っていたがただ静寂が生まれ、さらに空気が気味なくなった。しかたなく自分から本題をつく。

「早く俺を裁いてくれ。」

「え?」

相手の表情に動揺が見えた。が、すぐに落ち着いた様で口を開く。

「ここは地獄ではありませんよ。ましてやあなたは今死んでいない」

地獄にいるのに死んでいない?意味がわからない、じゃあどういう事だ?俺は実は死んでおらず何者かに輸送された?いや流石にそんなファンタジーはあり得ない。

疑問が頭の中を駆け巡るがその疑問に対する明確な答えは出ない。

「貴方は自分をなんだと思ってますか?」

自分が何か?それは哲学だ。だが種族なら人間だろう。それは間違いない。

「人間だ」

相手の少女はふう、と一度息を吐いてから話し出した。

「やはりですか。落ち着いてみて下さいね」

彼女はどこから出したのか手鏡を俺に向ける。そこに映っていたのは紅い髪の少年、体には少女と同じコードの様なものが付いていた。俺の髪は黒だったはず、見間違える訳もない。ましてや、こんなコードは絶対に付けていないし、自殺にもコードは使っていない。

使ったとしてもこんな目がついてるなんてことはありえない。

「悪い冗談だろ？」

「いいえ、貴方は私と同じ覚妖怪になっています」

そんな事は到底信じられないが現実は自分が覚妖怪というものになってしまっているらしい。しかし体つきだけは変わっていない、石仮面の様なものをかぶった覚えも無いので他の何かしらが起きたのだろう。

「何故だ？」

「わかりません。ただ、ここ幻想郷の賢者の八雲 紫ならわかるかもしれない」

これは悪夢なのだろうか？いや、自殺をしたのは事実、あの死に方なら助かるわけも無い。助ける人がいたならまだしもあんな樹海に助けは間違いない。それに俺を知る人間はそういない。

ならば、俗に言う転生というやつだろうか？いや、幾ら何でもそんなまるでアニメの様なことが現実で起きるわけがない。

「そいつとはどこで会えるんだ？」

何にせよ、その八雲というやつがこの原因を知っているのなら聞き出さなくてはいけない。

「そろそろくると思っています」

少女は淡白に言い放つ。

ここに俺が来る間に呼んでいてくれたんだらうか？何にせよ作業が速い。

「そうか、ところで、覚妖怪っていうのはどういった種族なんだ？」

それは気になっていた。百足から逃げた後、あそこの村民が「覚妖怪が百足を倒すとは」、と言っていた。という事は、覚妖怪は戦

闘力があまり高く無いという事だろう。なら、何故こんな大きな屋敷に堂々と住めるのか、本当に弱ければそれは出来ないはずだ。

「相手の心を読めます」

読心と言うことか、能力としては本当に最強クラスでは無いだろうか。しかし、俺は現時点で他人の心を読めていない。

さらにはこの少女にこれまで考えている事全てが筒抜けだったという事か。

「俺は読めない、後1つ、例外があるなら教えてくれ」

「読心は少し慣れが必要なので。あと例外ですが恐らくは相手も覚妖怪だった場合です」

という事はこの少女は俺の心が読めない、という事だろう。ならそれはこちらにとつて非常に都合が良い。俺が何故贖罪をしたいと言っているのかが俺がへまをしない限りばれないという事だ。

「さとり様、料理の準備が出来ました」

突然扉がノックされ、お燐と思われる声が聞こえて来た。

「良いタイミングですね、お燐。じゃあ行きましよう、そう言えば名前を言ってませんでしたね。私は古明地さととり、ここ地霊殿の主です」

「俺は、秦 空だ。今日現世から来た」

少年はお燐の後を歩くさとりについていく。館が広い事もあってかその食事の置いてある場所に行くまでに時間が掛かった。今頃だが、腕時計を持って来れば良かった。

ここは地底なので時間感覚が狂う。

少し歩くと食堂と思われる場所に到着した。天井にはシャンデリアが置かれ、其処から光が差し込む。部屋には長机に並べられた食事と、整然と並ぶ5つの椅子、地面に置かれたボウルの前で座るペットと思われるもの、既に椅子に座る大きな黒い翼の生えた黒髪ロングの胸に何か宝石の様なものを埋め込んだ女性。しかし、机と部屋のバランスがおかしい。巨大な部屋の中、6人用の長机に並べられた5つの椅子はなかなか滑稽だ。まあ、周囲をペットが取り囲んでいるので其処までの違和感ではない。

ただ、それよりも妙なことがある。俺は覚りの右に座ったのだ

が、それでも5人用の椅子と言うことは1つ余る。さとりの左、其処に誰も座っていない。食事があるので何処かに行っているわけではないだろう。

そう言えばお燐は姉妹、と言っていた。周囲を見渡すがさとり  
に似た姿の者は居ない。姉妹というぐらいならきつと同じように覚  
妖怪のはずだ。妹か姉かは分からないが取り敢えずその姿が見えな  
い。

どうやらないのはさとりの姉妹ということ確定だろう。しか  
し、お燐とその横に座る女性はその事について触れない。何故なの  
か、主の家族がいないのに心配では無いのか？取り敢えずペットの心  
でも読んで見ようか。恐らく自分の顔にある目ではなく、このコード  
のような物にある眼を使うのだろう。

どうやらさとりはその空席に座るべきだった人を待っている  
ようだったので十分に時間はあった。3つ目の眼に神経を集中する。

まだ無理かと思ったが意外にも、しばらくするとお燐の考えが  
流れ込んできた。

(こいし様はまだ来ないのかな、さとり様が可愛そう)

どうやら空席に座るべきだった者は先程お燐が言っていたこ  
いしという奴の様だ。これで黒髪の女がこいしである可能性は消え  
た。必要な情報は聞けたので第3の眼に手を当てて視界を遮る。

せっかくなのでさとりの心も読んでみようか、読めないといっ  
ていたが不意をつけなければいけるかもしれない。そうだった場合、これ  
からの行動に関わってくる。

さとりに気付かれ無いようにゆつくりと第3の眼を動かす。  
そして、かけてあった手をゆつくりと退ける。

(こいし……何故こないの？私の事が……嫌いなもの？サードア  
イでも貴方は読めないから。貴方が何を考えているのか……私に  
はわからない)

見れた、だが、不用意に見続けるとバレる可能性があるのではそ  
れぐらいで止めておく。というよりは見てはいけない気がした。  
他人に心を読まれるというのはあまり嬉しいことではないだろう。

得られた情報としてはこれは第3の眼ではなくサードアイと  
言うようなことぐらいだ。そのあともしばらく待ったので、ペッ  
トの心を読んだり、料理を見たりして時間を潰した。

どうやら人型になれるペットは知能が高いようでこいしを心  
配していたが、人型になれないペットは動物的な欲を抱いていた。

腹が減ったとか、遊びたいとか。まあ、そんな欲は読んで  
も楽しくない。正直、見ればわかる。

「じゃあ、食べましようか」

どうやら諦めた様で、さとりが大きめの声で皆に宣告する。そ  
の言葉に従いペット達が無言で料理を食べ始める。俺も流れで  
フォークを持ちサラダを食べようとした時だった。

さとのりの横の席の椅子が引かれた。俺がちらりとその音のし  
た方を見ると、そこにはさとりに似た服を着た少女が座っていた。髪  
は白に薄い緑色を混ぜたような色。服はさとりの服のピンクだった  
部分を緑と黄色にした様なものだ。

いったいどこから入ってきたのか。なぜ、気付けなかったの  
か。姿からしてもこいしと呼ばれる者である事は確定した。

真左に現れたこいしにさとりも気付いたようでその方を見て笑っ  
ていた。感動の再会とかいうやつだろうか。介入するのは流石に止  
めておこう。

少年はサードアイから意識を離し、ここに来て初めての食事を  
とった。

## 4話 数か量か

食事中、ふと、あることに気付いた。ペット達が全くこいしの方を見ていない。さどりの事を主と言うぐらいならその妹も大切な存在のはずだ。主従というのはそういうもの筈。しかし、挨拶すらしない。気づいていないと考えるのが妥当だろう。しかし、こいしが座つたのは後ろでも無ければ離れたところでもない、ペット達の目の前。普通ではありえない。なぜなのか、多少疑問に思いながらもスープを啜る。これもなかなか美味い。他の物も色々食べているがどれも非常に美味しかった。ただ、どれも少し味が薄い気がする。まあ、ペットのことを考えているんだろう。飼ってはいなかったが動物に過度な塩分を与えない方が良くというのは聞いたことがある。考え事をしながら食べていたせいか、無言で食べていたからかペットを含む誰よりも先に食事を終えてしまった。どうするか、考えているとお隣が気づいたのか椅子から立ち上がったので、心を読み食器をもつて部屋を去つた。

「いや、大丈夫だ。わかった」

お隣の脳内に無意識に浮かんだ道を覚え料理を運んだ。距離が遠くて覚えきれなければ頼もうかとも思ったが料理を作るところが料理を食べるところからそんなに遠いわけがない。自室まで運んで来ているなら別だが、今回は集まって食べていた、という事もあるが。

「流石に世話になりすぎだな」

そう言つて彼は綺麗に整理された台所から食料を探す、彼という見た事の無い存在が消えたせいかさどり達のペットが話し出したようだ。少々騒がしくなった。まあ、一部を除けば話すというよりか鳴く感じだが。当然といえば当然のことだった。

幾ら何でも静かすぎると思つたが俺がいたからか、流石にいつもあ

の静けさで食事をしているのならここは監獄か何かだろう。どちらにしても作るものによつては数十分は帰れないのでゆつくりと雑談をしていて欲しいが。

「にしても、意外と良いものが作れそうだ」

基本自分で暮らしていた時は家事は全て自分でやっていたので別にそんな衝撃的かつグロテスクな物はできないと信じた。

流石に本気でケーキなんかを作ろうとすればかなりの時間がかかる。それにここにケーキ作りの材料もあるかわからない。取り敢えずは軽いものにしておこう。理想としては軽く作れてそんなに腹にたまらないものだ。そんな理想を描きつつ彼はキツチンの中に目をやる。そこで机の上のボウルに大量の卵白らしき物があるのを発見した。恐らく卵白のあの独特の食感が苦手なペットもいるんだろう。しかし、メレンゲにした上でクッキーにすれば問題無い。さらに食べても腹は膨れない。条件は満たしているな。その後、棚を漁りなんとか砂糖を発見した。それまでに色々な調味料を砂糖かどうか毒味に近いものをした事は伏せておこうか。卵白の入ったボウルに適当に砂糖を投入していく。正直、メレンゲクッキーはその調理の簡易さからして自分でも作っていた物だったので測らずとも分量はわかる。ここからはただ混ぜるといふ単純作業だ。洗われ、壁に掛けてあった泡立て器を手に取りボウルに入った卵白と砂糖を混ぜあわせていく。

無言で混ぜる事数分、卵白は白くなり恐らくは頃合いになってきた。量も量だったこともあり相当負担になるかと思っていたが意外にも疲労はない。妖怪になった事による物だろうか？それならば、妖怪というのも悪くないと感じてしまう。彼はフライパンと思われる大きな鉄の塊を火に掛け熱する。家のフライパン違いと純粋な鉄の塊のようだ。油を敷こうか少し迷ったが。少しの思案の机の上で瓶の後に中に入っていた油を敷いてからメレンゲを焼いていく。だが、さすがに無理があったのか一つのフライパンには入りきらず。彼は2つの皿を両手に持ち、またあの場へと戻る。

「空さん、それは？」

彼の登場に気付いたのか、さとりが不思議そうに彼の持つ皿の上に置かれた謎の物体を見つめる。

「メレンゲクッキーだ」

彼は特に愛想をまくこともなく、皿を机の上に置く。

「悪いが人数は把握してかった。自分で取って行ってくれ」

完全に反応のないペットときとりを無視するような形で言いすぎる。その時、妙な違和感を本能的に感じ、さとりに視線を向ける。どうやら、心を読んでいたようで、サードアイがしっかりとこちらを見ていた。

（貴方は嘘つきですね）

いきなりそう言われると傷つく。が、きっと何か理由があるんだろう。

（嘘つき？それをお前が言うか、覚妖怪同士では読心はできなかったんじゃないのか？）

（私としてもそこはよく分かってないです。クッキー切っていないのペット達の為でしょう？）

事実、ペットの総数が分かっていたいなかった。結果的にペットに合った大きさに自由に切れるようになったわけだが、それは俺の意図したものでない。

(いいや、それは無い。考えすぎだ)

(そうですか)

クスリと笑った後にさとりのサードアイが視線を逸らし、ペットのほうへと向いていった。彼も何を言うわけでもなく、サードアイを逸らし、ペット達の方を向かせる。メレンゲクッキーを作ったは良いが誰も食べないのでは無いかと思っていたが気鬱だったようだ。

さとりが最初に食べ、その反応を確認したペット達が食べ始めた。また心を読まれる感覚があったのでサードアイだけさとりの方を見させる。あまり良い感覚とは言えないが、彼もできる分なにかを言う気にはならない。

(美味しいですね。どうやって作ったんですか?)

(卵白に砂糖を入れて、混ぜてフライパンで焼いただけだ)

どうやらさとりは少し、俺のメレンゲクッキーに興味を持ったようだ。まあ、この程度の料理なら小学生でも出来る。しかし、心を読んだ瞬間にさとりの表情がわかりやすく曇る。

(そういえば卵白だが。苦手なのはお前だったのか)

(そんなわけ無いじゃ無いですか)

残念だが、心では隠せても表情に出してしまったている。

(嘘だな)

どうやらお隣が気を使って卵白を使わないようにしていた様だ。

従者として相当しつかりと仕事をこなしているといえるだろう。彼は少しばかりお隣に対する考えを改めつつ、意識を戻す。

(だって鼻水みたいなんですもん、仕方ないです)

想像以上に幼い。そんな印象を抱いた。見た目通りといった感じだろうか。恐らくは外面は取り繕っていても心と心の会話になれば隠せないということだろう。確かに心でどのような他人と接するのかまで気をつかうというのは無理がある。

(そんな事はさて置き、メレンゲクッキーは食べれてなによりだ)

(美味しかったです)

(それは良かった。俺はそろそろ住処を探すから機会があればまた会おう。妖怪に取って食われてなかったらだがな)

当然、食われる気など無い、いざとなれば殺す。この能力さえあれば、まずまず負けることは無いだろうが。ただ、妖怪が皆一様にこのような能力を持っているというのなら警戒することに越したことは無い。

(そのことなんですが、ここに居てくれませんか?)

それは考えていなかった。寝床は正直野宿で十分、サバイバルの技術も十分。これが終わればまず野宿の場所を探そうとしている自分がいた。だが、最も楽なのはここに住んでしまうことだろう。

(心配してくれてるなら大丈夫だ。俺は弱くない)

(いいえ、心配ではなくてお願いです)

これはさよりの嘘だろう。今さつき分かった事だが。こいしは心が読めない、生まれつきというわけでは間違いなく無いだろう。何せ、サードアイの瞼が縫ってあった。閉じてしまっているならまだしも、生まれつき縫われているなどありえない。そしてこの覚妖怪という種族と、街を歩いた時の周囲の妖怪の目、そこからわかる事は。

覚妖怪は他の妖怪に嫌われているという事だろう。確かにこの能力は便利であると同時にこの能力を持たない者からすればただの脅威だろう。自分の考えた策、悪事、知られてもいいもの知られたくないもの、その全てが一瞬で知られてしまう。ただ、この瞳に見られるというだけで。恐らくこいしはその能力を恐れた妖怪達に縫われたか、はたまた自身自身が周囲の目に耐えられなくなって自ら縫ったかのどちらかだろう。

(それも嘘だな。大体は察せる、だから思い出さなくて良い。でも俺は罪人だ。だからそうして他人から敬遠されるのはなれてる。それに他人に慈悲を貰えるほど良い生き方は出来なかった)

妹が自らの目を縫う。そんな状況を思い出せというのは酷だろう。まあ、そうと決まったわけでは無いが。

(嘘では、無いんです。私はこの幻想郷に残された最後の読心可能な覚妖怪として、もう同族を傷つけられたく無いんです。あなたが過去に何をしたのか、それは知りませんし、知ろうとも思いません。ただ、もうこいしのような被害者は作りたく無いんです)

サードアイだけではなく体をさよりの方に向ける。その目には、涙が光っていた。成る程、女が泣くと男は少々揺らぐと聞いていたが本当だ。これは俺の贖罪云々は置いておいて俺が先折れるべきだと思ってしまった。

(……………悪かった。わかった、ここに居れば良いんだな)

(すいません。わがままを言ってしまつて)

(いや……………謝るのはこっちの方だ。)

何故、初対面の相手にここまで出来るのか。あんな仕事をしていた俺からは考えられない。信じるものは自分だけ、ただその自分もときには騙す。そんな俺からすればそれは異常だった。

同じ種族、というだけでここまでしない。というよりか、人間はそれが出来ない。人間はいつでも心のどこかでは他人を疑って生きている。例えばいきなり見た事も無い人が家に訪れ止めてくれと言われて泊めるだろうか？普通は止めない。何故か、それは心が半自動的に、もし夜襲われたらどうするのか、夜に金だけを取られて逃げられたらどうするのか？無意識のうちに人間は他を疑っている、という事だ。だから普通に考えてもこの対応はおかしいと思つてしまう。ただ、それは最も繁栄した人間の考え方で、種が少ない種族からすれば1人でも種族を減らしたく無いんだろう。これが本来のあるべき姿なんだろう。とも思う、同じ種族同士、信じあい、愛し合いその種族を繁栄させていく。恐らくはこれがあるべき姿だったんだろう。人間は少し頭が良くなりすぎた。疑うということを覚えてしまったわけだ。人間はもう既に道を誤っている。自然界のどこに自らにとって不利益であるという理由だけで他のコロニーの同種族を抹殺する生物がいるか。自らに利益が出るといっただけで生態系を崩すほどに自然を破壊し、富の為に他の生物を絶滅に追い込む生物がいるか。それは人だけだ。彼は世界とは実によくできていてと心中で失笑しながらお隣に連れられた部屋のベットに転がり。自らの出した結論の滑稽さに苦笑する。

やはり、人類は遠くない未来、滅ぶ。いや、滅ぶべきだろう。

その所謂、危険思想は電気を消した部屋の闇に染みて消える。色々な事が起きすぎだ。死んで罪を償えると思えばまさかこんな事になるとは。何なら人間も辞めてしまった。風呂は明日入るとするか。罪に穢され、壊れた少年は一人、良く整備され、肌触りのいいブラケットに包まれ、意識を瞼の下の闇に溶かす。

## 5話

### 湯煙

ステンドグラスを通り、色を持った光によって目を醒ます。声を上げることもなく、立ち上がり、伸びをする。昨日の事全てが夢なのかもしれないと思いい部屋に置いてあった鏡に自分の姿を映す。紅い髪、この時点で夢ではなかったようだ。

「本当に現実か。これが」

「そうよ、これが現実」

背後から声をかけられる。俺が起きた時点ではこの部屋に誰もいなかったはず、ならこいつは誰か。その答えが出る前に体は動いていた。短剣を慣れた手つきで手に取り、一步後ろに跳びのきながら回転。そのまま、その正体不明の首を掴み乱暴に地面に投げつける。まだ、立ち上がれないそいつを片手で固め、もう片方の手でナイフを当てる。

「速いわね。想像以上よ」

「お前はだ・チツ！」

質問をしようとした刹那その女が地面に何かを設置するとうのを読心で先読みし、その女の体を踏み台に後ろへ下がる。しかし、その床からは女の姿が消えるだけで床には何の異常もない。

「私は八雲 紫。ここ幻想郷の賢者よ。その様子だと自分が覚妖怪になつて居ることもわかつて居るようね」

女の姿は見えないが虚空から声のみが聞こえる。いったいどんな能力を使っているのか。

「で、その賢者とやらが俺に何の様だ？」

こんな正体不明の能力を持った奴とは出来れば闘いたく無い。何せ情報が少なすぎる。

「貴方の状況について、教えに来たの。そんなに殺意は向けないで頂戴」

俺が覚妖怪になった理由か。正直、聞きたいところだったので無言でベツトに腰を掛け意思表示だけをやる。

「まず貴方が外の世界で死んだ。というのは事実よ」

それはそうだろう。あれで死なない人間はいない。妖怪の生命力は分らないが、あれだけすれば流石に死ぬと思いたい。それに外の世界では俺は人間だった。

「その後、霊となった貴方は地獄へ向かった。ここまでは正常だったの。しかし、ここで問題が起きた」

問題？

霊となって動いていた時の記憶は無いのでよく分からない。というよりか、霊になった記憶がない。

「何故か貴方は間違つて幻想郷に入ってきてしまったの。ここには境界があつて、実体を持つ者は私の許可がなければ入れないの。でも、貴方は霊になっていた。霊は実体を持たないから入れるのよ」

要するに幻想郷は結界で囲まれていて実体を持つ者は八雲紫の許可が無いと入れない。俺は死んだ後霊になり地獄に向かった。しかし、何故か幻想郷に入ってしまった更に何故か肉体を手に入れた。という事か。なるほど、わからん。謎が多すぎる。

「そして基本的に外部から来た人間、外来人は能力を持って入つて来るのよ」

「それが心を読む程度の能力か」  
「いいえ」

違うのか。という事は自動的に俺の能力は2つになっている。読心があれば正直余裕で生きていけると思うが。

「で？その能力は？」

「変更する程度の能力よ」

変更する程度の能力？どこまで変更できるかによつて、また使い方によつては割と強い能力のはずだ。だが、正直、そんなに使う機会はなさそうだ。読心のみでの十分生きていけるだろう。

「そうか。じゃあ俺は風呂に行く。またな」

正直、閻魔からの伝言などを期待していたが無いようだった。今は自分で考えて償えという事か。さっさと罰を与えれば良いだろうに。直ぐに罪状を伝え、願わくば凄惨に残酷に屈辱的な死を与えれば良いだろうに。

「風呂：．行くか」

考えても仕方ないような気がしたので風呂へと向かう。部屋の扉を開けて左へ曲がった。どこに風呂場があるのかを知っているわけではない、だからこそペットの犬が居た左に曲がった。これは俺の直感的な予想だが。動物に風呂のある方向を聞けば、考えてくれるだろうと思つたからだ。予想通り、犬に声を掛け風呂の位置を聞くと無意識にタオルをもったさとりが行った方向を浮かべた。

正直ここまで上手くいくとは思わなかった。

「ありがとな」

そう言つてその犬の頭に浮かんだ通りに道を進む。この館は誰がやっているのか、いつも綺麗に掃除されている。

これだけ大きな館なら1日かけても掃除が終わらなそうだが。ペットにでも協力して貰っているんだろう。にしても、ここは地底という事もあり外は薄暗い。

別に、真つ暗では無いのは町の灯りと、きたときに見た天井の光源の影響だろう。そんなことの思いを馳せながらしばらく歩くと他の扉とは違う扉の部屋を見つけた。

どうやらここが風呂場の様だが入り口が1つしか無い、おそらく中で二手に分かれているんだろう。そう予測して扉を開ける。そしてすぐに扉が1つしか無い事に気付く。

「男風呂は無いのか？」

そう言えばこの館で未だに男に会っていない、考えれば街でも男の姿をあまり見なかった。

「おいおい、冗談だろ」

これはまずい。俺が入っているときに入られた場合、変態か何かかと疑われかねない。

もしも相手がさとりならばお互いにお互いの心を読んで逃げ場を自ら無くして行きお互いに自爆という事態まであり得る。それを回避するために服を着たまま風呂場の扉の前で叫ぶ。

「誰かいるかー？」

返事は無い、という事は恐らく中には誰もいないという事だ。

これは中に人がいないかの確認だが、逆に俺が入っている間に人が来る可能性もある。そこで、ドアに近付き2つ目の能力を使い、扉の一部を変更し錠を掛ける。

まさかこんなにくすぐ使う羽目になるとは思わなかった。だが、これで取り敢えずの安全が確保できたわけだ。

「やつと入れるな」

そう言つて部屋の隅に並べられた棚に服を入れていく。他にも部屋中に棚が並べられていた。ここにいるペットが一斉に入れるほど大きくは無いだらう。

そういえば、服はどうしようか。ずっとこの服を着るといふのは流石に衛生面的に宜しくない。

「行くか」

まあ、今そんなことを考えても意味はないだろう。1つ息をつき2つ持ってきたタオルのうち小さい方を腰に巻き風呂場へと入った。ドアを開けると、そこは想像以上に大きく、所謂外の世界の温泉だった。湯気で湯船は見えないが床には石畳が綺麗に並べられている。

「これが家にあるのか・・・」

いや、ここまでの豪邸なら妥当なのかもしれない。まずは体を洗つてから湯船に浸かる。これは温泉に浸かる前のルールという常識だ。場所によってはかけ湯という物があったりするがここには見渡す限り無い様だ。

彼は体を洗うために周囲を見回す。

「何処にあるんだ？」

温泉の湯気が非常に濃く、見通しが悪いので見つけるのに少し時間がかかった。温泉街にも職業柄行く機会はあるがここまで湯気が濃いのは初めてだ。

「これか」

しばらく周囲をうろろと歩くとそこにあったのはただ、出続ける水だった。恐らくこれで体を洗っているのだらう。

水は暖かいが水の出る場所が低い。正直洗いにくいだろう。

近くにあった桶をつかんで浚々洗い始めようと思った時良い事を考えた。

能力を使い、あちらの世界のシャワーと同じ構造に変更する。ただ、欠点もある。それは出る面積が減ったので水圧が非常に高い事だ。

「これは中々良い能力を取れたかもしれないな」

1人そう言って体を洗う。

シャンプーと石鹸はすぐに見つかったので体を洗いきるまでに時間は掛からなかった。

さて、風呂に入ろうか。そう思い、風呂場だろうと思う方向に近づく。

そこにはまた扉が、その先には先ほど服を脱いだ部屋が広がっている。

彼はまるで何もなかったかのように扉を閉め。反対方向、風呂がある場所へと歩いて行く。

ついに見つけた風呂にゆっくりと肩まで浸かる。異常なまでに熱かった。今考えればあの量の湯気が出ていたのだ。熱くない訳が無い。

だが、妖怪になったおかげか割と入っただけそうさ。そして奥に目を向けた時ある事に気付いた。

「何だあれ？」

何かがある。それは浮いているのか浮き沈みを繰り返しながら水面に波紋を広げている。彼は少し警戒しながらそれに近づいていく。ある程度まで寄るとそれはピンク色の髪をし、目を閉じて石に寄りかかりながら眠る無防備なさとりだった。

寝ている可能性も考慮すべきだったと先程立てた作戦の欠点を頭に入れる。

だが、起こすべきだろうか。ここまで安らかに眠っているのだから正直、寝かせた方が良いのでは無いかという考えが過ぎる。だが、ここは風呂場だ寝かせておくのは危険だろう。それに風呂の水も熱い為、気絶している可能性も無くはない。

「おい、死ぬぞ。起きろ」

彼は溜息を吐くと、さとりの肩を出来るだけ優しく、だが確実に起きる程度に揺する。

「う、うーん？」

さとりはゆつくりと目を覚まし、正面にいたここにきたばかりの少年を見る。寝ぼけた頭が状況を整理して行くうちにとある事に気付いてしまった。ここは風呂場だ。その事実には気が付くなり反射的に悲鳴をあげて立ち上がる。

何故立ち上がったのか？彼は正直そうとしか思えなかった。素直に浸かっていれば濁った温泉の影響で見えなくて済んだものが一気に彼の目に刻みつけられる。

一部を手で隠してはいるが、隠しきれておらず返って扇情的だ。未だに未発達な幼い双丘の上にある2つの《さくらんぼ》、細い腰回り、そこまで見て彼は目を逸らす。それ以上、下はまずいと彼の勘が告げたからだ。

「な、何でここにいます?！」

まず座ってほしい。正直、異性の体を見たところでどうとも思わない。だが、俺が疑われかねない。

(まず座れ)

心の中で思ってみるがさとりは心を読むという事を忘れるほどに焦っている様だ。未だに立っているのだろう。まだ振り返れない。

「あー、そんなに見せたいのか？その体を」

それを聞いた瞬間、さとりは正面に居るのが男だったということを出す。そして水飛沫を上げながらまた湯船に浸る。

その水飛沫を聞いた彼は顔をさとりに向け直す。

「取り敢えず。覚妖怪なら心を読もうか」

彼は、自らの脳裏に焼き付いてしまった目の前に立って居る少女の裸体を忘れるように目を瞑りながらそう言った。

面倒な状況だ。

風呂場に異性と2人つきり、完全に展開的に18禁だ。

しかも後で入るから今回は出る。

と言って見たのだが、寝てた私が悪かったなどと言って出させてくれない。

流石に直視するのはいろんな意味でいけないと思い、石を挟んで会話している。

ちなみにサードアイはお互い抱えているので読心は出来ない。

「本当に俺が出なくて良いのか？」

「出ないで良いですよ」

表情が見れないので話している口調で大雑把に感情を読み取っている。

サードアイほどの正確性はないが訓練、いやそんなことはしなくてもあちらの世界で生きていけば勝手に身につく。

「ペットが来たらマズイだろ」

「鍵を作っておいて何を言ってるんですか？」

「ばれてたのか」

確かに起きた時に俺の事をサードアイで見っていた。

ただ、その時鍵をかけた事を考えていないはずだった。

いや、無意識に考えてしまっていたのかもしれない。

そもそも、あの鍵はさとりなどこの館の住人に対して付けたものだった。

にしても無意識に考える要因にはならない筈だ。

「何でわかったんだ？」

「サードアイは相手の経験も読むことができるので、無意識に考えずとも簡単にわかります」

「成る程、そんなこともできるのか。素晴らしく便利だな」

恐らく、さとりは俺に悪意がなかったかの確認と、本当に声を掛けたかどうかの確認のためにやったんだろう。

「相手の経験なら何でも読めるのか？」

「そうです。トラウマを蘇らせたりも出来ますね」

強い。

それができるといふことは相手が精神が弱い場合なら自ら手を下すことなく潰せるだろう。

これまでの様に、自らがトラウマになる必要はなくなった訳だ。

まあ、トラウマを植え付けたとしてもすぐに殺すので意味はなかったが。

「にしてもそれで力も強かったら最強だな」

返事が無い。

もしやと思ひ岩の後ろを向く。

また寝ていた、と一瞬思ったが違う様だ。

息は荒く、顔は赤い。

のぼせてしまった様だ。

「全く」

助けを呼ぼうにもこの状況をペットに見られると面倒だろう。

だからと言って裸体の異性を抱え上げるといふのも後々問題を招きそうだ。

しかし、大事になってからでは遅いので抱き上げることにした。

ただ、流石に裸体のまま運ぶのは色々問題だったのでまた能力を使う。

空中にあった大量の湯気をタオルに変更、それをさとり巻きつけ抱き上げた。

妖怪になっているせいなのか本当に軽いのか簡単に持ち上げられた。

そのまま、転ばない様に細心の注意を払って歩き、脱衣所に出る。

その後、俺自身は着替えておいた。そうしなければさとりが起きた時にまたパニックになりかねない。

「取り敢えず、応急処置だろ」

そう言つて脱衣所の洗面台から水を出し最初の少量はタオルに変更しその後の水で冷やした。

それを額に乗せ、さとりが目を覚ますのを待つ。  
服を着せるということはしない。

着せる工程で色々な問題があるからだ。

どうすることもできなかったので眠っているさとりの横に座った。  
今回のこれは俺が色々聞いてしまったからだという罪悪感があったので相応の罰だろう。

にしてもこの能力の本質が少し見えた。

この変更する程度の能力を使用し対象を変更するには何かしらの代償がいるということだ。

シャワーに変更した時はその物の形を変更するだけだったが、タオルを作る時は気体、液体を個体に変えた。

今回の事でわかったのは後者の方が体力を使うという事。

どうやら対象の三態を変えようとするとその分体力を持つていられる様だ。

恐らく、落ちている石をダイヤモンドに変更する事よりも辛い筈だ。

試す気にはならないが。

「にしても起きないな」

本当にさとりは目を覚まさない。

ただ、息はしているので生きてはいるだろう。

にしても、今一度さとりを見てみると見た目はただの少女だ。

本来の人間ならここで恋愛感情が起きるのかもしれない。

そういえばもう人間ではなかった。

ただ、俺は起こらない。

いや、そう思えない。というのが正しいかもしれない。

さとりにだけは俺の罪を教えようかと思っただが結局教えていない。

しかし、覚妖怪である彼女から隠し続ける事は出来ないだろうし、いつかはバレるだろう。

しかし、自分から言いだす気にはなれない。

自分が暗殺者だったなどと。

言い出せない。

ここまで温かく迎えてくれたからこそ言えない。

「う〜ん」

もう考えるのは止めておこう。

読まれてしまう。

俺の秘密が。

俺はすぐにその考えを頭から排除してさとりの体を揺する。

今は、気付かれるまでは、この生活を続けたい。

無理だというのも分かっている。

間違いないつかは気付かれる。

ならその時が来るまでここを守ろう。

それが俺の贖罪となるのなら。

「あれ、私のぼせました?」

「ああ、見事にな」

にしても、なんだろうか。

自分にタオルしか巻かれていない事に気づいていないのか立ち上がった。

勿論、巻いただけのタオルは落ちて裸体が晒される。

今回は先にそれを読んだので見ずに済んだ。

「ごつちまで持ってきてくれたんですか?」

どうやら本気で気付いていないらしい。

「取り敢えず、タオルを巻いてはくれないか?」

俺は俯いたまま、さとりを見ずに言った。

「あつ」

恐らくまた真つ赤になっているんだろう。

というかさとりは真面目そうに見えて以外と天然というか、おつちよこちよいな感じがする。

だからこそ、ここにいるペットに好かれているのかもしれないが。

「今日は何かする事はあるか?」

「いいえ、特にはないです」

サードアイで無言の会話をしてもいいがサードアイにも風景は見えるのであえて使わなかった。

「泊めてもらってるだけだとあれだから何か手伝いたいんだが。」

「と言われても、、じゃあ、私の話し相手して下さい」

意味が分からない。

それは手伝いでも何でも無い。

ただ、話すだけ。

「わかった」

「ああ、そう言えば」

一応俯いている俺の近くにさとりが歩いてきた。

どうやらまだ服は着ていないらしい。

「どうした?」

「見てください」

「は?」

今さとりは服を着ていないはず、着ていたとしても下着のみ、そんな状態で異性に見ろ。

とはどういう事か。

「見てくれないんですか?じゃあ、こうです」

俺はさとりに突き飛ばされ床に転がる。

そのまま起き上がりさとりに理由を問おうと思ったが体が起こせない。

どうやら全身を使ったタックルだったようでそのまま俺の上に乗ったらしい。

「どうした?」

仰向けに倒れながら上に乗るさとりに理由を聞く。

仰向けになっっている俺の上に完全に全裸のさとりが乗っかっている。

そしてそのまま倒れ込んできた。

さとりの鼓動が胸に当たって聞こえる。

「やっぱりそうでしたか」

「何がしたかったんだ?」

俺はさとりが退いてくれたので立ち上がる。

床にぶつかったところが痛い、受身程度取ればよかったがあそこ

まで不意打ちでは流石に厳しかった。

「私と話すときにお教えしますね」

そう言っているさとりの顔は真つ赤だった。

恐らく、そこまでして確かめたい事があったのだろう。

「わかった。取り敢えず服を着てくれ」

「わかりました。一足先に戻っていてください。あとで呼びますので」

「そうか」

俺はそうとだけ言って浴室の出口の扉に手をかけ、錠から形を戻す。

その光景を見てさとりは驚いたようだがサードアイで見たようですぐに着替えに戻ったようだ。

俺はそのまま扉を開け外へ出る。

にしてもさとりのわかったこととは何だろうか。

まさか俺の経験を読んで暗殺者だったという事に気付かれたのか、などと思うと安心できなかつた。

そんな事に不安を抱きながら歩いていると割とすぐに部屋に着く事ができた。

すぐにドアを開け中へ入る。

「一体さとりは俺の何を知った？」

## 7話 真実

1人部屋でさとりが来るのを待つ、だが気配からしてもそれほど早く来ることも無いだろう。一人部屋に設置された豪華な寝台にゆっくりと横になる。こんなにも柔らかい場所で横になったのは久々だと思う。だが、今は余裕をもって寝ていることはできない。

一体、さとりは何を知ってしまったのか。俺が暗殺者だったという事に気付いたのだろうか？いや、無意識にでも考えた覚えはないので読まれていない筈だが経験を讀まれたとすれば納得がいく。経験はどうあがいても、消えない。

俺の経験。これまで様々なものをこの手で殺してきた。

腕を持ち上げ、血と恨みに染まっている両の手を眺める。

だがそうだと、さとりが俺に乗っかってきたことの説明が付かない。わざわざ、危険だと知った者の上に裸体のままかぶさるように乗るだろうか。危険すぎる。常人ならありえない。そんな行為に及ぶはずがない。さとりは確かに俺に乗った直後「やっぱりですね」といった。ということは俺に乗っかってきたあの行動で判断した、ということだろう。

いったい何を？

俺が受身でもとつてさとりを振り払ったならまだしも、俺は素直に乗られた。相手の不意を突くのが経験を讀むことの特徴だったのか？確かに不意は突かれたが……。いや、そうだとしてもあんなにも瞬時に理解できるのだろうか。経験とは膨大だ、たかが十数歳の間でも、十数年分の経験はある。それをあの一秒にも満たない時間で読めるのか？

なら、俺の何を知ったのか？

考え込んではいしたが、脚を引きずるような妙な足音がしたため、臨戦態勢に入る。体を上半身のばねを使うことで跳ねるように起こし。腰の短剣に手をかける。その直後、ドアが開き、さとりが入って来た。だが、異常であった。血まみれだった。服は深紅のノリによってつけられているような状況。フリルのついたスカートは原型をとどめて

おらず、ショーツまで見えてしまっている。

「お、おい。なにがあつた？」

彼は直ぐさまさとりに駆け寄る。

「百足が、」

そこまでそこまで言つて吐血する。その後も無理をして口を開こうとするさとりの口を右手で軽く塞ぎ、さとりを壊れやすい宝石でも持ち上げるかのように抱き上げ、寝台に寝かせる。当然寝台は赤く染まるがそんなことは気にしていれるような状況ではない。

「わかつた。寝ててくれ」

軽く微笑み、部屋を後にする。百足…おそらくは先ほどの大百足、となると俺への復讐か？どちらにしても、殺さなければいけないようだ。俺にはその程度のことしかできない。

ドアから外に出て、さとりを残し、廊下を駆ける。

途中であたふたしている鳥のペットを見つけたので声を掛ける。

「おい、さとりが怪我をして今、俺の部屋にいる。治療頼む」

それに答えてかペットは一度だけ鳴いて俺の来た方向へと飛んで行った。彼はそれを見て、また直ぐに駆ける。所々にペットがいたので避けながらエントランスに向かい開きっぱなしのドアから外に出る。外は所謂、地獄絵図だった。血塗れで倒れる妖怪たち、地面は血飛沫で赤く染まっている。俺は門を通り市街地に出る。なぜ、気づけなかつた？ここまでの被害が出ているなら音で気づけてもよかつたはず。だが、今気にすべきはそこではない。流石に情報が少なすぎ。まずまず、どこにいいのかすら検討が付かない。周囲を見回すが

居るのは倒れた妖怪達のみ。彼は周囲を見回し百足を探す。あいつは恐らく地面の中か、俺の見えない範囲に居るはず。それ以前に、なぜ今になって、砂漠を渡ってきたのか。周囲の倒れ伏した妖怪の生存を確認するが、生きてはいるものの、意識がない。そこで、彼は何者かの視線に気付きその視線を見返す。そこには一軒の家があった、少し扉が開いていて手招きする手だけが見えている。サードアイでその手を振る主を見て悪意がない事を確認してから駆け寄る。彼が近づき扉を開けるとそこには生き残った妖怪達が居た。いたのは老人、人ではないが、後は女と子供。どうやら女と子供だけはここに避難させたようだ。賢明な判断だ。

「おい、百足はどこだ？」

すると1人の子供が扉から外に飛び出し、口を開ける。頭部に生えている角からして鬼だろう。

「いま、勇儀さんが戦ってる。きつともっと町の真ん中だと思う」

勇儀、聞いたことがある。そういえば俺に酒を飲ませたあの鬼か。

「ありがとうな」

そう言つてドアを閉め町の中心部へ風の様に駆ける。中心部へ近づくに連れて地鳴りが聞こえ出した。地鳴りという事は地面に潜っている可能性が大きい。自動的にその分百足を探すのが難しくなる。あれだけ大きな物が身体を出していれば気付くはずだ。この地鳴りでも気づけたはずだ、なぜ、気づけなかった？

「どこだ？」

町の中心部へ来たが勿論のことながら、全く百足の姿は見えない。



る」と言った瞬間に心に興奮と思われる感情が現れた。どうやら戦闘狂のようだ。なんとなく予想はしていたが。

「ついでに地上に助けを呼んでおけ。町を直すためのな？」

勇儀はこの百足を倒すのを協力する妖怪を思い浮かべていたので付け加えて伝える。

「じゃあな、勇儀。また会おう」

彼はそう言い残し百足に対して走り出す。そのまま懐に入るのが目的だ。百足はそれをさせまいと、溶解液を連射してくる。相変わらず、色からして危険だと察せる。彼はそれを加速と減速、跳躍を駆使し紙一重で回避、百足の懐に入り込む。前に戦った時はサードアイの使い方を知らなかったが、今回はしっかりと分かっている。面白いぐらいに敵の行動がわかる。そして隙があれば足を切り落とす。しかし、これでは全く殺り甲斐がない。彼は距離を取り、そこで、静止するとあろうことか、サードアイに服をかぶせてしまう。

「今、俺は読心しないようにした。かかってきな、これでフェアかな？」

手を前に突き出し、挑発。

「バカメ」

百足は怒りに任せて突進、地面から彼を突き上げる。突き上げてくる頭部を踏み台にし、百足の背後に回る。

「行くぞ?」

そう言つて彼は短剣を身体に沿わせ体を地に這わすような低姿勢で百足に再度接近、短剣を甲殻に突き立てた。が、その刃は通ることがなく刃が弾かれる。衝撃が腕に伝わり、短剣を落としてしまう。想像以上に硬い、恐らく脚を切った所で倒れる事はない、ならば胴体に直接ダメージを与えた方がよい。そう思ったのだがこれほどまでに硬いとは思わなかつた。彼は襲い来る脚を切り落とし、後ろへ後退する。地面を変更し、すぐさま片手で持てる程度の剣を生成、彼はその二本の剣を構え、百足にまた接近する。無論、溶解液を吐いてくるが当たりはしない。正直、読心などしなくてもこの程度の相手の攻撃は読み切れる。直前で短剣をクナイの様に持ち替え、回転しながらまず甲殻に一撃、そこから更に片手剣で甲殻に回転力を乗せた斬撃を放つがやはり弾かれる。いつそのこと、甲殻の物質自体を変更してやろうかと思つたが実現可能かがわからない。彼はあの異常なまでに硬い甲殻に対抗する術を考える。そして、思いついた1つの可能性に賭ける事にした。それで無理だつたら物質を変更してみようか。彼はまた百足に対して接近、吐かれた溶解液に短剣を投げつける。瞬間、短剣にその溶解液が吸い込まれ毒々しい色を持つ。そのまま百足に突つ込み片手剣を両手に持ち替え全力の一撃を打ち込む。その衝撃でも百足の甲殻にはひびすら入らない。俺はまた一步後ろに下がり、百足と距離を取り、真横に落下して来た短剣を受け取る。硬い。割と本気で切つたがダメージ以前にひびすら入らない。恐らく、斬撃では碎けないだろう。そう確信せざるおえない。という事で武器を変え、る事にした。斬撃がダメならば打撃を打つ。当たり前だろう。手段を変えてでも、どんな手段を使つても殺す。彼は片手剣を地面に突き刺し片手剣を大鎚に変更する。ひびを入れやすくするため打撃を与える部分には先の尖った突起を付け、貫通力も追加。彼はその大鎚を軽く振るう。少し重くしすぎた気もするが別に良いだろう。それを握つたまま突つ込んでいく。短剣と違い、重いので溶解液をあと一步の所で浴びそうになる。だが、その大鎚の重さを逆に利用し、縫うように回避、そのまま接近し、大鎚を横に凧ぐ。その勢いを使つてもう一度体ごと回し、二撃目を入れる。やつとの事でひびが入つた。彼

はそこで回転を止め、逆に周り百足の節のうちの1つの甲殻を砕いた。ここまですればもうどうとでもなるので大鎚を投げ上げる。空中に舞った大鎚に百足の目がいつている一瞬の隙にさつき溶解液を吸寄せた短剣を握り直し。十字の残像が見えたかと思うと、そのまま、死を告げるように刻まれた十字架の中心に短剣を突き刺し、手を離す。そして大きく後方に飛びのく、ここで能力を解除し、固形化し、短剣の一部と化していた溶解液を溶解液に戻す。背後から百足の発狂したかのような悲鳴が聞こえたがどうとも思わない。いや、思えないというのが正しいだろう。

気づけば身体が血で染まっていた。別に身体は痛くない。ということは、あの百足の血か。なら良い。そう思い、彼はさどりの看病を行いに地霊殿へと戻っていく。危うく短剣を忘れかけたので急いで死体から引き抜き軽く振って血を払った。ちなみに大鎚は落下の瞬間に土に還したので問題ないだろう。あんなものが地面に埋まっていたら危険極まりない。そこで便利であり、自由に扱えそうな百足の甲殻の一部をばき取り、抱え上げ、持ちかえっていく。

気になってから百足の甲殻を持って地霊殿へと帰っているわけだが、少々大き過ぎた感が否めない。

事実、彼は自分の背ほどもある甲殻を持って歩いている。見た目的には重そうだったが実際に持ってみると非常に軽い。

「おい、空ー」

声的にはどうやら勇儀のようだが、足音が多いので2、3人は居るだろうか。

「何だ？」

彼は甲殻を持って歩きながら返事をする。

「本当に百足を狩ったのか？」

「あれ見てわかんなかったか？」

彼は歩みを止めることなく話しているが、これだけ大きな物を持っていると、かなり歩行ペースが遅くなるので問題無いだろう。

大きさにどうやっても顔まで隠れてしまうのでサードアイで前方を見ている。

「勇儀の横にいるのは誰だ？」

存在はあるのにも関わらず、話し始めてから何も言っていないのでこちらから言ってみる。

「あれ？どうやって確認したんだ？」

「足音」

因みに横にいるというのはほぼ勘だ。

町が襲われた時に全く人通りの無い通りを歩く奴はいないだろうという憶測はあったが、それはあくまで可能性に過ぎない。

勇儀の後ろにいた可能性もあれば前にいた可能性もある。

「これまた凄い奴が来たね。私は黒谷 ヤマメだよ。よろしく」

「俺は秦 空だ。よろしく」

彼がそう言った後に上から視線と同時に殺気を感じた為、甲殻を上に掲げる。

掲げた瞬間甲殻に何かが衝突した。

彼は何事もなかったかのように膝を曲げて衝撃を吸収しつづいた。

「完璧な……………不意打ちだったのに……………」

「残念だったな」

彼はその上から降ってきた奴の顔すら見ずに地面に甲殻を置く。

あれだけの衝撃でもひびすら入っていない。

正直、打撃だったので不安だったが上手く受けた事もあり、大丈夫だったようだ。

これならば形を多少変更すれば良い盾になるだろう。

彼は息をついてまたその甲殻を持ち地霊殿へと歩き出す。

「ところで……………なんで……………それ持っていくの？」

この声はヤマメでも勇儀でも無いので、きつと降ってきた奴だろう。

「良い装備になりそうだったからな。硬いし、軽い」

「そう……………」

何故か足音が変わっていないので、恐らく降ってきた奴は歩いていない。

しかし、それでは俺について来て話しているわけが無い。

俺はそれが気になり、1度止まり、サードアイで後ろを向く。

桶に入った緑の髪の毛の白衣？いや白装束を着た小さい奴が一人、さとりよりも小さいだろうか？

きつと降ってきたのはこいつで間違い無いだろう。

金髪のポニーテール？いや、おだんごか？という髪型に大きな茶色のリボンを付け、黒いふつくらした上着の上にこげ茶のジャンパーズカートを着ている。

何かをスカートに巻いているが正体不明ということで良いだろう。きつとこれがヤマメだろう。

最後に勇儀だ。

特に服装は変わっていないと思うが、あえて言うなら服がボロボロだ。

自身の血で汚れている為か白かったところが紅くなり、服は所々破

けて、痛々しい傷の付いた肌が見えていた。

そしてその3人に共通してあった感情、それは。

「何故、そんなに俺に興味を持つんだ？」

興味、そして好奇心だった。

「何故って、無傷であの百足を倒す覚妖怪に興味が湧かないわけが無  
いだろうか？しかも、私と戦ってくれるなんて興奮するだろ？」

「そうか、勇儀は戦闘狂か？」

戦闘で興奮するとは中々恐ろしいな。

「違うな、私はただ戦いが好きなだけだ」

それを戦闘狂というんだが。

口には出していないもののキスメとヤマメもそれが戦闘狂だと思っていた。

別にこの三人の仲を悪くしようとも思わないので特に何も言わな  
いが。

「じゃあ、俺はそろそろさとりんの看病に行くからな。また」

3人がお大事にと言ってくれと思っていたので了承し俺はその3  
人と別れた。

が、少し歩くと今度は肩が叩かれた。

「なんだ？」

「今晚宴会やるから来な」

勇儀だった。

「宴会？ああ、わかった」

「じゃあ今晚迎えに行くからな」

そう言つて勇儀はどこから出したのか酒を入れているであろう大  
きな皿の中身を啜ってから後ろを向いて歩いて行った。

正直、場所の事を考えていたので分かつていたが折角迎えに来てく  
れると言うならお言葉に甘えようか。

にしても、あれだけ百足に暴れられても建物が割と無事だった事は  
不幸中の幸いだらう。

あちらの世界では地震などの災害で家族を失った人を見た事があ  
る。

その被害者たちの目はいつ見ても不思議な気分させられる。その災害で家族を失ってから数日は悲しい目をしているが、一ヶ月ほど経つと、また変わる。

恐らく、数日は家族がいなくなった事を信じられず夢だと思っっているが、一ヶ月経つと、それが現実だという事がわかって来てしまう。まだ、家族が他人に殺されたのならその犯人という存在するものを恨む事ができる。

が、災害で死んでしまった場合何を恨む？

神か？

自然か？

それとも、自分自身か？

最初のうちは神や、自然を恨む。

が、最後には自分自身を恨む。

何故か、それは自分だけは生きているから。

まだ、家族が自分以外に1人でも生きていれば一緒に生きようという気持ちにもなるのかもしれない。

しかし、1人ではそういう気にはなれないだろう。

テレビでは「他の家族の分も生きる」などと言っているが本当にそれは出来るのか？

確かに、最初のうちはそう思うだろう。

だが、どれだけ生きたとしても孤独は変わらない。

生きている限り、その家族の温もりを知っている以上それを求めてしまう。

俺は家族の温もりは知らない。

だからこれはすべて勝手な推察だ、あちらでも既に覚妖怪だったと言うなら別だが。

あいにく、人間だった。

でもあの生活をしておいて自らをそこから普通に生活している人とは比べようと思わない。

理由など、言う意味も感じないが。

境遇、生活、生き様、仕事、全てが違う。

それで「一緒だね！」などと言ってくる奴は居ないだろう。

「おにーちゃん!!」

俺はその言葉で我に帰る。

サードアイだけを動かし、その声の元を見る。

「やっと気づいた!」

「悪い、ぼーっとしてた。」

こいしの心は読みにくいので読むことはやめ一度止めた足を地霊殿へと向かうために再度動かす。

「おにーちゃんは何してたの?」

「百足狩り」

嘘はついていない。

確かに俺は百足を狩った。

そこらとはサイズの違う百足を。

「え?!すっごく楽しそう!今度は私も呼んでね?」

「機会があればな?」

正直、もうない方が良さんだが。

まあ、機会があればこいしを呼んでもいいかもしれない。

「そのおっきいの何?」

「これか?これはさつき見つけたやつだ。色々使えそうだったから持ってきた」

「へ〜」

その発言の後こいしの気配が消えたので恐らく無意識に入ったんだろう。

取り敢えずこの甲殻を持っているせいで少々時間は掛かったが地霊殿に到着した。

俺は開きっぱなしの門を開け中庭を通り、同じく開きっぱなしで放置されていたドアを通った。

しかしそこで異変に気付く。

異常なまでの血の匂い。

そして向けられている多くの殺気。

殺気はペットからも向けられていたので別に何時もは気にしない

が少し、量が多すぎる。

俺は静かに甲殻を置き、地面に手を着く。

「死ね！覚妖怪！」

彼は当然予想していたので甲殻を双剣に変更し、襲ってきたその何かの脚の腱を右手で握った剣で切った上で立ち上がりながら回転し、首を切り落とした。

首を通っている動脈を切った為か大量の血が噴き出し彼の体を紅く染めていく。

「汚いな」

「なんだあの覚妖怪は?!」

「怯むな！全員でかかれ！」

物陰から数十人の人型の何かが出てくる。

「誰だお前ら?」

「我らは羅刹！ここに住む忌々しい覚妖怪を殺しに来た」

どうやら本当に覚妖怪は嫌われているらしい。

だが、関係ない。

俺を襲うなら闘わざるを得ない。

この殺し合いで俺が死んだならば俺がこいつらよりも弱かった、逆に俺が全員殺したなら俺の方が強かったということになる。

唯、それだけ。

結局、この戦闘でわかることはそれだけだ。

まあ、戦わないという選択肢もあるにはあるが。

闘わないことは殺されることに直結して居るようなので闘う。

差別されている種族が俺の種族だったと言うことも影響しているのだろうか？

「じゃあ、俺も殺されるのか」

「そうだ」

「そうか。残念だ」

「掛かれ！」

どうやら一斉に来るようだ。

さっきの攻撃で1対1では勝てないということを考えて上での

作戦だろう。

非常に良い。

だが、それは対象が重量のある武器、リロードが必要な武器を使っている場合に有効なだけで対象が軽い武器、リロードの必要のない武器を使っている場合にはあまり良くはないと言える。

まあ、圧倒的な差があればの話だが。

そんな事を考えているうちに包囲されてしまった。

360度敵だ、どこから来るのか。

まあ、こういう時は俺から見て左右前後から攻めるのが無難だろう。

予想は的中し、左右の羅刹が走ってきた上でそれを見た前後の羅刹も数秒遅らせてから動き出した。

波状攻撃という事か、なかなかの策だと思う。

俺は左右同時に振りかざしてきた羅刹の短剣を同時に前後に受け流す。

その場で2本の剣を逆手に持ち替えバランスを崩した左右の羅刹の心臓を突き刺し、体を半分捻り羅刹が倒れる前に握られた短剣の柄同士をぶつけ前後に飛ばす。

そのまままっすぐに飛んだ2本の短剣が前後から走って来ていた羅刹の胸に刺さり俺にたどり着く前に悲鳴とともに大量の血を吐いて死んだ。

「次は誰が来るんだ？」

俺は前後左右に倒れた羅刹には一切目を向けず、周りを包囲する羅刹に問いかける。

「さ、覚妖怪がこんなにも近接で強いはずがない！」

今の一瞬で俺を囲んでいる羅刹の戦意がかなり落ちたようだ。

心を読むまでもなく、周りの羅刹の眼の色が変わった。

実際の眼の色は変わっていないが。

「逆に聞こう。お前らは何時から覚妖怪に近接戦闘が出来ないと錯覚していた？」

## 9話 許されざるは一体何か

俺を取り囲んでいる羅刹の数は後10人、更に増援がいると考えた方が良いだろう。

「どうした、来ないのか？」

「野郎共、掛かれ！」

今度はどこから来るのかと思ったが風を切って部屋の奥から飛んできた何かに気づき。

身をかがめてそれを躲す。

弓か、ここで遠距離攻撃の可能な武器が出てきた。

これはかなり辛くなりそうだ。

味方の羅刹が近くに居ない限り矢はタイミングを見計らって放たれる。

俺はそれをいなしつつこの後何人いるかも解らない敵と戦わなくてはいけないわけだ。

「面倒な事をするな」

こうなってしまうと長期戦には持ち込めない。

しかし下手に気を抜いて相手に突っ込めばかなり不利だろう。

その時、また矢が撃ち込まれる。

俺はその矢の弾道を見つつ双剣で弾く。

現時点で相手の弓師は2人、ならば。

俺は放たれた矢の弾道から大体の位置を確認し弓師を探す。

階段上の右に1人、その対象方向に1人。

それ以上は今の所いないようだ。

俺は左右の剣を逆手から持ち替え、その方向に同時に投擲する。

左右一方ずつでは片方が逃げ、そいつにまた打たれてしまう。

だからこその同時投擲だ。

剣はうまく刺さったようで、悲鳴がエントランスにこだまする。

「なに?そんな馬鹿な」

かなり上手くいった。

と言うか、上手くいきすぎだ。

正直の所、手にでも当てて弓を撃てなくするだけで良かったんだが。

まあ、今はこの状況の打破が第一だ。

「もう終わりか？」

さつき剣を投擲した事で俺は今、何も持っていない。手と足が武器だ。

と思っておこうか。

「おい、よく見ろ！あいつは武器を持ってない。怯むな！」

どうやら多少士気は高まった様だ。

武器を持ってないなら勝てる！

そんな根拠のない思いが巡っている。

何故そんなにも根拠のない考えが生まれてしまうのか解らない。

まあ、剣を極めているだけで武術が出来ないと思っっているのだから根拠が無いというのは間違っているだろう。

正しくは証拠が無い、だ。

まあ、実際武器なしで残り16人の鬼を倒すのは辛いだろう。

だが、体が温まって来た。

多少は本気を出してみるのも良いかもしれない。

良い運動にはなりそうだ。

俺は構えを解きその場に棒立ちする。

一切の構えは取らず、ただ立っているだけ。

「お？ついに観念したのか？」

俺は頭を空にして正面の羅刹に歩み寄る。

「おお、ついに観念した様か。捕まえろ！」

しかし、俺は何も言わず正面の羅刹に歩み寄り続ける。

さすがに異常を感じたのか前の羅刹が構え横に剣を払う。

俺はそれを伏せることによつて躲す。

どうやら少し遅かった様で髪が切れていた。

俺はすぐさまその羅刹の足を払って転倒させ、素早くニードロップを叩き込みダウンさせる。

因みに、ニードロップと言うのはプロレスリングなどで使われてい

る技で片膝に体重をかけ、倒れた相手ののど元、胸の上などに落とす。という技だ。

俺は身長的にもそこまで重くは無いが喉元にぶつけることができれば十分すぎるダメージが入る。

俺は背後から走ってくる2人の羅刹を見て、わざと遅く走り羅刹が俺に追いつく程度で走る。

おれは階段めがけて走り、そのままの勢いでスロープを蹴り空中でバク転し2人の羅刹の背後を取り、さっきの羅刹から奪った剣で首を切断した。

あと15人。

そう思いながら剣を逆手に握り残りの羅刹に突っ込む。

つぎつぎと味方が力の弱いはずの妖怪に殺されていることを信じられないのかももうヤケになっていた。

恐らくは自らよりも絶対に弱い種族に負けたく無い。

というプライドからだろう、

「そんなくだらないプライドなら捨ててしまえ」

と言いたいところだがさっきと終わらせたほうが良い気がするので遠慮はせずに行かせてもらおう。

何より、覚妖怪を狙ってこの館に来たということは本来の目的はさとりとこいしだったはず。

こいしは外であったから大丈夫だとして、心配なのはさとりだ。

さとりは万全の状態なら戦えるだろうが、あの怪我では恐らく上手く戦えないはずだ。

最悪の事態も想像できる。

上手く逃げていてくれると良いんだが。

「終わらせる」

俺はあくまで剣撃で戦うつもりだったがさとりのことを思えば今すぐにでも終わらせたほうが良いだろう。

という結論に至ったのでやはり本気でも出そうか。

さっきの拾った剣は捨て、自らの愛用している短剣を取り出す。

刀身は百足の毒の影響で色が少々紅くなっている。

溶解液は紅ではななかつた気がするが。

俺は大きく息を吐き短剣を逆手に持ち構える。

本気と言ってもやれるかどうかわから無いことに挑戦するだけだが。

「heart rate accelerate」

自らの心拍を変更、約1.5倍にする。

恐らく身体に相当の負担が掛かるだろうが妖怪になっているしある程度なら行けるだろう。

俺は僅か二歩で羅刹の懐に入り、短剣を首元に押し込む。

「な?!」

その横にいた羅刹の喉も切り裂く。

身体が軽い。

心拍数を変えただけでここまでの変化が起きるとは想像もしなかった。

俺はまた走り、そこにいた羅刹を1人を残し殺した。

「今日、覚妖怪を何人殺した?」

無論、尋問の為だ。

「1人も殺せていない」

「そうか」

それはそう言つて首元に押し付けていたナイフを横に引き、鮮血を浴びる。

「はあ、真っ赤だ」

彼は誰に言うでも無く呟く。

それよりもさとりは無事だったようだ。

ここに住まわせてくれたことには感謝しているし、この恩は返そうと思つている。

なのでここで死んでしまふと恩が返せない。

今考えればそれが闘つた理由だろう。

「おい、お隣居るか?」

「はあ、はあ、逃げて!覚妖怪を狙つた輩がきてる!」

全く、一度落ち着いて周りを見て欲しいものだ。

「俺の後ろにいる奴らか？」

「えっ？」

驚きすぎたのか猫から人間に戻っている。

という事は人間の状態が正常ということだろうか。

「さとりは無事か？」

「いつも隠れているところにいるはずだけど」

もう現時点で嫌な予感がする。

いつもは隠れてもあの傷で隠れるのか、隠れようとしてもあの傷では早く動けない。

隠れるのはできるだけ早いほうが良い。しかし、あの傷では早く動くことは出来ないだろう。

確かだが、俺の部屋に来る時音では足を引きずっていた。

「今すぐそこへ案内してくれ。なんだか嫌な予感がするんだ。」

「え？でも何時も隠れてるところだよ？」

「良いから案内しろ」

俺はお隣の頭に浮かんだところへと急ぐ。

そこにさとりは居た。

「おい、さとり」

返事が無い。

何故だ？寝ているのか？

仕方ない、揺すって起こすか。

「おい、寝るな起きてくれ」

やはり返事が無い。

俺を馬鹿にしているのだろうか？

俺はさとりを揺するのを止め、座らせようとする。

「ううっ、大丈夫です」

「そうか。死んでたかと思っただぞ。取り敢えず傷を癒せ」

俺は立ち上がり、廊下見てペットの姿を探す。

「そういえば、彼奴らは？」

「全員殺した」

「百足じゃ無いですよ？」

「羅刹だったか？というか心読めばわかるだろう」

どうやら血がサードアイに掛かって見にくいようだ。

俺はサードアイに掛かったものの少量だった為もあり、特に見えな  
いということも無いが。

「本当に彼奴らを全員殺したんですか？元人間でしょう？」

「元人間なめんなよ？」

さとりは微笑を浮かべ気を失ってしまった。

おそらくこの出血量からして死ぬことは無いので貧血による気絶  
だろう。

「世話のかかる奴だな」

俺はそう言つてさとりを抱き上げ立ち上がる。

まあ、こういう奴だからこそペットに好かれるのかもしれないが。  
俺はさとりの寝室へと歩く。

(そう言えばさとりに俺の何を知ったのか聞くのを忘れていた。)

「あ、空」

お憐か。

「ああ、なんだ？」

「さとり様はその傷だし病院に連れて行こうと思うんだけど一緒に来  
るかい？」

「ここは地底だろう？どうやっていくんだ？」

その質問にお憐は心の中でとんでもないことを言った。

飛んで。

だそうだ。

翼なんてもの持っていないが飛べるのか？

「飛ぶ、だど？飛べるのか？」

「みんな飛べるよ」

飛ぶのが普通か、やはり世界が違う。

そう言えば勇儀達に飲みを誘われていたが断っておこう。

「ところでどうやって飛ぶんだ？」

「ああ、それならレッドブ○で」

ほう、どうやらこここの世界でレッドブ○は本当に翼を授けてくれる

ようだ。

「冗談だよ。取り敢えず飛べると思えば飛べるから」

「おお、そうか」

絶望的なほどに雑な説明だ。

「こうか？」

本当に飛べると思っただけで身体が宙に浮いた。

「さすが空。才能を感じるよ」

「お世辞は要らない。行く前に身体の血を流してくる」

お燐も随分と真つ赤だが、慣れていていいのか？

そういえば遺体を運ぶ仕事とか言っていたな。

「わかったよ。あたいはさとり様の血をざつと綺麗にするから」

「ああ、頼む。俺もできるだけ急ぐが服を探してくれるとありがたいな」

さすがに無いだろうと思ったがどうやらあるようだ。

あの笑い方からしてろくなものでは無いと思うが。

「スカートとかはやめろよ？」

念のために言っておいたが効果はあっただろうか。

取り敢えず今は全身に着いた血を流そう。

俺は服の事は正直諦め、風呂場へと向かった。

彼は1人、風呂場の椅子に座りシャワーを浴びていた。

身体にぶつかる温かい流水が俺の身体に着いた血を流していき、紅く染まり流れていく。

「ん？」

足を洗い流した時に軽い痛みが走った。

その痛みの感じた場所を見ると若干の切り傷ができていた。

範囲も少ないし、何せ俺が血まみれだった為に気付くのが遅れたようだ。

正直、この程度なら気にするまでも無いので適当に止血をし、浴槽へと歩いて行く。

「ふう」

にしても、自分の心拍数を上げることまで出来るとは便利な能力だ。

しかし1.5倍の時点で割と身体に負担がかかっていると思われるので下手に使わないほうが良いというのは事実だろう。

まあ、身体に慣れてもらえばどうとでもなると思うが。

「出るか」

そう言えば、さとりを地上にあるという病院に連れて行くのだった。

多少なりと急いだほうが良いだろう。

彼は風呂から上がり、俺が身体を軽く拭いて更衣室に向かった。

そこには一匹の猫、お隣だ。

俺は腰にタオルを巻いていたので問題は無い。

「これだよ」

差し出されたのは、恐らくさとりの服。

「おい、スカートだろこれ」

「冗談だよ。こっちを着てね」

そうやってさとりの服を持って外に出た。

まさかとは思うが本当にさとりの服だったのか？

取り敢えずお燐が投げた服を確認する。

何だろうか、紳士服？

間違いない動きにくだらう。

しかし、あの真つ赤な服など着たら殺人鬼とも思われそうなので黙ってその服を着ることにした。

「ああ、そうか」

何故そんな単純なことに気付けなかったのか。

俺はその服を持ってその服をジーンパンと真つ黒なTシャツに変更する。

変更すればよかつただけの話だった。

彼方では勿論そんな便利な能力は持っていなかつたので忘れるところだった。

俺は早速その服に着替え、外に出る。

因みに前の服は液体に変更して流してしまった。

あそこまで血に濡れてしまっってはもう使えなさそうだったので仕方ない。

たえ洗い流せたとしても血の匂いが残るのは嫌だ。

「あ、出てきた！って何その服?!」

にしてもなぜさとりを抱きかかえているのか？

「動きにくかつたから変更した」

「なんでもありだね、それ」

自分でもこの能力の汎用性の高さには感心しているが、これにばかり頼っていると戦闘の腕が落ちそうだ。

「まあな」

「取り敢えずさとり様を連れて行くよ。」

そしてさとりを投げ渡してきた。

「おいおい、主人をボールみたいに投げるな」

一応は受け止めたが身長差が無いので恐らく凄く不恰好だらう。

まあ、文句を言ったところで何かしらの理由をつけて俺に抱かせるだろうから何も言わないが。

「取り敢えず、行くぞ。案内は頼んだ」

「了解したよ」

俺はさとりを抱いたままお燐の後をついていく。

「なあ、結構こういうことあるのか？」

「まあね」

「そうか」

日常的にあそこまで狙われていては迂闊に外は歩けない。  
だからさとりは外にあまり出ないのか。

まあ、ただ単に肌が白く、俺が来てから一度も外に出ていないので  
勝手に外に出ていないと決めつけているんだが。

妖怪は肌が焼けないのかもしれないと言う可能性もあるのでやは  
り、ただの憶測だ。

「ああ、そうだ。このフード被って」

俺はお燐から投げ渡されたフードをさとりのの上に乗せる。

「この状態で取らせに来るとは中々に鬼畜だな」

「空の事だからできると思ってたよ」

俺はため息を吐きながらさとりを壁に掛けさせ、フードを被る。

正直、フードなどを被った方が目立つ気もするが。

まあ、肝心なのはサードアイを隠すことなんだろう。

「さとり様にも被らせておいて」

「ああ、わかった」

俺はさとりにフードを被せ、持ち上げる。

別に、妖怪になったこともあってかさとりの重さは全く感じない  
が。

この状況を赤の他人が見れば完全に出来上がったカップルだろう。  
というか、割と動いているはずだがさとりは全く起きる気配が無

い。  
まさかとは思いますが睡眠薬でも飲ませたのだろうか？

先程からさとりを投げ渡してきたりしているので、正直やりかねな  
い。

お燐は俺の準備が終わったのを見た後、ドアを開けた。

「おい、空。どこへ行くっていうんだい？」

ドアを開けるとそこには丁度門を開け、入ってきた勇儀が居た。

「さとりを病院に連れて行く。宴会はまた今度にしてくれないか？」

「おお、そうか。わかった」

正直、多少なり怒られると思っていたが、まさか何も言ってこないとは思わなかった。

念のため心を読ませて貰ったが、本当にさとりを心配している気持ちのみ感じれた。

さとりは外を怖がっている様だが周りは彼女をそこまで恐れてはいない様だ。

「ありがとう」

そう言ってお燐の後を追う。

空を飛びつつ、下を眺める。

へりに乗って仕事をしに行った事もあったがその時とは状況が違う、ゆっくりと眼下の風景を眺めれる。

基本的にへりに乗っている時は逃走中であつたり、戦闘中であつたりで、身体を乗り出して手榴弾を相手のエンジンに投げ入れるなどの割と簡単な事をするだけだったが。

やはり、外を見るほどの余裕は無かった。

「ここが地上への道だよ。この洞窟だけが上に繋がってる」

それは絶望できるほどに高い絶壁だった。

はるか上に、僅かに太陽の光であろう光が見える。

こんなものを今から登ると思うと軽く絶望できる。

しかし、今は飛ぶことができるので幾分かは楽だろう。

「ここに行くのか？」

「そうだよ」

そう言ってお燐はどんどんと上がっていく。

その後を俺はゆっくりと追っていた。

速度を出そうと思えば出るんだろうが、さとりを抱いているのでそう速くは飛べない。

お燐もそれをわかっている様でゆっくりと上昇してくれている。

ただ、真上に飛んでいくというものだったので俺は眠っているさと

りの顔を見る。

やはり寝顔とこの体つきを見れば中学生程度だろうか？

まあ、体つきで言えば俺もそのぐらいだろうが。

見たことは無いが両親も小さかったんだろうか。

いや、ここは大きかったと信じておきたい。

大人になっても身長が160というのは流石に笑えない。

俺が女ならいいが残念ながら男なのだ。

せめても170ぐらいは欲しい。

「やっぱりそれ気にしてたんですね」

彼はその声の主を見る。

その主は俺に抱かれ赤面しながらジッとサードアイで彼を見つめていた。

「いつから見てたんだ」

「私のことをちゆうがくせい？とか思ったところからです」

一番聞かれたく無いことを聞かれた。

油断していた。

「起きたんなら飛んでくれ」

「出来ないんですよ」

どうやら貧血で体に力が入らないらしい。

というかそれは貧血の影響なのか？

お隣に睡眠薬でも飲まされていたんでは無いかと再度思う。

「そうか、なら仕方ないな」

そう言つて俺は上昇を続ける。

気付けば差し込む光は近くなり、出口が近付いていた。

「さあ、地上だよー」

彼よりも少し先を飛んでいたお隣はそう言つてその穴から外に出た。

彼もそれに続き外に出る。

最初のうちは太陽光の眩しさに眼があげられなかったが、少しすると風景がだんだんと見えてきた。

そこから見えるのはある程度のサイズの山、葉を太陽に広げ

青々しく茂る木々。

彼方ではもう少ないと思われるような広大な自然だった。

# 11話

## 新聞記者と案内者

「おお」

思わず声が出るくらいには綺麗な光景だ。

それをゆつくりと見ていたのは山々だが、さとの事もあってさつさと進む。

というよりかお燐がどんどん先に行ってしまうので見る暇が無いのだが。

「目印とかはあるか？」

「広い竹林が目印だね」

「ああ、あれか」

お燐の飛ぶ少し前方に目をこらすと広大な竹林が見えた。

まだ距離がある様だがそう時間はかからなそうだ。

そんな時だった。

「こんにちわ」

いつの間にか背中には黒い羽黒い紙、その頭には赤い塔の先端をモチーフにしている様な奇妙な帽子から左右に白いボンボンを糸で吊るした。という、見るからに奇妙な帽子をかぶった女がいた。

「誰だ？」

特に敵意も殺意も感じないのでごくごく普通に振る舞う。

ただし、お燐がいかにも面倒な奴に見つかったとでも言いたげな感情を抱いていた。

正直、読むまでもなく表情に表れていたが。

「私は射命丸 文。新聞記者です」

「そうか、俺は秦 空だ。ここに最近来た」

俺は正直、新聞記者とか報道に関係する奴らが好きでは無い。

自らの報酬のためにわざわざ他人のトラウマを掘り返し、それを全国に広めている。

まあ、結局はその質問を受ける他人もお金を貰っているのなんとも言えないが。

「で、何のようだ？少し急いでいるんだが」

俺はそう言っただけ抱いているさとりに目を落とす。

一応察せという意味でやったのだが違う意味で取られたらしい。

凄く気味の悪い好奇心が相手の心中に渦巻き出した。

「ところで、さとりさんとはどういうご関係で？」

完全にやらかしてしまった。

これまであそこでもジャーナリストと対峙する事例は経験していなかった所以对処法がいまいちわからない。

「普通に地霊殿に住まわせてもらっているだけだ」

「住まわせてもらっているだけ、という関係でお姫様抱っこなんてします？」

そういえば身長差がないため一番楽な抱き方をしていたがこれはお姫様抱っことか言うものだった。

俺的にはただ単に一番効率的だったんだが。

やはり名前からして、他の一般人から見れば付き合っているようにも見えるのかも知れない。

「これが一番楽だからな」

「ふふふ、そうですか。ではそちらも急いでいるようなのでまた会いましょう」

変な記事を書かれるだろう。確信した。

飛んでいくのをサードアイで見ていたが、その時に書く記事について考えていた。

題名は、地霊殿の主、外来人の少年と熱愛。

だそうだ。

畜生、これは面倒な事になった。

俺は別に周りの目は気にならないがさとりが問題だ、大丈夫だろうか。

「うん、なんとというかお疲れ」

お隣が慰めにもなっていないような言葉を掛けてくる。

「最悪だ。あいつは後で焼き鳥にでもしてやろうか」

別に本気では思っていない。

まずまずもう相手が殺る気でない限りもう対象が人であれ、妖怪で

あれもう殺さないと決めたのだ。

それは変える気はない。

「怖いね。そろそろ着くよ?」

気付けば既に真下には広大な竹林が広がっていた。

昔から考え事をしてしていると周りが見えなくなる。

悪い癖だ。

「で、なんで竹林の前に降りたんだ?」

お隣に従って降りた先は竹林の中の病院ではなく、竹林の入り口のような所だ。

目の前には鬱蒼と茂る竹。

「ここは別名迷いの竹林って呼ばれてるんだ」

「迷いの竹林?」

彼方の世界でもそういう曰く付きの森はあった。

行ったこともないし、よくわからないが恐らくは人間業では越えられない障害物を全て右に迂回して避けようとした結果。

四方にその障害物がありぐるぐると回り続けているとかそこから変だと思うが。

しかし、この世界には妖怪もいるので外の常識は通用しない。

ならば本当に謎の力で迷ってしまうという可能性も到底信じがたいが否定はできない。

「やあ。珍しい客だね」

いきなり竹林の中から白髪、いや銀髪だろうか、女が出てきた。

目は真紅に染まっており。

服は白のカッターシャツに赤いモンペのようなものをサスペンダーで吊り上げたようなもの。

髪には大きな赤いリボンを一っ付け、髪の前にも複数個の小さいリボンが付けられていた。

そして、なんとも印象的なのがモンペのようなものに貼られた大量の護符だ。

一言で言うのなら平安貴族の亜種のような格好だ。

「誰だ?」

「私は藤原 妹紅だよ。妹紅とでも呼んで」

藤原、ということとは藤原家の親族とかそこらだろうか？

そんな可能性はゼロに近いだろうが。

「妹紅か、何の用だ？」

「何の用って、貴方達を永遠亭に案内するんだよ」

どうやら永遠亭というのがお隣の言っていた病院の事らしい。

中々察知能力が優れている様で、現状のさとりを見ての発言だろう。

「そうか、助かる」

別に悪意も感じないので素直に従う事にする。

もし、途中で殺しに来た場合は全力で潰すだけだ。

「じゃあ、こっちだよ」

俺は鬱蒼と竹林の中を妹紅の背を追って歩いて行く。

因みに、お隣は俺の後ろから付いてきているようだ。

恐らく、俺が逸れた時のためだろう。

昼なのにも関わらず日当たりは少なく、夕方の様な暗さと夜の静寂があるこの竹林では確かに迷いやすいのかも知れない。

「ここだよ」

妹紅が立ち止まり、前方にある大きな日本式の館の様なものを指し示す。

屋根は瓦だ。

外にもある様な日本式の家のとても大きなものと見るのがいいだろう。

「これか」

俺はその館に歩いて近付いて行く、流石に見えている距離で迷うことは無いと思うので先頭を歩いた。

「あつ、先に行くと思戯兎の罠があるから」

俺はそれを聞き終わる前に穴に落ちていた。

もう少し、早く言って欲しかったんだが。

ただの落とし穴なら良かったものの、暗くてよく分からないが何か水の様なものが入っていたのでかなり濡れた。

「なんか凄い濡れたんだが。水でも入れたのか？」

「昨日雨が降ってね。それがたまってたんだらうね……ウサ」

正直に言おう。

ウサを強引に付けすぎだらう。

完全に間が空いていた。

「ウサっているのか？」

俺は服についた水分を気体に変更し、一瞬で乾かす。

「割というウサよ」

なるほど、さっきのは付けにくかっただけか。

そして、こいつも変な格好をしている。

癖っ毛の黒い髪に白いウサ耳、そして袖以外はほぼピンクの半袖ワンピース。

いや、今気にすべきはそこでは無いな。

「医者に案内してくれ。さとりを見てもらいたい」

「わかったウサよ。所で名前は？」

ウサを付け忘れていいのか、必要無いと判断したのか。

まあ、別にいいだろう。

「秦 空だ」

「秦？ここに同じ名字の奴がいた気がするウサね」

俺と同じ苗字？

まあ、いた所でこれは偽名だし同じ血筋では無いと思う。

偽名と言っても生まれた時に捨てられたこともあって本当の名字など知りもしないが。

というか、名前さえつけられていたのだろうか？

「お前、名前は？」

そういえばこの兎は俺の名前だけ聞いて本名を名乗っていない。

「因幡 てゐウサよ」

「因幡で兎といえばあの因幡の白兎の本人か？」

「そうウサよ。なかなか知識があるウサね」

そう言ってるのが館に入って行ったので慌てて追いかける。

内装は外見からも想像はついていたが、和風だった。

まあ、当たり前だろう。

2、3個の扉を過ぎた時、てゐが止まりドアに対して指をさす。  
ここだ。

ということだろうか。

いや、ここウサ。

だろうか？

「ありがとうな」

俺は指定されたドアにノックをする。

「入って下さい」

声的には女性だろう。

「どうも」

俺はそう言ってドアノブに手を掛け、ドアを開いた。

## 12話

### 竹林に佇む館

「こんにちわ。どんな病人かしら？」

病人、と言うわけではないんだが。

まあ、ここは病院なのでその質問をするのが医者として当然だろう。

俺は抱いているさとりを目を向ける。

「貧血だ。割と重度だと思う」

あれだけ出血していれば重度ということになるだろう、そもそも人間とは体の作りが違ってあの程度ならすぐに治るといふなら別だが。

「あら、地霊殿の主じゃない。そのベッドに寝かせてくれる？」

俺は永林が示した部屋の隅にあるベッドにさとりを寝かす。

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。私は八意 永琳よ」

「俺は秦 空だ」

「そう、では自己紹介も済んだことだし状況を聞くわ」

状況を聞く？

その事になんの意味があるのか。

まあ、医者のお考えなんてよくわからないものだ。

今はサードアイのお陰もあり簡単に理解できるが。

「羅刹に襲撃を受けてさとりが大量出血した」

事実だ。

なんの嘘もない事実。

「そう、じゃあ輸血が必要ね。ただ、覚の血は流石に持ってないのよ」  
「どうやら、覚という種類の妖怪は少ないため輸血パックがないらしい。」

というか外でいう血液型の様な物はないのか。

「俺の血を抜くか？」

「あら、流石は覚ね。じゃあ別室でやってもらうわ。優曇華！」

俺の入ってきたドアが開きこれまたウサギの耳のつけた女が入ってくる。

てるよりはかなり身長が高い。

格好は外の女子高生の制服のようなもの。

ただ、1つ言ううとすればスカート丈が非常に短いことだろう。

「何でしょうか。師匠」

ああ、この兎はこの永琳の弟子の様な立ち位置か。

まずまず、師匠と呼んでいる時点で弟子だとわかると思う。

「彼の血を300ccほど抜いて頂戴」

「わかりました。こつちです」

俺はこの優曇華という人物に無言でついていく。

にしても、優曇華とは中々に珍しい名前だ。

確か優曇華というのは仏教の伝説の花の名前だった気がする。

そんな事を考えてい間に俺は1つ横の部屋に案内された。

「ではここに腕を置いて下さい」

「ああ」

正直の所自分で自分の血は抜けるので抜いてもらう必要は無いのだが折角やって貰えるというならやってもらったほうがいいだろう。

流石に医学のプロには技術では到底かなわない。

「じゃあ、力を抜いてください」

俺は言われた通りに力を入れる。

「じゃあ抜きますね」

どうやらこの優曇華という人物……人ではないだろうが取り敢えず採血が上手いのかあつと言う間に終わってしまった。

とくに痛みも感じなかったのでやはりかなり上手いと言えるだろう。

「上手いな」

「いえいえ、私はまだまだですよ」

医者にとつて謙虚さ程大切な物は無いと聞いているので、それ以上に何かを言おうとは思わなかった。

「ここで待っていてください」

そう言つて優曇華は俺の血の入ったビーカーを持って部屋を出て行った。

何故俺は連れて行かなかつたのか気になるが。まあ、そこまで気に

することでも無いのでこの部屋でも見ておこう。

天井ではプロペラの羽の様なものが回っており、俺の正面には小さな窓。

外には数匹のウサギが見える。

右にある棚の上にはホルマリン漬けではなく誰かは分からないが2人の人間のようなものと優曇華が写された写真があり。

その周りを包囲するかの様に女らしい小物が置いてあった。

ヘアピンやら人形やら、幾つか用途の分からない物があつたが気にしたら負けだと思う。

もともと女という生物は男とは色々ちがう。

しかし、女から見れば男が色々おかしく見えるのだろう。

それは性別の違いが産んだ他人からこう見られたいという願望の違いであり、それが考え方まで変化させたんだろう。

「お名前聞いても良いですか?」

後ろのドアが開き優曇華がこちらに話しかけてきた。

「秦 空だ」

「空さんですね。私は鈴仙・優曇華院・イナバです」

名前が長い。

それが感想だ、何かヨーロッパの人のフルネームの様だ。

「そうか、で、何の用だ?」

「さとりさんの診察が終わったので」

「ああ、そうか」

何故だろうか、外見はこんなにもお淑やかというのか、落ち着いているのに内心はかなり焦っている。

なにこの人?! 何で特に何でも無い様な反応してるの?!

正直煩かったのでサードアイに自然に手をかけ読心を出来なくする。サードアイ、やはりいい事だけではないな。

「で、いつ頃目を覚ますんだ?」

「わからないです。でも命に別条は無いので時期に目が覚めます」

「そうか」

彼はそう言って鈴仙の後ろのドアを開け外に出る。

そのまま一度さとりを見に行こうかと思ったがあの言い方からしてそんなにすぐ目を覚ますことは無いだろうし竹林でも眺めていようか。

縁側に座り、こう落ち着いて見てみると地面の所々から筍が顔を出していた。

外の様に車や電車の音はなく、ただあるのは風で揺れた笹が擦れ合う音のみ。

ああ、眠くなってくる。

ここで少し寝るのも良いかもしれない。

そうして彼は睡魔に身を任せた。

---

「ああ。」

彼は体に吹き付ける風で目を覚ました。

いつの間にか体には毛布が掛けられている。

恐らく鈴仙が掛けてくれたんだろう。

外は暗くなり、月が昇っていた。

どうやら割と長い時間寝てしまった様だ。

そろそろさとりの様子でも見に行こうか。

電気もない様で、頼れるのは月明かりのみ。まあ、俺はある程度夜目が利くので問題はないが。

彼はさとりが寝ているであろう部屋の扉を開けさとりを捜す。

探すと言っても部屋にベットは一つしかなかったのでそこに向かうだけだが。

静かな寝息が聞こえる。

どうやらまだ寝ているようだ。

彼は近くにあった木製の椅子に腰掛けさとりが起きるのを待つ。

さつき寝たのでまた寝てしまうことは無いだろう。

彼は恐らく鈴仙が掛けてくれたと思われる毛布を畳み、膝の上に置いた。

「流石にまだ起きないか」

彼は畳んだ毛布を鈴仙に返す為一度部屋を後にする。

恐らく鈴仙の部屋は俺が採血された所で間違いないと思うので昼に案内された所に向かう。

まあ、たつた1つ横だが。

ドアを開けると鈴仙はまだ起きていて机に向かっていた。

どうやらこちらには気づいていない様だ。

「おい、何をしてるんだ?」

「えっ?!いつ入ってきたんですか?」

「今さっきだ」

どうやら鈴仙はノートに薬のことを書いていたようだ。

整った字で見たことのある物質名が記されている。

「薬学か」

「そうです。これでも医者を目指してるので」

もう十分医者の仕事はこなせてると思うが、と言い掛けたが折角の向上心を落とさせたくは無いのであえてそうは言わなかった。

「そうか、頑張れ。あと助言だ、そのセラスタミンの所に人間に処方する際は二週間以内に留める、と書くべきだろうな」

「え?薬わかるんですか?」

どうやらかなり驚いているようだが昼間のように心中で騒いでいるということも無いのでサードアイは普通に向けておく。

「いいや、それぐらいしか分からない」

本当は自分で作らなければいけない事もあったし、割と分かるが医者を目指している奴には到底かなうようなモノでは無い、それにそこについて追及されると面倒なのであえてそこは避けておいた。

「そうですか。所でさとりさんは?」

「まだ起きていない」

「そうですか、早く起きると良いですね」

「そうだな。そういうえば毛布ありがとうな、風邪をひかずに済んだ」  
危なかった、一番の目的を忘れるところだった。

それを忘れてしまえば俺はただ、鈴仙のノートのミスを指摘しに来

ただけになってしまう。

「いえいえ、患者が増えたら大変だと思ってやっただけですから」

要は俺の体を心配してくれていたらしい、まあこの程度の寒さなら風邪など引かなかったが。

「そうか、妥当だな。俺はさどりの部屋にいる」

「布団でも用意しましょうか？」

「いや、場所だけ教えてくれれば後で自分で出す。さっき寝たおかげで眠くないしな」

鈴仙が一瞬いい出す前にルートを頭に浮かべたので鈴仙が言わずともわかっていたが取り敢えず聞いておこうか。

言葉で。

「部屋の隣の棚の中です。」

「随分近いな」

「遠くにもありますよ?」

「いや、遠慮しておく。じゃあ、ありがとうな」

彼はそう言って鈴仙の部屋を後にした。

## 13話

### 部屋に漂うは蝋燭の煙

「確かこの部屋の棚の中だったな」

俺は鈴仙に指示された部屋の棚の前にいる。

心を読んで棚の中にあるという事は分かっていたがまさかこの部屋がここまで棚だらけだとは思ひもしなかった。

ただ、探しているものが布団という事もありある程度は的を絞れている。

しかし、今のところは全てハズレだ。

よく分からない乾燥させてあった葉や草、服の類、何かのホルマリソソ漬けが大量に入っていたりもした。

ただ、一番驚いたのは棚を開けた瞬間に兎が飛び出てきた事だろう。

まず、棚の中に何故ウサギが居たんだろうか。

遊びで入って抜けられなくなったか、それとも閉じ込められていたのか。

俺はそんな事を考えながらまた大きな棚を開ける。

「やっと当たった」

その棚の中には綺麗にたたまれた布団が閉まってあった。

柄は特にないごくごく普通の布団という感じだろう。

俺はその布団を出し、持って行く。

危うく棚を閉め忘れるところだったので外に出て布団を置いてから中に戻り棚を閉めた。

俺は外に置いておいた布団を持ち上げさとりの寝ている部屋へと向かう。

両手が塞がっているのでまた布団を置きドアを開けたのちに入った。

「空」

中に入るときとりは目を覚ましていたようで俺の名を呼んだ。

そう言えばさとりは俺の事を呼び捨てで呼んでいただろうか？

呼んでいなかった気がする。

まあ、気にすることでもないか。

呼び方なんて人それぞれ、そこを拘束する権利は俺にはない。

「何だ？」

俺は布団を敷きながら適当に返事をしておいた。

「ねえ、空お」

流星におかしい、こんなキャラでは無かったと思う。

いや、これは本質なのかもしれないが。

流星にそれはないと思う、いや、無いと信じたい。

「どうして」

声をかけ切る途中で俺は敷き終わったばかりの布団に押し倒された。

「おい、何のつもりだ？」

「ふふふ」

何だ？まさかさとりには化けた偽物か？

偽物なら容赦無く殺れるが証拠がない、本人だった場合恩を仇で返す事になってしまう。

「冗談のつもりか？」

心を読んでみるが思考はモヤモヤとした霧のような物が邪魔して読めない。

おかしい、こんな状況には今の所なつた事が無い。

まあ、まだ使い始めて数日も立っていないが。

何か原因がある筈だ。

俺は俺に覆いかぶさるように乗っているさとりにサードアイを向けつつ、原因を探る。

探ると言っても、今の状況は悪くなる一方でいつの間にか両足を絡められ足は動かず、手も抑えられてしまっている。

俺は読心を諦め、今のさとの表情などから判断を試みる事にした。

と言っても、時間が時間のため部屋の電気は机の上の蠟燭のみという事もありはつきりと見る事は出来ない。

ただ、息が荒く、顔が赤い程度はわかる。

さらに体温が上がっているようだ。所謂、興奮状態ということだろう。

更に異性である俺を襲うということはもう結果は出た。

強力な媚薬でも打たれたかしたのだろう。

ただ、いつ打ち込むタイミングがあつただろうか？

いや、そう言えば媚薬というのは身体に付着するだけでも効果はあつた気がする。

更に気体の場合でも使えた筈だ。

俺は使わなかったが、昔その手の暗殺の標的になつたこともあつた。

まあ、暗殺者は基本的に毒に対する抗体を作るので人によるがかなり強力な物でも無い限り効かないが。

「一度落ち着け」

「なんでよお」

これは恐らく口論にならないやつだろう。

そう言えばこの部屋はやけに甘い匂いがある。

どうやらこの匂いのせいのようなのだ。

そういえばさつきは蠟燭なんて無かつた。

基本的には気体で使用される媚薬は二種類ある。

1つ目はランプなどの上に液体を置きその熱で蒸発させる物。

2つ目は蠟燭に見せかけ火を付け気体にする物だ。

今回は恐らく後者だろう。

机の上にあるあの蠟燭から出ているようだ。

「一回離れてくれないか？」

「いや。寂しいの」

即答か、どうしたものか。

ただ、媚薬というのは欲を増幅させるものであつて新しい人格を作るものではない。

まあ、物によっては感度を上げるだけのものもあるが、今回は違うだろう。

という事は、だ。

さとりは心の何処かで寂しがっていたということだろう。さつきの俺の発言の後から体を抑える力が強くなった。

本気になればすぐに抜かれるだろうし、今はまだそこまで危機的状況でも無いので焦る必要は無いだろう。

「寂しいのか」

「うん」

寂しいという感情はよくわからないが、恐らく辛いものなんだろう。

さどりの顔を見ればわかる。

さどりは泣いていた。

声も出さずに静かにだが、涙は流れていた。

その涙がさどりの頬を伝い俺の顔を濡らしていく。

どうやら、力尽きたのかさどりは眠り俺の胸の上に落ちた。

彼は再度寝たさどりを持ち上げベッドに寝かせる。

そしてベッドに腰をかけ、さどりにサードアイを向けた。

さどりの過去を知る為に。

読めたのは悔恨。

唯一の妹を守ることが出来なかった自分自身に対する罪の意識。

自分ももつとしつかりと妹を見ていれば良かった、妹のそばにいれば良かった。

ば良かった。

自分がそばに居れば妹は目を潰さずに済んだかもしれない。

今も覚り妖怪として居れたかもしれない。

けれど守れなかった。

延々とこの思考が回っていた。

心が読める妖怪だったこいしが目を潰してからたつた心の読める

覚妖怪として1人で生き、心が読めることで発生する悩みは誰にも打ち

ち明けず、1人で抱え込んだ。

自らのペットに相談しようかとも思ったようだが心配をかけたくない。

これは自分の問題だ。

そう決め込みその悩みを抱え1人、ベッドで泣いていた事もあるよ

うだ。

口調と雰囲気は大人だが、やはり気丈に振る舞っていたという事か。

まあ、常識的に1人でここまで大きな悩みを抱え続けていれば心には大きな負担が掛かるだろう。

感情がなければ問題は無いが。

まあ、そんな奴はなかなかいないだろうし、何せさとりには感情がある。

事実今こうしてさとりの感情を感じているわけだ。

俺はさとりに向けたサードアイを違う方向に向け、さとりの頭をそつと撫でる。

サラサラとした感触が心地いい。

恐らくかなり念入りに手入れしているんだろう。

俺は少しの間その感触を楽しみ、その後蠟燭を消し、布団に入った。

さつき寝たばかりではあったが、割とすぐに睡魔に襲われそのまま眠りについた。

## 14話

### 命知らずは命を捨てる

俺は体を揺すられて起こされた。

正直、自然に目が醒めるよりは辛いし、寝起きも悪い。

「ん？ああ？さとりか」

「昨日私、何かしましたか？」

言うべきか言わないべきか、少し迷ったが言わないことにした。

「いいや、何もしてなかったぞ」

「したんですね」

気付けばさとりサードアイがこちらを見ていた。

どうやら寝起きで思考回路が鈍くなっていたようだ。

という言い訳をしておきたい。

正直、忘れていた。

自分も他人の心が読めるので、読心を特別な物という認識が置けず。

結果今回の様に油断してしまった。

気をつけなければ。

「私は何をしたんですか？」

「俺をベットに押し倒した。その後すぐにまた寝た」

もう嘘も無駄だろうと読み、素直に嘘を交えた真実を言った。

嘘というのはそのままノーマルにつくのが一番バレやすい。

一番バレない嘘と言うのは、嘘を真実で覆い隠した嘘だ。

この嘘を吐かれるとどうしても真実の方に目が行きそれ以上は探ろうとしない、それによって嘘がばれにくくなる。

要は大切な物をしまうのと同じ感覚と言ったところだろうか。

例えば今回の件なら俺に対して本当は寂しいやら色々言っていたが、あえて押し倒されたという真実は認め。

その発言をした事を言わないわけだ。

「本当ですか？本当なら私のサードアイの前に手を置くのをやめて下さい」

「わかった」

俺はそう言っただけでゆっくりとさとりのサードアイから手を離す。

この動作は俺の思考を読まれないためでもあり、俺のサードアイをさとりに向ける時間稼ぎでもある。

「さとりがもし俺に何かをしてたとして何をしたと思う?」

少しいじりたくなかった。

「え?そ、それは。き、キスとかですか?」

「安心しろ、してない。」

それは事実だキスはされてない。

「じゃあ、もっと先の行為を?!」

「してねーよ。落ち着け」

さとりは焦っているのを必死に隠してはいるが、心が読めるので意味はない。というか表情に出てしまっている

「そ、そうですか」

「所で、元気になったのなら地上を観光しないか?」

観光という名を打ってはいるが本音は地上にはどんな生物が住んでいるのか知りたいだけだ。

「わかりました。行きましょう」

そう言っただけでさとりは立ち上がり、ドアを開けて出て行く。

俺はすこし慌てて、それを追いかけた。

「あら、退院かしら?」

「そうです」

「じゃあ、頑張るって」

いや、何を頑張るのだろうか?

特に頑張る要素はない様な気がするが。

取り敢えず先に歩いて行ってさとりの後を追おうか。

見失ったらおしまいだ。

外は、日がかなり登っていた。

太陽の位置から予測するに恐らくは10時から12時ぐらいだと思われる。随分と寝たな。

「所で何処に行くんだ?」

「取り敢えずこの管理をしている巫女のところへ行きます」

巫女に管理させるとは、やはり少し外の世界と比べて生活水準が低いのかも知れない。

まあ、自分で思っておいてだが、巫女が管理者だからと言って生活水準が低いと言うのは酷すぎる憶測かも知れないが。

まずまず生活水準など低くても生きていて楽しければそれでいいのだろう。

「あそこです」

ざとりが指差す先は山の上にある赤い鳥居、鳥居があるということ  
は神社だろう。

「どんな人が居るんだ？」

「博麗霊夢という紅白の衣装が目立つ巫女がいます。」

接近するにつれてその神社の全貌が見えてきた。

どうやら山のある程度高い位置にある様で、木々に隠れてはいるが  
所々石の階段が顔を出している。

「こんなところにあつたら参拝できないだろ」

「事実、参拝客はほぼいません」

「だろうな」

まずまず妖怪が出るという時点でここまでわざわざ来る普通の人間  
はいないだろう。

これもまた俺の勝手な妖怪への偏見からだが。

妖怪は人を食べる。

そうとしか聞いたことが無かったからだ。

見たことはない、ただ聞いただけでそれを信じてしまう。

それが人間の愚かな所だが且つ残酷な面でもあるんだろう。

しかし、今俺は覚妖怪になっているわけだが人間を食べたいとは思  
わない、まあまだこの姿になってから見てないというだけかも知れな  
いが。

「なんか、白と黒の奴もいないか？」

「ああ、霧雨 魔理沙という魔法使いでしょう」

距離的にはまだあるが一応視力は左右2.5以上はあるので判断  
は出来る。

そう思った瞬間、俺とさとりの上をビームのようなものが通った。  
「は？」

「もつと早く飛べますか？嫌な予感がします」

「ああ」

確かに、加速してからその霊夢であろう人物と霧雨という人物が周囲に光弾のような物を放っているのが見えた。

「何だ？光弾を周囲に放ってるぞ？」

「戦闘中の様ですね」

俺とさとりが残り数十メートルまで来た時、博麗と言われていた人物が札を掲げ何かを言い放つ。

刹那、その札が光り大量の光弾が四方八方に放たれる。

必殺技の様なものだろうか？

取り敢えず、宙に居るのは得策とは言えなそうなのですぐさま飛行を中断し眼下の森に降りる。

しかし、降りた先にまで大量の光弾が迫ってきていた。

どちらにしても他人の前であの動きをすれば無駄に詮索をされてしまう。

相手がただの人間であるならまだしも、覚と言う心を読む妖怪が居ては上手く隠せそうにもない。

いち早く、サイドアイに見られていても思考が読まれない策を講じなければ。

そんな事を考えつつも正面から飛んでくる光弾を躲していく。

色は虹色の様で稀に大きな光弾が正面から飛んで来るが木々をなぎ倒して来るので非常に読みやすい。

正面から光弾が4つ、飛んで避けてもいいがそれではブラインドさされた場合にもどうしようもなくなってしまう。

と言う事でスライディングをして下を潜る。

そしてすぐに立ち上がる。

どうやらブラインドはなかった様だ。

軽くホツとするがそんな暇はなくすぐさま次の光弾の群れが来る。

今度は左右から俺を狙ってのホーミングに、正面から2つのブライ

ンド。

本来ならブラインドは分からないが先に来る光弾よりも後ろから来る光弾の方が大きかったので直ぐに気付けた。

彼はホーミングの2つをギリギリまで引きつけながら後ろへ走り、そのまま上をへし折られ幹だけ残った木に足を掛け後ろへとバク転しそのまま地面に受け身を取りながら倒れ、ブラインドしてきた光弾も避ける。

まあ、少々危険なドッジボールと言ったところか。

この頃運動不足だったので丁度いいが。

まあ、銃弾よりは格段に躲しやすい。

その後1・2分程避け続けた所で光弾は止んだ。

俺は1つ息を吐いてからさとりの居るであろう上空へと飛ぶ。

「無事ですか？」

「ああ、なんとかな。伏せていたら頭上を越えていった」

さとりは俺の心配をしているがどうやら避けきれなかった光弾が複数あつた様で、服は破れ、あまり直視できない様な状態に陥っている。

「直すか？その服」

さとりは今の自分の状況に気付いた様で少々頬を赤らめながら頷いて。

「ほらよ。直った」

「便利ですね」

「そういう能力だ」

彼はそう言つて博麗という人物が居たと思われる処へと飛んでいく。

背後から気配は消えていないのでさとりも付いてきているだろう。

彼はそのまま、まるで爆弾でも落とされたかの様な状態になっている神社へと降り立った。

## 15話

### 人間とは常に愚鈍な豚である

「これは……………」

境内に降り立ったが、あそこから見えた通りかなり酷い状況で、鳥居は倒れかけ、境内に敷かれていた石は粉碎されていた。

どうやら銃弾よりも火力は高いようだ。

それもかなり。

「さとりじゃない。珍しいわね、何の用？」

「横の男は彼氏なんだろう？」

「どうやらこの女達が博麗と霧雨のようだ。」

「今、空に地上を案内してるんです。あと、空とはそういう関係では無いです」

「さとりはわかりやすいな」

霧雨が意地の悪そうな笑みを浮かべながら言った。

全くだ。

もう少し日本語と言うのを学んだほうが良いだろう。

「魔理沙さん、だから違うと言って」

「どうも、魔理沙さんだぜー」

「あつ……………」

これが墓穴を掘っていくスタイルという奴だろう。

さとりは親しい人であってもさん付けする。

これは今の事で証明された。

という事はしないのは家族ぐらいだろう、そして俺の事はさん付けしなかった。

俺しか気づかないかと思っていたが、どうやらこの霧雨という奴も割と頭が回るようだ。

「全く、そういうところは恐ろしく頭が回るのね。魔理沙は」

「そういう所ってどういう事だ?!私はいつも回ってるぜ!」

「あー、はいはい」

この博麗という奴はかなりこの霧雨という奴の対応に慣れているようだ。

恐らくは親友か何かだろう。

「所で何があったんだ？戦闘しているように見えたが」

「ちよっと妖怪の群れがね」

神社に押し入る妖怪の群れ、とは。

この世界に安全な所はあるのだろうか………

「にしても、わざわざ夢想転生なんて使うか？死にかけたぜ？」

どうやらあの距離で味方もいるのにも関わらず手加減なしでアレを放ったようだ。

当然、霧雨の服は見るも無残な状態だ。

味方がいるという認識のある上でアレを放つというのはなかなか狂っている。

もしも、かわせず被弾していたらどうしたのか。

まあ、あの距離でその程度の被害に収まっている霧雨も凄いとは思うが。

「取り敢えずこれをなんとかしないとね」

「無視か?!」

華麗なスルーだ。

見事に話を変えてきた。

「俺が直そうか？」

まあ、神社がこんな状態では信仰がさらに落ちかねない。

それに多少の恩を売っておくのも良いだろう。

……この管理者なら敵に回すと非常に面倒だ。

「直せるの?」

「ああ」

この範囲をするのはさすがに疲れそうだがなんとかなるだろう。

対象はそこらに散らばっている木片などにすればそこまで体力も使わずに済む。

指を鳴らし周囲を元あったように戻す。

ただ、この博麗の住処であろう家は元の形が分からないため戻せなかったので多少の改造はしたが。

「ありがとう」

「どうって事はない。さとり、次の所に向かおう」  
もうここに用はない、ならばここを後にするのみだ。

次の所に案内してもらおう。

「はい。では、また会いましょう霊夢さん」

そう言つて飛んで行つたさとりの後を追つて行く。

「次の目的地は何処だ？」

「村に行きます」

どうやら地上にも村というのがあらし。

まあ、神社があればそれを信仰する人間も居るだろうから普通だが。

まあ、街ではないのでテレビやらスマホやらはないだろう。

「村か。人間のか？」

「はい、そうです。良い人もいますよ。悪いんですが村ではフードを付けてください」

さとりは本来入りたく無いはずだが、どうやら来てくれるようだ。

と言つても、覚妖怪は人間にも妖怪にも嫌われていた種族、フードでその象徴であるサードアイを隠すのは当然だろう。

ただ、それはさとりが1人できた場合のみ。

隠す術がそれしかない。

ただ、今回は俺がいる。

「変更すれば大丈夫だ。好きな服装とかを言ってくれ。」

「えっ、そんな事が出来るんですか？」

俺の能力は変更する程度の能力、ならば服装ぐらいなら簡単に変えられるだろう。

ただ、問題はサードアイだ。

あれを気体に変えてしまうと戻せなくなる可能性が非常に高い。

俺はサードアイがどのような出来ていてどのような身体についていて、何故相手の心が読めるのかわからない。

そんな状態で変更すれば戻せなくなってしまう。

そうなった場合、存在意義が無くなり存在ごと消えかねない。

それは避けなければ。

「俺の能力は変更する程度の能力。大抵の物は変更できる。ただ、サードアイは変更すると戻せなくなりかねないから大きさを変更してネットワークスにする」

「わかりました。な、なら」

よくわからない要求でもしてきたらどうしようかとも思ったが。

基本的なファッションの事なら全て殺しの技術として覚えさせられていたので大丈夫だろう。

「が、学生服が良いです」

「は？学生服？逆に目立たないか？」

まさかそうくるとは、思ってもいなかった。

というか学校も無いような所で学生服なんて着れば間違いなく目立つだろう。

「冗談です」

「冗談だったか、良かった。おかしくなったのかと思ったぞ」

全く、何の前触れも無く驚かしに来るのは実にやめて欲しいものだ。

驚くとまではいかないが、今回の物は地味にリアリティがあった。

「よくわからないので空のオススメでお願いします」

結局こうなるのか、全く。

適当に俺が外で来ていた服装にでもしておくか。

「ちよっと考えるから待ってくれ」

身長などは俺と同じか小さいぐらいなので気にしなくても良いだろう。

胸に関しては……………別に考慮しなくてもよさそうだ。

「今失礼なこと考えてましたよね？」

「いや、そんな事は無いと思うが」

また忘れていた。

こっちが意識しなければ心を読まれるのだった。

「逆に何が失礼だったと言うんだ？」

「そ、それは」

まあ、言い出しにくいだろう。

さどりの性格上、昨晚のように薬が入っていないければ自分の胸という言葉すら出しにくいだろう。

同性ならまだしも俺は異性、当然さどりはかなりいい出しにくい。「わ、私の胸がち、小さいとか」

想定外だ、言ってきた。

言わない方にかけていたんだがな。

「ああ、そのことか。俺は無い方が良いと思うがな」

「……えっ?」

何故頬を赤くしているのだろうか?

俺は邪魔にならなくて動きやすいだろうという意味で言ったのだが、まあ、別に気にする所でも無いだろう。

「服装はこれで良いか?」

俺は動きやすさを意識し、紺色の半ズボンに白い半袖のTEEシャツ意味を感じないので刺繍も模様も無い。

首にはサードアイでできたネックレス。

大きさもかなり小さくしてあるので気づかれることは無いだろう。ちなみにさどりは最初の期待通りに学生服にしてある。

最初に俺を軽く騙した罰とでも言っておこうか。

膝よりかなり短い紺のスカートに、白いTEEシャツ、その上からはセーターを作っておいた。

因みにさどりのサードアイもネックレスにしてある。

「えっ、えっ?! やめて下さい空!」

何だか必死に訴えかけてきているが俺はそれが似合うと思ったからといえれば解決する。

「何でだ?」

本人自体はかなり恥ずかしいようで必死にスカートを抑えている。

なかなかに見えていて面白い。

「普通のにして下さい!」

「普通のと云われても外ではそれが普通だが?」

そう、『学生にとっては』普通だ。

別に言うまでも無かったので言わないが。

「空と同じ格好で良いですから!」

少々遊びすぎたようだ。

涙目になって来た。

少々悪いきもして来たので、そろそろ戻そうか。

「わかったわかった」

そう言つて一応スカートの丈を膝の下まで伸ばす。

「格好はこのままなんですネ」

「俺のこれは男向けだから似合わないんでな」

事実、着せてみたところさとりには学生服が似合う、更に顔もかなり可愛い部類だろうか。

こんな女子が学校にいたら恐らく色々な男子から狙われるだろう。

「いくんじゃ無いのか?」

「そ、そうですね。行きましょう」

そう言つてさとりは前を飛んでいく、正直にいわせてもらえばさつきスカートを隠していたが今は飛んでいるわけだ。

下から見られたら隠しようが無いこともわかっているのだろうか

?

「ここで一旦降りましょう」

彼はさとりの指示に従つて無言で降りる。

「では、この先が村です」

さとりはそう言つて前をさすが動こうとしない。

よく見れば目は恐怖に怯え、足は震えていた。

トラウマが甦っているのだろう。

俺は少どうするか迷つたのちさとりに歩み寄る。

「今回はお前1人じゃない。俺がいる。無理だったら帰るか?俺はここに村があると知れただけで十分だ」

俺はそう言つてさとりの手を取る。

これでは何かのアニメの主人公のようだ。

ああいった類の物は嫌いのだが。

まあ、やってしまった事は仕方がない。

「いえ、大丈夫です」

そう言つてさとりは俺の前を歩き始めた。

「無理はするな?」

「わかつてます」

俺はその横に並び一緒に歩き出す。

自分の意思で他人の横に並び、歩いたのは初めてかもしれない。

俺はいつも1人で行動していたし、高校の時も友達だと思っている奴らが1人で帰る俺の横に来たぐらいだろう。

そんなことを考えている間に1つの家の前に到着した。もうすでに村の中だったので、周囲は人が歩いている。

俺の変装はうまくいっているようで誰も覺妖怪という事には気付いていないようだ。

「ここが寺子屋です」

「寺子屋。成る程、だから子供の声が聞こえるのか」

その家の中からは子供の騒ぐ声が聞こえる。

寺子屋というのは江戸時代程度からあつた今でいう学校だつた気がする。

「おや、誰だ?」

俺たちの存在に気づいたのか家の中から1人の女性が出てきた。

戸は開いていなかったので雰囲気を感じ取つたようだ。

人間であつても只者では無いだろう。

腰まである非常に長い藍色の髪に見たことの無い三角錐が乗つたような帽子。

特徴的なのは服だろうか、胸が大きくひらき、上下一体となつている。

「新しい生徒だったか。ほら、早く入れ」

「えっ、待つて下さい」

さとりは戸惑いつつも事情を言おうとしているがそのまま奥に連れて行かれてしまった。

彼はやれやれと言いたげにその後につき入っていく。

手を引かれているさとりは途中から諦めたようで何も言わずある

部屋に入れられた。

どうやらここが教室のようだ。

先ほどよりもはつきりと子供の声がする。

「入るしか無いか」

少しだが、どんな授業をやっているのかどうかも気になるので俺もさどりの入っていった戸を開け中に入る。

俺が入ると室内から謎の歓声上がる。

俺はそれを無視し、教室を見回す。

男子がざっと見ただけでも数人しかいない。

道を歩いている時から少し思っていたが今確信した。

ここは、男と女の比率がおかしい。

道を歩いても男は少なく、すれ違うのは女ばかりやはり男自体が少なかったようだ。

そしてもう一つ気づいたのは、人間で無いものも混ざっているという点だ。

全員女だが、背中から氷が生えていたり、翼が生えていたり、あるいは触覚まで生えている。

周りの生徒の反応を見る限り、隠れているわけでもなく、ただ普通に馴染んでいるようだ。

「ほら、早く座れ」

俺もいつの間にかその教師であろう女に手を引かれ真ん中の空いている席に座らされた。

さどりは一番後ろに座らされている。

「あの、よろしくお願いします」

「よろしくー」

左右に座っている2人の女子から声をかけられた。

一人は最初に入ってきたときに見た翼の生えた少女、座っているの  
で服はよくわからないが。

とりあえず緑の髪をサイドポニーにし、後ろでは黄色いリボンで髪をまとめている。

もう一人は恐らく人間の姿をしていて、翼も生えていないが人間で

は無い。

金髪の髪を左だけ紅いリボンで留め、服は黒の上下一体の物、そして胸のあたりにネクタイの様なものを付けているがネクタイにしては蝶結びに近く、どちらかといえばボンボンの様なものなのかも知れない。

「ああ、よろしく」

まあ、授業など面白く無いと判断すれば全く聞かないが。

多少は興味はあるので軽く聞いてみようかと思う。

もしかすると俺の知らない知識を使うかも知れない。

「じゃあ始めるぞ。取り敢えずこの問題を前に出て答えてもらおうか」

前につらつらと書かれたのは足し算だった。

もうこの時点で興味は完全に消えた。

しかし、左右に座っている少女二人はかなり考え込んでいた。

「おい、分かんないのか?」

そうやって緑の髪の少女の問題を覗く。

何故だろうか、何故この少女は掛け算をやっているのか。

前の問題は足し算だ。

しかし、彼女は掛け算を解いている。

この少女は優等生という事だろう。

一方もう片方の金髪の少女はと言うと引き算をやっていた。

なんだこの寺子屋は、やってることがバラバラだ。

「じゃあ、さつき来た2人、これを解いてくれ」

いつの間にか前の黒板に2つの数式が追加で書かれていた。

さとりのは足し算だったが、俺の問題は分数のかけ算とわり算の混合した物。

何故俺のがこうめんどくさいものになるのか。

不条理だ。

しかし、結果としては所詮分数の計算なので前に歩いて行くまでの時間に暗算し答えだけを書いて直ぐに席に戻った。

「えっ、暗算でやったんですか?!」

横にいた緑の髪の少女が驚いた様に聞いてくる。

「こんな事で驚かれるとは思ってもいなかった。」

「ああ、そうだが?」

「凄いですね!後で勉強を教えてください」

小声なのは教師にばれない様にといい事だろう。

「出来たらな」

一方のさとりは少しして前から戻ってきた。

教師はさとりの答えに丸を付けてから、少し考えたのち俺の答えにも丸をつけた。

「そういえば、お前たち名前は?」

「秦 空だ。外人人という奴らしい」

「古明地さとりです」

教師は何かを思い出した様で、少し慌てていた。

「え?!あの古明地さとりか?!」

「そうです」

どうやら気づいた様だ。

「すまないが空といったか。ここの生徒に授業をして置いてくれないか?わたしは少しだがさとりと話をしたい」

「ああ、わかった」

そう言つて俺は教師とさとりが部屋の外に出たのを確認してから教壇に立った。

いきなりの事について行けてないのか生徒は黙ってしまっている。

「授業をしろと言われたので授業をする。秦 空だ。よろしく」

そう言つて俺は黒板に数字を書き始める。

何故俺が授業なんてしないといけないんだ。

まあ、別にできない事でも無いし構わないんだが。

やはり、教師がやるべき事だと思う。

しかし、これは職務怠慢か?

と言われれば確かにそうではあるが、生徒には迷惑にはなっていないわけだ。

まあ、さとりの事も知っている様だし、悪意も読めなかったので気

にはしないが。

## 16話

### 愚かな思想は来世に伝う

俺は黒板に一桁の足し算の問題を2つ書く。

「これが解ける奴手を挙げろ」

取り敢えず生徒のレベルを見なくてはいけない。

さっきの2人の状況から察するにこのクラスはできる奴とできないやつとの差が激しい様だ。

まあ、できるやつ手を挙げろ。

と言ったが実際問題数は2つ、手をあげても当たる可能性は低い。要は分からなかったとしても手を挙げるということだ。

結果全員あげている。

「じゃあ、その氷の羽生やしてる奴と、君」

ただ、それを見分けるのは非常に簡単だ。

こういうのが解けない典型的なやつは自分が最強最強言ってすぐさま手を挙げるやつと、周りの状況を見ておどおどしてつつ挙げる奴。

正直、サードアイを使えば即座にわかるのだがあまり外で使う事は避けた方がいいだろうし、独学で仕入れた心理学の知識でも軽く使う。

と言っても、自分の経験から考えているので心理学的にはおかしいかもしれないが。

まあ、氷の方は最強最強言っていたので当てたが、他の子供はこの程度の難易度ならできるようで特に動揺もしていなかったので適当に当てた。

「丸付けするぞ。どっちも当たりだ」

さすがに簡単すぎたようだ。

なら考え方でも教えておけば良いだろう。

「なかなか優秀だな。驚いた。それなら考え方を教えよう。何を教えて欲しい？」

教室が少し騒つくが気にしない。

少しして人間の女の子が手を上げてきた。

「引き算の考え方を教えてください」

「わかった」

そう言つて俺は机の上に花を咲かせる。

咲かせるといふよりか花に変えたという方が正しいのかもしれないが。

「ここに花があるな。さて何輪だ？」

「五輪ですか？」

「そうだ。そしてここに三匹の虫が居る」

俺はそう言つて机の一部をカブトムシ三匹に変える。

カブトムシにしたわけは女だけでなく男の気も引くためだ。

男にも見てもらわないと意味がない。

「これこの花を食べる虫だ。まあ、大きさがこれだから一匹一輪しか食べれない。さて、ここに虫は三匹いるわけだが花は五輪ある。この虫がこの花々を食べたら何輪残る？」

「二輪ですか？」

俺は一匹ずつ花に近づけて行き触れた瞬間に変更を戻していく。

「正解だ、答えは二輪。今のを式にすると5-3だ。そして答えは2。まあ、全員知つてるとは思うがこんな考え方だ。これからは個人的にわからない問題を聞いてくれ。俺はここに居るから」

そう言つて教卓の椅子に座る。

こうするなら最初からそうすればよかつたかもしれないが最初のあれは俺がどのように数学を教えるかを見せるためにやったことだ。

俺はどんな風に教えてくれるかもわからない奴にわざわざ聞きたくはない。

こんな私情を挟んではいけないのかもしれないがこれが俺のやり方だ。

と言つても教師をするのは初めてだったので俺のやり方だ、何てこととは言えないが。

「先生。良いですか？」

俺の横に座つていたあの翼の生えた少女が質問に来ていた。

「どの問題だ？」

「これなんですが」

その少女が俺に出してきたのは難易度はそこまで高くはない分数のかけ算だ。

どのように教えようか。

まあ、後々やるであろう分数の割り算にもつながるような教え方をしたほうが良いだろう。

と言うか、こんなにもやってる事がバラバラな授業は初めて見た。

「かけ算は出来るか？」

「はい」

聞いておいてあれだが、かけ算のできない奴が分数のかけ算をするわけが無いか。

「分母、分子、この言葉は知ってるか？」

「はい、大丈夫です」

単語の知識もある、と。

やはり優等生だったようだ。

「じゃあ説明しよう。分数は基本的に亀として捉えるとわかりやすい」

「亀、ですか？」

「そうだ。分母が母亀、分子が子亀。この考え方がわかりやすい」

おそらくこれが一番ベターであり、わかりやすい物だろう。

それ以上にわかりやすい例えもあるのかもしれないが俺の頭では残念ながら浮かばない。俺は説明を楽にするために机の上で能力を使い机の一部を2つの親子亀に変更する。

「はい。何となくわかりました！。ありがとうございます」

いや、俺は何の説明もしていないんだが。

ありがとうございます。

俺はその後にも次々と質問を手に、前に来る生徒に解法を教えつつさとりが来るのを待っている。

そんな時、1人の男が俺にこう言った。

「先生ってさとり妖怪？」

ばれたんだろうか？

まあ、いざとなればこんな奴ら簡単に振り切れるから別に良いが。

「覚妖怪？何だそれは？」

一応知らないという事にしておこう。

「知らないんですか？」

「外から来たばかりでな、あまりここについての知識がない。是非教えてくれ」

嘘はついていない。

俺は事実来たばかりだし、ここの情報をそれほど持っていない。

わからないとも言っていない。

それにここの奴らが覚妖怪をどのように考えているのかも分かる。

「心を読むという恐ろしい妖怪ですよ」

「そんなに恐ろしいか？それ。そんな強くなさそうだが」

これもまた事実、心を読むと言われても今となってはそこまで強いとは思えない。

「それに加えトラウマも見せれるんですよ」

正直に言えば、だからどうした。

と言いたいところだが、ここはあえてここの子供に養育をするべきだろう。

今は一応教師でもあるのだから。

「そうか、で、なにが恐ろしいんだ？」

「いや、だからトラウマを見せれるんですよ？」

やはり、そう教えられているだけのようだ。

さとりから聞いた話ではさとり妖怪は力のない種族、相手が人間でも3人程度に囲まれれば逃げれないと言っていた。

「それ以外は無いのか？所でその覚妖怪ってのにあって見たいんだが」

「いないですよ。そんな種族追い出しました」

やはり人間は自分の行動を美化する。

力の無い妖怪とわかった上で自分に都合が悪かったから抹殺したというのが正しいだろう。

まあ、本当に追い出されただけだとしても村の外にいる妖怪に殺さ

れたんだろう。人間3人に勝てないのに妖怪に勝てるとは考え難い。だから今は心の読める覚妖怪はさとのみという事だ。結果どちらにしても人間の良いように進んでいる。

そして後世にはとても恐ろしい妖怪だったから追い出したとだけ伝える。

昔の人は私達を守る為に必死に戦ったなどとも書いてありそうだな人間なんてそんなものだ。

「いや、俺はもつと恐ろしい能力があると思うけどな」

「え？まあ、それはそうでしょう」

どうやらこの村自体に覚妖怪は恐ろしいというイメージが出来ているようだ。

大人を説得しても良いが、大人を変えるより未来ある子供を説得したほうが良いだろう。

何かを変えるときは現在ではなく未来を見たほうが良い。

「所で、そんなに恐れているようだが、なんかされたのか？」  
「多分」

恐らくは見た事も聞いたことすらも無いが、何かをしたから追い出されたんだらうという推測だ。

それか書物自体にも詳しく明記されていないか。

「まあ、どちらにしても俺はその覚妖怪つてのがどんなやつだったのか知らない」

「そうでしょうね」

まだ続けるといふのに話し出さないでほしいものだ。

「しかし、ただ恐ろしい能力を持っているからと言ってそこまで避ける必要は無いと思うが」

「でも、怖いじゃないですか」

そう、人間は異質な物、自分よりも強いものを極端に恐れる。それは外の世界でも同様。

例えば何かわからない黒い物体が近づいてきたらどうするか。相当自分に自信がない限り逃げるのが一番有効な手だろう。

そんなに自信もないのに戦う奴は基本的に早死にする。

何故恐れるのか？

それはいたって簡単だ。

分からないから。

人間は知識を有する種族だ。

人そのものは非常に弱い。

素手の状態では毒蛇にすら勝てない。

まあ、常人であればの話ではあるが。

だから人間は知恵を手に入れその知恵で強者を圧倒し外の世界では一番階級の高い種族となった。

しかし、子ども相手にこんなことを言っても分からないだろう。

「まあ、怖いと思うならそれでも良いが1つ言っておく。力は使いようだ。使い方次第で壊すことも守ることもできる」

「わかりました」

「まあ、そろそろ疲れたから授業終了な。お疲れ様。まだ聞きたい問題あるやつがいたらあの先生に聞いておけ」

教育というのは疲れるものだ。

一対一ならまだしも一体多数では、かなり気を使わなければならない。

それに加え、生徒一人一人が持つてくる質問にその場でわかりやすい考え方を教えなければならぬ。

やってみるとわかるものだが非常に大変だ。

「誰かしら？」

後ろを向くと丁度女が入ってくる場所だった。

完全に警戒を忘れていた。

ここに居るとこのあまりの平和さにぼけてしまいそうだ。

気を抜きすぎている。

そうとしか思えない。

「誰だ？」

格好は女にしては珍しく赤いもんぺ、おそらく札であろうものが縫い付けられているような模様だ。

まあ、一番印象的なのは真っ白な髪だろう。

見た目はまだそこまで年もいっていなさそうなことからアルビノという可能性がある。

そういういえばどこかで見たことがあるような気がする。

「私は藤原 妹紅。ここの教師の慧音の友達よ。貴方とはあったと思うけど」

「そうか、そういういえば竹林であつたな」

他人を覚えるのは苦手だ、会ったところで関係をもつ意味がなかったので他人を覚えるという所が抜けているのかもしれない。

まあ、そこまで警戒はしなくても良いだろう。

「慧音が今どこにいるか知ってるか？ 連れが連れて行かれたんだが」  
「多分あそこかな、ついてきて」

そう言つて藤原は外へと出て行つたのでそれを慌てて追いかける。

「多分ここかな」

そう言つて案内された所はさっきの部屋の目の前だった。

そうだ、ここは一軒家だ。

地霊殿でも無いのだからあんなに大きくは無い。

少し考えればわかつたはずだが、完全にうっかりしていた。

「目の前か……………」

「そうね」

藤原は顔は笑つてはいなかったが、心の中では必死に笑いを堪えていた。

堪えるぐらいなら笑つてくれた方が楽なのだが。

「慧音、もう日も傾いているし生徒を帰した方が良いわよ」

「それもそうだな」

どうやら言つていた通りその部屋にいたようで、慧音が出てきた。

慧音もう上白沢と呼んでも良いのだが、噛みそうなのでできれば言いたく無い。

という事でこいつは下の名で読んでいる。

まあ、他にもさとりなどは下の名で読んでいるが結局のところその判断基準は噛みそうか噛まなそうかだったり、姉妹がいる等々だ。

そう言つて出てきた慧音とすれ違うように部屋の中に入っていく。

「空、大丈夫でしたか？」

「ああ、何とか無事だ。もう日も暮れてきているし、一度帰らないか？」

「さとりは少し考えたようだがすぐに決めたようで頷いた。」

「えっ、貴方の連れってさとりだったの？」

「ああ、そうだが？」

「どうやらかなり驚いているようだ。まあ、今はサードアイを変更しているので覚妖怪と気付けなくても無理はないが。」

「こちらとしてもほぼ引きこもり状態と聞いているさとりのことを知っていることに驚いてはいるが。」

「空？なんか失礼なこと考えました？」

「いや、考えてないぞ？」

「そうですか、なら良いですが」

「危ない、非常に危ない。」

「少しでも気を抜けばすぐに読まれてしまう。」

「いつかこの分の仕返しでも考えておこうか。」

「じゃあ、帰りましょうか」

「そうするか」

「そう言っただけ俺は部屋を出るさとりの後を追う。」

「そうだったわ。ちよつと良い？」

「どうやら何か忘れていたようで背後から藤原が話しかけてきた。」

「何だ？」

「明日の夜、お祭りがあるんだけどこないかしら？」

「祭りか、悪くない。」

「この機会にここに住民にも会っておくと後々便利だろう。」

「ただ、ここでやるというなら話は別だ。」

「さとりに聞かなくてはいけない。」

「まあ、さとりは聞いたところで強がるので読心をするが。」

「俺は別に良いが、さとりはどうする？」

「良いですね。行きましょう」

「やはり強がるか。」

まあ、明日に夜にやるようだし時間はある。  
ゆつくりと考えても十分な時間はあるだろう。

「ああ、わかった。そういうことだ、藤原」

「ふ、藤原?! 妹紅でいいよ、妹紅で」

「そうか、わかった。妹紅」

俺はそう言つてさとりと共に寺子屋を出て、帰路に着いた。

「そういえば、さとり」

聞くタイミングを探していたのだが、夜空に2人というこの状況がベストだろう。

「何ですか?」

「そういえば、俺の何を知ったんだ?」

そう、羅刹に襲われてそのあとさとりを運び、忘れかけていたが聞く必要があるだろう。

いったい俺のどこまで知ってしまったのか。

それは非常に大切だ。

その具合によつては俺も策を講じなければいけない。

「それですか……」

どうやら言い出しにくいようだ。

少しの間静寂が続く。

「地霊殿に着いたら部屋で待ってて下さい。そこで話します」

「わかった」

俺とさとりは輝く星々の下、月の光を浴びて地底へと入つていった。

俺とさとりはゆっくりと地底へと続く穴を降りていた。さつきからというものの言葉は一度も交わしていない。

読心をしようにも警戒されているようで、すぐに対応されてしま

う。  
そんな時間が少し続き、半分くらいだろうか、穴を降りた時に上空から何かが降ってくる音がした。

風を切る音的にはどう考えても石ではない。

石であったとしても当たって無事でいれるような大きさではないだろう。

まあ、さとりとはそれなりに距離も離れているのでさとりには当たらないと思う。

俺はその上空から降ってくるものは見ずに飛行を止め、落下する。恐怖は感じない、いや、感じれないというのが正しいだろうか。

体は重力に引かれ加速していく。

このまま地上に落ちれば死ぬだろう。

ただ、それでは俺は贖罪ができずに死ぬことになる。

今はまだ、死ぬべきではない。

そういうことだ。

俺はなおも重力に身を任せ落ち続ける。

上から落ちてくる何かは来ているのだろうが、俺の体が風を切る音で聞こえない。

俺は地上が見えた瞬間に一瞬体を飛行させる事で地面に難なく着地し、そのまま大きく後ろに飛びのいた。

瞬間上から何かが落下し、地面に衝突する。

「桶？」

降ってきたのは桶だった。

それどころかで見覚えのあるもの、あれだけの衝撃が入ったにも関わらず、傷1つついていない。

おそらく、妖怪の持つ能力か何かで強化しているのだろう。

「また…………… 躲された……………」

「キスメか。あんなの当たったら死ぬからやめてくれ」

「次は…………… 当てる……………」

「どうやら聞く耳は持っていないようだ。」

「空、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

「まあ、あのスピードをいきなり止めたので身体にそれなりの負荷は掛かったが気にするほどではない。」

「さあ、さとりに行くぞ」

俺は心配しているのかわからないが、どちらにしてもいち早く俺何を知ったのかを知りたいので、手を軽く引つ張った。

「えっ」

軽く引つ張ったつもりだったが、さとりが全く警戒していなかったこともあり俺の胸に飛び込んでくるといような形になった。

にしても軽い、軽すぎる。

「おお…………… 熱いね……………」

それを見ていたキスメは表情を変えずにこちらを見ていた。

「取り敢えず、今日は急いでるんだ。悪いな」

正直、軽かったので俺はぶつかられても痛くもなんともないが、さとりはどうだっただろうか。

まあ、どっちでもいいだろう。

死んでもいないし、重大な怪我を負ったわけでもないのだから。

「さとりに、行くぞ」

しかし、さとりは俺の胸から離れようとしなない。

怪我でもしたのだろうか。

「おい、大丈夫か？」

「えっ、は、はい！大丈夫です」

さとりは俺から離れた。

本当に大丈夫だろうか？

まあ、別に異常もないようだ。

「ああ、なら良かったが」

「ではキスメさん、また会いましょう」

さとりがそういつたのを確認し、俺は地霊殿へと向かう。

眼下の街はまるで百足に襲われたのが嘘のように活気にあふれている。

飛んでいたが、少し街を見ながら行くのも良いだろうと思い、街へと降りる。

「賑やかだな」

「きつといつもこんな感じですよ」

いつもの間にやら俺に追いついていたのだろう。

背後からさとりに声をかけられた。

「そうか、平和だな」

「急ぎますか？」

正直、そこまで焦る必要はなかった。

さつきは急いでいるからなどと言ってキスメと別れたが話していても良かったかもしれない。

まあ、馬鹿らしいので戻ることはないが。

「ここからは歩いていくか」

「そうですね」

さとりはそれを快諾し、歩く俺の横にならんだ。

いつものペースで歩いても良いが、さとりが横に並びたいのならば歩行ペースを落とした方が良いだろう。

「おお、空か」

全く、これは不運なのだろうか？

目の前の店からちようど勇儀が出てきた。

相変わらず巨大な杯を持ちその中の酒を啜っている。

「勇儀か。歩きながらで良いか？」

わざわざ止まって話をするのは効率が悪い。

歩きながらの方が効率が良いだろう。

「構わないよ。これまたお熱いねえ。2人きりでデートかい？」

デート？なんだったか、確か互いに思い合っている男女が屋外で共に行動することだったか。

「違いますよ」

俺が何かを言う前にさとりが否定した。

だが、その顔は赤い、なぜだろうか？

読心をしようと試みるが警戒しているようで出来なかった。

「あはは、そうかいそうかい」

完全に遊ばれているな。

まあ、特に気にする気もないが。

「そういえば体は大丈夫かい？」

今一度考えれば、勇儀は俺がさとりを病院に連れて行った事を知っているので本当にさとりで遊んでいたのだろう。

まあ、結局のところなんでも良いのだが。

「ええ、大丈夫です」

「それは良かった。そう言えば空、私といつ戦ってくれるんだい？」

ああ、すっかり忘れていた。

勇儀も忘れてくれていた方が良かったが、そう上手くはいかないらしい。

「今日明日は取り敢えず無理だ、明後日なら大丈夫だと思うが」

明日の午前中は空いているが、祭の前にわざわざ戦闘などするものではない。

「わかった。じゃあ明後日だな」

「ああ」

面倒だ、だが、鬼の力を身をもって感じられる初めての機会だ、有効に使おう。

気付けば既に地霊殿の門の前まで来ていた。

「じゃあ」

そういつて俺は地霊殿の門をくぐる。

「先に自分の部屋にいてください。私が貴方の部屋に行きます」  
「そうか」

そういったさとりは階段を登り自分の部屋へと向かっていった。

俺も自分の部屋に向かい出そうか。

そう言えば羅刹と戦った際に投擲した百足の甲殻で作った短剣は

どこに行つたのだろうか。

まあ、考えるまでもなくお隣に処理されたのだろうか。

おれは自分の部屋のドアを開け中へと入る。

「はあ、疲れた」

正直、そこまで疲れてはいない。

しかし、少しであっても疲れているのは事実だ。

特にする事がない。

いや、短剣の手入れでもしようか。

俺は鞘から短剣を取り出し刀身を眺める。

「いや、必要ないな」

俺は短剣を部屋の中央に位置する机の上に置きベットに横になる。

ここに来てからまだ一週間も経っていないと思うが、いろいろな事があつた。

もう慣れてきてはいるが自分が人間ではなくなり、周囲には人間でないものがある。

少し眠くなってきた。

さとりが来るまで少し寝ようか。

俺はそうして夢の中に意識を手放した。

「空？いますか？」

どうやらさとりが来たようだ。

どれ程寝ただろうか？

まあ、起きなければならぬ。

俺は体を起こし、ドアを開ける。

「入りますね」

「ああ」

俺は机へと向かい椅子に腰掛ける。

「ベッドで話しませんか？」

ベッドで？

まあ、いいか。

座り心地はベッドの方が良いだろう。

俺が座るとその横にさとりが腰をかけた。

「で、俺の何がわかったんだ？」

さどりの方は見ず一番聞きたいことを聞く。

「貴方に、感情がないことです」

そうか、そこまでわかっているのか。

いつかはバレると思っていたが、想像以上に早かった。

俺が暗殺者だったということもすぐバレるだろう、ならば自分から言った方が良いだろう。

「そうか。聞いてみたいか？俺の過去を」

「貴方が良いのなら聞きたいです」

他人に話してはいけない、そう教えられたが。

俺は今は暗殺者ではない。

その過去と決別し、贖罪をする事が大切なんだろう。

人は今を生きなければいけない。

過去を引きずっても意味はないのだ。

過去は変えられない事実。

それを認めていかなければいけない。

だからこ今がある。

過去の罪の精算をしていくために。

「俺は、暗殺者だった」

「そうですか……」

「俺の罪を話そう。自分で話すのも良いが、見てもらったほうが速いな。見るか？それとも聞くか？」

恐らく見るといっだろう。

俺がさどりに過去を見られれば嘘をつくことはない。

いや、つけないというのが正しいだろうか。

「……聞かせてください」

何故だ？

何故見るといっ選択肢を選ばなかったのか。

理解ができない。

「わかった……さあ、語ろうか俺の過去を」

俺は覚悟を決めゆつくりと口を開く。

## 18話

### 断罪を

「俺は名前がない。秦 空というのは戸籍上の名前だ。俺自身の名前は俺も知らない。」

まあ、名前をつけられていたのかも分からないが。俺は産まれてすぐ捨てられてらしいしな。

それで俺は1人の男に拾われた。

そいつが暗殺者を育成する施設の人間だった訳だ。

名前は、なんだったか。

覚えてもいないな。

俺は周囲からの関係を一切絶たれその状態で育てられた。と言っても語学の為に少しは話しかけられていたが。

幼いときは1人薄暗い部屋に置かれた。

感情は幼い時に親や、周囲から学ぶものだ。

それが無い、ということは勿論感情が無い。

暗殺は他人を殺す仕事だ、感情ほど邪魔なものはない。

一瞬でも相手を哀れめれば行動は遅れる。

その一瞬が大きな差になるわけだ。

俺は少し大きくなった時、まあ、寺子屋の生徒ぐらいか。

その時から暗殺の基本を学び出した。

刀、短剣、長剣、ククリ、クナイ、まあ武器は大抵使えるように育てられたな。

この世界には無いが拳銃の類も一式使える。

ある程度全ての武器が扱えるようになった頃から勉学も始めた。

数学、化学、生物、文学、まあ基本的には全て。

一見関係なさそうだが、かなり関係する。

化学は毒や、爆薬を作るのに必要だ。

生物は言わずもがな急所をつくため。

数学や文学は潜入暗殺の際にターゲットと距離を縮めるためだ。

その関係で、日本語、英語、スペイン語、ドイツ語、中国語、韓国語、それも喋れる程度は学んだ。

結局の所そこまで使うことはなかったが。恐らく今はもう忘れて  
いる。

それで俺が10歳ぐらいの時だったか、初めて暗殺の仕事に1人で  
行った。

まあ、簡単なものだった。

後ろから近づいて首元を短剣で切り裂いた。

見た目が幼かったからから相手も油断していたしな。

それが初めての仕事としての殺しだった。

その後1年くらいだったか、俺はずっとそこで働いていた。

が、ある日仕事から帰ると育成施設が燃えていた。

発砲の音が響いて、次々施設の奴らが殺されていた。

小さい奴らも燃えていた、皮膚は爛れて、そんな状態で死んでたな。

俺は自分の身を守る為にその襲撃者を全員その場で殺して焼いた。

ただ、それで俺の居場所は無くなったわけだ、俺は木の実とかを適

当に食ってそこで暮らしていた。

飢えへの対応や、サバイバルも学んでいたから特にこまりもせず暮  
らせた。

燃えたと言っても建物の形は残っていたから雨風に苦しめられる  
こともなかった。

そんなある日ある男が現れた、国の人間だった。

俺を見るや否や、俺を雇いたいと言ってきた。

別に条件も良かったから俺は国家に雇われた暗殺者になった。

その条件だが、一般人の生活という物だ。

学校に行き、自分の家に住む。

まあ、家族はいなかったから1人だったがな。

その時、学校で不審に思われない様に多少の感情を覚えたが。

だから感情は無いって程では無い、最低限はある。

これが俺の過去だな」

敢えて俺が自殺した事や、この後の事も話さなかった。

俺自身も言いたく無い、更に聞いた方も不快になるだろう。

「………そうですか」

そういったさとりを見ると涙が頬を伝っていた。  
何故、他人の過去にここまで感情的になれるのか？

何故、俺にここまで優しく接してくれるのか？  
俺には理解できない。

この世界では普通なのだろうか？

それとも、あちらの世界でも同じだったのか？

泉から溢れ出る水のように疑問が溢れ出る、ただいつもこの疑問は  
幸か不幸か1つの答えでまとまってしまう。

そうか、俺が【異常】なのか。

あるはずの感情がなく、育てられ方も異常だと言っていていいだろう。  
何せ、他人とは圧倒的に育った環境が違う。

家族愛さえ受けず育った。

そんな人間が、一般人を理解する事は出来ない。

いや、理解しようとするその行為自体、烏滸がましいものだ。

海外に行った時、外国と自国の物事の考え方の違い、価値観の違い  
に驚いた事は無いだろうか？

行った事が無くとも島、森などの先住民を見ればわかる。

自分達と同じ暮らしをしているだろうか？

私達から見えて驚くことと同様に彼らも驚くのだ。

しかし、それも1つの答えで纏まる。

育った環境が違うから。

幼少期に育った環境で教えられた事はとても影響しやすい。

恐らくは未だに持っていないそこで生きるための常識、それを初め  
て手にするのだ。

人は皆、初めて手にするものはすぐ覚えるものだ。

「空は、強いですね。わたしの過去なんて」

そういったさとりは笑ってはいるが、泣いている。恐らくは同情と  
言うのをしているのだろう。

まあ、俺には同情する情も無いわけだが。

「さとりには感情があるだろう？」

「確かにそうですが」

「感情がなければ辛いとも思えない」

この一言で通じるだろう。

そう、辛いという事もまた感情。

肉体的には疲れらしきものを感じたりはするが精神的には何が起きてても辛いと思えない。

「そうですか…。」

「この話は終わりだ。もう寝て明日の夜に備えよう」

ここできっておくのがベストだろう。

質問をされると面倒だ。

と言っても基本的に真実を言っていたし、言っていないのは過去雇われた後だけだが。

それにある程度の質問は予想し回答を考えていた。

しかし、俺は完璧ではない。

想定外の質問をされれば多少は答えを考えてしまう。

その思考の時間が答えの信憑性を奪うのだ。

しかし、彼女はすぐには部屋から出ず。ドアの前で立ち止まり顔を見せずに1つのしつもんをしてきた。

「私が行っても大丈夫でしょうか？」

俺の過去ではなかった。ただ、これも想定しておくべき質問の1つではあった、

自分から過去に酷い目にあわされた所に行きたいと思うものはないだろう。

ただ、多少の特例はあるが。

「今日あの格好でばれなかったんだ。大丈夫だろう」

今日あんな派手な格好をさせたのにも意味がある。

俺の能力は服を変えることは出来ても顔は変えれない。

いや、変えられるのかもしれないが変えなかった。

要は顔を知っている奴がいればその場でばれていたということだ。しかし、今回ばれなかった。

という事は里の人間はさどりの顔を覚えていないということになる。

写真などもあの射命丸という天狗を除けばあの生活水準では持つていないだろう。

そのせいも有り、一世代でも後になれば残るのは覚妖怪は恐ろしいという事ぐらいだろう。

細かいところまでは伝えきれない。

体格程度は言えたかもしれないが、妖怪も成長はするだろうから時間が過ぎれば無価値な情報となる。

ただ、妖怪は成長するということを確かめるには情報が少ない。それをさとりで聞くか？

いや、身長と体格だけ見ればそこまで成長していないはずだ。

「空？大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。少し考え事をしてた。もう今日は寝よう」

「はい、また明日」

そう言っさとりはドアを開け外に出た。

まあ、深く考えてもあまり意味はないだろう。

気づかれていなかったのならそれで良かったという事にしよう。

もし、気づかれていて罠だったとしても、相手は所詮ただの人間だ。

元の状態であったとしてもあの程度の範囲の抹殺なら短剣のみでも直ぐに終わるだろう。

若干数妖怪もいるのでそいつらの実力によっては少しかかるかもしれないが。

そういう奴らはわかってる限り最初に標的にし、不意をついて一瞬で終わらせれば良いのだ。

それをいかに暴露せずに密かにやれるかの勝負だ。

いや、こんな事を考えるのは止そうか。

今は来る明日に向けて体を休めよう。

もし、最悪の事態が起きた場合に最善の状態に対応できるように。

風呂は明日入れば良いだろうか、いや、今入るか？

「どちらでも良いか」

今日は血も浴びていない、特に運動をしたわけでは無い。

汗もかいていない。

だが、身体は綺麗に保っておくべきだろう。鼻の良い奴であれば俺に残った僅かな血の匂いも嗅ぎつける可能性がある。

それが原因となり人里で面倒ごとに巻き込まれても厄介だ。

「やはり入るべきか」

そう言って部屋に置いてあつたタオルを持ち風呂場へと向かう。道は忘れていなかった。

今回はさとりがいたなどということは無く、ゆつくりと浸かれた。血の匂いも自分の嗅覚ではもう分からない。

これだけしておけば大丈夫だろう。

犬などの妖怪などがいた場合気付かれるだろうか？

いや、それに対策を講じても無駄だろう。

その嗅覚を避けるために自らに匂いをつけ、逆にそれで村人に怪しまれれば意味が無い。

この状況では存在未確定の者よりも存在が確定している者に注意するべきだろう。

全く、また悪い癖が出ている。

さつき寝ると決めてたにもかかわらず、思考を巡らせ、自室の椅子に座っている。

少しは自分の決めたことを守ったほうがいいだろう。

やはり今日はもう寝ようか、そう言えば夕飯を食べていない気がするが全く空腹を感じない。

何故だろうか？

いや、今考えてはいけない。

またさつきと同じ事を繰り返してしまう。

彼は寝台の上に転がり、目を閉じる。

そしてゆつくりと自らの意識を手放した。

## 19話

### 罪人は日常を謳歌する

俺はゆっくりと目をさます。

急かされることもなく起こされることもなく。

寝台から身を起そうとする。

しかしそこで一つの異常に気付いた。

何かに身体が押さえられている。

「何だ？」

手と足が動くことからどうやら手枷などの拘束器具では無いだろう。

俺は首を回し、状況を確認する。

部屋は変わっていない。

恐らく、俺の部屋だろう。

寝台は何か変化した様子は無い。

そして横にはさとり。

そうか、そういうことか。

手足が動くわけだ。

と言っても、いや正確には、と思ってもだろうか？

まあどちらでも良いだろう。

体はあの華奢な腕とは思えない力で抱きつかれ、左足は上手く絡ま  
れてしまっている。

手は上ではなく、下に置いていたので片腕はさとりの体のに挟ま  
れ、もう片方の腕は丁度肘のあたりと、手首のあたりに手を回されて  
いる。

要は実際に動かすのが可能なのが右の手首と、右足、そして頭のみ  
という事だ。

左手首はさとりに挟まれている。

恐らくさとりの頭の位置からして股であろう位置にあるだろう。

動かせない。

実際には動かせるのだが、動かすと妙な疑惑が生じかねない。

今日は祭りがあるものの、それは夜だ。

それまでは暇なわけだ、今が何時なのかわからないのだが。  
まあ、夜では無いだろう。

そんな十数時間も寝ていた実感は無い。

時計も陽の光も無いので、確認のしようも無いのだが。

どちらにしてもさとりが起きるまで待つしか無いようだ。

にしてもなぜさとりが俺に抱きつくというような行動に至ったのか。

普段の行動を見てもそんな事をする奴には見えなかったが。

可能性としては、これが裏の顔だったという事、酒が入った、他者の陰謀この三点が有力だろう。

「あつ、おねーちゃんここにいたの！」

こいしか、なぜこのタイミングで来たんだろうか。

どちらにしてもチャンスだ、

「さとりを起こしてくれないか？」

「あれ、おにーちゃんもいたの？」

気づいていなかったのか……。

まあ、良いだろう。

この状況の打開策が見つかったという事だけでも良しとしよう。

「おねーちゃんに抱き枕にされてるね。」

「枕にしては硬すぎると思うんだがな。」

俺は、正直贅肉も多くないと思う。

間違はなく、枕よりも硬い。

まあ、物によるだろうが。

そんな俺を枕にしても心地よくは無いただろう。

「これがおねーちゃんの無意識が望んでいたことなんだ。」

「は？」

この状況にしたのはこいしということか。

俺はこいしの能力について勘違いをしていたようだ。

こいしの能力は、俺の前で消えるだけだったことから無意識になる程度有能力だと思っていた。

これが大きな勘違いだったようだ。

恐らくこいしの能力は無意識を操る程度の能力だったということだろう。

だから今回さとりの無意識を操り、この状況を作ったのだろう。もしこいしの能力を使用された場合、自らの意思なしで無意識に体が動いてしまうということか。

非常に使い勝手の良さそうな能力だ。

あっちの世界にいた時に持っていたらどれだけ良かったか。

「こいし………居ない？」

いや、無意識に入ったのだろう。

ドアは開かれているのでこいしが外に出ても気付けない。

「おにーちゃんはあったかいね。」

「はっ。」

どうしたものか、さつきから状況がまた一段階悪化した。

さとりと逆、詰まり右側からこいしが抱きついていた。

位置はさとりとほぼ同じ、足もさとりと同じように絡めている。

にしても、手を回され、足も絡められていたのにも関わらず、全く

気づけなかった。

まさか俺の無意識も操られていたということだろうか。

そう思えば、こいしが無意識に入った時にやけに警戒していた。

恐らくは俺の無意識を操り、警戒させ俺の意識を奪っていたということだろう。

ことだろう。

いや、今はこんなことを考えていても仕方ない。

現状を打破しなければ。

と言ってももう頭しか動かせないのだが。

右手首が無事かとも思ったが、こいしはさとりと身長がほぼ同じだ。

という事は手の位置もさとりと同じ場所になる。

これで完全に頭しか動かせなくなったわけだ。

正直そこらの拘束具よりもタチが悪い。

しかも、他の妖怪と比べて力は弱いとはいえ妖怪なのだ。

俺が鬼だったならまだしも残念ながら覚妖怪なのだ。

多少は普通の覚妖怪より力が多少強いといえ片腕、片足のみで覚妖怪1人の拘束を解くほどの力はない。

もう一度寝てしまおうか。

しかし、寝ようにも2人の寝息が首元を擦るのだ。

というか、こいしが寝付くのが異常に早い。

寝れない、動けない。

どうしようもない。

やはり起きるのを待つしかないか。

一層の事声でも出して起こそうか。

いや、止めておこうか。

何故俺に抱きつきながらそんなにも安眠できるのかは謎だが、心地よさそうに眠っている。

いや、俺が能力を使えば良いんじゃないだろうか？

しかし、この状況から俺の能力で抜け出すと事は出来るだろうか？

無理だろう、俺が何を変更してもこの2人の拘束は解けなそうだ。

少しあの時の技術を使うことも考えたが、2人を傷つけかねないの  
で止めておこうと言う考えに至った。

「あれ？ドアが開いてる。」

声から判断するにお燐だろう。

お燐であれば助けてくれるだろうか？

足跡も近づいて来ている。

これでやっとな動けるな。

「お燐、ん？ん？」

突然口をこいしの手で覆われる。

加減はしているがそれなりに強い力で押さえられているので声を  
出す事が出来なくなる。

「あれ？呼ばれた気がしたけど気のせいだったかな。」

そう言ってお燐はドアを閉めて歩いて行った。

畜生、せっかく助けてもらえると思ったのだが。

人生そんなに甘く無いということか。

全く、やはり起きるまでは待てということか。

もう一層の事無理にでも寝てしまおうか。

まあ、時期にさとりも起きるだろう。

「おにーちゃんの口の中ってあったかいの?」

「ん?んーん。」

いや、口を押さえられた状態で聞かれても答えられない。

答えてほしいなら手を退けてほしいものだ。

「確かめてみるね。」

は?!

突然口の中にこいしの指が入ってくる。

指の一本一本が俺の歯や舌を弄る。

正直、気持ちの良いものではない。

「おにーちゃんの中とつてもあつたかいよ。」

歯を弄つても面白く無いと判断したのか、舌を弄る。

口の中の全権がこいしに行ってしまうている。

舌の裏、横、表面、全てを指で弄られる。

「こいひ、ひゃへろ!」

指が口の中にあるせいで上手く話せない。

「えー、わかつたよ。」

こいしが俺の口から指を抜くと、こいしの指に付いた俺の唾液が糸を引いていた。

「あはは、ベタベタだ〜!気持ちよかつた?」

「そんなわけがあるか。」

まあ、気持ちが良いとかその程度の感情はあるわけだが、今回の気持ち良いと思うほど狂ってはいない。

「えー、残念だなく。」

そう言ってこいしは俺の唾液を舐めとる。

俺はこのタイミングである事に気付き、サードアイをこいしに向けてる。

やはりか。

「おにーちゃんの味がする!」

これまでの行動は無意識の状態で行われていたようだ。

証拠に今サードアイで見てもなんの感情も読めない。

「それはそうだ、俺のだからな。」

これを用意識で無い状況でやっていたとしたらこいしの見方がだいぶ変わっていた。

「それじゃあね、おにーちゃん。」

そう言っでこいしは無意識に入っでいった。

全く、それよりもやくさとりに目を覚ましてほしいものだ。

「空？」

起きたようだ。

一体この状況に気付いた時どんな反応をするのだろうか？

サードアイを向けておこうか。

「え？え?!」

焦ったかと思うと、状況を理解したようで顔が真っ赤になる。

さどりの反応は何時も興味深い。

やはり、感情のあるものの感情を読むというのは、自身の感情の勉強になる。

やはり、周りと普通に接するようになるには感情をもう少し覚えたほうがいいだろう。

「俺の体はそんなに抱きやすかったか？」

折角だ、もう少し虐めてみようか。

そうすればさらにいろいろな感情が読めるかも知れない。

「そ、そんなことは..」

今は、照れと後悔、更に疑問を抱いているようだ。

疑問は何故こんな状況になっでいたのか？

で間違い無いだろう。

読心をするまでも無い。

一体どんな結論を出すのか。

いや、考えるまでもなかったようだ。

即刻、こいしの名前が浮かんでいった。

「いこし.....」

どうやら、かなり心配なようだ。

だが、これはさとりの問題だ。

わざわざ話をする必要は無いだろう。

俺にも兄弟がいたというなら別だが、1人だった。

俺には恐らく分からないことだ、それをわざわざ聴くというのは相手への侮辱だ。

経験は無いのに相手に同情するという事は、経験したことがなくても想像できる程度という意味にも取れる。

それは失礼だ。

戦場で友を失った事がある者が同じく戦場に行つて友を失ったものに同情するのは可能だろう。

また、病、事故、そのような事で友を失った者が同情するのも可能だ。

状況がどうであれ結局は友を失うという経験をしているのだから、だが友を失ったことの無いものに同情されたらどうだろうか？

まず、それは同情なのだろうか？

結局その同情は相手の情況の推察を行い、その結果に同情しているのだ。

それが本当に相手と同じ情がわかっているということになるのか？

それは否だ。

わかるはずも無いだろう。

そういうことなのだ。

「今日は祭だ、準備をしよう」

「あつ、時間大丈夫ですか？」

いや、正直わからないのだが。

これほどの地下で地上の時間を判断するには時計などを持っていなければ厳しいだろう。

「取り敢えず浴衣に着替えて地上に登ろう」

「ゆ、浴衣ですか？」

夏祭りと言ったら浴衣では無いだろうか？

さとりと言つてはいないが夏祭り自体行くのが始めてだ。

よって、何を着て行くのが良いのかが分からない。

ただ、あちらの世界のニユースでは皆一様に浴衣を着ていた。

「浴衣を着るものじゃ無いのか？」

やはり、娯楽といえど知識は知識だ知っておこうか。

「いえ、浴衣の着付け方が……」

着方がわからないのか、おしえようか、それとも服を変更して浴衣にしようか。

いや、それは俺ではなく本人が決める事だ。

「着付け方を知りたいか？」

俺は着付けは潜入暗殺用に習った事もあり知ってはいる。

まあ、簡易なものではあるが。

しかし問題は教えるとなると下着姿になってもらわなければならぬという事だ。

俺はどうとも思わないが、さとりがどう思うか。

「知りたいです……！」

「取り敢えず、浴衣を見せてくれ」

「わかりました」

そうしてさとりは浴衣を取りに出て行った。

それを見てからだ。

それによつては下着姿に成らずとも教えられるかもしれない。

全く、着物であれば長襦袢か半襦袢を着て貰えば良いのだが、浴衣にはそれが無い。

まあ、昔は夏季の寝間着だったという事もあり仕方ないが。

「これです」

中々帰ってくるのが早かった。

持ってきたのはどうやら浴衣のようだ、内心着物と間違えている可能性もあると思っていたがそれは無いようだ。

まあ、見ただけで繊維がわかるほどの目は持っていないので触らないとわからないが。

「見せてくれ」

俺はさとりから受け取った浴衣を自らのベットに広げ、大きさを確

認する。

ふむ、大きさは大きくもなく小さくもなくという感じだろうか。触って確認したが生地は恐らく木綿だろう。

浴衣の生地としてはごくごく一般的だ。

色合いは薄いピンクといったところか、詳しく言えばさよりの髪よりは少々薄い程度だろう。

柄は赤い薔薇、確か意味は愛と美だったか。

赤い薔薇自体はその赤の種類、咲き方、本数によってかなりの量の花言葉がある。

例を挙げるとすれば、色で言うところと真紅であれば内気、恥ずかしさ、真紅は灼熱の恋、情事。

咲き方であればトゲのない蕾であれば初心で怖い、満開の薔薇は私には人妻という意味。

本数で言えば999本で何度生まれ変わってもあなたを愛するということの意味がある。

度々花言葉で暗殺の予告をした事があった。

まあ、何時もは送られないような花を贈る事もあり気づく奴は気付いていたが。

中には全く気付かない奴もいた。

流石にスノードロップやハナズオウを送ったにもかかわらず、油断していた奴はバカだろうかと思っただが。

「愛か、それとも美なのか？」

「えっ？」

ああ、わからないのか。

どちらも という意味で捉えておこうか。

「浴衣の意味だったんだがまあ、良いか。着方教えるから下着姿になつてくれ」

「えっ？」

まあ、こうなるだろう、予想済みだ。

「浴衣は下着の上に着るものだ。嫌ならその服を変更するが」「わ、わかりました。服を脱ぐのであっち向いててください」

俺は特に返事をせず、後ろを向く、別にさとりの体など見ても何も思えないが。

「というかどんなに美しいと言われる女をみてもどうとも思えないだろう。」

「まずまず、感情が無ければ下心はないのだが。」

「いや、男としての本能は残っているのだろうか？」

「脱ぎました」

俺はそつと後ろを向く。

そこには赤面し、白いレースの下着を着たさとりがいた。

肌も真つ白とは言えないが白い。

下着を着ているにもかかわらず体を腕で隠している。

「隠されると着せれないんだが」

さとりは顔をさらに赤く染め、腕を退ける、何かを言っていたがよく聞こえなかった。

おれはさとりの後ろに回りこむ。

「じゃあ腕を上げてくれ」

さとりはゆっくりと俺の指示に従い腕を上げる。

俺は力を掛ければ直ぐにでも折れてしまいそうな腕に浴衣の袖を通していく。

そしてベットの上に置いておいた帯を取り、両端を合わせることで中央を見つけさとりの後ろに帯を回し前で交差させ後ろで結ぶ。

その後同じ事を少し太めの帯でもう一度やり着付けを終了する。

「終わったぞ、俺は変更して着替えるがな」

俺は自分の寝間着を変更し、黒地に青い紫陽花の花が描かれたものにする。

青い紫陽花の花言葉は冷淡、無情。

俺にはぴつたりだろう。

「じゃあ、地上に行くぞ」

俺はさとりの横を抜けようとする。

が、さとりに腕を掴まれた。

「なんだ？」

「し、下着どうでしたか？」

は？

それは感情のない俺に聞くことだろうか。

「答えは直感で言ってください」

「綺麗だった。俺は胸が小さい方が良いと思うしな」

嘘は言わない。

俺が素直に思ったことだ。

まあ、胸が小さいというのは客観的に見て邪魔そうだからだが。

「そ、そうですか？」

「ああ。ほら、行くぞ」

俺は掴まれた腕を解き手を引いてドアを開ける。

そのままさとりの手を引き門を抜け、地上へと飛んだ。

## 20話

### 人々は溢れ、金魚は泳ぐ

地上へと繋がる巨大な穴を飛ぶことにより登っていく。  
どうやら想像以上に寝ていた様だ。

上から差し込む光の色の様子から日が暮れかけているということがわかる。

「毎回思ってはいたが、割と深いな」

そう、彼処は地底というだけあって非常に深い。

と言っても深過ぎれば暑いわけだが、そうでもないことから絶妙な深さにあるのだろう。

「そうですね、でもこれしか道がないんです」

一層の事俺が能力を使って何か作るのも良のかもしれない。

ただ、この距離の移動となるとエレベーターなどになるわけだが、どんなに飛ばしたところで飛んだ方が早いだろう。

「そういえば、あの博麗という奴が撃ってきた光弾は何だ？」

「ああ、あれですか。あれは弾幕です」

弾幕？

俺の知っている弾幕とはかなり違ったが。

と言っても俺の知っている弾で弾幕などはられたら普通躲せないだろう。

状況によってはだが。

「弾幕？俺の世界のものとは違う様だが」

「この幻想郷は弾幕ごつこと言うもので物事の決着を着けるんです。人間は魔理沙さんと霊夢さんぐらいしか弾幕は出せませんが」

ごっこ遊びで物事の決着を着けるということか。

一応ここで暮らしていくためには必要な物だろう。

「ルールはあるのか？」

「ええ、相手が躲せないものはダメです。そして被弾回数に制限があります。後はルールとは言えないですがどれだけ綺麗に見せるかも大切ですね」

なるほど、要は相手にその光弾を被弾させれば良いのだろう。

「所で、さとりもできるのか？」

「はい、何度か戦った事もありますよ」

ふむ、外にでてても日が沈むまでは時間がある。

折角なら、

さとりと一戦交えても良いだろう。

こういうものは聞くよりもやった方が慣れる。

いや、祭りの前にやる事ではないな。

「いつか教えてくれ」

「はい、教えて欲しくなったら言ってください」

「ああ」

取り敢えず村に向かう前にさとりと俺のサードアイをネットワークス状に変更する。

「心配か？」

この質問は今すれば、さとりが祭りに行きたくないという可能性もあった。

だが、聞かずに連れて行き何かが起きれば面倒なことになる。

一応は俺が目を離さなければ大丈夫だとは思うが俺も完璧ではない。

俺の不意をつかれる可能性もあれば俺が殺されるというケースもあり得る。

外ではどんなにありえなさそうな物でも此処では起こる可能性があると考えた方が良いだろう。

「……………はい」

「行きたくなければ引き返しても良いが」

「いいえ、大丈夫です」

サードアイを警戒した上で嘘をつくか、それでは本心が掴めない。

ただ、本人が大丈夫だと言ったのだ。

そこで何度も問答することは無意味だ。

「わかった。行くぞ」

そう言って村のある方角へと進んでいく。

少し飛ぶと祭囃子が聞こえ出した。

子供の笑い声や、太鼓の音、様々な騒音が入り混じっている。そんな時、眼下に4人組の人影が見えた。

確認しようかと考えたがその隙に木の陰に隠れたのか見えなくなってしまうたので気には止めないでおく。

そしてそのまま村の入り口へと降り立つ。

「凄い混みようだな」

テレビで見た外の祭りほど人はいないがそれでも人が多い。

俺もさとりもお互い小さい為、すぐに見失いそうさ。

その対策を考えているとさとりが俺の袖を掴んできた。

浴衣がはだけるので正直引つ張らないで欲しいのだが。

「何だ？」

「手を………繋いでくれませんか？」

成る程、手をつなぐという手があったか。

盲点だった。

確かに一番お互いに楽で、逸れる前に気づけるだろう。

「良い考えだな」

俺はそう言っさとりの手を取る。

思っていたよりも小さい。

力を少し加えただけでも壊れてしまいそうさ。

「何か食べたいものあるか？」

「お金持ってるんですか？」

「そこら辺のものを変更すればつくれる」

多少なり犯罪のようなことではあるがまあ、俺が渡すのは確実に金であるから問題ないだろう。

偽物ではないわけだ。

ただ、原材料が違うだけで。

そして地面に落ちていた石を彼らが使っている金に変更する。

「何が食べたい？」

さとりは少し黙っていたが口を開く。

「私、祭り初めてで………」

何ということだ、さとりもか。

俺も祭りに来るのは初めてという事もありどうやって楽しめば良いのかわからない。

祭りの様な人の多い所でも暗殺は出来るが、俺にはそんな依頼は来なかった。

基本的にそういった人の目がある中での暗殺は集団で行うものだ。常に単独行動だった俺にはその依頼は向かない。

「俺も初めてでよくわからないが、取り敢えず見た感じ美味そうなのを買おう」

「じゃあ、あれなんてどうですか？」

さとりは繋がれていない左手でとある屋台を指差す。

そこには金魚すくいと書かれていた。

いや、金魚が美味しいわけないだろ。

違った、そういうえば金魚すくいとは娯楽の名前で食べ物の名では無い。

だが、金魚すくいとは何だったか、名前の通り金魚を救うのか？

そうなると状況としては空中に吊り下げられた金魚を吊り下げている糸を切ることによって助けるといふものだろうか？

「金魚すくいを知らないんですか？」

どうやら俺の心を読んだようだ。

まあ、読まれてどうにかなることでは無いので気にもしないが。

「祭りにきたのは初めてだからな」

今更かもしれないが、お互いが覚妖怪と言っても心は読める。

確か、さとりが読めないと言っただけだが事実読めている。

ただ、覚妖怪同士では読心を警戒していれば読まれることは無い様だ。

では何故さとりはそれを知らなかったか？

それは恐らく、読心をされたく無い場合が無い程幼い時にこいしがサードアイを閉じてしまったからだろう。

その為に、そこに気付くことができなかった。

その為、間違った知識を持っている。

「空も初めてなんですか？」

さつき俺もと言ったはずなんだが、まあ良い。

「ああ、来る意味が無かったからな」

国に雇われた時からは何度か行く機会はあったが、あまり人混みが好きでは無いし、何せ花火の音が聞きたく無い事もあり、行くことは無かった。

「そうですか。色々教えてあげますね」

いや、さとりも行ったことは無いだろうと思ったが、そんな事は経験を読めば行かずともわかるか。

「ああ、頼む」

そしてさとりは人混みの中俺の手を引いて金魚すくいと書かれた屋台へと向かう。

人がいると言っても結局はこの村の住人しかいないので活気はあるが、人にぶつかりそうになる事は無い。

「へいいらっしやい！お二人かい？」

いつの間にか店の前まで来ていた。

屋台の下には浅めの水槽があり、その中で色とりどりの金魚が優雅に泳いでいた。

「やってもいいか？」

「二回かい？」

俺もやってみるか？

正直、どちらでも良いんだが。

さとりはやるだろうから別に見ているだけでも良いだろう。

「二回でお願いします。」

「お嬢さんの彼氏かい？」

「えっ…？」

彼氏？確か仲の良い男女一組の男側の呼び名だったか？

なら俺は違うだろう。

俺は何かと言われればボディーガードだ。

にしてもさとりは随分と顔が赤くなっているが何かあったのだろうか？

「残n」そうかそうか！言わなくて良いよ。特別に今回はまけてやる

よ!」.....」

いや、違うんだが。

まあ、無料になったのなら別に良いだろう。

さとりは顔を赤らめている。

他人から見れば可愛いと思われるのかもしれない。

事実、先程から俺を羨む声が読め、聞こえる。

あんな可愛い彼女がいて良いな。

が主な内容であるがまず彼女ではない。

しかし、何故さとりが俺の彼女だと誤解されるのか。

「ありがとうございますー!」

「ああ、助かる」

ここは乗っておくか。

下手に否定して妙な疑念を持たれるのも面倒だ。

「じゃあ、これ使ってくれ!」

そう言っただ店主は俺たちに持ち手があり、その先に輪っかの付いている何かを渡してきた。

何だ、これは。

さらにその輪っかには薄い紙が貼られていた。

これで金魚をすくえということか?

それ以外には考えつかないが。

まあ、これだけ薄い紙を濡らした状態で金魚をすくうのだ、ある程度は難しいだろう。

「すくえたらこの桶に入れてくれ。」

そう言っただ一つの桶をすつと流してきた。

「よし、やるか。」

「空は上手いんですか?」

いや、さつききたこと無いと言ったばかりだが。

「わからないな、やってみないことには」

「そうですね、なら私から良いですか?」

「ああ、お手本がてら見せてくれ」

そう言ったださとりは桶を手元に近付け、水の中に先程渡された物を

入れ近付いてきた金魚をすくおうとする。

が、紙が破れ金魚は落ちてしまった。

やはりなかなか難しいようだ。

さとりは周囲のやっっている奴らの経験を読みそれを真似ているようだが。

それは理想であり、現実では無い。

そう現実はいくもものじゃ無いだろう。

相手は生物だ、救われたいわけが無い。

例え周囲の奴らの経験を読み、それを完全に真似れたとして金魚がまったく同じように動くわけが無い。

「残念だねお嬢ちゃん、次は彼だよ」

そんなことを考えているうちにさとりの紙は破れて無くなってしまったようだ。

金魚をすくえるほどの紙がなくなれば交代というシステムか、効率的だな。

「お、お手本になりましたか?」

「まあな」

そう言っただけはさとりと場所が変わる。

実際、周りの奴らの経験を讀むより、アドバイスを受けた方が良さだろう。

「なにかコツとか教えてくれないか?」

「金魚の動きを見ることだな」

「助かる」

俺は桶を近付け、紙の貼り付けられた方を上にし、金魚を待つ、紙を貼り付けた方を下にすると接着面が溶け、紙ごと剥がれるリスクがあるからだ。

そこに一匹の金魚が寄ってきた。

こいつで良いな。

俺は素早く金魚の下に紙をくぐらせ、金魚を桶に移した。

そこまで考えるほど難しくなかった。

俺はその後数匹の金魚をすくい、紙は残っていたがそこで終了し

た。

「楽しかったか？」

「空はすごいですね！簡単でしたか？」

「ああ、想像よりは、だが」

さとりは今さつき取った金魚が入った袋を下げ、俺と手を繋ぎ屋台を歩いている。

「何か食べるか？」

「そうですね。あれが食べたいです！」

そう言つてさとりが指をさしたのは白い雲の様な固まりだった。確か、綿飴だったか。

仕組みまでは覚えていないが、原材料は砂糖だったはずだ。

にしてもいきなり甘いものに行くのか？

普通ならばたこ焼きなどを食べてからだと思うが。

「でもその前にあれを食べましょう！」

さとりが次にさしたのはりんご飴と書かれた屋台だった。

これはなかなか独特なものだった筈だ、林檎を丸々一つ濃度の高い砂糖水などに漬け込み、固めたものだったか。

にしても、また甘いものか。

まあ、別に良いか。

「じゃあ、行くか」

そう言つてその屋台に向かう。

店頭には幾つかのリンゴが並べられていた。

「あら、いらっしやい！」

「りんご飴をくれるか？」

「特別なのがあるけどそれにするかい？」  
特別なりんご飴？

りんご飴に特別も何もあるのか。

にしても俺の知らないものだ、今のうちに知識を仕入れよう。

「ああ、それで頼む」

「500円だよ。」

円の単位は同じか、なら通貨も同じだろう。

俺は手早くポケットに入れていた元石の金を店主に差し出す。

「これで良いか？」

「ほら、仲良く食べな」

そうやって渡されたのはハート型のリンゴが一つ。

これが、特別なもの？

ただ、林檎をハート型に切っただけじゃ無いか。

「まあ、食うか」

そうやって俺はさとりにりんご飴を差し出す。

しかし、さとりは食べるのを赤面しながら躊躇していた。

「食べないのか？」

「食べますよ」

そう言ったさとりは俺繋いでいた手を離し、りんご飴を食べる。

「美味しいですよ？食べますか？」

「そうだな、貰おうか」

そうやって差し出されたりんご飴を嚙る。

味も特別というわけでは無いと思うが、何か仕掛けでもあるのだからか？

うか？

まあ、りんご飴自体食べるのが初めてということもあり結局それが

普通なのか異常なのか分からないが。

「美味しいな」

美味しい、確かに美味しいんだろう。

取り敢えずはこれで良いだろう。

後はゆつくりとしていきたい。

ただ、花火だけは上がって欲しく無い。

あれは、駄目だ。

あれだけは、感覚を思い出してしまう。

忘れていたあの感覚が。

「来ていたのか！」

俺はりんご飴を食べているさとりのそばにいたのだが、前から声を

かけながら近づいてくるものがいた。

どうやら焦っているようだ。

サードアイを使うまでもなく見れば分かる。

「ああ、教師と妹紅か。何かあったのか？」

「子供が数人行方不明になっていてな」

「迷子じゃ無いのか？」

普通に考えても迷子という線が妥当では無いだろうか？

祭りでは大抵迷子が出るものだ。

読心するべきだろう、迷子が出ることは想定済みの筈だ。

それで焦るといふのはおかしな事だ。

ふむ。

どうやら、妖怪に森に連れて行かれるのを見たという情報があったようだ。

そんな時だった、なにかが上がる音がし、爆発した。

振り向くと、そこには夜空に輝く火があった。

花火だ。

幾つもの花火が夜空に絵を描いている。

「その子供を探してくる。さとりを見ててくれ」

俺はそう言っつて屋台から離れ、森に少し入る。

花火の爆発音が身体に響く。

身体が震える程の音だ。

この感覚だ。

思い出したくなかったモノ。

その感覚に酔わされながら俺は森の中に入っていく。

## 21話

### 作られた命

俺は1人森の中を進んでいく。  
暗い、ただ人間は野生動物に比べれば弱い、暗視がある程度は出来る。

まあ、俺はこうなってしまうと野生動物に近いのかもしれない。  
ただ、俺は人間だ。

感情は無いが、人間だ。

「坊や、大丈夫か？迷子だろうか？」

「えっ、おじさん誰？」

そんな事はいい、いまは突然現れたこいつらをなんとかしなければいけない。

恐らくこいつらが誘拐犯だ。

読心をしても敵意が見える。

俺の身長からして幼く見えただろう。

適当に幼い声でも出しておけば連れて行ってくれそうだ。

「俺は慧音さんの知り合いだね。迷子を見つけたら届けて欲しいと言われてるんだ」

「本当？ありがとう！」

成る程、あの村に教師は1人しかいない。

だからこそそれを逆に利用しているのか。

家族の名は知らなくても、教師の名は知っている。

さらにあの村には寺子屋が1つ、教師も恐らくは1人。

まあ、見たことがあるのは1人というだけだが。

子供は知っている人の名を出されれば信用しやすい。

だが、この目的はここでは無いだろう。

恐らく直に子供は見つけられる。

紫が少し探せばすぐに見つかるだろう。

その時に、子供が「慧音先生の知り合いだって言っていた」と言っただとしてしよう。

恐らく、嘘だとわかってても信頼は無くなる。

無くならずとも少しは失われることになる。

「じゃあこつちにおいで」

「うんー」

教師の信頼を落とす。

それが真の目的だろう。

そうすれば最悪、慧音は村から出て行くことも想定できるだろう。

そこを集団で叩くという事なのだろうか？

しばらく歩いたところで異変に気付いたフリをする。

「こつちは言っちゃダメって言われてた方じゃ無い？」

「そうだよ、おやすみ」

そう言っつてハンカチを俺の顔に押し当てて来る。

軽い睡眠薬のようだ。

正直な全く効かないが効いているフリをしておこう。

俺は体の力を抜きその誘拐犯に身を委ねる。

このあとこいつらから子供を奪還して、逃げるわけだが、逃げるのが速いか。

それとも全員殺してから子供を連れて行った方が良いか？

俺をさらったこいつは馬鹿だが、他の奴らも馬鹿とは限らないし、子供の前で殺しなどすれば、子供が腰を抜かすなどの可能性があった。

そうなると俺が背負うかどうにかしなくてはいけないわけだ。

だが、逃げるとなると、相手の人数によっては1人では守りきれない可能性もある。

安全なのは全員殺し、その後すべての子供を救うという手だが、子供に俺の様にはなって欲しく無い。

多少の負担が俺に掛かるだろうがそれでも逃げた方が良いだろう。

その答えが出た所で俺は何か括りつけられた。

それから周囲から物音がしなくなるのを待つ。

拘束具は鎖だろうか、そして体の固定された状況からして十字架に架けられている事がわかる。

目が開けずに、周囲の人気を探す。

周囲に人気は無い。

一人一人違うところに拘束してあるという事か。

俺はゆつくりと目を開ける。

「地下か」

どうやら場所は地下の様だ。

正面にも同じ様に十字架があり子供が拘束されている。

然し、鉄格子で仕切られており、一筋縄ではあちらに行けなそうだ。

「動くか」

俺は自らの拘束具を砂にする事で十字架から免れ地面に降りる。

子供を守るに当たり、遠距離の武器が必要なので足元に転がっていた石を拳銃に変える。

「サイレンサーは、要らないか」

あつても良いのだが、無くても構わない様なものだろう。

俺は自らの浴衣を黒いフードに変え、長いズボンに変更する。

そして鉄格子を砂に変えることで通路へと出て周囲の状況を確認する。

通路は手を広げた人が5人分ぐらいだろうか。

広さは十分だ。

だが、風を感じない。

という事は、外からかなり遠いか、入り口を完全に閉じられているかだ。

後者の場合、急がなければ窒息死に至る。

少々探索をすべきだろう。

これだけの広さがあればまず、そんなすぐに窒息する危険性は無い。

子供も今は寝ているので、もし、敵と遭遇し殺しても死体を隠せば良い。

取り敢えず、この空間を把握しようか。

少し歩こう。

敵の気配は無い、壁は石だろうか。

そう簡単には壊れないだろう。

牢屋の数は左右に5個ずつ、すべての檻には1人の子供が入っていた。

ただ、俺は脱出しているので数は9か。

さらってきた奴がどこにもいないという事はどこかに出口がある筈なのだが。

全く見つからない。

隠し扉の様なものだったならサードアイで見しておくべきだったな。俺とした事が迂闊だった。

1人で探すぐらいならば一層の事、子供も出すか？

いや、それだともし彼奴らが帰ってきた場合に俺が対応できなくなる。

「この壁にも無し、か」

すべての壁は見たが、何もなかった。

ならば残っているのは檻の中だ。

面倒ではあるがひとつひとつ確認していくか。

まずは左端だ。

「あつた」

まさかこんな簡単に見つかるとは、取り敢えず先に行つて外を確認すべきか。

階段の壁には一定の間隔で松明が設置されていた。

そのお陰でまあ、暗くは無い。

だが、置かれている間隔が広いため十分な明るさとは到底言えないだろう。

俺は階段を上っていく、ただこの状況から敵に見つかればすぐに報告される事は免れないだろう。

更に、罨にも警戒する必要がある。

「階段まで石で出来ているとは」

手間がかかっているんだと思う。

ただ、通常より段差が大きい。

子供を連れて逃げるには辛いかもしれないな。

俺はいいとして普通の子供には走れない高さだろう。

一段が50センチ程あるだろうか。  
逃げにくい様にとことだろう。

要は最初から子供を誘拐し、監禁する施設だったというわけだ。  
だが、何のためだ？

何のために逃げにくくする？

そして、何故見張りがいない？

あの十字架から逃げられるわけが無いということか？  
にしても甘すぎる、多少は隠すべきだ。

さつき探したときには何もなかった。

いや、待て。

俺は、床を探していない。

となると……

やってしまった。

俺は登ってきた階段を段ではなく、壁を蹴って下へと高速で降りる。

こちらの方が着地が難しくなる以外は効率がいい。  
俺は子供達の監禁されているスペースへと戻った。

「やはりか」

地面の一部が上がり中からは妙な物が覗いている。

何かはわからない。

しかし、俺にとっていいものでは無いだろう。

ならば処分するしか無い。

邪魔なのだから。

躊躇なく、拳銃を構えその何かに1発打ちこむ。

しかし、その何かは微動だにせず、徐々に上がってくる。

その後も数発撃ったが無駄な様だ。

この拳銃では火力不足ということだろう。

身体の半分程が出た所でその正体が明らかになる。

ライオンとヤギの頭を持ち、蛇の尻尾を持つ物。

所謂キメラだろう。

にしても、あの程度の科学の技術でキメラを作ることとは可能なのか

？

それとも元からこういった個体があるのだろうか？

正直、バカ丁寧に闘ってやる気は全く無い。

それは明日の鬼の戦闘で十分だ。

俺はそのキメラの上がつてきた檻を即刻硫酸に変えキメラを自らが上つてきた穴へと落とす。

穴がどれだけ深いかはわからないが、時間は稼げるだろう。

事実、しっかりと硫酸に苦しめられている様で獣の吠え声がかたましている。

「(っ)は、(ど)っ?」

どうやらこの声で子供達は起きた様だ。

いちいち起こす手間が省けてラッキーだ。

「逃げるぞ。走れ」

俺は静かに、だが確実に聞こえる声で子供達に指示を出し同時に拘束を解く。

一応階段を上がる前に人数を確認する。

2. 4. 6. 8. 9 いるな。

「俺が先頭に行く、何があつても勝手に逃げるな。俺の近くにいてくれ」

そうでもしなければ守りきれぬ自信が無い。

これだけあのキメラが騒いでいれば何かがあつたことに気付くだろう。

後ろから来る可能性もあるが、その場合は拳銃で撃ち抜く。

前から来ても同じだが。

まあ、来ないでくれることほど有難いことは無い。

正直この子供を置いて先を見に行きたいが、その場合後ろから来られてしまうと何もできなくなってしまう。

「お兄さん待って」

少し早かったか。

「ああ、悪いな」

だが、このままのペースで登るとかなりの時間がかかる。

何せまだ上に光が見えない。

光と言っても夜ということもあり。

星や、月のものだが。

一層の事、能力を使うか？

階段の一段の一部を気体に変更すれば、恐らくは今よりはペースが上がるはずだが。

このどれだけあるかもわからない階段を一斉に気体に変更などすれば俺の体力が子供を救うまでもたない可能性がある。

体力を考慮して液体に変えるという選択肢もあるにはあるが、一般的な大人でも膝の高さに水が流れてきた場合、流されてしまう。

この段差を50センチと仮定し、その半分、25センチ×25センチ×横幅分の水が段数分流れてくることになる。

それが一斉に流れてくれば俺は耐えれたとしても子供が間違いないく流れてしまうだろう。

更にその水が下に流れるとすれば落としたカメラの穴に水が集中する。

それにより硫酸が薄くなり、穴の深さによってはあのカメラが脱出し、子供を食われると言う事態があり得る。

「ごめん、誰か踏んだかも。あれ、誰でも無いの？」

こういつた場合に何か踏んだとすると。

正面から丸い岩が転がってきた。

「そうだよな」

俺はすぐさま手をかざし、岩を気体に変更する。

「急がないとな。少し先を見てくる。何かあったら大声を上げてくれ」

俺は一言だけ言い少し先に登る。

声を上げてくれれば早く気付けるだろう。

だが、そこまで遠くに行く事は出来ない。

俺が拳銃を持っているとはいえ、俺の射撃は

百発百中では無い。

距離が延びればそれだけ当てにくくなる。

後ろから来られては厳しくなる事は確かだ。

「あった。そういうことだったか」

光は見えなかったわけでは無い。

差し込んでいなかったということか。

大きな石の塊のようなものが邪魔をしている。

蓋のようなものだろうか？

この状況では判断できないだろう。

巨大な石の塊という可能性あり得る。

まあ、今のうちに変更しておくか。

そうすれば子供達が上がって来るまでに敵の人数によってはだが殲滅できるだろう。

俺はその石を気体に変え、外の様子をうかがう。

近くに焚き火が見える。

周囲には何人だ？

いや、暗い、更に頭を出しただけでは幼樹や草が邪魔で見えない。

上に出るか？

いや、それだと子供が勝手に出てきてしまう、静止しなければいけない。

いや、出てくる前に殺れるか？

駄目だ、念には念を入れておくべきだろう。

俺は一度階段を降り、子供に命令をする。

「おい、そこで待っていてくれ。周りを警戒してくる」

「わかった、おにいさん！」

声大きい、まあ気づかれていないようだが。

サイレンサーは使うべきか？

いや、サイレンサーは使えば命中精度や、誤作動の可能性が増える。

ならば音がなったとしても、命中精度や誤作動の可能性が上がる可能性があるならば使わないほうがいいだろう。

ま

まあ、子供を守る意味が薄れた今の状況では銃を使う事は先ず無いだろう。

まだ子供の後ろから敵が来る可能性も否定できないこともあり、銃は片手に持つておく必要があるが。

準備は出来た、行くしか無いだろう。

「すまない、ここらで子供が誘拐されたらしいんだが知らないか？」

覚の読心を活かした戦いというのでも試してみるか。

それに、誘拐犯では無いという可能性もある。

出来るだけ、関係の無いものは殺したく無い。

これ以上罪は増やしたく無い。

まあ、正直なところ今更と言った感じが否めないが。

百足やら羅刹やらは正当防衛と言っても良いだろう。

「探してるのか？手伝うぞ？」

「それは本当か?! そうなら非常に助かるな」

ああ、非常に滑稽だな。

嘘をついているのがばれていないと思っっている者は。

いつでも滑稽に思える。

## 22話

### 罪人は罪状を想起する

「じゃあ、死んでくれると嬉しい。」

俺は笑みを浮かべながら短剣を振り、近くに居た男の喉を切り裂く。

男は悲鳴をあげることも出来ず、鮮血を噴き上げながら倒れた。

周囲のその状況を見た数人は驚いたのか一瞬固まる。

その隙に俺はもう一人切り裂く。

「くそっ。所詮は一人！殺すぞ！」

一斉に襲い掛かって来ようという魂胆だろう。

にしては人数が少ない。

ある程度手慣れという事だろうか？

まあ、そこまで気にする事でも無いだろう。

子供の危険もある、早々と終わらせよう。

能力で弾性の高い糸を空気から生成。

俺は短剣の持ち手にその糸をくくりつける。

「今だ。一斉に掛かれ！」

4方からの同時攻撃。

あの羅刹よりは頭は良い様だ。

四人がほぼ同時に攻撃し、逃げ場を無くしつつ？一撃を入れ、すぐに後退。

ほぼ同時にまた四人の攻撃といった具合だろうか？

この作戦ならば間違いなく普通の人間なら逃げ場は無いだろう。

だが、俺は人間ではない。

妖怪なのだ、空にも逃げ場はある。

しかし、今回はこの相手への賞賛の意を込め、飛ばずに戦おうか。

俺は前方に短剣を投擲する。

非常に避けやすいコースだ。

勿論相手は上手く避けた。

やはり、多少はやり手らしい。

俺は短剣につながる糸が伸びきったタイミングで糸を引く。

俺のところに戻ってくる短剣を逆手で受け取り、背後から斬りかろうとしていた妖怪の喉を斬る。

俺は身体を捻り、そのまま右の妖怪の腹を蹴り、左の妖怪の腹に短剣を突き刺す。

そのまま突き刺した妖怪の体を盾に距離を取り、その妖怪の腹を横に切り裂く。

腹を切られたと言うことで臓物と大量の血液が噴き出し、彼の凶器を、彼の身体を、紅く染めていく。

「汚い。」

「なっ?!此奴………撤退だ!逃げるぞ!」

いい判断だ。

だが、俺には今回飛び道具がある、さつき作っておいてやはり正解だった。

まあ、この状況は想定していなかったが。

俺は逃げようと背中を向けた妖怪達の頭部をを撃ち抜き、殺している。

弾切れは起こらない。

俺が打った直後に空気を弾に変更しそれを撃っているからなのだが。

周りを全員射殺した後そのボスの様な奴に銃を向ける。

「殺せ、早く殺せ。ここで生き恥を晒す気は無い。」

「そうか。」

俺はそう言っつてその妖怪の頭部を撃ち抜く。

これで子供が連れ出せる。

今のうちに上空から自分の位置を探るか。

俺はそう思い、上空へと上昇し周囲を見渡す。

どうやら、かなり遠くに来てしまったらしい。

「村は見えるが、距離がある。」

2、3キロと言ったところだろう。

まあ、出来るだけ早く戻るべきか。

さあ、子供を連れて行かなくては。

だが、その前に服を変更しておくか。

こんなにも血塗れでは、子供が警戒してしまう。

それは避けなければならぬ。

俺は服を白いフードにし子供の所に向かう。

その他に色は入れない、ただ白一色。

「大丈夫だったか？村に帰ろう。」

「おっきい音がしたけど大丈夫？」

「ああ、全く問題ない。」

俺は子供を落ち着かせる為に笑みを浮かべ会話する。

ただ、俺の笑顔がどんな物かは分からない。

それは、作った笑顔であって、俺の無意識に出たものではないからだ。

「じゃあ、行くか。しっかりついて来い。」

そう言っただ俺は子どもを連れ、村のあった方向へと進む。

「その必要はないわよ。私が送るわ。」

聞き覚えのある声だ、確か八雲 紫などと言っていたか。

俺に能力を教えた奴だった筈だ。

「俺も送ってくれるか？」

「ええ、良いわよ。」

「助かる。」

俺は紫によって開かれたスキマに入る。

子供は突然現れた女性に少々怯えていたが、仲間だという事を伝えるとすんなりが入ってくれた。

「到着だ。」

「凄い！すぐに着いた！」

まあ、驚くのも無理はないだろう。

おれも正直、こいつを敵に回すことはあまり良くないだろうと思っ  
た。

村では未だに祭りが行われていた。

どうやら花火は終わった様だ。

「空!？」

突然背後から飛びつかれた。

何の前触れもなく、背後からだったこともあり。

俺は軽く体制を崩した。

声的にはさとりだろうか。

「何だ？ 余り人前でやる事とは思えないが？」

返事が無い。

一体何なんだ？

顔を胸に埋められているため表情も理解できない。

ソードアイを使うべきか。

俺は自らのネックレスになっているソードアイをさとりに向ける。

何故だろうか、凄く心配されていた様だ。

基本的にあの程度の奴らなら死ななかつたと思うが。

胸が濡れた様な感覚がし出した。

泣いている様だ。

静かに泣いている、声を上げて泣くわけでも無い。

ただ、俺の胸に顔を埋めて泣いていた。

「あー、悪い。紫、適当な所に飛ばしてくれ。」

「わかったわ。」

紫は覚妖怪では無いが俺の思っていることをさとしてくれたいた様だ。

俺たちは紫のスキマに落ちた。

落とされたのはさとりの部屋だ。

これまた随分な所に飛ばしてくれたものだ。

にしても、甘い匂いがするな。

お隣が何かを作っているのか？

「おい、大丈夫か？」

「何で1人で行ったんですか？」

何故か？

決まっている、俺1人で終わらせる為だ。

「俺1人で終わらせれる量だったからだ。」

「嘘ですね。」

嘘？

ついた覚えは無いんだが。

「何故、相手の量が分かってるんですか？」

「ああ、確かにそうだな。」

バレるのが早くなっている。

まあ、今回の俺の嘘がかなり酷かった為だろうか。

「本当は、私に戦っているところを見られたく無かったんでしよう？」

ああ、確かにそうだ。

わざわざ、もう使うことの無かった筈の技術など見せたく無い。

それに、血水泥になる俺を見たところで良いことも起きないだろう。

「そうかもな。」

「空……。」

何故だか、抱きしめる力が強くなる。

正直な苦しい。

だが、今回は俺に非がある。

今は好きにさせておくか。

こういった所は本当に子供の様だ。

いや、これは普通の反応なのか？

よく分からないな。

もう少し、あつちでも他人の心理のことを学ぶべきだっただろうか？

まあ、今更考えても意味の無いことだ、過去は変えれない。

変えられるならば変えたいものだ。

「さととり、座って話さないか？」

徐々に、俺を抱きしめる力が上がっていて痛い領域まで達し出した。

別に、骨が折れるほどでは無いが一応はさととりも妖怪という事でその域に達しかねない。

それは避けておくべきだろう。

「良いですよ。でも何故ですか？」

「少々疲れているからな。」

まあ、これも真実だ。

俺はあの戦闘で多少なり疲れた。

嘘は吐いていない。

まあ、こんな事が読まれないうちに早く座っておこう。

「明日は紅魔館と言う所に行きましょう！」

これは泣いていた事を忘れようとしているのだろうか？

やけに興奮している。

そして、泣いていたからだろうが顔が赤い。

「元気だな。」

「空はどうなんですか？」

「そうだな、まあまあだ。」

さとりはその言葉を聴いたからなのか、何か策があるのは分からないが笑みを浮かべている。

少々、おかしい気がしてきた。

俺の前にいるさとりがさとりでは無いような気がする。

いや、流石に杞憂か？

「じゃあ、元気にしてあげますー！」

「はっ！」

押し倒された。

俺はこの世界に来てから押し倒されすぎてはないか？

まあ、ほぼさとりかこいしだが。

「何がしたいんだ？俺に感情が無いことは分かっているはずだが？」

もう1度俺の感情の有無を確かめようとしたのだろうか？

いや、わかつている事を2度もするか？

今、この状況に成ってもさとりは笑みを浮かべている。

にしても、この甘い匂いには覚えがあるような気がする。

そう思い、押し倒された状態で天井を見るとスキマが開いていた。

そこから、煙が出されている

そして部屋の隅にはカメラが置いてあった。

成る程、そういう事か。

成る程な。

どうやらあの妖怪共につづき処刑すべき対象が現れたようだ。

「空は私が好き？」

どうやらあの時の病院らしき所にあつたものよりも効果が強烈らしい。

とんでも無い事を言い出した。

感情が無い人が他人に恋心を抱くと思うのだろうか？

まあ、今はカメラを壊さなくてはいけない。

ただ、四肢が拘束されたこの状況ではとても破壊などできないので体を捻り、さとりと体制を逆にする。

「空?!」

俺はベットに寝ているさとりを置いて、立ち上がり、カメラに歩み寄り短剣を突き刺して破壊する。

そしてそのカメラをスキマに投げ返し、能力を使う事で爆発させる。

どうやらしつかりとダメージは行ったようでスキマが閉じるとともに小さな悲鳴が聞こえた。

と言つても爆発はそこまで大規模なものでは無い。

あの烏天狗が焼き鳥になる程度だろう。

「全く、面倒な事を。盗撮は犯罪だぞ?」

まあ、これでひと仕事終えたわけだ。

「空……………?」

訂正だ、終えていない。

あの質問にはどう答えるべきだろうか？

ここで想もしないのにもかかわらず、嘘を言うべきだろうか？

いいや、それでは時期にバレる。

それに罪人は罪を償うまでは幸せになつてはいけない。

ただ、好きと想えないと言うのも残酷すぎるだろうか？

ただ、それは真実だ。

何時もとは逆の趣向を試してみようか。

嘘で真実を隠蔽するべきだろう。

それがこの状態でのベストだろう。

「きつと、さとりなら俺よりも適した男が現れる。その時まで待つと良い。」

俺は結局暗殺者、血に塗れ、他人を殺し、戦いの中でしか生を見いだせない。

たとえどんなに贖罪意識に苛まれようとも、後悔するとわかっていても結局は俺は殺しをしている。

あつちでも、こつちでも変わらないんだ。

そんな俺が幸せになる権利は無い。

【幸せにならない事】これが俺の選択していた自らへの枷であり錠だ。

まあ、見合わせになったとしても実感は出来ないだろうが。

自分で決めておいてあれではあるが、甘すぎるのかも知れない。

「私の事は嫌いですか？」

「悪い、嫌いという感情も好きという感情も。分からないんだ。」

俺はそう言っつてその部屋を出て自分の部屋へと向かう。

ああ言うしか、なかった。

ああ言う以外の選択肢が俺には与えられていなかった。

さとりが俯き、泣いていても結局何も感じていなかった俺が憎いと思いたい。

他人の血を浴び、身体を裂いても何も思えない自分が憎いと思いたい。

俺は自分が大嫌いだと思いたい。

だが、俺は感情が無い。

憎いという感情も、嫌いだという感情も、好きだという感情も。

外の学校で覚えた。

だが、それは結局俺の中では思えるだけで。

感じれてはいなかった。

何故、俺は感情を持っていないのか。

何故、俺は暗殺者などやっていたのか。

何故、俺は生まれてきてしまったのか。

この事をずっと考えていた。  
だが、分からない。

何故こんなにも俺を苦しませる？

ああ、そうだ。

そういえば、俺は苦しいのかも感じれない。

これは、苦しみなのか？

それすらも分からない。

そうか、そういうことか。

結局、俺は何も分かっていなかった。

「ああ。」

全てが結局は理解したフリであって、本当に理解などは全く出来ていなかったと言うことか。

それは覚妖怪になっても変わらない事実。

これからも俺は感情を感じれない。

そして、此処にも、どの世界にも馴染めない。

それこそが俺に与えられた罪であって。

本当の外せない枷であり、錠だった。

罪を自分で償おうとするなど。

結局は虚しい行為であり、それも罪だったのかも知れない。

罪は結局、神に与えていただくものだ。

そして、神はもう俺に罪を与えていた。

生まれ、暗殺者として育てられていく過程で。

すでに罪など決まっていた訳だ。

何故気付けなかったのだろうか？

どちらにしても、俺は自分がやはり大嫌いだと思いたい。

少年はその夜。

姿を消した。

## 23話

### 依存

私は昨日の夜。彼に告白した。彼が感情を持っていないで、答えられない事を知っていたのにもかかわらず。

私は何処かで、彼が好きだと言ってくれる事を期待していたのかもしれない。結果、彼の答えは、肯定の yes でもなければ否定の no でも無い。

ただ、彼はもつといい男がみつかる。

そう言った。私は彼しか居ないと思っていたのに。本当の家族以外では、初めてだった。

私を怖れず、嫌わず。

特別扱いもしない、それだけでも充分だった。

それだけでも、私が彼に恋する為の要素は揃っていた。でも、その彼は私の前から居なくなってしまった。

ただ、自らの短剣を残して。

「空………」

彼の短剣を抜き刀身を眺める。傷1つなく、刃こぼれもない。どれだけ彼がこの短剣に手をかけていたのかがわかる。

私はもう一度短剣を鞘に入れそつと抱きしめる。

彼の暖かさもなければ、匂いもしない。

だが、彼の物ということだけでも私にとっては大きな意味がある。

「さとり様、やはり空はこの屋敷のどこにも居ません。恐らく地上に出たか、町にいるかと」

「そう……。わかったわ。わざわざありがとう、ゆっくりと休んでね」

私はお燐に退室を命じ、椅子に座る。

彼は強い、尋常では無いほど強い。

でも、それは結果論であって。

私は彼が戦っているのを見たことが無い。

百聞は一見にしかずという言葉もある事もあり、やはり心配になってしまう。

「彼が事実上どれだけ強いのか？  
それが分からない。」

本来なら今日やる筈だった勇儀さんとの戦闘で明らかになる予定だった。

流石の彼でも鬼は倒せないと思うがそれでもどれだけ戦えるのかが分かる。負けた所で、どれだけ戦えたかを見ればおおよその戦闘力は分かる。

しかし、彼はその戦闘をすることは無い。

彼はどこかに行ってしまった。

「さとり」

「勇儀さん？」

突然の来訪者である。

部屋に勇儀さんが入ってくる。

何故か異常な程に傷だらけだ。

服は裂け、血は身体の至る所から流れ出している。

「どうしたんですか?! そんなにも傷だらけになって……」

「彼奴と戦った」

彼奴？

例の百足だろうか？

いや、それに関しては空が狩った筈。

という事は。

「空、ですか？」

「ああ、結果は見ての通りだ。ボロボロだろ？」

でも、空でも鬼に勝てるわけがない。基礎値が違いすぎる。空が他の覚妖怪よりも圧倒的に力が強いとしても鬼ほどではない筈。

「勝ったんですか？」

「いいや。負けた、完敗だったよ」

そんなわけがない。

能力を駆使しても絶対に超えられない壁というのがある。

それが種族の壁、生まれたその瞬間に神によって決められている不

変の物。それを流石の空でも超えられる訳がない。

それとも、それすらの彼は技術で超えられたという事なの？ そうだとしたら、彼の技術は一体どれだけのものなの？

「嘘でしよう？」

「事実さ」

「何故、負けたんですか？」

「すまないな、それは言えない。約束なんだ」

どちらにしても、彼は自分の戦闘方法を隠している事には間違いが無さそう。恐らくその理由は、彼の戦闘方法が暗殺者だった頃に習ったものだからだろうという事は容易に想像がつく。

彼は、自分がその方法で戦っているのを見られたくない、そしてその教えたくもない。

何よりもそうして戦う自分を覚えていて欲しくない。だからこそ、彼の戦闘方法を見たものは皆殺しにされている。恐らく、大百足に關しては知識がないということで見逃したに違いない。

ただ、それ以外の羅刹、子供を攫った妖怪は一匹残らず息の根を止められていた。その為、未だに何故あの妖怪たちが子供を攫ったのかは解明されていない。

まあ、概ね想像はつくけれど。

「さとり、私がここにきた本当の理由を話そう。」

「本当の……理由？」

「彼奴から伝言がある。」

確かに、今考えればこんなにも傷だらけでわざわざ負けを報告しに来る様なことはしないだろう。

「内容は？」

「あの答えだが、少し時間が欲しい。3日後、紫につれられる先で待つ。だそうだ。」

「わかりました。」

告げられた事実は私の告白に対し考えているという事。

確かに、あの時の彼の心境はやけにあせっていた。あれは焦っていたのかもわからないけれど。まずまず、彼は焦ることも出

来るのかどうか分からない。

彼は感情を持つていないと言った。

ただ、その後周囲に慣れる為に学ぼうとしたらしい。

けれど、結局感情とは幼い時に身につけるからこそ無意識に出るものであつて。学んで覚えたところで、無意識に思う事は出来ない。

それを彼は身に付けようとしていた。恐らく、彼の事だから身に付かないことは分かっていたのかも知れない。それでも彼は無理に覚え、一部の感情は理解することに成功した。非常に単純なものだけだが。

嬉しい、楽しいくらいだろう。

「じゃあ、またな。さとり。」

「また会いましょう。」

私は思想の海に浸っていた自分を引き上げ、愛想の挨拶だけをしておく。私も単純な過去を持っているとは思わない。

けれど、今はある程度幸せだという事に間違いはない。妹だけでも家族がいる。

ただ、彼は、本当の家族はいない。そして、自分が幸せなのか、不幸なのか、それが恐らく理解出来ない。

それでも彼がああして普通に振舞っていたのも恐らく、その状況が辛いのがわからないからだろう。

そう考えれば私の過去も可愛く思えてくる。確かに辛いと思えなければ何をされてもどうも思えない。でも、何も思えないという事ほど残酷な事はないと思う。

何を見ても何も思わない。

何も感じない。

よく、世界が詰まらない事を世界の色が消えたと比喻する事があるけれど。彼は、それが日常になっている。何かに群がる虫を見ても、雲が浮かぶ空を見ても、太陽の光を反射し、輝く海を見ても、人々の喜びを見ても、逆に悲しみ、絶望する顔を見ても、自らが傷つき、血が流れても。

彼は何も思えない、何も感じない。つまらないとすらも思えず。本当に、ただ、ただ、生きてきた。私は恐らく、耐えられない。何も思えず、何も感じず。他人との差に気付いたとしてもその差は埋める事はできない。そして、ただ、暗殺という仕事をこなす。

それでは、ほぼ機械と同じじゃない。彼はそんな状態でも、壊れることなく生きてきた。そして彼は贖罪をしようとしている。

「空、なんでそんなにも。自分を責めるの?」

本当に贖罪をすべきは、彼をそうさせた世界であり、人々なのに。

何故、自分を責めるの?

同情しようにも出来ないけれど、1番の被害者は空だと思う。

「おねーちゃん、大丈夫?」

「あら、こいし。大丈夫よ。」

いつからいたのか、そんな事は今はどうでも良いこと。私は隣に座ったこいしの頭を撫でる。

「おにーちゃんは居ないの?」

「空は考え事をする為に少し散歩してるわ。」

「嘘だね、おねーちゃん。なら、なんでそんなにも辛そうな顔をするの?」

辛そう?..... そんな筈は無いのだけれど。やはり、顔に出してなくとも血の繋がった姉妹だからわかるものなの?

「そうかしら?」

「へへへ、おねーちゃんはわかりやすいもん。誰でも気づくと思うよ?」

「そんなにわかりやすい?」

少しショックね..... やはり、他人との関係を極力切った所為で心にしまうという行為が出来なくなっているのかも知れない。少しは関係を持つことも考えたほうが良いのかも。

「うん、凄くわかりやすいよ。」

「駄目押しね。」

私はため息をつき、こいしを撫でていた手を離す。こいしは能力の影響で強く存在を意識するか触っていないと何処に居るのかわからなくなってしまう。そんなにも儂い様な妹でも今はこうやって私を心配してくれている。

やはり、家族というのは大切。その事実を知っているからこそ、空にも家族の大切さを教えたい。でも、それが理由で空に告白したということでは無い。

私は恐らく空に恋をしている。

幻想郷には男性が少なく、まず、わざわざここに来る男などそうそういない。

来たとしても、覚である私には近づかない筈。

それでも彼は私を助けてくれ、特別扱いもしなかった。

それが、とても嬉しかった。

彼を見るたび、顔が火照るし、彼と話しているととても楽しい。そんな事は数百年生きてきて初めてだった。だからこそ、私の愛している彼を助けてあげたい。

例えその結果、彼が感情を手にいれ。

私が恐れられたとしても。

いつの間にかこいしは意識出来なくなっていた。

## 24話 戦い

俺は館から抜け出し、1人地底の街を歩く。今は取り敢えず勇儀を探さなくてはいけないだろう。

闘うという約束をしていた。俺自身も鬼の戦闘力に興味はある、それに約束は破りたくない。

ただ、勇儀とお俺が闘うとなるとそれなりに観衆が集まる。ことが容易に想像できる。

それは避けたい。俺が強いという事はもう既に隠す事は出来ないが、俺の戦闘時の動きは見られていない。

それに……見せる気はない。俺が闘ってきた奴らは基本的に皆殺しにしてある。なぜかと言われれば、俺の戦闘方法が自らを守る為ではなく、全てが相手を確実に殺す為に出来ているからと言っておこうか。

要は、俺がその戦闘方法を使うことは相手の死に直結するという事になる。まあ、多少の手加減は出来るが、したところで元が殺人を目的として作られている為手加減をした場合。相手が四肢の何本か、感覚の幾つかが無くなることは間違いない。そんな事をし、一生苦しませるぐらいならばいつそ殺したほうが良い。それは相手にとってもそうだろう。

ただ、稀に異常な程に生にすぎるものもいるのだった。まあ、どちらにせよ。死んだ相手には。喧嘩を売った相手を大きく間違えたと言っておこうか。

「ああ、違う。今考えるべきはそれじゃない。勇儀を探さないと。」

俺は初めて勇儀に会い、酒を飲まされた店へと向かう。

確信も、証拠もないが。ただ、そこにいる気がした。要は、ただの勘という事だ。

周囲が俺を見ているのが分かる。まあ、殺意を込めた目線よりか、好奇の目線が多い。そんな事よりも今は、勇儀に会い、闘いを早めてもらいよう頼むべきだろう。

俺は少し歩いたところで店を見つけることができた。居て

くれれば良いのだが、居なかつた場合探さなくてはいけない。俺は地霊殿に住んでいるとは言え。街を散策したことは少なく、店の場所などは把握しきれていない。

俺はドアを開け店内を見回す。店長が俺にいらつしやいと言うが俺は愛想だけし店内を見直す。

「おお！どうした？夫婦喧嘩でもしたか？」

俺がその声の方に目を向けると、パルスィと勇儀が2人で酒を飲んでた。

まだ入って間も無いようで余り酒を飲んでいないようだ。と言っても周囲に酒瓶や酒樽が無いというだけだが。

「夫婦？俺に妻はいないぞ？」

「気付けない貴方の鈍感さが妬ましいわ。」

パルスィが後ろを向いて俺を軽く睨見ながら言い放つ。サードアイで見えるまでもなくその瞳には悪意というよりか呆れが籠っていた。

1方その後ろから俺を見る勇儀は何か面白いショーでも見ているかのように笑っていた。

全く、感情というのは理解しがたいな。別にそこまで理解したいというわけでも無いが。

何方にしても早く本題に移そうか。酒もまだそこまで入っていないようだし話にはなるだろう。

「明日の決闘の件だが、今日に早めてくれないか？」

「ほう？何故だい？」

いきなり話題を振るのは危険かとは思ったが、当たり障りは悪く無い。

「俺は、観衆の前で闘いたく無い。出来れば俺と勇儀、2人だけでやりたい。」

勇儀はその案を少し考えているようだったが、その前に座るパルスィが俺を見ずに言い放つ。

「貴方は、それで大怪我をしたらどうするつもりかしら？勇儀は貴方が怪我をしたとしても何も出来ないわよ。そんな事も分からない貴

方が妬ましい。」

確かに、御尤もな意見だ。だが、それでは一体誰にその役をして貰おうか？俺の戦闘を見られる以上、約束を確実に守ってくれる者が望ましいが。さとりはありえない。こいしは……何処にいるのがわからない。お隣も選択肢にはあるが、恐らくさとりに許可を得なければ動かないだろうし。許可を取る際に嘘は通用しないので真実を話すしかない。この時点で俺の信頼できる者を当てるのは厳しくなった。

「じゃあ、パルスイとヤマメにしよう。それで良いな？」

勇儀の突然の提案、確かに勇儀にとって信用に値する者達だろう。

それに勇儀に約束を取り付けられれば何とか隠すことは可能だろう。

「全く、そんな風に人を扱える貴方が妬ましいわ。」

パルスイはそんな風に答えてはいるが、嫌だなどと拒否はしない。正直、そういう所が勇儀に気に入られる理由になっているだろう。

「そういうことだ、悪いな店長。勝って戻ってくるよ。」

勇儀は既に勝利は決まっているかのような、発言をし店を出て行く。俺はその後ろを追った。

その後、ヤマメを見つけ出し、決闘の事を伝え同行させた。そろそろ、約束を取り付けられなければならない。

「なあ、悪いんだが。1つ約束してほしいことがある。」

俺は3人に連れられ決闘の場所に向かう道中で口を開く。「これから闘うわけだが、俺の闘い方を絶対に口外しないで欲しい。伝えるのは勝敗だけにしてくれ。」

「ああ、私は構わない。」

勇儀が即答する。勇儀がそう言うのは分かっていた。何せ勇儀の目的は俺と闘うことであり俺の闘い方を見る事では無い。

ただ、問題は後の2人だ。

「私も構わないわ。」

「あたしも別に良いよ。」

「ああ、助かる。」

意外にもあつさりと事が進んだが。取り敢えずは、これで俺の戦闘方法が流出することは防げた。だが、問題はさとの読心をどの様にして避けるかだ。だが、それはさとの性格からして勇儀が約束したと、読心される前に言えば読むことは無いだろう。

「ここだ。ここなら人目にもつかない。」

そこは砂漠だった。多少なり足が取られるが。まあ、そこまでの事では無いだろう。

「ああ、確かにここなら人目にもつかなそうだな。助かる。」

「私の目的はあんたと闘う事だからね。それに観衆の中でやったら私も本気が出せないしな。」

ああ、周囲への被害を恐れてという事か。まあ、その程度の破壊力は予想していた。それほどの力が無ければあの百足の甲殻にヒビをいれることはできないだろう。

ただ、予想出来ていたとは言えその攻撃の威力は減らない。あれだけ硬いものを砕く拳を受ければただでは済まない事は容易に想像できる。

「じゃあ、そろそろ始めよう。大百足すら倒す戦闘力……見せてもらおうか。」

「ああ、来いよ。」

俺は長剣と短剣を精製し、両手に握る。所謂、二刀流というものだ。俺自身の短剣は地霊殿に置いてきているので今は無い。まあ、置いてきた目的がないという嘘になるが。3割程度は俺がただ忘れて来たと思っても良いだろう。

「そら、行くぞ?」

勇儀が右足を踏み込み、俺との距離を縮める。5メートルほどあった距離が一瞬で詰められ目の前の勇儀が右の拳を振るう。

「速いな。驚いた。」

正直、予想通りだった。俺はその拳の軌道と向かい合うように長剣を振り下ろす。肉が裂ける感触、噴き出す血が俺を紅く染め

ていく。

「なっ?!」

距離を取ったところで俺と勇儀の闘いを見ていた。パルスィの悲鳴が聞こえる。まあ、どうでも良い。

ただ、長剣を振り下ろしただけ。それだけの動作でこれだけのダメージが入った。正直な所、剣の刃が通らなかった場合はどうしようか?なども思っていたが気鬱だったようだ。

「想像以上だ。やるね。こいつは久しぶりに楽しめそうだ!」

一度勇儀は俺から距離をとる。すでに右の拳からの出血が止まっているあたりから。筋肉を膨張させ強制的に止血したか、自然治癒したと考えられる。

ただ、後者の場合は寸止めの加減が狂えば相手を殺しかねないので少々面倒になる。

「想像以上、か。全く、お前は俺の戦闘力を想像できるほど闘ったのか?構えろ、行くぞ?」

俺は長剣を短剣に変え、勇儀へと突っ込んで行く。足場は悪いのでいざという時にステップは踏みにくい。がそれは立っていても変わらない。

勇儀はそれを迎え撃つ様に蹴りを放つ。恐らく、あの速度で俺に当たらない距離で振るうという事は衝撃波が飛んでくる。

俺はそれを見越し、左の短剣を長剣にし地面に突き刺すことでそれを軸にし姿勢を落として回転。上を何かを通ったのを確認したのち、その回転力を利用して右の短剣を投擲する。

「ああ、最高だ!私よりも圧倒的な強者に会ったのはいつ振りだ!」

俺の投擲した短剣はガードしたのであろう腕に突き刺さり血が流れている。だが、それで何故か興奮し自らを昂ぶらせている。完全に狂人の類だろう。戦闘に身を沈めてきた者の末路とでも言いたいところだが、俺は勇儀が過去に戦闘に身を沈めていたのかはわからない。よって、ただ単に戦闘が好きただけだと解釈するのが妥当だろう。

勇儀は笑いながら、自らに刺さる短剣を抜いた。無論、血

は吹き出し砂漠の地面を紅く染めるがすぐに止血される。

次からは先端が抜きにくい武器を使用すべきだろう。そうでもなければすぐに止血されてしまう。

「悪いな空。あんたを見くびっていたよ。此処からが、私の本気だ。楽しめよ！」

「悪いが、俺は闘いを楽しいと思わない側でな。残念ながら楽しめなそうだが、勇儀に負ける気は無いな。」

「ああ、良いねえ！最高だ！」

そう言ったのを最後に勇儀の四肢が、胴体が、腫れる様に膨れ上がった。大きさが約1.5倍程度になっている。その分が全て筋肉だとすれば。これまでの情報は意味をなさないだろう。

戦闘するにあたり、情報を取ることは大切ではあるが、それよりも恐ろしいのはその情報が間違っていた場合だ。その場合それまでに立てた全ての作戦が狂うと言っても過言ではない。作戦には柔軟が必要だ。まあ、今回に関しては俺が大した作戦を練っていないのでそこまで影響は無いとは思うが。

ただ、距離が取れなくなる可能性があるのはそれなりに危険だろう。

「構えろ！行くぞ？」

体の膨張をし終えたのであろう勇儀がこちらへ向き一步を踏み出す。刹那、消え瞬間的に俺の眼の前へ。距離は10メートルはあったはず。それを助走なしで詰められるとすると。

距離が取れなくなった。眼前に現れた勇儀が膨張し、幹の様になった左腕を振るう。おそらく当たれば即死で良いところだろう。

「heart rate accelerate。」

使わずとも躲せただろうが俺はそんなにゆつくりと勇儀と闘う気は無い。心拍数を一時的に2倍にする事で一瞬にして勇儀の背後に回り。ガラ空きの背中に握っている長剣を突き刺し、刺された勇儀が行動を起こす前に身体を蹴り飛ばすことで、強制的に長剣を抜く。更に蹴りによって体制を崩した勇儀の背中を長剣の一部を砂に変えることで創り出した短剣をで深々と大量の傷をつけ大きく一

歩離れる。

「ああ、ダメだ。あんたには敵わないな。」

勇儀はそうとだけ言いのかし砂漠に身体を倒した。

案外強くもなかったな。正直もつと何かあることを期待していたんだが。まあ、こんなもんだつたということだろう。

パルスイ達を呼ぼうか。だが、その必要は無い様だ。もう既に走つてこつちに向かつてきている。

「終わった。それと紫、お前に観戦の許可を与えた覚えは無いが？」

俺は《何も無いはず》の虚空を睨む。するとその空間が裂け、その中から幻想郷の賢者である。八雲 紫が現れた。

## 25話 感情のない花々

「あら、何時から気付いていたのかしら?」

「さあな。いつからだろうな。まあ、見られた物は仕方ない。勝手に見た事に関しては何に咎めないでおく。その代わり、俺の頼みを聞いて貰おうか」

八雲 紫、幻想郷の賢者であり、恐らく幻想郷の内部でもそれなりの力がある人物。能力は空間を操るだけだろうか?

「あら、あなたの事だから消されるのかと思っていたわ」

「悪いが、俺は戦闘狂では無いからな。それにお前を消すのは苦勞しそうだ」

全く、俺に対しどんな印象を持っているのやら。まあ、それもどうでもいいことだ。正直、紫が見に来るのは想定内だ。ここが強者であるならば突然入ってきた謎の覚妖怪の力量を確認しておくこともするだろう。

「で、そのお願いは何かしら?」

「俺は今、1人で考える時間が欲しい。3日間、外の俺の家に飛ばしてくれ。そしてその最終日にさとりを送ってくれ。それだけだ。」

少々、自分の周りで起きたことに対して整理が必要だ。流石に情報が乱れすぎている。

「それは無理ね。」

「は?」

俺は外から入ってきたのだから、自動的に外に出ることも可能だろうと思っていたが。

何か特殊な理由でもあるのか?

「貴方は今、妖怪なのよ。今は幻想郷の中にいるから存在出来ているのであって。外に出たら消えてしまうわ。」

「消える?それはまた物騒だな。何故だ?」

「妖怪は人間の畏れの感情から生まれたというのは知っているかしら?」

確かにあちらの世界でも妖怪は人間の畏れから生まれる

と言われていた気がする。その畏れも抱けない事もあり気にして  
なかつたが。

「知っているようね、なら話は早いわ。外の人間はその畏れを科学で  
解明したの。これが何を意味するのかわかるかしら？」

「成る程、人間は畏れなくなり。妖怪の存在意義が薄くなっている  
と。」

それならば村の発展の遅れも理由がわかる。科学などで  
色々と学ばれると妖怪の存在理由が消え妖怪が消えてしまうからな  
のだろう。

「話が早くて助かるわ。という事で外に行くのは厳しいわ。その代わ  
りと言つては何だけど、妖怪含め誰も近づかない場所ならあるわ。そ  
こなら直ぐに案内できるのだけど」

パルスイカヤマメに助言を求めようかと思つたが勇儀の  
看病でそれどころでは無いらしい。こんな事なら関節破壊程度に抑  
えるべきだつたらうか？まあ、それぐらいでは筋肉でなんとかされて  
いただろう。仕方の無い事だ。

「いったい何が居るんだ？何の理由もなく誰も近づかないわけが無い  
だろう」

人間が近づかないならまだ、妖怪に警戒しているという事  
だろうと思えるが、妖怪までも避けているという事は何か妖怪が恐れ  
るレベルのものがいるという事だ。

「そうね、強いて言うなら。花が大好きな妖怪と言つたところかしら、  
どちらにしても貴方ほどの戦力があれば死ぬ事は無いわ」

「素晴らしいくらいに物騒だな。笑えない。まあ、それでも良い。  
送ってくれ」

花が好きで他の者が近寄らないという事はそこまで花を  
溺愛しているという事だろう。そして、その花を傷つけようとすれば  
それに対し防衛手段と称した一方的な攻撃を放つという事だろうと  
予測できる。

ただ、それでも誰も近寄らないというのは少しおかしいだ  
ろう。まずまず花に危害を加えなければ良いのだから。恐らく過剰

防衛が行われている可能性が高い。

範囲としてはその花のある場所に入った瞬間だろうか？

「考は固まったかしら？送るわね」

俺がその返事をするよりも先に足元に出現した、不気味な目のようなものが覗いている気味が悪いと形容せざるおえないような裂け目に落ちた。

「やはり紫は敵にすべきでは無いな」

周囲には大量の花。気付けばその中に立っていた。風が吹けば花が揺れ花弁が宙を舞っている。

そのまま地面に落とす事なく俺を送ったのは恐らく紫も例の花が大好きな妖怪を怒らせたくなかったという事だろう。

にしても、こんな花畑があるとは。空があるという時点で地上だという事は分かるが。外にこんな花畑は無いだろう、いや、あるのかもしれないがゆっくりと見て回ることは出来なかっただろう。

まあ、そんなに花の知識があるわけでも、花が好きと思えるわけでも無いが。

「あら、貴方どこから来たのかしら？私が侵入に気付けなかったという事は紫に送られたのでしょうけど」

「俺の能力という線が頭に浮かばないところからしてそれなりに同じ事があったみたいだな」

「まあね、それはそうと何の用かしら？」

紫から聞いた印象では話など通じなそうだったが、想定外だ。割と普通、いやこれまで俺の会ってきた人間……いや、妖怪たちと比べればかなり話を通じる部類だ。恐らくさとの次程度には話を通じそうな気がする。

まあ、まだ今のところではあるし、仮面を被っているという可能性を除けばの話だが。

「実際、この花畑には用はなかったんだが。此処なら、静かに物事を考えれると聞いてな。それより聞いていたよりも話を通じそうではないよ」

「話を通じそう、ねえ。一体どんな風に聞いていたのかしら？」

「聞きたいか？オススメはしないが」

「大方検討は付くし良いわ。それよりも此処で考え事だったかしら？此処で良いならご自由に、ご飯になれば呼ぶわ」

思ったよりも簡単に此処での滞在を認められた。それに俺のサードアイを見ても何も言わないところからして、覚妖怪を恐れている風も無い。恐らくはかなりの戦闘力を持っている。

「流石にご飯までは大丈夫だ。3日程度、何も食わずに生きれる」

「いいえ、それではこっちの気がすま無いのよ。久々の客人なのよ、それぐらいはさせて貰うわ」

これは、譲ってもらう事は出来なそうだ。此処は諦めて従うとしようか。恐らく此処で無理に断るより従った方が後々の事が円滑に進みそうだ。

「成る程、そこまで言うならお言葉に甘えよう」

「あっさり了承するのね。毒殺されるかもしれないわよ？」

「残念だが、毒では死なないだろうし俺は覚妖怪だ。そう簡単には逝け無いだろうな」

そう。とだけ言ってその花大好き妖怪は俺を見つめる。一体何を考えているのやら、サードアイを使うか迷いどころだがまあ、使わなくても良いだろう。

「そう言えば名前は何て言うんだ？紫からはお花大好き妖怪と聞いているが」

「お花大好き妖怪……ねえ。まあ間違っってはいないけどね、私の名前は風見 幽香よ」

前は風見 幽香よ  
「俺は秦 空だ。まあ、3日だけだがよろしく頼む」

どうやら今のところはやはり一般的という感じだろう。何故此処に来るといっただけで死ぬ事は無いとまで言われなくては行けないのか。

可能性としては、幽香自体は危険でなかったという事が、まだ幽香が本性を現していないという事の2つが上がるだろう。

いや、紫の性格からすれば俺を警戒させ戦わせる事も目的だったのかもしれないが。

「じゃあ私は花を見て回るわ、一緒に来るかしら？3日でも道程度は覚えたほうが良いでしょう？」

「確かにそうだな、一緒に行かせてもらおう」

それに、それで幽香の本性が覚えるならばそれに越した事は無いだろう。

「じゃあ、少し私のお花達の紹介でもしようかしら？」

「お花大好き妖怪という事は間違っではない様だな」

「そうね、否定しないし。私は花が大好きよ」

やはりそれだけしか分からない、何かもう少し情報が欲しいものだが。そんなにも考える必要は無いだろう。この3日は俺が自分の事を考えるためにあるのであって他人の事を考える為にあるのでは無いのだから。

「ああ、ところで此処はどれくらい広いんだ？身長が高く無いもんでな、あまり見えないんだが」

「どう表せば良いかわからないけど、取り敢えず飛べばわかるわ」

そう言っただけで幽香が空へと飛んでいく。俺は慌ててそのあとを追った。

気のせいだろうか？此処にきてから他人の背を見る事が多い気がする、まあ、どうでも良いことか。

「取り敢えず範囲はこれくらいね」

「かなり広いという事はわかった」

東京ドームと言われるものがあるがそれが収まる程度には大きいと思う。

そんなことよりも衝撃的なのは恐らくこの範囲の花の世話を幽香が1人でやっているということだ。それだけすれば1日のほぼ全てを花に使っていると言っても過言では無いだろう。

使用している時間で考えれば親が子供を見る時間とほぼ同等レベル。それだけすれば、愛着が沸くのも、花に対する危険を極力排除したくなるというのも、まあ、理解は出来る。親心と言うものが働くのだろう。

「せっかく飛んだことだから、このまま家へと飛ぶわ、出来れば場所を

覚えて」

「ああ、努力しよう」

此処までは普通に良い奴と言う印象が強い。だが、良い奴なら他人に、他の妖怪に避けられ、恐れられる理由が無い。全ての事象には何かしらの理由があるものだ。

ただ、これは紫のあの発言が真実であると言う仮定の元成り立っている。あの発言が嘘であれば俺の考え全てがひっくり返るだろう。だが、紫の言っていた花好きの妖怪と言うのは間違っていないかった。

「此処が私の家よ、後は好きに考え事なりしてなさい。私は花を見てくるわ」

そう言って日傘をさし、歩いて行く幽香の後ろ姿を見ても何も感じ無い、特に悪意も読め無い。なら、今は良い奴と言うことにしておこう。

事実は違ったとしてもその時はその時だ。今は来たるべき3日後に向けて、自分の考えを纏めなければ。

そうして少年は自らを思想の海に沈めた。

## 26話

### まるで傀儡か機械か

まずは此処の位置を把握する事から始めよう。1つ目の方法として断層からどの時期に何があったのかを推測する方法が考えられた。これにより火山灰の層を発見できれば大体の位置は特定できる可能性がある。

が、俺の能力で断層を見ることはでき無い。ならば断層のむき出しになっている場所を探そうと試みたが、来たばかりの場所では何処にそんなものがあるのかわかるわけも無かったため実質的に無理だと判断した。

ならば周囲の草木を見るという方法に移ろう。この花畑の中では自然に生えている植物を見ることができない。という事はこの花畑の範囲外に行かなくてはならない。

「面倒だが飛ぶしか無いな」

俺は自身を浮かせ、花畑の外の森に降りる。ここは流石に花畑では無いだろう。周囲の木々が金木犀や椿であれば話は別だが見た感じではそうでは無いようだ。

まずは周囲の草花から確認をしていく、それでも大まかな位置は分かるはずだ。その植物がどのような条件で自生するのかをある程度覚えておけばそんな事も可能だったりする。

だが、これにも大きな問題がある。俺の知識に入っていない植物が見つかったり、周囲に基本的に何処にでも自生できる物ばかりの場合、全く場所が絞れなくなる。

「前者か…… 予想はしていたが」

全く分からない物ばかりだ。

キノコを食べると成長する男の世界の土管から出てくるやつのような色をしていたり、クネクネと動いていたり。

妖怪の影響だろうか。

これでこの場所を割ることは俺の今できる範囲の行動では出来なくなった。

「仕方が無い、なら次だ」

俺は再度空を飛び、花畑へと戻り自らで作った椅子に腰掛ける。

次は今の俺の持つ幻想郷に対する情報の管理だ。

まず、此処は幻想郷という物は日本の何処かか又は異世界にあると仮定しておこう。

そして此処には外界の科学の進歩に伴い、ある意味での畏れという信仰が減り、存在理由が不安定になった妖怪が存在している。

この時点でどのようにして妖怪の畏れを確保しているのかは、あの町の人間たちを使っていると考えるのが妥当だろう。これが現時点でまとめられる幻想郷についての情報だろう。その他にも地底には嫌われた妖怪が住むなどもあるが、それは今の状況では組み込む必要の無い情報だ。

ただ、1番の問題は俺という存在だ。

俺は死んだにも関わらず、此処で何故か妖怪となり復活した。紫曰く、俺の魂が何かの手違いで入って来たと言っていた。だが、それにしても俺の肉体が変わっていない。身体の大きさも、傷の跡も、何も変化が無い。ただ、髪の色は変わっていたが。

にしても、全く持って理解不能だ。肉体が変わっていない事からいわゆる転生という事でもなくただ復活したということになる。

かつて、キリスト教のイエス＝キリストも復活したと言われているが、俺は教祖になるような事はしていない。何方かと言えば悪魔と恐れられる側の人間だ。

というか俺のことに關しては正直、俺の知識外の事が多すぎる。その俺の知っている法則に従うと矛盾する。

まあ、まとめられるのはこれが限界だろう。少々まとめ方が強引だが仕方無いことだ。理解できる範疇を超えている。

そして最後の1つに移ろうか。恐らくこれが1番時間が掛かる。

さとりはなぜ俺を愛しているといったのか。

先ず考えられるのがさとりのあの発言そのものが嘘だという場合。ただ、それは割と厳しいと思っている。さとりが俺に告白をした際、あの部屋には媚薬が充満していた。その状態で綺麗に嘘を吐くのは厳しいと言わざるおえない。

次に考えられるのはさとりとゆかり達がグルという可能性。媚薬が俺に通用しないことが分かった上で俺にあの煙を媚薬と勘違いさせることにより、さとりに逃げ場を作る。

ただ、これも考えにくい。わざわざさとりがそんな事で紫に恩を売るとは考えにくい。

それに俺の知っているさとりはそんなに演技が上手くない。どちらかといえば下手な部類だ。

「となると、考えられるのは1つだけか」

それは実に単純な事であると同時に、彼が最も対処に困る物だ。

「あれ、先生?」

突然後ろから声をかけられ反射的に振り向くとそこには寺子屋の生徒がいた。と言っても例の妖怪だ。

「先生って強い?」

「あ?まあ、弱くはないだろ。」

突然どこから現れたんだか……。正直子供は全く行動が読めないので少々扱いにくい。

まあ、今はサードアイと言う最強の道具があるが。いや、サードアイは体の一部なのか?

それに関しても後で考えようか。

「名前はチルノだったか?いきなり何しにきた。それに俺の名前は秦空だ。これからは空と呼んでくれ」

「わかった!空、アタイと戦え!」

こいつも戦闘狂か?ここは何だってこんな戦闘今日だからなのか……

だが相手は子供、俺は元教師。ならば、頭脳戦でも文句は無いはずだ。

「じゃあ、先に15を言った方が負けというゲームを提案しよう。一度に言える数字は3まで。やるか?」

「何それ、あたいのやりたいのと違う……」

「でもいいや、あたいはサイキョーだから何しても負けない!!」

「すまないなチルノ、お前が必勝法を知らない限り俺に勝つことは無い。」

「あたいは、1. 2. 3」

「どうやら必勝法は知らないようだ。もう既に9割は勝つただろう。」

「4。」

「5. 6. 7!」

「8だ」

「そんなに少なくないの?」

「ああ、これで良いんだよ」

正直な所、必勝法を相手が知っていた場合、先行でないで勝てないが今回は確認がてら先行を取らせた。

先行という状況で俺の知っている策をとらなければほぼ俺の勝ちというわけだ。これによりチルノが必勝法を知っているかどうか判断できる上に、次からもこの戦い方で戦える訳だ。

非常に平和的な策だと思う。

「ふーん、9」

「10。」

「また?やる気あるの?」

「もうやる気が満ち溢れてやばいぞ。」

まあ、この時点で俺の勝利が確定した。

実際は一手前から必勝出来たが、相手が必勝法を知らないとわかった以上悟られてはいけない、という事であえて外した。

「11. 12。」

「13. 14。」

「あつ。」

「俺の勝ちだな、また挑戦待ってるぞ。」

そう言つて花畑へと向かう。まあ、あれは非常に簡単に必勝法が見つかるゲームだ。

あのゲームの性質上14という数字を言った方が勝ちとなる。そこから自分が14という数字を確実に言える様に逆算する。すると、10、6、2、となる。そして2という数字を言うには先行が条件となる。よつて先行が勝者になる訳だ。

ただ、これを知らない奴からすればただひたすらに勝てず。ストレスが溜まるだけだが。

「全く、探したわ。貴方に客人が来てるわよ」

どうやら、俺の事を探していたようだ。特に収穫もなかった事だし、花畑から出なくても良かったのではないかとも思うが。

それは結果論に過ぎない。

「ほお、どんな奴だ？・幽香」

にしても俺に客人とは、中々興味深いな。一体何のようであれ俺を訪ねるのか。

「忠犬と言つたところかしらね」

「ああ、成る程」

この時点で相手が何を求めているかまで大体想像が付いてしまった。

まずはこの忠犬という言い方からして何処かの下っ端、またはどこかからの使いと考えられる。

そして、訪問対象が俺ということとは……

恐らくだが、戦闘技術を教えて欲しいのだろう。流石に人里や、地底で戦い過ぎたか。これからは避けれるものは避けた方が良さだろう。既に手遅れという感じもしなくも無いが。

「あれよ。」

幽香の指し示す先には白い何かがあった。

流石にまだ遠すぎるせいかな正確には判断できないが、取り敢えず、人ではないだろう。

「人ではなさそうだな。」

「ええ、ご名答よ。あれは天狗。中でも階級の低い白狼天狗よ。」  
「天狗に階級があるのか。」

外は完全なる階級社会だが、天狗既にそうなっているらしい。  
い。

おや、どうやらこちらに気づいたようだ。白い塊がこちらへと飛んで来た。

「貴方が秦 空ですね。」

「そうだが、何の用でここまで来た？」

「貴方にお願ひが有りました。」

さあ、サードアイの出番だ。

(どうまとめるべきか、いかにしてこの覺妖怪を納得させるか。でもここはシンプルに行くしか無い。)

「是非、私に戦闘を教えてくださいませんか？」

シンプルイズベストという思考に落ち着いたようだ。

「ほお……では俺の質問に答えてくれ、それだけで良い」

何もそんなにも難しい問題をぶつける気は無い。ただ、俺から学んだ戦闘がどのように使われるのかが知りたいだけだ。

本当に、ただそれだけだ。

「俺から戦闘を学ぶのはわかった。だが、それを何に使う？」

「それは……」

さあ、どう答える？その答えによって俺の行動は決まる。

「私は、仲間を守りたい。同族の皆を！」

「そうか。なら……教えることは出来ないな。」

## 27話

### 上がる黒煙、咲き誇る血の花

目の前にいる犬の耳と尾を持つ少女に俺は無理だと答えた。  
「な……………何故です?!」

サードアイを通して目の前の少女の荒ぶる感情が伝わってくる。ただ、それを見ても俺の感情は動かない。

「何故か?簡単な事だ、用途が違う。お前は体を温めるのに氷を使うか?体を冷ますのに熱湯を使うのか?」

そう……………俺のこの技術は人を守るためにあるのではない。  
「しかし、力とは弱者を守る為の物だと!」

目の前の少女は必死に俺に訴えかける。そこまでして、何故力を欲するのか。

「それが、お前の常識か?」

「ええ、強者は弱者を守らなくてはいけない。それが私の常識であつて、生きる意味です!」

「いい事を教えてやろう。常識なんて言うものは若い時に身につけた偏見のコレクションだ」

エジソンの言葉にも常識とは18までに身に付けた偏見のコレクションという言葉があつた筈だ。正直、これは素晴らしい言葉だと思つている。事実、常識なんてものは非常に脆い。

「何が言いたいんですか?」

わからないのか。それともわかりたく無いのか。

「お前は守る為に力を使うのが常識だと言つたな。なら、お前は力を何に行使する気だ?」

「それは我々を攻撃する者達に……………」

「そうか、じゃあその対象は何故お前らを攻撃する?お前の常識だと力を相手を傷つける為に使うのはダメなんだろう?」

さあ、どう答えるか。この少女の常識はどこまで強いか?

「そ……………それは。」

「常識が違うんだよ。相手からすればお前らは憎むべき相手、滅ぼす

べき対象。相手はそれを実行に移す。それこそが相手にとつての常識。もう一度言おう、やはり用途が違う。だから教えられない」

ただ、俺の言っている事は嘘だ。俺はこんなにも綺麗な理由を立てているが、本音は教えたく無いだけだ。

こんな、技術を教えられたところで、誰も幸せにはならない。先に見えるのは怨みと復讐、そしていつも犠牲になる弱者。

「それなら貴方のその力の用途は何なんですか?! 一体、大百足を1人で殺す程の力の使い道は何ですか?!」

目の前の少女は声を荒げ俺に迫る。これが激昂か、恐らく俺が教えない事への感情だろう。

「俺のこれは、守る為にあるんじゃない。その逆だ、もう分かってるんだろ? 俺はこれでも覚妖怪だ。お前の中ではもう気付きかけてるだろ?」

「なら、見せて下さい」

「は?」

想定外だ、一体どうしてそうなる? やはりここは戦闘狂が多いな。

「ほら、早く剣を抜きなさい!」

そう言つて俺に向かつて来た刹那、その白狼天狗の背後に突然現れた幽香に首元を叩かれ昏睡、地上へと落下していく。

非常に鈍い音がした。

「ここをどこだと思つてるのかしら、ここは私の畑よ」

「素晴らしいな、完璧に決まっていた」

あんな物を不意に喰らえば昏倒どころか永眠までありそうな勢いだ。

「褒めても何も出ないわ」

その瞬間だった、倒れた筈の白狼天狗が凶刃を幽香に対し落下しながら投擲、凶刃は円を描きながら確実に幽香に当たるルートを飛んでいく。

「おかしいな、確実に決まっていたように見えたが?」

俺は幽香へと向かい飛んで来た凶刃の柄を掴み刃を眺める。

珍しい形だ、ククリに似た形状だが大きさが違う。そしてそれなりに重い。これを落下しながら投擲する辺り腕力では敵わなそうだ。

「あら、助かったわ」

「まあ、気付いていたろ？」

「まあ……ね」

そうやって俺にニヤリと笑みを浮かべて来る。どうやら俺が動いた時点で弾いてくれると思っていたようだ。全く、うまく利用されたものだ。

そんな会話の最中、今が機と判断したのか白狼天狗は落下を止め、飛行していく。

「角度はこんなものか」

やはり物は返さなければ行けない、キャッチボールでも投げられたら相手を取りやすい位置に返す。これがルールだ。今回は投げるものが違うだけの話だ。十分にこのルールは適応される。

ただし、今回は相手がわざと死球を投げて来た。ならばこちらも其れ相応の返球をする。

「ほら、返すぞ」

俺の投擲した刃が先程投擲されたのと同じように円を描きながら逃げる白狼天狗に向かっていく。

進路は完璧。まあ、恐らく何かしらの手段で弾かれるだろう。刃にちよつとした細工を施しておいたが。果たして意味を果たすだろうか？

「あら、上手ね」

「褒めても何も出ないぞ？」

「それは残念。にしても、ここで喧嘩をしようとしたあの犬は問い詰めなくちやないわね」

問い詰める……ねえ。そんなに殺意持つるところからしても完全に相手の命はなさそうなんだがな。

にしてもどうやら俺の投擲は受け止められた様だ。まあ、一見した感じでは盾も持っていない様だったし、それなりに妥当ではあ

る。

「まあ、俺も同行しよう。動いた方が血液回って頭も回る」

「あら、そういう思考え方好きよ」

やはりこの幽香の恐れられる理由は過度な防衛だろう。ここではつきりして来た。狂氣的なまでの花への愛から生まれる過剰防衛。

「他人に好かれるのはあまりな」

「それはさとり一筋ということかしら？」

「全く、何故そうなるんだ……」

それに加え恐らく本人は通常時なら意識的に隠しているのだろう。今回の様に花畑が荒らされる危機に瀕するなどし興奮状態になると本来のサドステイックな一面が出るところか。

「とりあえず追うわよ。目的地は妖怪の山、付いて来なさい」

「ああ、了解した」

そう言っただけで空は前方を飛び出した幽香の後を追う。風が追いつくという事もあり飛ぶペースは遅くはならない。

にしても、いまだにまだ一つ疑問が残っている。俺がどこにいたのかは紫からの情報流出と考えているので特に問題はないが。

何故、あれ程までに焦っていたかということだ。初対面の間……いや、妖怪に対しあれ程の感情をぶつけるとなるとそれ程までに追い詰めた要因があったということだろう。

「なあ、幽香」

空は少し前方を日傘をさしながら飛ぶ幽香の横に移動し声をかける。

にしてもどこから傘が出て来た？

「何かしら？」

「白狼天狗と言うのは全体的にああいうやつなのか？」

「あまり関わったことがないから何とも言えないけれど私の知っている子はそうではなかったわ。ただし、性格はそれぞれよ。ただ……」

どうやら、同じところまでは来れているらしい。

「あれ程の感情のぶつけ方からして何かが起きていると考えるのが妥当……か？」

「そうよ。覚の貴方が言った今確信を持ってたわ」

そんな事を話しながらも空はサードアイで常に幽香を見続けている。

だが、私の畑を荒らした罪は重い……か。まあ、あの犬の事などどうでも良いのだが。

取り敢えず、ほほ何かが起きていると言う事で確定できるだろう。

「幽香、お前は何かが起きていると思う？」

「そうね。安直に考えれば内部抗争か、敵の襲来というのが上がるわ。ただ、それだとあの犬がここまで来た意味が分からないのよね」

幽香は2つの例を挙げたがどちらも本人的にはそうとは考え難いという事も分かっていた。

まず、あの必死さからして上からの命令ではないだろう。命令という可能性も消せはしないが、それならば簡単に手を引けなかった筈だ。まあ、これは幽香があのだを忠犬と紹介した事からの勝手な憶測だが。

それに、あそこまで焦るほど状況が厳しいならば態々ここに兵を派遣する意味が分からない。

「貴方、いつも何か考えているでしょう？」

空は突然掛けられた声により少し考える事を止める。

「そうだな。自分でも気づいてはいるんだが」

「まあ、良いわ。それより目的地が見えて来たわ。どうやら考えは当たっていた様ね……」

それを聞き、正面を向いた空は前方に天に向け煙を登らせる山を確認する。

山の所々から上がる黒煙は木が燃えたものではない事を半強制的にその場の2人に理解させる。

「こんな事がここでは日常的に起きてるのか？」

「さっきの犬の焦り方からして理解出来ないかしら？」

それもそうだ。こんな事が日常的に起きているなら対策を

練るだろうし、あれほど焦る事もなかっただろう。

「それもそうだな、急ぐか？」

「ええ、彼処には知り合いもいるしね」

「了解した」

1人の元人間と、花の好きな妖怪は飛行のスピードを一気に上げ黒煙を立ち昇らせる山に向かっていく。

## 28話

### ある晴れた日の妖怪の山で

ここは妖怪の山。天狗という種族が統治し管理をしている場所である。そんな場所で1人、木漏れ日の中で眠る少女がいた。

「全く、また寝てる…… 起きなさいよ！」

「は？も、権？！何故ここが？」

今日も妖怪の山にはいつも通りの日常が流れている。最近  
は他の妖怪からの攻撃もなく非常に平和。

ただ、不謹慎ではあるがここを守る私たちからすれば非常に  
暇。

「今日は休日だけど、少しは気を張ったらどうなの？」

「まあ、そんな固い事言わないでよ」

少女はそう言つてにつこりと笑う。

「だからと言つて昼寝は駄目でしょ？」

「えー、何で？気持ちいいよ。今日は日差しも良いし。そうだ！権も  
一緒に寝る？」

「寝ません！」

少女はその答えに不満そう頬を膨らませる。ただ、それは本  
心ではなく。平和を楽しんでいるものという事もお互いが理解して  
いた。

「立場一緒なんだから、真面目にやってよ」

「権がお固すぎるんだよ。もつと楽に行こうよ。可愛い顔が台無しだ  
よ。」

この会話もいつも通りの日常。お互い、白狼天狗の中では高  
い職についている女同士という事で仲も良いと私は思っている。

意味は少し違うかもしれないけれど、類は友を呼ぶと言うも  
のだと思っている。

「楓……？」

彼女は名前を呼びながら白狼刀と呼ばれる、ククリを片手剣  
程度の大きさにした武器を黒い笑みを浮かべながら鞘から引き抜く。

「お、落ち着いて？ね？まず話し合おうよ。」

「次言ったらわかってるわね？」

「は……はい」

椀は白狼天狗の中でもかなり美人として有名だ。そして幻想郷では全体的に女性の比率が高いがこの天狗という種族は男が多い事もあり、一部でファンクラブの様なものが作られているという噂も聞いている。

「まあ、良いわ。所で最近の文さんの新聞は見た？」

「勿論。あの外来人の事だよね？」

たった1人である大百足を倒し、鬼をも超える力を持ち。覚妖怪となった外来人。

流石に大百足を倒したと聞いた時には文さんの相変わらずの盛った報告だと思っていたけれど、今朝出された鬼を倒したという記事を見て妖怪の山中が震撼した。

「あれは、嘘じゃないのよね？」

「多分ね、嘘でも鬼が倒されたなんて書いたらそれこそここが滅ぼされちゃう」

鬼は嘘が嫌いだ。そして負けることも嫌いだ。鬼に嘘でもそんな記事を書いたとバレれば文さんはまず生きてはいないだろうし、まずまずそんなリスクを冒してまでそんな嘘を書くような人ではない。

「でも、覚妖怪よ？」

「そうなんだよね。そこが問題、私の知ってる限り、覚妖怪は読心が出る代わりに腕力が弱かったはず」

「となると、どうして勝てたのかしら？」

それが分かればその覚妖怪への対策ができるのだけど。まるでそれを見越したかの様に戦闘の内容を明かさなない。勇儀さんに頼んでいた様で、新聞にはいつさいどの様に戦ったのかが書かれていなかった。

「正直、謎だね。外来人という事は元人間だからそんなに元が強いという事もないだろうし」

「そうよね」

謎が多すぎる。戦闘方法不明、性格不明。わかるのは覚妖怪であり読心持ち性別は男そして元人間ということ。

情報が多く入っている様で重要なところが欠落している。もし、これがその男の計算の内ならかなりの危険人物だろう。

「まあ、攻めてきても全員で掛ければなんとかなるわよね?」

「多分……」

「権さん! 楓さん! 緊急事態です!」

突然の部下の出現に戸惑いつつも、姿勢を起こす。

「何があつたの?」

私が言うよりも先に権が反応する。取り敢えず、この焦りようからしてこちら側にとつて嬉しいことではない。

「謎の生命体が妖怪の山を襲撃しています!」

「謎の生命体?」

また、私より先に権が反応した。謎の生命体とは一体どう言うことなのか?そして、何故私達が気付けなかったのか。

「わかつたわ。行くよ、権!」

「ええ、行きましょう!」

「案内します、ついて来てください!」

「よろしく」

私は短くそう言つて部下の後を権と共に追う。

にしても謎の生命体とは一体なんなのか?

「あれです!」

そこにいたのは、確かに謎の生命体と言われても仕方のないものだった。

2つの頭部に、長い尻尾。肉体は溶けかかり、顔の肉は既になくなり眼球のあったと思われる場所には何もなく暗い穴になっている。角の場所や、顔の骨格からして、獅子と山羊の顔と推測ができる。そして恐らく尻尾は蛇。

「キメラ?!」

全てを把握した時、楓は声をあげた。

ギリシア神話に登場する、テュポーンとエキドナの娘とされ

る、山羊と獅子の頭を持ち、胴体は山羊、毒蛇の尻尾を持つ魔獣。

「キメラ？何よそれ」

「知らなくても良いよ。取り敢えず倒しちゃおう」

取り敢えず、弱っているであろうことは間違いない。ここま  
で肉体が溶けていれば碌に身体が動かないはずだ。

「行くわよ。楓！」

「言われなくてもー」

そう言っただけで彼女達は白狼刀を鞘から抜き、走り出す。作戦は  
基本的には量で押す波状攻撃。変更の場合は攻撃前や途中で彼女達  
により指示が送られる。

白狼天狗という妖怪は名前の通り、狼の様な俊敏さと嗅覚、  
聴覚、縄張り意識、チームワークを誇る一族である。

見る間もなく、弱り果てたキメラは彼女達により絶命させら  
れた。

「権さん今日も可愛かったな」

「俺は楓さん派だ」

先頭が終われば集まった白狼天狗達の間でいつもの様な会  
話が交わされる。

私達は聴覚も良いのである程度の囁き声でも聞こえてしま  
う。最初は恥ずかしかつたけれどももう慣れた。今ではそれを無視で  
きる様になって来た。

恐らく男のあいつの話も一種の平和ではあるんだろう。

「じゃあ、権。帰ろっか！」

「そうね」

そう言っただけで彼女らは樹々の間を歩いて行く。元は道が無  
かったけれど長年通って行くうちに獣道の様なものが出来上がった。

「にしてもあれ、どう思う？」

「キメラのこと？」

「そうよ」

権が軽く返事をする。

キメラ、伝説上の生き物。それが突然現れた。ただ、こんな

事はそこまで驚くことではない。この山の上にある守矢神社の巫女もここでは常識には囚われてはいけなと言っていた。

問題は、あのキメラが何故、あんな状態になっていたのかという所。元々あの風貌とは考えにくい。あれは熱による体の溶け方ではない。あれは溶解液による溶け方だった。

あれ程の巨体を溶かすだけの溶解液を出す事が可能な妖怪が居るとい事だろうか？

それに、キメラは神話上の存在。弱いわけがない。伝説上では、火を吐き、尾の蛇は毒を持つと記載されていた。

もしも、キメラが万全の状態であればこちらもただではすまなかった筈。

「ちよつと？考え事？」

「えっ、うん。ごめんごめん」

私は考え事をする则自分の世界に入ってしまう。悪い癖だと思っけど、なかなか治らない。

「で、どう思っの？」

「何か、キメラを溶かしたんだと思っけどそれが何かがね」

「そうよね。私もそこを考えてるのよ」

そんな時、上空から黒い影が2人の近くに舞い降りた。

「あややや、なかなかよろしい様で」

「文さん、どうかなさいましたか？」

私は跪き、頭を下げる。

「何の用ですか？」

一方の権は一切頭を下げない。まあ、立場の差ということ。権は文さんとも仲がいいし本人が固い事はやめてと言ったらしい。

「今回のあのキメラの件についてですよ。上の方々は、今回の件を重く受け止め。現在、太陽の花畑に居る秦 空に協力を求める事にしました。そこで楓さん貴方に彼の技術を学んで来てほしい」

「私ですか？」

「ええ、ある程度の戦力があり。上からの信頼もあるという事で貴方に決定しました」

拒否権は無い。行けということか、全く扱いが酷い。いつも上はそうだ、下を駒の様に使い何もしない。

「わかりました、行って来ます」

そう行って私は体を浮かせる。ああ、学ぶという事はそう早くに帰ってくる事は出来ない。権とも少しお別れ。

「頑張ってるね」

そう言って権は私の事を心配そうに見る。別に戦いに行くわけでも無いのだからそこまで心配しなくても良いのに。

「すぐ帰って来るよ」

そう行って彼女は妖怪の山から外来人のいる太陽の花畑へ飛び立つ。

にしても、一体外来人の覚妖怪は一体どんな奴なんだろうか？もしかすると鬼のように筋骨隆々なのかもしれない。

どちらにしてもあって見なければわからない。危険性があれば皆に伝え、無ければそれも伝えなくてはいけない。

「あー、考えてても。仕方ないな」

風が向い風という事もあって余りスピードが出ない。時間的には十分程度で着くかな。それまでは、取り敢えず交渉の計画でも立てておこう。

## 29話

### 罪人に教えを請うとは如何なものか

気付けば太陽の畑まで数100メートルになっていた。風は向かい風だったけれど思ったよりは早く着けた。

ただ、問題はここから。この眼下に広がる広大な畑からこの管理人である風見 幽香か目的の秦 空を探さなければいけない。ただ、私は双方にも会ったことが無いので顔で判断することは出来ない。ただ、ここにわざわざ訪れる妖怪なんて居ないだろうか。人影が見えれば何方かで確定だと思っても良い筈。

そんな事を考えていた彼女地上から突然レーザーが放たれる。

「冗談でしょ…？」

地上には向日葵しか無い。ただ、その向日葵は意思を持つかのように茎を伸ばし、侵入者と判断した彼女に向けてレーザーを放っている。

最初は数本のレーザーだったため気にもしていなかった彼女だったが、段々と現状の厳しさを認識しだす。

眼下には大量の花、その中で向日葵のみではあるがそれが彼女を見つける度にレーザーを撃ち込んでくる。また、距離を取ればターゲットが外れるならば良いが、一度認識されると恐らくこの畑を出るまで狙い続ける様に式が組まれている。

数本なら簡単に避けられてもそれが何本も集まれば絶対不可避のものへと変化していく。

「こんな所で落ちるわけには…！ いかない！」

現状を悟り、飛び続ければ蜘蛛の巣にかかる様になることを認識した彼女は、レーザーに被弾するのは覚悟の上で真下に急速降下、眼下の畑へと飛び込んでいく。

彼女はレーザーに狙われている間に1つの仮定を立てていた。ここの妖怪はこよなく花を愛していると聞いたことがある。なら、あえて自分の花畑にレーザーを撃ち汚す様なことはしない筈。

それならば、一層の事わざと花畑に突っ込みレーザーの照射

できない位置に行ければいい。ただ、それは自らレーザーの放たれる場所へ行くということも示していた。

「参る……！」

彼女は大きく一度息を吸いレーザーの放たれる地上へと一気に降下する。ただ、向日葵もそう簡単に行かせるわけもなくレーザーで彼女を執拗に狙い続ける。

大量の向日葵から放たれるレーザーが彼女を行かせまいと前方から襲いかかる。

ただ、彼女は狼の身体能力を駆使しその全てをギリギリで躲けていく。

そして、地上まであと少しという所で正面の向日葵からレーザーが放たれた。

彼女はそれを背中に背負った盾で受け流し、花畑に降り立った。

「あら、犬臭いと思ったら。一体ここに何の用かしら？」

花畑に降りた彼女の前に日傘を持った赤いドレスが特徴的な女性が歩み寄る。

「貴方は、風見 幽香ですね。私は上の命令でここに居る秦 空に会いに来ました」

「そう……残念だけど。彼はあなたの求めているものは教えてくれないと思うわよ」

それはそうだ。そんなに簡単に自分の戦い方を教えてくれるとは思っていない。でも、天狗社会は上の命令は絶対。

「何となくわかってます。ただ、上の命令なので、逆らえないんですよ」

「あら、それは失礼。取り敢えず彼はじきに帰ってくるでしょうしそれまでゆっくりしていると良いわ」

向日葵は私に攻撃してくる気配はもうない。彼女の命令なのか畑に入ったからなのかはわからないけれど。まあ、秦 空が来るまではゆっくりと花でも見てようか。

「花は好きかしら？」

そんな彼女に突然幽香が話しかける。

「ええ、そうですね。嫌いではないですよ」

「随分と……曖昧な回答ね」

「匂いが強いと少し辛いんですよ。全ての花を愛せるわけでは無いですしね」

それは彼女が白狼天狗であるから。それは言わずとも理解できる常識だ。

だからこそ、彼女達は匂いの少ない紅葉樹を愛した。銀杏など例外はあるが。まあ、気にするほどのことでも無い。

一部の家系は紅葉樹の家紋や、子供の名前に付けることもある。事実、彼女地彼女に親友は共に紅葉樹の名が付いている、

「それもそうね。少し、お茶でもいかがかしら？」

「頂きます」

お茶を飲むと告げられた幽香は茶を作るため、自分の家に入って行った。

こうして接してみると意外にも悪い人ではない。話に聞いていたような戦闘狂では無いし、普通に話を通じる。やはり、百聞は一見にしかずという事か。

そうなると、秦 空という人間も実は非常に柔和で、優しいのかもしれない。

「ねえ、あなた誰？」

「…誰ですか？」

突然後ろから声をかけられた。振り向くと、そこには黒いドレスに赤いリボンの映える。まるで人形のように可憐な少女が立っていた。

「私はメデイスン」

「私は楓です」

簡単な自己紹介をする。メデイスン……一度文様の新聞で見た気もするけど。よく覚えてない。

「ここに何しに来たの？」

「秦 空に用があるんですよ」

「そう…… 私はアレ嫌いよ」

そう言つて少女はまた花畑の中に入って行つてしまつた。

「今日まだ見てないと思つたら、彼から隠れてた訳ね」

いつの間にもやら家から出て来ていた幽香が湯気を立ち昇らせるティーカップを持ち歩いて来ていた。

「お知り合いですか？」

「ええ、一応一緒に暮らしてるのよ」

そう言つて差し出されたティーカップを受け取り、匂いを嗅ぐ。

「ハーブティーですか」

「お口に合わないかしら？」

「いいえ、お茶は好きですから」

そう言つて彼女はティーカップに入ったハーブティーを啜る。

「美味しいですね。種類は何を使つてるんですか？」

「自家製にジンジャーよ」

「自家製ですか…… 良いですね」

一時期、家庭菜園をしていたこともあるけれど。結局仕事が忙しくて辞めた。これを機に再開するのも良いかもしれない。

「どうやら帰つて来た様よ」

そう言つて幽香は森の上空を見据える。

「それは良かったです。あの人ですか？」

確かに幽香さんの見据えた先には人影が見える。それは森の上からこちらへゆつくりと飛んで来ていた。ただ、まだ距離が遠く情報はあまり手に入れない。

「私が話を通すから後から来て」

そう言い残し、幽香はコップを薦を伸ばした向日葵に渡し、空の元へと飛んでいく。

人影で見る限りはただの少年に見える。年齢も外来人ということも考慮すれば体相応だろう。それで鬼を倒したとなると、やはり非常に強力な能力持ちと考えるのが妥当。

だけれど、幻想郷の常識では能力は1つというのが一般的な筈。彼は覚妖怪という時点で既に相手の心を読む程度の能力を所持している、という事は能力の2つ持ちは考え難い。

という事は読心をフルに使い鬼の攻撃を回避……いや、それも考え難い。読めたところで鬼のあのスピードは心を読んだ刹那に飛んで来るはず。読心してから躲すのでは遅い。なら一体どうやって勝ったのか。やはり能力の2つ持ちという線が有力だけれど。取り敢えず会ってみれば分かるだろう。取り敢えず、幽香さんの後を追おう。

気づかぬ間に幽香は既に空に接触していた。先ほどの幽香の指示通り、彼女は空の元へと飛んでいく。それほどの距離もなく、彼女はすぐにかれの元に着くことができた。

「貴方が秦 空ですな」

見た目は本当にただの少年。特になんの変哲も無い。

「そうだが、何の用でここまで来た？」

言葉使いが妙に威圧的だけれど。本当にそれだけ、特に強者の威圧といった物も何も感じない。

「貴方にお願ひがありました」

さて、本題に移行しよう。どうまとめるべきか、いかにしてこの覚妖怪を納得させるか。やはりここは一度シンプルに行ってみよう。

「是非、私に戦闘を教えてくださいませんか？」

非常にシンプル、恐らくこれ以上は無いほどにシンプル。

「ほお……では俺の質問に答えてくれ、それだけで良い」

質問……？ 一体何を、今のうちに想定をして回答を考えておかないと。

「俺から戦闘を学ぶのはわかった。だが、それを何に使う？」

一見非常に簡単に見えるこの質問だけれど。少しでも回答を間違えれば教えないという一点張りに成りかねない。これは彼の使い方が分かっていたいれば非常に簡単だが。それを知らない者からすれば難しい。

「それは……」

「私は、仲間を守りたい。同族の皆を！」

「そうか。なら……教えることは出来ないな」

間違えた……？

「な……何故です?!」

当然の驚き。非常に一般的な模範解答であって、常識的な解答だった筈。それに私の知る外の世界でも力は人を守るためにある。がポリシー。

「何故か？簡単な事だ、用途が違う。お前は体を温めるのに氷を使うか？体を冷ますのに熱湯を使うのか？」

用途が違う……？じゃあ、この少年の力の用途は一体？

「しかし、力とは弱者を守る為の物だと！」

これが私の常識。そして、社会一般の常識でもある。ただ、常識なんてものは……

「それが、お前の常識か？」

「ええ、強者は弱者を守らなくてはいけない。それが私の常識であって、生きる意味です！」

「いい事を教えてやろう。常識なんて言うものは若い時に身につけた偏見のコレクションだ」

その時、彼女の耳にのみ。白狼天狗特有の咆哮が聞こえた。意味は、緊急事態至急帰れ。この咆哮が使用されたのは私の知る中で2度目。確か、最初に使用されたのはかつて鬼の四天王の一角であつた今は亡き方が狂ってしまった時。

「何が言いたいんですか？」

何かを言っていたみたいだけれど、正直聞いてなかった。取り敢えず、今は早く戻りたい。ただ、鬼の四天王の暴走レベルともなると私1人が帰った所で状況は変わらない。その状況を打破するには協力的な助っ人が必要になる。恐らく、博麗の巫女、森の魔法使いには誰かが伝えるだろう。

「お前は守る為に力を使うのが常識だと言ったな。なら、お前は力を何に行使する気だ？」

「それは我々を攻撃する者達に……」

なら、私は何とかしてこの2人を妖怪の山に連れて行こう。ただ、この状況から来てくださいと言った所で説得をしやすくするために連れて行くのだろうと思われるのは間違いない。それには関係ないわねなどと言つて風見 幽香を連れて行くことが恐らく出来ない。

「そうか、じゃあその対象は何故お前らを攻撃する？お前の常識だと力を相手を傷つける為に使うのはダメなんだろう？」

今は何とかしてこの2人ともをどんな手を使つても連れて行きたい。たった1つだけ、頭に策が浮かんだ。それはわざとこの花畑でこの少年と戦闘に持ち込もうとする事。

「そ……それは」

「常識が違うんだよ。相手からすればお前らは憎むべき相手、滅ぼすべき対象。相手はそれを実行に移す。それこそが相手にとっての常識。もう一度言おう、やはり用途が違う。だから教えられない」

結論は出た。ただ、少し彼について疑問が残る。彼は用途が違うと言った。ならば、彼の力の用途は何か？

「それなら貴方のその力の用途は何なんですか?! 一体、大百足を1人で殺す程の力の使い道は何ですか?!」

彼の力は「守るため」にあるのでは無い。ならば答えは必然的に決まる。

それは守るといふ行為の対局であるということを示していた。

「俺のこれは、守る為にあるんじゃない。その逆だ、もう分かってるんだろ？俺はこれでも覚妖怪だ。お前の中ではもう気付きかけてるだろ？」

ただ、それは今は重要では無い。

「なら、見せて下さい」

彼女は白狼剣を抜き、構える。

「はっ」

強引にでも戦闘に持ち込む。それしか、この2人を妖怪の山

に連れて行く策は思いつかない。

「ほら、早く剣を抜きなさい！」

そう言つて彼女は彼に向かって行く、片手に構えた白狼剣を握りしめできる限りの速度で。

ただ、その剣が彼に届く事はなく。背後に現れた風見 幽香の強烈な一撃を受け、一瞬意識を失い地上へと落下していた。

「こんな所で、落ちるわけには…！」

彼女には強固な意志があつた。私の同族を傷つけさせる事はしないという。彼女は常識と言つていたが、それは常識ではなく意志であつた。

彼女は意識を取り戻し、片手に握つていた白狼剣を風見 幽香に投擲する。落下しながらの投擲ではあつたが、彼女の理解している覚妖怪などでは止めることなど到底出来ない速度。投擲された白狼剣に秦 空の視線を移し、瞬時に空中で体制を立て直し、妖怪の山へと全力で飛行する。その直後、背後から何かが空を切ってくる音がした。本能的に振り向くと既に白狼剣が目前まで迫つていた。彼女はそれを回転しながら取ることで勢いを殺し何とか受け止める。

「投げ返された…？」

私の知つている覚妖怪では無理なはず。けれど、死角から投げたのだから風見 幽香が受け止めたというのは考えにくい。

という事は非常に考えにくいものではあるけれど、彼が受け止め、投げ返して来たという事だろう。どうやら噂は本当だった様だ。彼は覚妖怪のレベルを遥かに凌駕している。これなら、妖怪の山で起きている何かを解決してくれるかもしれない。

彼女はそんな期待をしながら妖怪の山へと急いだ。

### 30話

#### 罪人は救済を始める

空と幽香は黒煙を立ち昇らせる妖怪の山へと順調に近付いていた。

「1つ提案がある」

この距離から見ただけでも黒煙は数10カ所から立ち昇っており、幽香と共に行動し確認するのでは時間がかかりすぎる。それに効率が悪いのは間違い無い。

「何かしら？」

「少し手分けをしないか？」

紫の話の他の妖怪からの恐れられ方からして幽香がかなり強力な妖怪であることは分かる。別に個別に行動しても問題はないだろう。

「私は貴方の戦いを観たいのだけど？」

「俺は見せたくないんでな」

観られたところでどうでもいいが、ここで認めると恐らく一緒に行動することになる。それでは効率が悪い。

「あら、残念。じゃあ、死ななければ花畑でまた会いましょうね」

そう言つて幽香は黒煙の一つへと向かつて行った。

「そうだな」

落ち合う場所は自分の家にすると言うのはまあ、妥当だろう。生きて帰つたらそこに向かうことにするか。

そして、彼もまた黒煙の1つへと向かつて行き、黒煙の出ている手前の森に降りゆっくりと黒煙の発生源へと歩いて行く。

流星に、これ以上は煙を吸うのは良く無いな。第1何が燃えているのか分からない、それに有毒ガスが発生するものだった場合は後々困る事になる。戦う前にガスで死ぬなんて事は正直何の進展にも繋がらないため、出来るだけ避けた方が良いだろう。

「これで良いか」

足元に落ちていた大きい葉を拾い、能力を行使してガスマスクとゴーグルに変更。黒煙の発生源へと歩みを進める。彼の場

所は黒煙の発生源の下にある為、風が吹いており視界も非常に悪い。

彼が歩いて行くと黒煙の中で倒れている者を見つけた。

「おい、大丈夫か？」

返事が無い。彼は生存の確認の為に脈を取るが既に息を引き取ったようだ。遺体は重度の火傷を負っていて所々の皮膚は爛れ、体は音を出して焼けていた。これはとうにIIIも超えてしまっているだろう。

恐らく、種族は白狼天狗。白い耳や尾が辛うじて確認できた上に、手に幽香に対して投擲された独特な形の剣が握られていた。

「死んでるか」

にしても、この外傷からすれば敵は炎を扱えると考えるのが妥当だろう。という事は能力的に炎が使用できる奴なのか、それとも純粹に火をつけられたのか。

恐らく、この先にこれをした奴がいるというのは間違いないだろう。

彼はまた、黒煙に向かい歩み出す。

周囲の木々がところどころ燃え、炭になっている。どうやら近付いてきたようだ。そんなとき、前方から剣撃の音が響き渡る。

彼は無言でその剣撃の元へと走り、上空からは黒煙の為に見えていなかった少し開けた場所に出る。

そこで戦っていたのは先程幽香に対して武器を投擲した白狼天狗とそれと息のあった攻撃をするもう一匹の白狼天狗。そしてその相手は、紅い鱗を纏った恐らく2, 3メートルの高さはあるドラゴン。

「全く、なんでもありませんがやしないか？」

彼は一度停止し、その竜の動きを観察する。

竜、そう一言で言っても竜には多くの種類がある。二足歩行で翼と手が一体化したものの、四足歩行で翼が別にあるもので飛ぶことにのみその翼を使うもの、四足歩行で翼が別にあるがその翼を腕としても使える実質6本足のもの、そこから更に火、空気、水、土のどれかを操るとというのが一般的な解釈だが、世界中に竜の逸話がある影響

で様々な姿形が生まれている。

今回の竜は行動を見る限り実質6本足のものだと思われる。恐らく先ほどの遺体を作ったのもこの竜だろう。

遺体の状況と周囲の焼け具合からしてどうやら火を吐く型のようなのだ。現在戦闘している白狼天狗2人はその火を警戒してかあまり距離を取らないように立ち回っている。この時点で周囲に突然火柱を立たせるマジシヤンの行動はせず、火炎を口からのみ吐くという事も予想できる。

彼女たちの動きは素晴らしく、隙もない。が、攻撃をしていない辺り、恐らく鱗が強固な影響である刃が通らないのだろう。

さつき投擲された剣を見ても、手入れはされていたし、刃こぼれもしていなかった筈。恐らく鱗を切るのには切れ味が足りないのだろう。

ただ、観察している限り、喉元から胴体にかけては鱗がなく、柔らかさそうではある。事実そこには切り傷と戦っていたのであろう。白狼天狗の刃が確認出来た。

ただ、そこを狙うという事は竜の正面に入るという事を表す。それには火炎を放たれる危険性もあれば噛み砕かれる可能性、前足による攻撃を受けやすくなるというデメリットがある。そのせいかあの2人はあまり腹部への攻撃が出来ていないようだ。ただでさえ既に2人しかいないのにそれ以上数を削るのは良くないと言う判断だろう。

「行くか」

誰に言うでも無く呟き地面の土を掴み左にデザートイーグル、右に短剣を生成する。

相手が相手という事もあり装備は本気だ。地面を掴んだままクラウチングスタートの姿勢になりそのまま全力で地を蹴る。

距離はそこまでなかった為数秒もかからず竜の視界内に入る、突然現れた新しい敵に竜は咆哮しその小さな少年を怯ませようとすると共に足元にいる2人の小賢しい敵を怯ませ距離を取らせる。しかし、小さな少年が止まらない。竜は続いて正面から来るその少年

に火炎球を吐き出し、その少年の走って来ている方向を焼き尽くし、元の2人の敵へと向き直った。そのとき、一瞬にして轟音と共に射出された何かによって眼球を1つ貫かれた。理解が出来ない。ただ、突然何かに眼球が貫かれた。それしか分からない。

「分からないか。残念だ」

残った1つの眼球で土煙と白煙の上がっている先ほど火炎球を放った場所を見る。そこには無表情で長く黒い筒状のものに付属して引き手などが付いた見たことのない武器を抱えた少年が立っていた。

「結局はトカゲか」

彼はそう呟き手に持ったDSR―1というドイツ製の狙撃銃を短剣とデザートイーグルに戻す。

彼は竜の口から火が溢れた瞬間に地面に伏せ、両手の武器をすぐさまDSR―1に変更しつつ、周囲の窒素を全て水に変更、火炎球を打ち消せるようにし竜の眼球に当たるように弾道を合わせトリガーを引いていた。

「一体何が…？」

今の状況が理解できない2人の白狼天狗。しかし、それも無理もない話だ。まだ幻想郷には銃が入って来ていない。

「知らなくて良い事だ」

まあ、片目は潰したがもう一方の目は残っている。未だに油断は出来ないだろう。それに竜なんてものはこれまで戦ったことがない。どんな攻撃をして来るのか、大体は姿から想像できるが、それでも分かっていることが多い。

あの火炎球は一発ごとにクールタイムがあるのかそれとも連発可能なのか？まずまず無限に打てるのか否かも分からない。科学的に考えれば無理なんだろうがあの百足のようなパターンもありうる。

「秦 空ですね、来て頂きありがとうございます」

どうやら森を迂回したようで俺の後ろから投擲をした方の白狼天狗が現れた。白狼と言うだけあって速い。

「あれだけ焦っていれば何か起きてくるということは安易に想像できる。まあ、竜は想定外だったか」

未だに前方にいる竜は俺を見据えたまま動かない。さっきの一撃でかなり警戒された様だ。まあ、片目を潰されれば流石にどの生物でも警戒するだろう。ただ、片目を潰されて尚逃げないという事はまだ勝機があると思っっているという事か、俺の様なガキには負けたく無いというプライドなのか。

「私達としても想定外でした」

「そうか」

ただ、火炎球は水で防げた。狙撃銃ならばある程度のダメージは期待出来る、今の所そんなにもどうしようもない状況では無い。

「こいつはさっきの他に何かしてくるか？」

「火炎球の他には特に無いです」

それでもあれだけの被害を被ったという事はこいつらが弱いだけか、近接がアウトなレベルに近接が強いかのどちらかだろう。確かにあの強固であろう鱗に覆われた太い腕に殴られれば1発で死にかねないだろう。

「分かった」

突然彼を睨んでいるだけだった竜が走り出し突っ込んできた。自らの質量を生かした攻撃、非常に簡単でいくらでも想像できたものだ。ただ、思っていたよりも速い。どうやらこの竜は翼腕が異常に強化されている様だ。

前脚の前に翼腕をついて走っている。それに、走った後の地面が抉られていた。

「完全に近接ダメなやつだな」

背後の白狼天狗はそれなりの速さでその突進の進路から退避した。

それに対し彼は突進を上空に飛んで回避する。その後、眼下で上空に飛んだ彼を見上げる竜にデザートイーグルを発砲。しかし、銃弾は弾かれた。

デザートイーグルはそれなりに威力のある拳銃。それを弾

かれるということは普通に撃つたところで意味がないということ。ただ、狙撃銃ほどの勢いがあれば弾かれても多少の衝撃は入りそうではあるが。流星に立ちながら撃てる代物ではないので地面に寝るか、台に置くかしなければいけない。だが、流星に2度もそんな隙を見せてはくれないだろう。

「どうすべきか」

一方、眼下の竜は上空の彼に向けて火炎球を撃ち出す。突然現れた子供、見たことのない武器を使い理由も分からず片目を潰された。そのことから、竜は本能的に脅威はこの子供であると判断した。

しかし、10数発撃ち全て余裕を持って回避された事で無駄だと判断し中断した。

「全く、無駄撃ちしてくれるな」

彼は地上からの火炎球をかわし、未だ上空にとどまり策を練る。弱点は下腹部ということは分かった。

ただ、彼奴の動きを見る限り下腹部を見せていない。これは自動的に奴の下に潜り込まなければいけないという事を意味している。それは危険すぎる。下腹部には滑り込むことができる程度の隙間しかない。ならば狙うは喉。

だが、さっきの火炎球の撃ち方からして恐らく火炎球連発の際のクールタイム、連発の限度が無いという事が薄々予測出来た。あのレベルのものを即座に連発できる程のエネルギー源があつた竜の体の何処かにあるというわけだ。そしてあのクールタイムの無さからして恐らく火炎球を吐き出すためのエネルギー源があるとすれば喉だろう。そうでなければあのクールタイムの無さが説明出来ない。

という事は、俺が喉を裂いた場合。そのエネルギー源が空気に晒されるわけだ。これはあくまで最悪の場合だが大爆発する可能性がある。斬っているという超至近距離の状態では、いくら能力を使った所で恐らく爆発は躲しきることは難しいだろう。

「捨て身になるな」

ただ、ここで死んでしまえば。贖罪が出来なくなるのでここ

で逝くのは避けたい。ならば喉に攻撃しないように注意しつつ殺すしか無いだろう。

彼は下から自分を見続ける竜の前方に降り立つ。

降りた事で火炎球の射程に入った彼を竜はすかさず火炎球で地面ごと吹き飛ばす。舞い上がる黒煙、燃え上がる地面、それらが彼の生存の可能性を否定していた。

### 31話 植えつけられた常識は消にくく

高さは約2・5メートルといったところか。そこから火炎球が飛んでくる。ただ、高さがそれだけあれば下を潜ることができるはず。火炎球の大きさはそこまで大きくはない。

空はそう確信し火炎球に走り出す。そして火炎球の下に滑り込む。流石に超高温なだけあるようで、少し皮膚が焼けた気がしたが、戦闘に支障が出るほどではない。火炎球を潜り終えると直ぐさま立ち上がり、背後で爆裂した火炎球の爆風を追い風に加速し、そのままの勢いで竜の眼前に飛び込み、右足で地面を蹴ることで身体を捻り、残った左の眼球を左手に持ったデザートイーグルで撃ち抜いた。両目を撃ち抜かれ、光を完全に失った竜は血涙を流しながら咆哮。腕を振るい、見えなくなった敵を殺しにかかる。

恐らく、回避は難しい。ならば同速で後ろに飛ぶ。

一瞬の判断で空は大きく後ろへ飛び、竜による一撃のダメージを極力抑える。ただ、彼の体は吹き飛び、後ろの木に直撃した。

「全く、無駄に暴れるなよ」

にしても、本当に信じられない力だ。かなり力を入れて飛んだにも関わらず十数メートル飛んだ。その上、今の衝撃で右の肩が外れた。まあ、それぐらいで済んで良かっただろう。肩の関節程度、直ぐに直せる。

彼は左の手で右肩を抑え強制的に関節をはめ直し、その場で軽く腕を回す。

骨は折れていないようで良かった。折れていると戦闘している上で色々面倒になる。

「もう楽にしてやるよ」

デザートイーグルは先程飛ばされた際に手から離れてしまったようだ。一応、能力を解除したうえで、右に長剣、左に短剣を地面の土から生成し構え竜へと向かう。

未だに竜は暴れており、腕を振り回し、火炎球を吐いていた。ただ、それは何も見えない暗闇の中で行われている。それは非常に単

純で困ることもなく避けれる。的を絞れていない攻撃ほど適当で単純な物はない。まるで赤子がまだ開かない目で親の乳を探すようで非常に滑稽だ。そんな攻撃を避けながら竜の眼前に立つ。

「さようなら」

その声に気づき、目と鼻の先に居る少年に火炎球を放とうとするが、開いた口に短剣を差し込まれ、激痛で身体を上げた瞬間に腹部をを長剣で深々と裂かれ、血と臓物を腹から零しながら絶命した。その正面で地を浴び真っ赤に染まった空は体の血や汚れを窒素に変更した。

「逝ったか」

全く、やはり初めて戦う生物というのは殺りにくい。弱点も何も分からないというのが難点だ。

にしても、キメラといい今回の竜といい伝説上の物と戦う事になるとは。人生は全く予想のできないものだな。

取り敢えず、逝った様だし体でもバラして弱点を探るか。

彼は右に持っていた長剣を短剣に変更し竜の身体を解体していく。

「な……何をしてるんですか？」

後ろから幽香に投擲をした白狼天狗の声がした。

「見て分からないか？解体してるんだ」

「何故です？」

どうやら、怯えられているようだ。何故だ？弱点を探るといふのは大切な事だろう。それにこの白狼天狗も初めての事態と言っていたし、弱点も知らないんだらうから必要な事だとは思うが。

「何故って、こいつの弱点を探るためだ。流星に腹だけなんて事は無いだらうしな」

「ですが……」

ああ、成る程。私達にやらせろという事か。確かに被害を被ったのはこの天狗なのだから俺がやるというのは少々傲慢とも思われるな。

「そうか、悪かったな。じゃあ、俺には弱点だけ教えてくれれば良いか

「らやると良い」

そう言い、空は後ろに立つ白狼天狗2人に地面に倒れ、臓器と血を地面に散らし眼を向けるのも憚られる様な状態となった竜から離れた。目は見開かれ、色を無くし、鮮やかだった鱗も輝きを失い、地面に臓物と血が広がり池を作っている。

「……………」

そうだ、サードアイを使えば良いだけの話だったな。

彼がサードアイを使い読心をした結果見えたのは怯えと、畏れ、それとある1つの疑いだった。

【何故こいつも残酷な事を何の躊躇もなくできるのか】

残酷？

残酷なのはこの竜の方では無いだろうか？

仲間が焼かれたのでは無いのか？

こんな事が2度と起こらないように対策を探し、講じる事が最も優先されるべきだろう……………」

「ああ、そうか。単純なことじゃないか【常識】が違うだけだ」

そつと彼の口から溢れて結論は誰の耳に届くこともなく。

消えていった。

「じゃあこの死体の処理は任せる。取り敢えず俺は帰らないといけな  
いんでな」

俺は死ななかつた。と言う事は、幽香の待っている花畑に帰らなくてはいけない。

「常識…：か」

彼は空へと浮かび、花畑へと向かっていく。

彼女たちにもあったように俺にも常識がある。ただ、それは血塗られた過去の物であつて。他人と同じであるわけがない。そんなものは誰も理解できないだろう。それに、してもらふ必要も無い。された所で、きつとどうとも思えない。

「貴様が、秦 空だな?」

突然背後から声を掛けられた。声的にはあの白狼天狗たちでは無い。

「何の用だ？」

空は後ろを振り返り、声をかけてきた者を確認する。

黒い羽、見た目はいつかの新聞記者に似ている。

「お前を拘束しに来た」

「ほお……… 何故だ？」

「お前が、今回の事件の首謀者である可能性が高いからだ」

何故だ？俺はただ、助けてやっただけなのに。

「反抗しようなどと思わない事だ、反抗すればあの忌まわしい覚妖怪を処刑する」

どうやら、さとりを拘束している訳ではなく。いつでも殺せるという意思表示のようだ。とりあえず、ここは従うべきか。

「お前が拘束しようとしている俺も忌まわしい覚だが？」

「外来人で元人間の覚妖怪だろう？もちろん知らされている」

情報源は紫か、一応幻想郷の権力者には俺の事を説明したんだろう。

「見た目は鳥でも結局犬という事か」

彼は皮肉った笑みを浮かべながらそう言い放つ。知ったのではなく知らされたのならこいつは1番上の者ではなくその指示に従うことしか出来ない犬だ。

「私は鴉天狗だ、覚えておけ」

鴉天狗はそうとだけ言って俺の手を麻縄で強引に縛り、数名の仲間を呼んだ後山の頂上へと向かった。

「どこに連れて行くんだ？」

「我々の頭領の元だ、そこでお前を審判してもらう」

「審判ねえ、閻魔か何かなのか？」

閻魔であればさっさと裁かれて罪を償いたいのだが。まあ、閻魔ではないだろう。

「閻魔では無い」

「それは残念だ」

手には麻縄、周囲には4人の鴉天狗。能力を使うまでもなく、こんな包囲も縄も抜けれるがここでそれをするときとりに危害が

及ぶ可能性がある。

一応はあそこを護ると決めたのだからわざわざ自分から危害が及ぶような事はしたく無い。

少し飛んでから鴉天狗が口を開けた。

「あれだ」

「ほお」

先程までは何も見えなかったが、山の頂上の雲の上に巨大な赤い扉が現れた。特殊迷彩が施されていたのだろう。

「随分と大きいな。巨人でも居るのか？」

「居ないな」

ここの建物はどれも無駄に大きい。フルメタルアルケミスト的な力を持つている奴が居るのか？

巨大な扉がこちら側を開き、鴉天狗に連れられ中へと入っていく。そこには青々と茂った芝と巨大な寝殿造りの屋敷があった。

「拘束を解く、無駄な抵抗はするな」

「結構だ」

そう言つて彼は手首をひねり、麻縄から抜ける。

「貴様…！」

「最初からこんなもの外せた」

空の手が空いた事に警戒してか周囲の4人の鴉天狗が扇を構えた。成る程、この扇が武器になる訳か。見た所、刃物では無い様だが。

「素晴らしいー！」

突然目の前に白髭を胸まで生やした、緑の着物の老いた白髪の日天狗が現れた。暴力的なまでの威圧感、少し見える手や、顔にある傷からからして歴戦の強者である事が容易に想像できる。そして恐らくこの日天狗がこいつらの頭領だろう。

「何故呼んだ？」

「貴様っ！我等が大天狗様に向かってなんて口を…！」

自分らの長であるものに威圧的な態度をとった彼が許せないのか彼を連行して来た日天狗が声を上げる。

「構わん、何故呼んだか？だったか」

「ああ、そうだ」

「少々貴様と話してみたかったのだよ。それだけだ」

全く、我儘な気もするが。おそらく本当の狙いは俺の危険性の確認だろう。

「そうか、それなら態々拘束しないで欲しかったな」

「それはすまないと思っている。ただ、そうでもしないと下が従わんのだよ。わかってくれ」

「最初からそこまで気にはして無い」

「では、ゆっくりと話をしようじゃ無いか」

そうして彼は大天狗と呼ばれる老天狗に着いて行く。ただ、周囲の天狗は全く警戒を解く気配はなく純粹に敵意を抱いていた。それは屋敷に入ってから変わらず、すれ違う度に睨まれ、心で悪態を吐かれた。

にしてもさつきから。この老天狗の読心が上手く出来ない。感情は読めるが何を考えているのか全く分からない。何かしらの攻撃をされた覚えも無い。いや、純粹に読心に対する対抗策を知っていると取るのが妥当だろうか。

「そんなに警戒せんでもいいだろう？」

「周囲からこんなにも殺意向けられてまったり出来るほど肝が座つてないんでな」

相変わらず、すれ違う度に睨む、心中で読まれるとわかっていて悪態を吐く天狗達に空は警戒していた。今、目の前に居るこの老天狗も読心が上手くいかないため、信用することは出来ない。それでも、この老天狗は彼を屋敷の奥へ奥へと連れ込んで行く。

「随分と遠いんだな」

「そういう作りなのだよ。少々周囲が煩いかもしれんが我慢してくれ」

どうやら、この老天狗は俺がよく言われていないことに気づいていた様だ。

「まあ、無理もないだろう。何せ、忌み嫌われている覚妖怪を自分らの

家に招いてる様なものだからな。嫌っている奴が家に来て嬉しいやつはいないだろう?」

「それもそうだな。ただ、覚の読心は心に読まれたくない物があるから怖いのであってそれが無ければ怖くないのだよ」

そう、空も気付いてはいた。何故、人や妖怪が覚のことを嫌うか。それは純粹に気味が悪いという綺麗な理由ではなく。

ただ、自分の心の闇を見られたくないからという事だ。嫉妬、怠惰、暴虐、高慢、自分の醜いところ、他人から隠しているところを見られるのが嫌なだけだ。

「それはそうだろう、だがお前の感情も見えないんだが?」

「これでもかなり生きてるのでな。隠し方を覚えているのだよ。到着だ、入ってくれ」

そう言つて、老天狗は鳥獣戯画であろう物が描かれた扉を開け、中へ入って行った。

その後を空が少し遅れて入って行く。そこにあつたのはかなりの広さがある広間、床には畳が敷かれている。そこに何故か炬燵が置かれ、その上にみかんが置かれていた。

扉から入ったところで、左右に女の鴉天狗が2人おり。その扉を閉めた。それ以外には天狗らしき姿は見えない。

「座ってくれ」  
「ああ」

空は老天狗の前に座りみかんに目を向ける。毒は入っているだろうか?少量なら特に意味はないが多いと効果が出る可能性もある。

「何故、みかんなんだ?」

「炬燵と言ったらみかんじゃないの?」

「それはそうだが……」

空はみかんから目を離し、正面にいる少女を見た。

「……は?」

白髪という事は変わっていないが、正面いるのは老天狗では無く幼い少女、たださとりよりは年が高く見える。

いまのところは。

「どーも、こんにちは。私は大天狗、ちよつとお話ししようか」

「ああ、何を話す?」

訂正だ、こいつはさとりよりは精神年齢的に幼さそうだ。

「そんなに驚かないのね。なんで、地上に出て来た?」

本当になんなんだこいつは、さつきから威圧感を出したり消したりと。

空はその目の前の少女雰囲気の変わりようを見ながらみかんに手を伸ばし、手の上で弄びながら返答した。

「理由があるのか?」

「いるわよ。地底と地上とで結ばれた契約があるからね」

そう言つて目の前の少女はみかんの皮を剥き、みかんの一切れを口に放り込む。

「どんな契約か聞いても良いか?」

「まあ、今回は知らなかったのでしょうしこれからの為に教えてあげるわ」

ここで少女はまた1切れのみかんを口に放り込み。ゆつくりと咀嚼してからまた、口を開く。

「昔はね、この妖怪の山は4人の鬼が統治していたのよ」

### 32話 全ては理解のできた事

「ここはね、昔4人の鬼に統治されていたのよ」

少年は手で弄んでいたみかんを掌に乗せ正面の少女を上目遣いに見上げる。

「ああ、どうでもいいな。さっさと契約の事を教えてくれ。全く、何故歴史を語ろうとする。俺が聞いたのは歴史ではなく契約の内容だ。あちらの世界でも多いが正直時間の無駄だ」

それに対し、少女。大天狗と呼ばれる少女は上から見下ろすように少年を見ながら言い放った。

「ここを知らないと誤解を招くのよ」

「そうか、悪かったな。なら続けてくれ」

炬燵の上に身を任せ、目だけでこちらを見ている少年に少し呆れながら少女は話を続行した。

「4人の鬼は非常に良い人達だった。けどある日4人のうちの1人が狂ってしまったのよ」

炬燵から上目使いに見ていた少年が体を起こした。

「狂った?」

「そうよ、狂ってしまったの。突然鬼の力を使ってこの山を破壊し始めたの」

「何故だ?」

体を起こし、頬杖をついている少年がやはり上目使いに少女に聞いた。

「何故って、狂ったからよ」

少女のその当然のように思える回答に少年は無表情で応答する。

「そう言う意味ではなくだな。なんで狂ったかと聞いてるんだ」

全ての事柄には起きる理由がある。それは彼にとって当然の事だ。どの程度狂ったかはわからないが。何も無意味に狂う事はないだろう。

「さあね。わからないわ。私も子供だったからすぐに逃がされたの

よ」

言わせて貰えば正面のこの少女。今いくつかわからない。見た目は幼いとまではいかないものの妖怪なのだから俺の想像は到底あてにならない。そんな状況で子供の頃と言われても分かるわけがない。

「一体どれくらい前だ？元人間なもんでな。正直感覚がわからないんだ」

「そうね、確か2、300年前だったかしら」

「とんでもないな、妖怪は」

少年は口角を上げ少し笑った。

そんな少年に大天狗は現実を告げて笑う。

「そういう貴方ももう妖怪だけどね」

少年はその言葉を軽く受け流し、自らの顔に被せた笑顔を剥がして大天狗に問いかける。

「ところでだ、お前の姿はあの老人の姿なのか？それとも今の少女の姿が本来の姿なんだ？」

僅かな静寂、その間大天狗は品定めでもするように正面に座る少年を眺める。

「そうね、世間的に言えばあの姿が正しいわ。でも、私自体はこの姿よ。妖怪はただの人間の抱いた畏れの塊のようなもの。姿なんて簡単に変わるわ」

「それは俺でも可能なのか？」

「無理でしょうね。私は人間から恐れられてこういうものだと思うれていたのがあの厳つい老人だった訳よ。姿を自在に変えるには狸や狐のように変身用の妖術に長けていないと無理ね」

妖術……知ってはいたが信じてなどいなかっただけの言葉が出てきた。確かゲームなどでは妖力を消費して使う所謂魔法のようなものだったか。そうだったゲームに基づく考えは今の所外れていないのでそう考えてもいいだろう。

「妖術か。俺には使えると思うか？」

大天狗はそうねと言った後に暫く少年を眺めてから口を開

く。

「きつとできると思うわ。まあ、貴方も今は妖怪だしね。妖力も少しは感じるし」

少年はその答えを聞き、みかんの皮をむきながら、そうかとだけ答えみかんを口に放り込んだ。

「にしても随分と覚らしくないわね。覚なら態々話すまでもなく会話できると思ったのだけど」

大天狗はまるで馬鹿にするかのように正面の少年を笑いながら言い放つ。

「まずまず、さつき隠す術があると行ってなかったか？」

少年も馬鹿にするように笑みを浮かべながら言い放った。

対する大天狗は特にどうも思っていないようで少年から目をそらすと話を続けた。

「そう言えばそうだったわね。話を戻すわ、その鬼が暴れた所為で妖怪の山は壊滅状態、結果的にかなりの数の天狗と妖怪が死んだわ」

鬼は勇儀としか戦ったことは無いが、あれは戦いを楽しむ為の勝負であつて本気ではなかった事はわかつている。なら、狂った状態……力に制御がかかつていない状況ならば。

あの時よりも強大な力がぶつかつてくるわけか。

「その責任を取つて残つた3人の鬼は妖怪の山の四天王を辞めそれぞれの道を歩んだの」

いや、違うだろう。おそらくその事件があつた後周囲が鬼の存在を危険視し良いように言えば圧力を掛けたのだろう。

何故それを自分達は悪く無いとでも言いたげに言うんだ？

結局のところその鬼を止める力のない所為だ。

それに鬼が何故狂つたのか話を変えてくる辺りそれも此奴らが原因だろう。

「そうか、で。それがどうして地底に閉じ込める理由になるんだ？」

少年は本題に踏み込んだ。鬼が狂つた理由などどうでも良い。故に話を逸らされても何も言わないが地底に閉じ込める訳は聞かなければならない。

大天狗は少しの間目を瞑りこれは話さざるおえないと思つたのか口を開いた。

それと同時に少年はサードアイに神経を集中させる。

「勇儀は知っているわね。彼女がその時嫌われていた妖怪達を自ら引き連れたのよ。その際地上に出さないと契約したの」

「自らか?」

少年は左目を瞑り自らの左胸元にあるサードアイを右手に乗せる。

それは無意識な行為であつて、相手に読心をしたと言う現実を伝えるものだった。

「騙したのかしら?」

大天狗の言葉は怒気を帯び、彼女の周りに突如現れた風が唸る。

「一体どうしたんだ?俺はお前を読心できないと言つた筈だが、その反応はさっきの発言が嘘だったと言う事で良いよな?」

嘘をつくのは罪だ。なら、相手に現実を誤認させれば良い。それならば罪ではない。

「貴様... 騙したな?」

発せられたのは暴力的なまでの怒気、それと共に大天狗の周りの風も呼応するかの様に唸りを上げる。

それに対し少年は無表情で大天狗を見ていた。

「騙した...? 違うだろ? お前が勝手に読心されたと勘違いしただけだ。自分の失態を他人の所為にするなよ」

これだけの状況、一歩間違えれば死ぬ状況においても表情一つ変えないこの少年に大天狗は恐怖を覚えていた。

言うなれば、まるで少年の皮を被つた化け物と話しているような感じだ。八雲紫から少々異常な奴とは聞いていたが少々どころでは無い。そういつた奴は早々と処理をした方が良い。

「殺せ、此奴は危険だ」

こう言い放つた瞬間、扉から彼を捕らえるために数十人の天狗が流れ込み、目の前の少年を抑え込む。

「最初からこのつもりだったのか」

四肢を抑えられ、身体には妖怪としての力を封じる護符が貼られている。この状況にまでなっても少年からは何の焦りも感じない。

押さえ込まれた少年はその状態で問いかける。

「で、捕まえてどうしようというんだ？」

少年の態度に舐められていると思ったのか彼を抑える天狗の1人が目的を告げた。

「貴様があの竜を連れてきたと認めさせ覚妖怪を抹殺するためだ」

その言葉を聞いた少年は疑問を持った。何故、俺が助けた奴らに捕まり。さとりを殺す口実を吐かされそうになっているのか？俺はただ、助けただけなのに。

「そうか」

やはり俺の常識はズレているらしい。俺の常識がズレているから他人と考えが合わない。これは相手では無く俺が悪い。全く、そんな簡単なことじゃないか。

「連れて行け」

少年の正面でじっと状況を見ていた大天狗は少年が抵抗する気がないのをわかると。早々と天狗たちに命令を下す。

「拷問か？」

少年の口から出たこれから行われるのであろう行為。ただ、その言葉では無くその時の表情に大天狗は戦慄した。

彼はまるで仮面でも付けられた道化師のように笑っていた。焦るわけでも無く、恐怖するわけでも無く、ただ笑っている。

「それはお前の常識だ」

少年の吐いたこの言葉は誰に聞こえることはなかった。ただ少年は天狗たちに目隠しと猿轡をかけられた上で引きずられている。

少年を捕らえた天狗も彼のあの表情に恐怖を覚えたようで一瞬怯え、疑問に思った。だが、それは一瞬にして【覚妖怪】だからという理不尽な理由によって肯定される。

少年は廊下を引き摺られ、その後その館の地下にある牢獄に建てられた十字架に架けられた。

「拷問か、久しぶりに受けるな」

少年は一人残された密室の中で眩く。少年の手足は鉄製と思われる鎖が何重にも縛られており胴体もばつ印を描くように鎖が巻かれていた。

それと時を同じくして異なる2つの場所に場所に一報が行った。

地底にある館では少年は死んだと伝えられ、それを聞いた桃色の髪の少女が笑みを浮かべ、地上のある館では少女の力を借りたいと、1匹の天狗が吸血鬼に話を持ちかけた。

そんな事が起きているとは全く知らず、少年は眠りについた。

### 33話

### それは依存か溺愛か

地上にある非常に大きな館。その外観は血を連想させる様な赤で染め上げられている。その正面には常に霧のかかっているから霧の湖と呼ばれる湖。更にはその先に魔法の森という広大な森が広がっている。何時もならば門番が寝ていたりと外観とはかけ離れたゆつくりとした時間が流れているのだがその日は違った。

門の前に体がすっかり隠れる様な夜に紛れる黒いフードを被った何者かが訪れていた。

「こんな時間に何の用です?」

門番は大きな門にもたれ掛かりながら歓迎とは言えない様な態度で来訪者を迎えている。

「この主人に会いにきました。通していただけますか?」

一方、来訪者の方は全く気にしていない様で非常に大まかな用件だけ伝えた。

「要件はなんですか?」

「ここで言うのは宜しくないかと」

「種族は?」

「ここで言うのは宜しくないかと」

全く答えになっていない。何を言ってもここで言うのは宜しくないと言いつ放たれる。明らかに入ってはいけない客。だが、門番は

「承知しました」

そうとだけ言い残し門を開け客を館に迎え入れた。

開けられた門の中は庭園があり、色とりどりの花が咲き乱れている。その中心には赤い石で作られた噴水があり。誰もいない庭園でただ水を吹き出し続けていた。

客はその花や噴水には目もくれず、館の扉を開けて中に入った。

「いらっしやいませ。主人がお待ちです」

突然、客の横に現れた銀髪のメイドが先を歩いて行く。

フードの客は無言で頷きそのメイドの後をついて行く。廊下の壁や天井窓の淵までもが紅く塗られていた。ただ、所々にある花瓶に生けられた花々は紅くは無い。白や黄色、様々な色を花々は主張し来るはずのない虫を待ち受けている。

「この先で主人がお待ちです」

そう言い残し、メイドは姿を消した。それを見たフードの客は正面の紅い巨大な扉を押し開け中に入る。そこには1つの光源も無く、純粋な闇が広がっていた。

「また来たのか。天狗の犬。要件はなんだ？」

そんな空間の奥から非常に威圧感のある声が響く。

フードの客はフードを下ろし何も見えぬ闇の中声の主がいるであろう方向に跪坐くと口早に伝える。

「レミリア・スカーレット様。要件は何時もの通りですが。今回は少々特殊でして」

「特殊？何時ものようにフランを貴様らに派遣すれば良いのではないか？」

威圧感のある声がどれほどの空間があるのかもわからない場所で反響しそれに更なる威圧感を得させている。

「今回の対象は覚妖怪なので」

この発言を言い切った刹那、客の首元に鈍く光る緋色の槍が突き付けられる。

その槍を突きつける幼い少女の目は紅く光り、その幼い体からは通常ではあり得ない威圧感が放たれる。

「覚妖怪?! 貴様ら何をしてしまったのか分かっていいのか？」

覚妖怪、心を読む者。それだけでも能力的には非常にタチが悪いが今では地底で大きな権力を握っている。それ故今では、どんな実力者であつても出来れば喧嘩を売りたく無い相手であるし、売つてはいけない相手でもある。それは条約でも決められていた筈だ。

「ええ、上もそんなに馬鹿ではないです。今回はあちら側がこちらに攻撃している首謀者と判断したので拘束しました」

「攻撃？私はまだ妖怪の山が襲われたなどと言う話は聞いていないが

？」

「無理もないです。情報統制が行われていきますし、その攻撃者と会って生きているのは私を含めた2人の白狼と首謀者のみですから」

少しの静寂、レミリアは少しは落ち着いた様で槍を客の首元から離し自分の横に突き刺す。その鈍い光で威圧感からはかけ離れた幼い彼女の姿が闇に照らし出される。まるでドアノブカバーのような帽子を被闇に紛れる黒をメインとし、赤いリボンが胸元に付いていると言う所謂、子供用ドレスだ。

「貴様らは覚を敵に回したいのか？それに首謀者だと？どうせ証拠もないんだろう」

「ないですね。だからこそ言わせる必要があるんです。このような状況ですが妹さまを派遣していただけますでしょうか」

再度訪れた静寂、鈍い光の中でレミリアは自らの愛しい妹について考えていた。ここでフランを派遣すれば確かに能力の暴走の可能性は下がる。だが、それでは本当のフランの精神が不安定になってしまう。

「3日、3日なら待つと上が申していました。如何いたしますか？」

「そうさせて貰おう。咲夜、客人のお帰りだ」

そう言うと、レミリアは槍をどこかに消し闇の中に姿を消した。

一方の客人も一瞬にして姿を消し、気付けば外に放り出されていた。

「やってくれるな、あのメイド」

そう言うと客人はフードについた泥を払い、地上を駆け出した。正面から吹き付ける風でフードがはだけ、白い耳が露わになる。

「これで時間は稼げた」

そう呟き、地を駆ける少女は、迷う事なく妖怪の山に帰って行った。

一方その頃、地底の巨大な館、地霊殿には花の妖怪が訪れていた。

「幽香さん、今回は一体何のようですか？」

風見 幽香の通った道には色鮮やかな花々が地底の天井まで生い茂っている。ただ、その花を誰も綺麗や美しいと思うことは無い。何故なら、地底を守護する妖怪たちがその花々によって縛り上げられているからだ。その者達の血がその花をより一層美しく見せていた。その状況だけでもそれなりの先頭が起こった事は明白だが、地底を護ろうとした妖怪以外や、民家には一切被害が出ていない。

それは風見 幽香にその配慮が出来るほどに余裕があったと言うことだ。

「あら、さとり。探したわよ」

背後で起こっている惨状とは裏腹に風見幽香は爽やかな笑みをさとりに向ける。

「訪れる度に守護達を吊し上げるの辞めていただけませんかね……………」

対するさとりは呆れ顔で風見 幽香の後ろの街に絡みついた花々を見渡す。

「いきなり襲ってきたのは彼らよ。そろそろ私は襲うなど覚えさせたらどうなの？」

日常的にはありえない光景ではあるが風見 幽香が地底を訪問した時のみその光景は必ずと言ってても良いほど起こる。

「それができればしてますよ。どうやら彼らにも守護者としてのプライドがあるようで、負けると分かっていても戦うんですよ」

「そう、プライドね。そんなくだらない物捨てれば良いのよ」

風見幽香は嘲笑を浮かべ空中で縛り上げられている守護者を降ろす。降ろされた守護者は駆け寄って来た周りの妖怪達によって怪我の処理をされている。

「まあ、わざわざここに来たと言う事は何かしら理由があるのでしよう？館でお茶でも飲みながらゆつくりと話しましょう」

さとりはそんな状況には目もくれず、地霊殿に足を進める後

ろをついて来た風見幽香が突然声をかける。

「さつきから気になって吐いたのだけ。貴方、何故短剣なんて持っているのかしら」

さとりは答えようか迷ったようで少し口籠ったが、後ろを振る向かず直ぐに口を開いた。

「少しは、自分の身を自分で守れるようになってはいけないと思っただけですよ」

ただ、普通のことでしょう？とでも言っているような口調ではあるが。それとは真逆に心は悲鳴を上げていた。本当はそんな理由ではない、ただあの人の残した物をもっているだけ。そうでもしないと、彼を忘れてしまえばよかった。

「そう……まあ、能力に頼りすぎるのも良くないものね」

私も不覚だった。秦 空、顔は見たことがあると思っただけ。まさかさとりと恋愛していると噂になり新聞に載っていた奴だとは……何故、俺は覚妖怪だしと言った時点で気付けなかったのかしら。

「さとり？」

「何ですか？」

「何でもないわ」

たとえ静寂を破つてもこの様に会話が切れてしまう。

新聞で、あれだけ仲の良い存在と言うように書かれていたのは見ていた。そして、あれは恐らく嘘ではない。何せ、あれには写真が付いていた、恐らくは盗撮。と言う事は、何時もの様な捏造記事でもなく、盛られた記事でも無くあれは本当に行われていたのだろう。その存在が死んだとしたら。彼女はそれなりのショックを受ける。

もしもだが、それである時のように覚妖怪に暴走などされれば、1人しか居なくなつた読心可能な覚妖怪、古明地さとりは殺されてしまう。

彼女は私にとっても大切な友人。ここで幻想郷中から敵に回されて、正義の名の下に殺されるのは見たくない。

「幽香さん？幽香さん？聞いてますか？」

我に帰ると目の前でさとりが手を振り小さな体で自己主張をしていた。

「あら、ごめんなさい。少しぼーっとしてたわ」

私は笑顔を向けいつの間にか入っていた地霊殿の一室に案内される。部屋は綺麗に清掃され、白く塗られた壁には本棚が並べられている。そこには歴史書から物語、伝記と言った様々な本が収納されていた。その書斎の中央に木製の机が置かれていた。大ききからして恐らく本を読むためにあるのだろう。

「で、話というのは？」

「にしてもさとり、貴方相変わらずこんな部屋にずっといるの？」

「そうですが、何か？」

この部屋は部屋の壁中に本棚が配置されているため、一切の光が入ってこない作りになっていた。

「もつと、光を浴びなさいよ」

「ここは地底ですよ？一日中光が出てます」

「ごもつともな意見だ、ただ私が言いたいのはそういうことではない。」

「もつと外に出て光を浴びなさいってことよ」

「覚の私に外に出ると？」

やはり隠しきれぬ気がしない。相手は覚妖怪、しかもさとりだ。話を変えようにも限度がある。それにかなり警戒しなければさとの読心は止められない。ここは不確定情報を慣れない程度に混ぜるしか……

「無駄です。読心はしようと思えばいつでも出来ます。で、ここに来た本来の理由は何ですか？」

「そう……無駄だったわけね」

幽香は苦笑いを浮かべながら天井を見回し、さとりに向き直る。

「貴方の愛人の外来人。死んだかもしれないわ」

その言葉を聞いた瞬間。さとの表情が変化しだす。何時もならば落ち着き払っている彼女のこんな表情を見るのは初めて

だった。それは悲壮にも見え、怒りにも見えた。

「かも、何ですよね？」

「ええ、私も遺体は見えないの。でも、彼が帰ってこなかったのよ」「帰ってこなかった？どこかに行ったんですか？」

幽香はその時の状況を口にしようとするがさとりの右手が前に出されたことによつて制止される。

「思い出すだけでいいです。真実が欲しいので」「わかったわ」

幽香は何の抵抗もせず素直にその意見を飲み、あの時の状況を思い出した。全身がやけ、見るに耐えない姿になった白狼がいたこと、一瞬にして正面に立っていた白狼が食い千切られたこと、此処にはまだ居るはずのない者がいた事。それは何れも非常に非現実的なものではあつたが、さとりはそれを信じざるおえない。これが幽香の思い出である以上それを疑うということは風見 幽香が幻覚を見たと言ふのと同意だからだ。風見 幽香は幻想郷でも屈指の実力者である。それほどの人物に幻覚を見せれるほどの実力を持つ者は私の知る限りではない。

「……成る程。で、それはその竜と殺し合つたと」

「そうね」

「その後、待ち合わせ場所に来なかつたと」

「だから一応報告しに来たの」

やはり竜に空は殺されてしまった？死体を探そうにも妖怪の山で起きたことに私が頭を突つ込むこともできない。それに、幽香の記憶だと死体は何れも身元なんて分かりそうなものではなかつた。

ならお隣に死体を確認がてら回収させに行こうか？いや、恐らくこれも妖怪の山側に拒否される。彼らは確か死体を埋葬する習慣があつた筈。

でも空が死んだなんて、私は信じない。また同じ心を読む覚妖怪が私だけになつたなんて。

信じない

信じない信じない

信じない信じない信じない

信じない信じない信じない

信じない信じない信じない信じない信じないシンジナイシンジナイシンジナイシンジナイシンジナイシンジナイシンジナイシンジナイ

「落ち着きなさいさとり。私はまだ、死んだとは言っていないわ」

幽香はさとの肩に手を置き呼吸が荒くなっているさとりを落ち着かせようとする。

「ふふふ、ふふつ、何を言ってるんですか幽香さん。私は落ち着いていますよ?」

そう言ったさとの目にはこれまで見たことないようなナニカが見えた。そのナニカに何とも言えない狂気を感じた幽香は一歩後ろに後退する。

「そ、そう。大丈夫なら、いいわ」

まさか、暴走? いや、ならもう既に私はトラウマか何かを見せられている筈。見ていないと言うことはまだ大丈夫と言うことだろう。ただ、今さとりが非常に危険な状態ということに間違いは無い。これは一度紫に報告を

「しなくていいですよ。言ったじゃ無いですか。私は至って正常ですよ幽香さん?」

顔は笑っているが、目が笑っていない。いや、笑っているが私の知っている笑みでは無い。それよりももっと狂氣的で、何か重要なものが欠けているような。

「ええ、わかったわよ。じゃあ、此処で私は失礼するわ」

これ以上は危険と判断した幽香は軽い別れの言葉を告げる。

「ええ、また会えるのを楽しみにしていますよ」

そう言っただけで地霊殿から去っていく幽香の背中を古明地さとりは笑みを浮かべながら見送る。ただ、その笑みはやはり何時ものさとりとは違う何かを感じるものだった。

### 34話

#### 拷問すらも機会へと

少年は1人、光1つ刺さない地下牢で嚴重に十字架に掛けられていた。いくらこういった状況からのメール脱出法を学んでいると言っても人間には限界がある。無脊椎動物能力ならばまだしも人間は脊椎動物である故関節を外そうとも脱出できなければ拘束から抜け出す事は諦める他ない。骨を折るといふ選択肢も無くはないが折ってしまうと治るのにも時間がかかる。それに、逃げた後に当然予想される戦闘にも支障をきたす事は間違いない。まだ、能力が使えればまだ希望があったが、サードアイは目隠しをされ、この鎖の影響が何かだとは思うが能力による変更も出来ない。

もう既にさとりに連絡した約束どうりに帰るといふのはもう実行不可能だろう。地底に帰る際に天狗に追われたままでは、正義の名の下地底に襲撃をかけるのが目に見えている。それでは俺が自分で決めた守護者の役割を自ら放棄することになる。だが、もし俺がここから脱走し、逃げ地底が襲われた場合、何も出来ずにやられるか？言われれば恐らく撃退はできるだろう。

だが、それで奴らを撃退した所で奴らは覚妖怪の俺が今回の異変の元凶と言い覚妖怪が更に居場所を失いかねない。さとりが読心を使い俺の無実を証明しようとしても同族を守ろうとしていると考えられ、意味はないのは目に見えている。

「時間だ。起きろ」

十字架に架けられた少年と闇のいた場所に光と何者かが入ってきた。

「安心しろ、起きている」

全く、サードアイだけで無く俺にまで目隠しをする必要は無いらうに。念には念を入れているんだらうが、無駄な警戒だらう。

「貴様は証言してくれる気はあるか？」

恐らく正面に立っているのであろう天狗が低めの声で話しかけてきた。

「何をだ？」

「しらばつくれるな、貴様があの竜を連れてきたと言うか聞いているんだ」

「ああ？言うわけないだろう、俺は嘘が嫌いなんだ」

こいつらは証人を取る為にも俺を殺す事は恐らく出来ない。ならば、俺は黙っていれば良いだけだ。こいつら程度の拷問ならきつと問題はない。

「そうか、残念だ。こいつを部屋に移動させろ」

どうやらこいつらの他にも天狗は居たようで俺の掛けられた十字架が持ち上げられ、何処かへ移動させられて行った。道中階段を登るのにかかった時間と、部屋までの時間をカウントし覚えておく。恐らくはここも尋常でなく広い。逃走することがあれば役にはたつだろう。

こいつらに連れて行かれる事数分、どうやら目的の場所に到着したようで俺は十字架から外され、椅子に座らされた。

「おお、やっと座れるのか」

少年に対する返答はなく、無言で手錠と足枷を嵌められた上で、胴体を椅子に固定され、1人の天狗を残し部屋から退出した。

「ヤア、初めまして。秦 空」

「顔が見えないから初めましてかもわからないんだが？」

「そうか」と一言言ったその男は何の躊躇いもなく少年の目隠しを外し、ゴ丁寧に猿轡まで外して顔を見せた。正直、猿轡は緩かった為にはぼ役割を果たしていなかったが。

「ああ、初めましてだな」

相手の顔を確認し、少年は事実を告げる。

確かに、一度もあったことがない男の顔だ。顔はそれなりに整っている。恐らくは古傷か何かがあるんだろうが顔以外は包帯が巻かれており、身長はそれ程高くないように見える。ただ、このタイミングで出てきたと言う事は、こいつが何をする奴なのかと言うのは安易に想像できる。それに、喋り方からしても少し狂っているような感じがある。まるで、これから始めることが楽しみであるかのような雰囲気だ。まあ、拷問する奴が拷問が好きと言うのは基本ではある

が。

「始めようか。これが何だか分かる？」

少年が座っている椅子を指差し、座席部分から背もたれ、さらには少年が腕を固定されているところにもまで無数に開いた奇妙な穴を指差す。

「知らないな」

少年がそう言った次の瞬間どこからか出したのか男の手にある黒いリモコンのボタンが押され、その穴から2センチほどの針が一斉に飛び出し、少年を貫いた。身体中に鋭い痛みが走り、刺された部分から鮮血が滲み出る。

「なるほど？・審問椅子か」

審問椅子、中世から今まで使われる非常に有名な拷問器具だ。対象を椅子に座らせ、椅子に着けた大量の針に突き刺すといったものだ。この器具の利点は、すぐに殺さないと言う点だろう。拷問にはもってこいと言うわけだ。針が突き刺さった影響ででた血が椅子から垂れ、床を赤く染めている。一瞬この勢いでは死ぬなども思った少年だったが、その考えは直ぐに否定された。

「こんな勢いでやったら死ぬとか思う？・ダイジヨウブ、君はもう妖怪だから」

「成る程、そう言う事か」

男がリモコンを押した瞬間今度は電撃が走った。これも人間であれば死ぬレベルの物だ。更に、先程の針の影響で出た血で電気が通りやすくなっており、身体中を電流が駆け抜け続ける。

「喋っちゃダメ。君は拷問されているんだからね？」

電気を止める事はなく、正面の男は醜い笑みを浮かべる。流されるづける電流によって遂には少年の体から出た血液が沸騰しだし、少年の体は更に針に突き刺さるのも御構い無しに痙攣し体に刺さった針が肉を裂き、木製の椅子を真っ赤に染め上げて行く。その拷問は数十分間に及び、少年の意識が遠のくところまで来た。だが、少年への拷問はこの程度で終わる事は無い。

「ハイでおしまー」

あともう少しで意識が飛ぶ。その瞬間を見切ったかのように男は電流を止めた。電流を止められ、痙攣の治った少年は男に声をかける。

「流石に死ぬんじゃないか？」

「ダイジョウブだよ。君はもう妖怪なんだからネ」

今、ここまでされて死んでいないと言うのも中々不思議ではあるが。これが妖怪の生命力ということか。

いや、それ以前に死ぬことはあるのか。紫は俺に妖怪は人間からの恐れで出来ているといった。それが真実ならば妖怪は歳をとらず、人間からの恐れがなくならない限り消滅も死ぬことも無いんじゃないだろうか。それならばこの男が俺が意識を失う直前に拷問を止めたのも分かる。

死なないのなら、拷問に適切なのは相手の気を狂わす事だ。気絶しないギリギリを攻め、相手の気を滅入らせ狂わせる。一度狂ってしまったら正常な判断は出来ない為、そこで嘘であろうが情報を言わせ、後は正義の名の下殺してしまえば証拠も残らない。これが恐らくこいつらの目的だろう。

「怖い？」

「そうだな。怖いな」

まさか、こんなにも死が眼前に迫って来ているというのに全く何も思えないとは。感情を学んで少し無意識になるようになったかと思っただが、どうやら全くダメなようだ。酷い話だ、これでは拷問する側が怯えるなんていう事態が起きかねない。

「すごいね。俺がやる時はこれでもう喋ってくれる奴が多いんだけど」

「そうか、残念だったな」

「まあ、俺が聞き出せなくてモ。あと2日で悪魔の妹が来るから、さつさと言った方が楽だ？」

悪魔の妹？初めて聞く単語だ。こいしである可能性は万に1つもない。何故なら、こいしは無意識を操る程度の能力を持っている。こいつらが制御できるわけがないし、俺とこいしは顔を合わせて

いる。それにこいしは既に読めないが覚妖怪であったことに間違いない。

同族同士にやらせるというのも中々ではあるが、どちらにしてもあの能力は拷問向きではない。やれた所で、無意識に何か言わせると言った所だ。だが、それは無意識から出てくるのであって何をいうかまではコントロール出来ないはずだ。無意識というのは心の何処かでやりたいと思った事を意識せずに行動に移すと言うもの。俺は微塵もその供述をしたいと思っていない。ならばいくら無意識を操られようが言わせる事はできない。

「そんなにそいつはエグイのか？」

「今の百倍は」

「どんな能力なんだ？」

ここで能力を聞き出せばある程度対策ができる可能性がある。まあ、物によっては無理だが。

「教えない。さあ、拷問を続けよう。今度はここに手を置いてもらうか」

手の前に出されたのは手がちようど入るような鉄の板。そこに梃子の原理で浮き上がるように設置されたシーソーのような物が五つ。そこに男は強引に少年の手を乗せ、爪にシーソーの下がっている部分が引つかかるように設置する。左右の手に全く同じものが取り付けられ、手首を鉄の板の下から回したロープで固定し、指もゴムでしっかりと固定された。

「もうわかるよネ？一枚目〜！」

男はどこからか出した木槌でシーソーの上がついている方を思い切り叩く。無論、爪と皮膚の間に入った鉄が強引に上に持ち上がり。右の親指の爪が少年の後方に飛んで行った。爪を剥がされた右の親指は根元から出血している。

「ちっ」

「あれ、それだけ〜？じゃあ、もっといけるネ。右の爪もう全部行くのか！」

男が醜い笑みを浮かべたかと思うと返しを一箇所に集め、無情

にも木槌で思い切り良く。叩いた。

「クツ」

「本当に反応が薄いね」

右手の爪は全て剥がれ。全ての指からゆつくりと血が滲み出し、見るも無残な状況になっていた。

「君。こう言うことに耐えられる様に訓練されたことがあるでしょ？」

急に男が落ち着き、少年の耳元で囁く。

「どうだかな」

「でも、流石にこれは厳しいんじゃないかな？」

また男が醜い笑みを浮かべる。そのまま、左手に設置された物にも木槌を振り下ろす。左手も同じ様に爪が剥がされ根元から血がゆつくりと滲み出す。

「それでもないぞ？」

「誰も終わりだなんて言っていない？」

男はそう言い残し、部屋から出て行った。

それを確認した少年は息を吐き力を抜く。

「全く、酷いな」

少年は爪の剥がされた自らの指を見る。先程よりも血が滲み、見るに耐えない様な状況になっていた。爪のあるべき場所に爪がなく。その代わりにグロテスクな皮膚が見えていた。強引に剥かれた所為もあってか所々肉ごと持っていかれ根元以外からも血が滲んでいた。

「待たせたね」

男が今度は清々しいまでの笑みを浮かべて入ってきた。その手には鉄製のバケツ。それには水と思われる液体が入っていた。どうやら、血を洗い流す気らしい。

「行くよー」

その液体が頭からかけられた瞬間少年の身体中にこれまでも受けたことのない様な激痛が走る。これまでは声を一切出さなかった少年はそこで初めて獣の様な絶叫を上げた。ただ、その声は正面の男以外に届く事はなく。部屋の中を木霊する。

「初めて反応した！まあ、無理もないよ、何と言ってもその傷に塩水か

けてるんだもんね。おっと、ちよつと残ってる」

そう言つて男はバケツに残つていた塩を特に傷の酷い少年の背中に躊躇いもなく塗りつける。

あるはずの無い感情。ただ、痛みは感情では無い。痛覚がある程度は飛ばす事は出来てもある一定ラインを越えれば脳が危険と判断し、強制的に体をシャットダウンする。さもなければ許容量を超えた痛みの所為で脳がいかれてしまう。

「さあ、ここからが本当に楽しいんだよ？」

意識が飛ぶ、そう少年が確信すると同時に、突然流された電流が少年の意識を強引に引き戻す。意識が戻つたということは無論あの痛みを再度味わうことになる。

ただ、少年は痛いとは思えても、感情が無いのだから辛いとは思えない。喉だけは狂った獣の様な絶叫を上げているが、それは脳からの指示であり、感情ではない。大声を出すことで少しでも痛みを緩和しようと言う生物の本能的な部分からくるものだ。

その状態で十分程度放置され、痛みで体を痙攣させている少年に男は勝ち誇つたかの様な表情で語りかける。

「どう？言う気になつた？」

男は事前に用意してあつたと思われる水を少年に掛け塩を洗い流す。しかし、傷口に塗り込まれた塩までは取れず、少年には多少は楽になつたものの十分過ぎるほどの激痛が全身に走り続けている。「馬鹿にするな」

セリフの対して状況は完全に絶望的だが。そのセリフを言つた少年の表情に男は戦慄し、寒くもないのに関わらず身震いし、決して暑くもないのに関わらず汗をかいた。

「お前……本当に元人間か？」

少年の表情には何もなかった、悲しみも喜びも怒りも絶望も、まるで自分の身には何も無かつた、たとえあつたとしても興味がないとでも言いたげな無表情。その表情と裏腹に傷だらけになり、痙攣し、身体から出血した血が地面を染めている。それが少年の異常性を物語っていた。

「なんで、痛いのならもつと苦痛に歪んだ顔をしろ！辛いのなら泣きわめけ。何故だ、何故無表情でいられるッ！そんなのおかしいだろ?!」

そんな男の様子を見た少年は無表情のまま顔を上げ、男を見つめる。

「何故、何故そう思う、お前はすべての人間に、全ての意思ある生物に同じ事をやったのか？やってないだろ？ならお前が出したその結論は正しいのか？この世界には貴様の知らない世界がある。要は貴様の勉強不足だ。と言う事で少し体感してみろ」

少年が胸元のサードアイを軽く動かすとサードアイをにかけられていた目隠しが外れ読心という少年の知る中では最強能力を持つ瞳が男を見据える。

「想起」

「何故外れているんだ！だが、外れたところで能力は封印されている、意味はない！」

はらりと落ちた焦げた布を見て男は一瞬焦ったように見えたが、すぐ様落ち着きを取り戻し勝ち誇った様な表情をした。

「どうだろうな」

少年が淡白に言い放った刹那、男の体が跳ねたかと思うと絶叫とともに泡を吹き、目の前で痙攣し動かなくなってしまう。死んでいるのかなどは正直どうでも良い。

「おいおい、そんな早く気絶したら勉強にもならないじゃないか」

少年は1人、そう呟くと審問椅子にゆったりと座る。その為少年の身体に針が食い込み座る位置を変えた事により肉が裂ける。しかし、少年は気にもせずサードアイで目の前の気絶した男に次の想起を掛ける。

「想起」

気絶したはずの男がまた狂ったように声を上げ、暴れ始める。

「拷問というのは楽しむというのも大事だが、本来は相手に絶望を与えるという事がメインだ。相手がいつしか絶望に押し潰され、服従するまでやるのが本来の拷問、服従させれば後はなんでも聞いてくれる

良い人形になってくれる。お前のように気を狂わせたりするよりもこっちの方がずっと拷問した後が楽になる」

少年はまるで教師の様に目の前で狂った様に転がり、叫ぶ男にゆっくりと語りかけるが無論男の耳には届かない。

「おいおい、ちゃんと聞いとけよ。まあ、良い。俺も聞きたい事があるんだ。しっかり答えてくれよ」

そう言った少年は聖母の様な笑みを浮かべ。胸元に浮かべている第3の目で正面に倒れ痙攣している男をしっかりと見据えた。

### 35話 どこの世界も結局は

少年が男を無表情で見下ろし、男に悲痛な叫びを上げることがを強制していた時。妖怪の山ではあの竜の攻撃で生き残った白狼天狗たちが山の中にある藁葺き屋根の質素な家で集会を開いていた。

議題は勿論、襲撃による被害状況の確認と今後の対策。ただ、今回は最大規模の被害となったため。仲間意識の強い白狼天狗達には相当厳しい結果が待っていた。

「今回の襲撃による負傷者は？」

重苦しい空気をかき消すかの様に1人の白狼天狗の凜とした声が響く。

「椀様、我々村の女子供以外は全員、負傷、または死傷しています。ただ、あの戦況での怪我となると…」  
「……………」

もし、今この状況でまたあの竜の様な者がここを襲撃すればどうなるか。それは目に見えている。

「にしても、あの鴉共っ…！」

椀の正面で足を組む屈強そうな男の天狗が体を震わせ、狼の唸りにも似た様な声を上げる。

それを見た椀は正面に置いた鴉天狗からの書簡に再度目を通す。字体はとても綺麗とは言えず、適当に書いたとも思われる様なレベル。内容は、「襲撃者：竜の死体と生存者の明細を今晚のうちに送れ」ただ、そののみ。

我々が妖怪の山を守ったのにもかかわらず我々に対する一切の敬意はなく、一切の賞賛の言葉もない。その代わりと言わんばかりに生存者の人数を送れと記してあった。

「奴ら我々を一体なんだと思っているんだ…！」

今度は正面の男の横に座っている男が唸る。それに呼応するかの様に2人の白狼天狗を除いた天狗が個々で唸りだす。

「取り敢えず、生存者はここに居る人数と子供女のみって事で良いのかな？」

そんな中、楓のみが非常に陽気そうに問いかける。勿論、彼女も本心から陽気なわけでは無いだろう。ただ、この場を少しでも和ます為の仮面と言うことはこの一同が理解している。

「ああ、その通りだ」

白狼天狗の社会では女は基本的に戦わせない。ただ、周囲から一線を超えた強さを持つ白狼天狗と認められた場合のみ、女も男と同じ様に戦士として認められる。そのため、今回は女子供には被害は出なかった。ただ、もう一度襲撃されれば話は別だ。

「じゃあ、伝えてくる。と言いたいところだけど。今回のこれは私も少し気に食わなくてね。折角なら秦 空。彼を攫ってこようと思う。どうかかな？」

突然の提案、ただ、彼は間違いなく。我々を救ってくれていた。それは私達2人には間違いなく真実。彼は身を呈する、とまではいくまでもなかったようだが、たった1人である竜を殺した。その彼が鴉天狗に連れて行かれるのを私の千里眼で確認した。

と言うことは、鴉天狗は襲撃には気付いていたということになる。それなのにも関わらず援軍も寄りこさず、我々に無理を強いた。

許せるわけが無い。私たちの仲間が、友人が、家族が。あんなにも悲惨な殺され方をした。それをただ、見物していただけなど。許せるわけが無い。

「はあ、全く皆野蛮だなあ。そんなに毛を逆立てて、怒ったところで行動しないと何も変わりはないんだよ？」

毛を逆立て、唸りを上げる同族の中で楓だけが1人何も感じていないかの様に冷静を保っていた。

「貴様、忌子の分際で・・・！」

1人の白狼天狗が、言ってしまったこの発言で場が凍り付いた。

「へえ、ここでそれを言うんだ」

突然、1人冷静を保っていた楓から怒気では無く、純粋な殺意が溢れ出す。その殺意はその禁忌を口にした白狼に襲いかかり、その喉元を締め上げていく。

「楓……！」

これ以上は危険と察知した椀がすかさず楓に声をかけ、落ち着かせる。しかし、締め上げられた白狼は気を失い、泡を吹いていた。「また能力を使ったな……！この忌子……！」

その周囲にいた椀と部屋の奥に座っている男を除く白狼が一斉に楓から距離を取り、武器を抜く。その刹那、1人の白狼の怒声が響いた。

「いい加減にしろ」

大声でもなく、小声でもなく、ただ確実に全員に聞こえるように発せられた声とその身体から溢れんばかりに発せられる怒気に凍り付いて場は解け、怯えが支配した。

「貴様らは何だ、ここにきて仲間割れをして種族を終わらせたいのか？私が貴様らを召集したのはそんな理由では無い。これからを話し合わせる為だ。ここで争うならば纏めて殺すぞ？」

ずっと無言を保っていた奥に座っていた白狼が声をあげた。その事により、場は静まり無言で皆が元の場所に戻る。

「ありがとうございます、父上」

椀が奥に座る白狼に片膝をつき、感謝を述べ、そして、すぐに元に向き直った。

「秦 空を誘拐すると言っても何か策はあるの？」

そして何事も無かったかのようには楓に声をかける。

「勿論、普通に拷問は我々ですと言えばいい。それに、被害を受けたのは奴らでは無い。私達が拷問するのが適切だろうか？と言っておけばいいのさ」

常識的にはそう言うっておけば確かに相手は秦 空を引き渡さざるおえないだろう。だが、今回の相手にそれが通用するとは到底思えない。何故なら相手は我々より立場が上で、今となつては人数的に戦力も上。そんな事を言ったところで到底応じるとは思えない。

何か弱点でも握られていれば良いのだが、上から連絡が来るのはこう言った場合のみ。それ以外は文さんが取材に来るかセクハラに来る時くらいものだ。

「もしそれに応じなかった場合はどうするつもりだ？」

「私の能力を行使する」

一瞬周囲の男が騒めく。楓の能力、それは白狼天狗の中でもずっと秘密にしていたものだ。上も知らず、その上白狼天狗の中でもごく限られた者しか知らない。

「本気で言っているのか?!それは反逆になるぞ」

「なら、黙って証拠隠滅されて、私達を救ってくれた男をいよいよに利用された上で処刑されてもいいのかな?それは恩を仇で返すと言うのも良いとこだと思うよ」

また、奥に座っていた白狼が声をあげる。

「承認する。ただし、失敗は許されない」

「ありがたき幸せ」

楓は膝をつき、そう言うのと残った白狼天狗の人数を炭で早々と書き示し、小屋を出て 直ぐに飛行。鴉の屋敷の門まで直行した。

一方、拷問を受けている筈の秦 空は目の前で犬のような鳴き声をあげている男からその男が知る限りの情報を聞き出していた。「で、お前らの長は一体なんで俺を捕えたんだ?」

空の足から垂れる血を舐めている男ににこやかに問うと、男は血の混ざったよだれを垂らし、快樂に歪んだ顔を向けながら告げる。

「今の主人は貴方様ですが。あの長はきつと覚妖怪の立場を危うくして、地底を攻めようとしているんだと思います」

成る程、まあ、思った通りではある。ただ、これは本人から聴き出さなくては意味がない。この男の発言では、ただの憶測だ。

「そうか、ならもうこの拘束具を解いてくれ。犬」

犬と呼ばれる事に快感を得ているのか男は身体を震わせる。と彼の拘束具を外し彼を自由の身にした。

「これで如何ですか?ご主人様」

「ありがとうございます。じゃあ、申し訳ないが自害しろ」

そう言つて秦 空は即座に作り出した短剣を男に渡す。

「了解しました。ご主人様」

そう言うのと、犬は短剣を拾い。自らの喉元に突き刺し赤い噴水と化して血の海に沈んだ。

血の海に沈み、しっかりと動かなくなった事を確認した後少年は落とされた短剣を拾い上げ、首と胴体を切り離し、首を自らの座らされた椅子に乗せ。血の匂いの充満した拷問部屋から外に出る階段をゆっくりと登って行く。

「もう一度会いに行こうか」

そう言った少年は一切の躊躇いもなく、後悔もなく、感情もなく、振り返る事も無く扉を開けもう一度大天狗という少女のいるであろうあの場所を目指した。

既に日は沈み、廊下に点々とある火の灯った蠟燭のみが彼を導くように並んでいた。そんな廊下を連れてこられた際に数えた歩数と照らし合わせながら歩いて行く。

またその頃、楓は扉を開けられ、中に入り。既に大天狗と面会していた。

「秦 空の拷問をやらせて欲しいだど？」

既に内容を聞いた大天狗が怪訝そうに答える。

「その通りでございます。こちらにも拷問のプロが居りその者がどうしても言っておりまして」

誰でも吐ける様な簡単な嘘。到底こんな物には引つかかるとは思えない。にしても、酷い血の匂いがする。既に秦 空が拷問されているのだろうが一体何をすればこんなにも血の匂いが充満するのか。

「それはできない。秦 空の身体は我々が預かる」

大天狗は淡白にそう言い。自分の前に出された茶を啜り書簡に目を通す。

対する楓も茶を啜り、一度目を瞑ってから開き覚悟を決める。

「今回のこれで、貴様らには一体何の被害があった？貴様は今回何をしました？何も無いだろう？貴様らがもつと早く援軍をよこしていれば白狼がこれだけ人数が減らされなくても済んだはずだ。それで我々

を救った者を私利私欲の為に殺させると思うのか？」

突然の豹変に大天狗は少々驚いた様で、少しばかり目を見開いたが、直ぐにまた茶を啜る。

「その何が悪い。覺妖怪は悪だ。奴らは害悪でありこの世界の均衡を壊しかねない存在だ。それはお前らにとつても同じことのはずだが？」

その時だった、扉の方から血の匂いが増したかと思うと。突然何か空を切る音がし、護衛の2人が音もなく崩れ落ちた。そして響く、男の声。

「成る程、これで証言は取れたな。ただ、思うんだよ。結局の所、読まれて嫌って事は自分の心が汚いから、罪を犯しているからだろう？それを見られて贖罪せずに隠そうつてのは更なる罪だと思うんだが、違うのかな大天狗？」

扉は開けられ、そこには首から上の無い護衛が2人。血飛沫を上げ崩れ落ちるその間に他人の血で真紅に染まったそれは居た。

「罪人は処刑だ。それは当然だろう？その罪が重ければ重いほど処刑も辛さを増す」

「貴様……！どうやって出てきた！」

額に汗を浮かべ焦り出す大天狗、彼奴は間違いなく拷問中の筈。なら、そこに居るあれは一体何なのか。他人の血で自らを赤く染め、両手で持った鎌の刃には器用にも護衛の首が乗っている。

あまりに突然で、反応出来なかったのか全く表情のない生首2つは死を感じさせない。だが、直ぐに目や口、切断面から鎌を伝って床に垂れる濃度の高い赤い液体が死んでいる事を証明している。

「どうやって？あんな物で俺がどうにかなると思っていたのか。まあ、お前のお陰で色々できる様になったがな」

そう言った少年は鎌を傾け乗っていたものを地面に落とす。落ちたそれは地面をまるで何かの無機物の様に転がり、赤い線を描きながら部屋の端で壁にぶつかり生々しい弾力で停止した。

「秦 空まさか自分から出て来るなんて驚きましたよ」

ここで初めて楓が口を開いた。

「驚きました、ねえ…。まあ、想定内の範囲内だろうか？」

「どうでしょうかね」

楓は少し口元を緩めると大天狗に向き直り再度口を開く。

「さあ、どうします、我々に秦 空を渡して頂けますか？」

対する大天狗は苦虫を噛み潰したかのような顔をしながら黙っている。成る程、俺を此処まで来てわざわざ迎えに来たのだから。

「さあ、どうする大天狗。俺を此処で白狼天狗に渡すなら、此処での処刑はやめておいてやる」

この際だ、一層の事利用して地底に帰ろうか。そうすれば時間には遅れてしまっているが、まあ、お咎めは避けれそうだ。

「わかった、承認しよう。ただし、」

その瞬間大天狗の横を何かが一瞬で通過し壁と衝突。響く鈍い金属の振動音と衝撃音。

「ただし？そんな事決める権利はお前には無い。今、立場は俺たちの方が上だ。その所、しっかり理解しろ」

冷や汗を流す大天狗に少年が興味無さげに言い放った。

大天狗は衝撃音のした方を見るがそこにあっただのは何かがぶつかった様な跡のみ。肝心のそこに衝突した物が無かった。

「貴様一体何をした…！」

そう言っただけ振り返ったそこには、既に2人の影は無く、残された護衛の首無し死体と壁へ転がった生首が無意味に虚空を眺めていた。

「まあ、良い。後はあの悪魔に任せておくか」

そんな中1人不敵に笑う大天狗。その笑みに追われながら彼らは地上へと降りていく。

### 36話 罪人と忌み子

「全く、酷い目にあった」

などと言い、苦笑いを浮かべながら秦 空は横で飛行している楓と呼ばれる白狼と共に妖怪の山へ降下していた。

「拷問の傷は大丈夫ですか？ 手当はしますよ」

「そうだな、特に必要は無い」

その答えが返って来ることを彼女は当然予想していた。だが、彼は拷問を受けていた筈。それで無傷なわけが無い。でも、彼の力量があれば無傷で逃れる事も出来たんだろうか？ 事実、何事もなかったかの様な服装だ。全く乱れていない。何なら新品だと言われても特に疑問には思えないだろう。

「無傷なわけが無いだろ。それなりの傷は負った」

そんな事を考えている私の心を読まれたのか察したのか、秦 空はにこやかに笑いながら言い放った。

「なら、治療をしましょう。それくらいはさせて下さい」

「まあ、断る理由もそこまで無いか。敵意も無い様だしな。やはりお言葉にあまえようか」

地上に降り立ち、自分の家までの道を少年と二人で歩く。しかし、しばらくして彼の身に異常が起きた。随分と息が荒れている。山とはいえ、そんなにもきつい道では無い。標高も高く無い。彼程の者なら走って登頂する事も容易な筈だ。

「どうしました、拷問で毒でも盛られましたか？」

念の為、後ろを歩く少年の姿を確認する。傷だらけで、もはや役割の果たせていない服。それが彼の身体から出ていたのである。血で赤く染まりべったりと彼の身体に張り付いていた。

「な……」

しかし、まるで幻覚だったとでも言う様に次の瞬間服装が新品同様になった。

一瞬のことだった為見間違いかとも思ったが、流石に鮮明すぎる。

「本当に大丈夫ですか？今一瞬血だらけに…」

「変更しても限界が近いと維持が難しくなる訳か。成る程な」

彼が一息吐くと、彼の体が突然赤く染まり、新品同様だった筈の服は所々破れ、赤く染められ、体の至る所から血が滴りだした。「まあ、拷問受けて無傷な訳が無いって事だ」

足も相当な傷を負っているが足の変更まで戻してしまうと恐らく歩けなくなる。たかが数センチの針だったがそれでも俺の体の針に刺された部分はほぼ挽肉の様な状態にされていた。

「これは私だけでは無理ですね… 医療班の所に行きましょう」

「ああ、連れて行ってくれ」

森の中に血の道を作りながら、彼らは白狼の集落へと向かっていく。然し、そんなにも血の匂いを漂わせて何事も無く移動できる訳が無い。ここは妖怪の山、無論居るのは天狗だけでは無い。通常なら白狼天狗が狙われることは無い。だが、手負いを連れて居るなら話は別だ。白狼を倒せずとも手負いの方だけでも殺せればそれを食料に出来る。

「囲まれたな」

「その様ですね。どうしますか、抹殺という方針で？」

「そうしたいのは俺もなんだが。何せ少々限界に近い様でな。歩くのが少々辛くなってきた」

いくら、能力で歩ける様にしていると言っても少々変更した時の力というのだろうか、それが足らなかつた様で、表面上は何とかなっているが内部の修復が不十分らしい。神経は最優先した為、恐らく大丈夫だが、問題は筋肉などだろう。細かいものを変更し作り上げるには理解だけでなくそれだけの力が必要ということか。

「では、ここは逃げましょう。来てください、背負います」

「ああ、任せる」

すぐに少年は軽々と持ち上げられ、少女は走って集落へと急ぐ。が、そんな簡単に物事は行かない。世界はいつも残酷で冷酷なのだから。

例えどんなに逃げようと彼の血が地面に落ちその匂いで妖

怪共が付いて来ていた。

「まずいですね。集落に直行はできない様です。先を読まれました」

しかし、少年からの返答がない。どうやら気絶してしまった様だ。気づけば私の首に巻かれた手にはロープが巻かれ、脱力しようが落ちない様になっていた。流石にあれだけの出血をしていれば仕方がないだろうが、状況は悪化の一途を辿っていることは間違いない。

「しつこい奴らですね」

どこまで逃げても妖怪の気配が離れない。更には移動することによってこれまで気付いていなかった妖怪達まで付いて来ている。集落に戻ろうとすれば今着いて来ている妖怪達が雪崩れ込んでくる事は間違いない。彼らとて、白狼が竜との戦闘で数がどの程度かまでは知らないものの相当減っているという事は分かるはず。

恐らく、戦闘になって負ける事は無いと思うが今の集落には女子供がいる。我らの将来を担う若者を殺させるわけにはいかない。となればもう、私が1人でなんとかするしかない。

取り敢えず、この量を彼を背負って捌き切ることではできない。まずは彼をどこか安全な所に置いておき。それを護りながら戦わなければ。

「入り口は一方のみであればどこでも良いだろう。洞穴か何かは無いのか？」

「気絶してたんじゃ無いんですね」

「勝手に気絶させないでくれ。取り敢えずそんな所は無いのか？」

一度黙り込み、必死にその条件に合致する場所を探す。しかし、先に声をあげたのは秦 空だった。

「少々記憶を漁らせてもらったが、この周辺にそんなものは無いな。仕方がない、一度地底に降りてくれ、そこならその妖怪共も入って来ないだろう」

「残念ですが。それは無理です。掟の関係上、私が地底に入ることは出来ませんし。私は大天狗に秦 空を集落に連れて行くと告げてしまいましたから。地底に行つてはその契約も破ることになります」

淡々と答える楓に少年は1つの疑問を持つ。一般的に考えても何故そうなるのかが理解できない。

「何故、そんなに自分の種族を護ろうとするんだ？あいつらはお前を忌んでいるんだろう。お前が死なせるわけにはいかないと思っっている女子供もお前を忌んでいる。お前の護りたいものは誰一人としてお前を護ろうとしていない。何なら、死んで欲しいと思っっている。それなのに何故、護ろうとする？お前に何の利益も無いじゃないか。私は死んでしまったという事実を作り上げ、地底で暮らせばみんな幸せハッピーエンドだろ」

「流石は覚。隠し事はお見通しですか、じゃあ、こんな綺麗な口調ぶつても意味ないね。それでも私はあそこを護りたい。そりやあみんな私を忌んでいるのは承知の上さ。でもね、なにも悪いやつだけって訳じゃない、一人だけだが、私を気にかけてくれるやつもいるのさ」

そう言い切った楓の感情に迷いは感じれない。どうやら、地底に逃げるという選択肢は潰れたようだ。

「まあ、俺がどうこう言ったところで意味は無さそうだな。しかし、地底に逃げないならどうする？助けを待つのか、正面きって戦うか」

事実厳しいことになりはしない。地底に逃げる。それも考えなかった訳ではない。しかし、それでは私が契約違反以前に帰って来れない。それでは権がどう思うのか。

「成る程な。理解した、お前は権という白狼の事が好きという事か？」  
「へ…？そ、そんなことないですよ。それに私も彼女も女ですし」

おぶわれているので、表情は伺えないが。声のトーン、口調からしても明らかに動揺している。それを見逃す秦 空ではない。「別に同性で恋愛関係持っても良いんじゃないか？ちなみにわりと外では認められているが」

間髪入れずに直ぐさま追撃を入れていく。ただ、彼には相手をからかって楽しむという事は出来ない。まずまず楽しむことができない。ならば、なぜこんな状況で突然相手をからかうようなことを始めたのか。

それは彼が覚妖怪にとっての栄養補給。要は相手の感情を

読み、そして、その感情を喰らう為。先程まではただじつと自然に現れる感情を読むだけだったが、ここで彼は他の感情はどうかと考えた。今は、焦り、それだけだが。感情は多様性に溢れている。絶望、希望、歓喜、悲哀、羞恥、その他にも数え切れないほどに。ならば、この中に体力回復を他の物よりも促す物があつても可笑しくはないだろうと。

「な… だから、恋愛感情なんて持つてませんよ！ただ、ちよつと」「ちよつとなんだ？」

この一見雰囲気破壊するようなこの行為が功を奏した。羞恥、この感情はどうやら体力回復を速める物だったらしい。事実、さっきの焦燥を見ている時よりも何かの流れ込んで来る感覚を感じた彼は続行という選択をする。無理もない。今は他がどうであろうと自らの体力回復が最優先事項。それを読心により楓から手に入れた情報から理解していた。

「まあ、良いんじゃないか？恋愛つてのは良いものだ」

しかし、彼は恋愛という物が何であるかを知っているだけで、自らがしたことはない。ただ、彼にとって悪い物という認識はない。恋愛とは特定の他人に特別の感情を持ち恋い慕う事。悪い意味と取るのは難しい。

「だ、だから私は権をあ、愛してなんかいないよ…！こんな時に突然なに！今はそんな状況じゃ無い！」

「無意味にやったりなどしない。態々こんな状況で突然おれの命綱となつているやつにちよつかいを出すなんて、理由がないとしない。当然だろう」

まだ、十分とは言えない。ただ、あとは周囲から彼を狙う為近付いて来ている妖怪の心でも読めば何とかなるだろう。ただ、念のためもう少し補給しておくべきだろう。

「一体何を？」

驚くのも無理はない。先程までは満身創痍。傷だらけだった彼が何事も無かったかのように背中から地に降りた。

「覚妖怪と言うのは他人の感情を喰らうみたいだな。少々食事をして

いた」

「な…じゃあ、さっきまでのあれは全部？」

「無論だ。ただ、もう少し欲しいんでな。悪いが犠牲になってくれ」

そういった目の前の小さな少年から発せられる異様な雰囲気は一瞬たじろぐが直ぐに一種の危険を察知し距離を取ろうとする。が、その一瞬のたじろぎが彼にとっては大きな隙になった。

一瞬で目に前までできたかと思うと強引に唇を奪われる。生まれた時から母親も居なかった楓にとっては恐らく正真正銘ファーストキス。キスがどんなものか知らないわけではない。一瞬状況が把握できず硬直するが直ぐに状況を察し彼から逃れようとする。しかしその時には既に遅く、腰に手を回されてしまっていた。強引に離れようと彼を突き飛ばそうとするが、その瞬間舌が入ってくる。言葉にならない悲鳴をあげるが、彼は元とは言えど暗殺者、どうすれば女が堕ちるかなど知らないわけではない。やっと状況を把握した脳を次第に羞恥が支配していき、身体から力が抜ける。しかし、ぐったりとした楓を支えながら秦 空はキスを続ける。思考までもが羞恥に染まり何も考えられなくなり、あつという間に彼に支配されてしまう。本来の暗殺なら、次のステップに入るのだが今回はそれが目的ではない。

生々しい音を立て、楓は彼のキスから解放されるが脳裏に焼き付けられた羞恥が消えるのには時間がかかる。力なく地面に座り込み、真っ赤な顔を彼に向け、虚ろな目で開いたままの口を閉じれなくなってしまうていた。

「俺の体力の回復は済んだんだが、まさかここまでなるとは」

やっとの事で正気に戻ったのか、楓はフラフラと立ち上がる。

「こ、この変態！淫魔！」

怒るのも当然。しかし、彼は全く悪びれる様子はない。

「悪かったな。ただ、あれが最も効率的に羞恥を引き出せると判断した」

「…狂ってる」

素直な感想。これだけ危機的状況で、周囲を敵といえど意識あるものに囲まれている中羞恥も感じず。突然のディープキス、外の世界はこんな人間ばかりなのだろうか。流石にそんなわけがない。要は・・・彼が異質という事。

「狂ってる、か。確かに狂っているかもな。きつと間違ってはいない」  
口角を上げ、皮肉そうな笑みを浮かべた彼は左右の手に短剣を握る。

「敵の数は大まかにわかるか？」  
「ぎつと100位かな」

「まあ、その程度か。これをつけてくれ」

突然渡される何かマスクのようなもの。ただのマスクだろうがさっきの行いからしても少々信用できない。

「なら仕方ない」

ぼそりと呟かれたその一言にゾツとする。その刹那手渡されたマスクが消え、顔に何かが被せられる感覚。

「な・・・」

マスクが着けられた。彼に強制的に着けられた？いや、流石にそれは考えにくい。着けられたというよりかこのマスク自体が突然現れた様な。

「絶対に外さないでくれ。面倒なことになる」

特に楓の動揺も気にしていない様で、秦 空の周囲から白煙が一斉に放出される。そこからはただの地獄だった。周囲から響く泣き声、絶叫、嘔吐、慟哭、狂った様な雄叫び。そして数分も経たないうちに周囲に静寂が訪れた。先程までは向けられた視線も、命を狙う者の足音も全てが消えた。

そして、その白煙が消えていく。風に流れ、ゆっくりと消えたのならまだ分かる。それとは違う全く異質な消え方。まるで、そんな煙は無かったとでも言いたげにゆっくりと消えていく。思えばこの煙が現れた時もそうだった。これが彼の能力？いや、彼は覚妖怪。覚妖怪には読心という能力が既にある。なら、彼は覚妖怪でない？

しかし、そんなことを考えている余裕は煙が晴れた後に現れ

た本当の地獄によって消え去った。

煙の後に立つ秦 空、その服は先程の様に綺麗でまるで新品の様だった。その姿を確認したのち周囲に訪れていた異常に気付く。月明かりに照らされ、妖怪が浮いていた。ただ浮いているわけでは無い。まるでマリオネットの様に宙に浮いている。その全ては目と口、更には耳からも血を流し、ピクリとも動かない。四肢がありえない方向に曲がってしまったている物もあれば目を見開き口を開けたまま気をつけの姿勢のものもある。ただ、共通しているのは全てがまだ生きているという事。よく見れば呼吸をしている。

「まだ、生きてる?」  
「いや、死ぬ」

そう言ったとたん何かが肉を裂く音と共に浮いていた妖怪がバラバラになって地面に落下する。

周囲に転がる肉片と臓物、生首。あまりの光景に吐き気が抑えられず、嘔吐してしまう。その様子を秦 空は見ていたのか嘔吐する瞬間にマスクが消えた。

しかし、マスクを外せば濃厚な血の匂いが鼻腔に入ってくる。その匂いがこの状況を更にリアルに伝え、更に嘔吐を助長させてしまう。

「大丈夫か?」

こんな状況になれば間違いなく血に濡れるはずの彼の服は新品のまま。更に彼を見上げた瞬間、本当の恐怖が訪れた。

全くの無表情だった。何も感じない、何も感じれない。喜怒哀楽のどれでも無く、殺人鬼の様に狂った笑みを浮かべるでもなく。ただ、無表情。まるで興味がない。とでもいう様な。これだけの数をこんな殺し方をして、この光景を見て。それでも何も感じていないというのか。

「逃げるぞ」

しかし、この発言で何かがおかしいことに気付く。

「逃げる?」

秦 空は楓の返答も待たず強引に背負い、臓物と肉塊の中を

駆け抜ける。何故、逃げるのか。楓は理解できずにいた。ただ、分かったことは。さっきのアレは秦 空がやったことではないという事。

「申し訳ないが、お前の集落には帰れない。これはお前の集落のためでもある。お前を地底に置いた後、俺は残りの白狼を護りに行く。所謂、緊急事態という事だ」

「それなら私も力になります。我々白狼は誇り高い「黙れ」

これまでに無い何かを秦 空から感じた楓はただの一言で黙ってしまふ。

「そんなくだらない誇りの所為で未来を捨てるな。罪を犯すな。他人を殺すな。それは……俺の仕事だ」

その返答がどう言った意味かまだ楓には理解できていないが秦 空は地底へ何も考えず飛び込む。底も見えない穴の中へ飛行することもなく重力に身を任せ落下する。一瞬にして見えた地面の直前で飛行。地面ギリギリで止まるとそのまま、砂漠の上を楓を乗せたまま飛行する。

「良いか。俺は正面に見えるあの町でお前を降ろす。そうしたら、まっすぐ先に大きな館がある。そこで古明地さとりという奴に会ってくれ。秦 空の使いだと言えば簡単に入れてくれる筈だ。そこで、地上であつたことを話してくれ。無論竜の件についてもだ。取り敢えずそれだけで良い」

その返答の代わりに楓は1つ頷く。しかし、1つの疑問が生まれる。彼の背に乗せられ飛び少し経つと、彼は止まり町の中で楓を下ろした。

「あれは、貴方が？」

あれだけの惨殺、どの様にしてあなつたのかは理解できないが。あれを彼がやったのか。そこは重要だ。彼が白狼天狗ごと天狗を拷問の見返りに抹殺する可能性が無いわけではない。

「違う。あれは俺のやり方ではない」

そう言つて空はすぐさま切り返し妖怪の山へと向かつていく。舞い上がる砂塵の中地上へと向かう彼は服装も暗殺者だった頃

の物に変更し、黒いフードを羽織る。

### 37話 闇夜を舞う亡骸

場所は変わって妖怪の山の白狼の集落、其処で椀は一人門の手前で楓の帰りを待っていた。

「遅い」

楓が集落を出てから既に2時間が経過していた。どんなに飛ぶのが下手であっても鴉天狗の屋敷までは片道で20分行き来で40分。例え大天狗との議論に時間が掛かったとしても1時間を超える事はまずあり得ないだろう。それに楓はもしも相手が拒否する様なら強行手段、能力を使うと言っていた。

楓の能力は感情を具現化する程度の能力。例え形になったとしても感情は覚妖怪という例外を除けば見える者はいない。要は絶対不可視の攻撃という事になる。そんな能力を持ったが故に感情と能力のコントロールが効かない間はずっと皆に恐れられ、監禁されていた。そんな能力があれば恐らくは大天狗も抵抗できないだろう。

となるとやはり楓の身に何かがあったとしか考えられない。そんな時だった。集落の外から木々を揺らしながら風が吹き込んだ。気持ちのいい風だった、せっかくなので1つ深呼吸でもして落ち着こうと思った時だった。肺に送られる新鮮な筈の空気から血の匂いがした。

どうやら集落の皆も気づいた様で集落が騒めいた。流石に血の匂いが全集落民に伝わる程漂って来たという事はそれだけの出血が起きる何か起きたとしか思えない。

恐らく一人の出血量ではなく何かが一方向的に瞬間的に虐殺されたという事だ。少しずつ殺されたのなら少しの血の匂いが段々と強くなつていくはず。

「椀様、いかがしますか？」

流石に異常だと感じた様で先ほどの会議で集めていた面子が椀の周りに集まり始めた。

「あの血の匂い、楓か秦 空、または両方の戦闘と捉えることもできませんが。その他の戦力ということも考えられます。私と、そうですね。」

銀杏あなた二人で確認に行きます。その他の戦闘のできる者は集落を守ってください」

「はっー」

威勢の良い声の後、銀杏という男の天狗が自分の装備とを装着し棍の装備を手渡した。

その間に残った戦闘のできる白狼天狗も装備を整え、集落を守るために動き出した。

「父上、行ってまいります」

準備は整った。その場には居なかったが、父のいる屋敷に一礼した後。銀杏と共に妖怪の山の血の匂いのする方へと駆け出した。

「棍様、どうかご無理はしないで下さいー」

遠くから子供達の声が聞こえた。その声に右手をあげるといふ簡単な動作で応じ山の中に駆けていく。

少し走った後、連れて来た銀杏が突然棍に声をかける。

「棍様、なぜ私を選んだのですか？私は白狼の中でも落ちぶれている者ですよ。もつと他にもいた筈です」

「貴方は本当は優秀だからですよ」

ただ、そう答え。棍は突き出た枝を切り落とし、根を飛び越え。血の匂いへと向かう。

「そうですか。有難うございます」

俺は棍様が好きだった。しかし、それは絶対に叶わない恋。そんな事は分かっている。彼女は頭領の娘、俺は白狼天狗の中でも出来損ない。能力もほぼ無能に近い。それに棍様はきつと集落のどの男よりも楓様の事が好きだ。本人は同性同士という事もあるが、隠そうとしているようだが、正直隠せていない。楓様と話す時が最も気が楽そうさ。

「そろそろ、血の匂いの発生源です。十分に注意して下さい」  
「了解しました」

静かに返答し、一度駆けるのを中断。姿勢を落とし、音を立てないよう細心の注意を払い藪の中を進んで行く。にしても酷い血の匂いだ。近付いた事によりはつきりと分かるようになったがこれは

本当に酷い。鼻が曲がりそうだ。

「椀様、敵影は見えますか？」

血の匂いの発生源はまだ先だが、椀様の能力である千里眼を使えばこの距離であっても状況どころかはつきりと全てが見える。

「…」

「どうか、なさいましたか？」

闇の支配する闇の先を見つめる椀の体が震えたかと思うと突然後ろを向き、青ざめた顔で木に手を着き地面に嘔吐した。

「一体何が?!」

流石に尋常ではないと察した銀杏は素早く白狼剣を抜き臨戦態勢をとり状況を把握するため。必死に頭を回しありうる限りの可能性を考える。

突然の嘔吐、毒？いや、それなら俺にも効果が出るはず。なら能力に対する、カウンター？それも考えにくい、椀様の能力はただ見るといふものそれに対してのカウンターは俺の知っている知識では不可能。もしそんなものを作れる者が居るならば例え椀様でも敵わない。今すぐ逃げるべきだ。取り敢えずは椀様が落ち着くのを待ち一体何を見たのか聞くべきだろう。

「一旦引きましょう」

まだこれだけの距離がある。だが、椀様の嘔吐音、それに何かのカウンターだったとすれば位置がバレてしまつて居ると考えるのが妥当だ。

「大丈夫。ただ、少々想像以上だっただけです」

落ち着いたようで、顔を上げ。正面を見る椀。しかし、その気丈な対応とは裏腹に内心非常に焦っていた。

「一体何が見えたんですか」

「肉塊と臓物です。それもかなりの量」

淡々と告げられた事実には銀杏は戦慄する。臓物、肉塊。どれも出来れば見たくないものだ。だが、確認するために来た以上行かざるをえない。それに、それだけの量を一瞬で殺す事が可能な何かがあったという事だ。

それが秦 空か楓様ならばまだいいが、それ以外ということも十分に考えられる。そうだった場合、それはただの脅威でしかない。取り敢えずは死体を確認し、秦 空と楓様の生死を確認しなければならぬ。

「行きましょう。酷い状況なので私の様に嘔吐しない様に」  
「了解しました」

短かく返答し、二人の白狼は再度日の沈みきり不気味なまでの静寂と全てを隠さんとする山の中を濃厚な血の臭いの発生源へと駆ける。

正直、椋様に行かせるくらいなら自分一人で行きたい。だが、そう言ったところでまだ殺戮を行なった者がいるかも知れないという事で行くことは目に見えている。

しばらく走ると突然目の前が開けた。

「成る程、これは酷い」

地面に生い茂る草はまるでインクでも撒かれたかの様に赤く染め上げられ、所々に臓物が転がっている。まだ、死んでから時間が経っていない様で、月の光に照らされ、赤い池の中に転がっている臓器はどれも生々しく輝いていた。

「ですが、なんで臓器だけ残ってるんでしょうか？肉体は一体どこへ」  
周囲に転がっているのは臓器のみ、その臓器を納めていたはずの器が見つかからない。

「確かに妙ですね。肉体は一体どこへ？」

「おやおや、どうやら私のショーの客がまたきた様ですね」

突然男の声がした。其処に現れたのは黒いフードを被った男。声質的に恐らくは老人。しかし、なぜこんなところに老人が？妖怪の山はその名の通り妖怪の住む山。其処に老人が1人で無事なわけがない。答えは1つしかないだろう。

「一体何者ですか？」

「ただの哀れな傀儡師ですよ」

老人がそう行った直後、月明かりが消えた。ただ、消えたのではない。同時に空を見上げた二匹の白狼は同時に恐怖した。

突如空に現れたのは大量の妖怪。しかし、その全てに生命の息吹は感じられずどれも体の至る所が使い古された麻袋の様に縫い合わされ、マリオネットの様に空に吊られていた。

「シヨールを開園します」

黒いフードの下に隠された口角が釣り上がる。刹那、上空の傀儡の肉が裂け一斉に手を飛ばしてきた。

「一旦退散します！攻撃を回避しつつ退避！」

状況は危険。我々では勝算がないと判断した樫が銀杏に素早く命令を出す。

「了解しました」

銀杏も素早く返事を返し、森の中へ踵を返して入って行く。背後からは大量の手が迫っていた。樫も銀杏の横につき必死に森を駆ける。然し、どこかで戦わなくてはいけないのも事実、この敵だけは集落に近付けてはいけない。それは暗黙の了解で2人とも理解している事もあり。集落とは真逆の方向に走っている。だが、それならどうするか。2人では敵わない。援軍を呼びに行くのでは集落の存在がバレてしまう。

「賭けに出ましよう。今はそれしかありません」

「賭け？」

「そうです。さっきあの男はまた客がきたと言ったんです。なら、恐らく秦 空と楓もあれと遭遇したということになります。その2人を走りながら探しましょう。あの2人と合流できればまだ戦況は変えれます」

確かに、そうだ。だが、この賭けは危険すぎる。何せ、秦 空と楓様が生きているという確証がない。秦 空に関しては恐らく天狗の屋敷で拷問を受けていたはず。当然万全な状態ではないだろう。それであれと戦えるとは思えない。

「然しそれは幾ら何でも賭けの要素があり過ぎませんか？」

「もし、彼らが死んでいたら私達は死ぬしかない」

それは事実だ。樫様の能力は戦闘向きではない。例え、どんなに戦闘力が高かろうとそれを上回る能力を行使されれば終わり。そ

れが能力持ちとの戦闘での常識。

「了解しました。では、探しながら逃げましょう」

探すという行為の上では椀様の能力の横に出るものはいないだろう。やはり今できる最適解は彼らを探すという事。

例え、彼らが死んでいたとしても。未だに背後からは手が追ってきている。状況は悪い、いくら逃げたところで追ってくる手と一方的に消費される此方の体力。相手も能力を使っているのだから何かしらの消費は少なからずあるだろうが此方の消耗に比べれば大したことはないだろう。

「椀様！一度あの手をやりませんか？」

当然の結論だ、ここまで逃げて追ってくるあたり恐らく距離による効果はほぼ意味がない。

「そうですね。最大限警戒して下さい」

椀の同意に合わせ、2人は同時に切り返し追ってくる手を切り裂く。

「おやおや、やっとショーに参加していただけるのですね」

声の聞こえた正面の木の上、そこにフードの男の姿があった。どうやら距離すら取れていなかった様だ。にしても白狼の全速力に付いてくるとはこいつは一体どんな化け物なのか。

「あの竜を連れてきたのも貴方ですか？」

椀が周囲を囲む手の動きを慎重に観察しながら声を上げる。

「時間稼ぎですか？まあ、急いでもいませんしお答えしましょう。私、と言うよりか私の依頼主と言うのが正しいでしょうね」

木の上のフードの老人は薄情に答えた。

「依頼主？貴方は一体何が狙いで来たんですか！」

椀が続けて質問する。然し、その質問に男は不満そうに唸ると声をあげた。

「次は此方が聞く番でしょうに。まあ、私の任務は果たしたのでいいでしょう。秦 空ですよ、ただ彼は私の力に即座に気付いたようで模範的に逃げてしまったので追いきれませんでしたよ。まあ、結果としてこの人形達を手に入れたので良いですがね」

男がそう言い切った瞬間だった。背後の藪から短剣が突然音もなく投擲され頭上を掠めて男の元へと一直線に飛んで行った。然し、男の眼前で何故か止まってしまった。

「ああ、貴方とずっ

背後の藪から耳を花火を思わせるような爆音が連続で数発響き男の発言をかき消した。が、それもまた男の眼前で止まってしま

う。  
「酷いですね。まだな

刹那男の背後に現れた影が、男の体を引き裂く。吹き上がる血が重力によって落下し。突然現れ、その木の下に着地した黒いフードを濡らしていく。

「逃げましょう！これは本当に駄目です！」

直感的に生命の危機を感じた権がそう指示する。然し、本能的な恐怖のせいか眼前に現れた絶対的強者のせいか声にならず足も動かない。

「安心しろ。秦 空だ」

その一言で腰が抜けてしまったのか地面にぺたりと座り込む。それを庇うように銀杏が前に出る。

「悪い、敵ではないと言った方が良かったな」

まるで機械が文字を読まされるような全く感情の捉えられない声が響く。フードの中からサードアイが覗き、銀杏を見据えた。

「銀杏、安心して下さい。秦 空に間違いありません」

それを聞いた銀杏は構えていた白狼剣を下ろし息を吐いた。

「まさか2度も助けられるとはなんと礼を言ったら良いか。所で楓は何処ですか？」

「地底に逃がした。流石に1人の方が動きやすかったからな」

「地底に逃がした?!そんなことしたら2度と上がって来れなくなってしまうのでは?」

「そこは俺が話を通す」

楓も無事と言うことに安心したのか権は座ったまま大きく息を吐く。そして立ち上がるうとした瞬間だった、周囲から音がしたか

と思うと一本の手が楯を標的にし高速で動き出した。

「まだ死んでないのか」

なんの感情も籠っていない声を上げ、空が楯の元に向かうが間に合うわけがない。楯の体に手が触れそうになった瞬間だった。

「楯様！」

「銀杏?!」

楯を突き飛ばし、銀杏がその手に掴まれた。するとそのまま森の奥の方へと引きずられていく。

「不味いな。楯と言ったか？集落の守りを固めろ。俺はあいつの所に行く」

返答を待たずして、空は銀杏を追って。藪の中へと駆けて行った。楯はそれでも銀杏を追おうとも考えたが、先ほどの状況を考え集落へと駆けて行く。その目には自らの無力を呪った涙が流れていた。

一方、空により地底に送られた楓は地霊殿へと駆けていた。楓をまるで呪うように見つめる周囲の目が痛い。門のない地霊殿に入り、扉を叩くと直ぐに桃色の髪の秦 空と同じ目を持った幼い少女が現れた。古明地 さとりで確定だろう。

「何の用ですか、天狗」

全く好意的とは思えない反応。なんなら敵意すら感じる。

「秦 空の使いのものです。話を聞いてくれませんか？」

秦 空。そのワードに反応した様で体がピクリと動いた。

「わかりました。付いてきて下さい」

そう言う少女は門を開き、中へと楓を迎え入れ、進んで行く。楓はその後にゆっくりと付いて行く。中は洋風で、天井からはシャンデリアが吊られている。然し、そこから発される光はあまりにも少なく全体的に薄暗く。外から入った光はステンドグラスの影響で明るく照らしはしていない。そんな館内を少女とともに歩く、その腰には何故か短剣が携えられていた。ホルダーに入っている為形状は伺えない。だが、覚は近距離戦闘はしないと聞いていたはずだがまあ、誤報だった様だ。そんな少女の後を歩いていくとある一室の前で少女が止まり入って行った。何も言わず付いて行き、部屋の中に入って

行く。

「座つて下さい」

手で示された椅子へと座ろうとした時だった。

「その背中についているのは何ですか？」

「背中？」

さとりは楓の背後に近付くと背中にテープの様な物で付けられた白い花を取った。

「彼岸花？」

どうやら、背中に白い彼岸花が付いていた様だ。いや、でも私は白い彼岸花のある場所を通った覚えはない。それに走っているうちに普通なら落ちてしまう筈。となると秦 空の能力だろうか。秦 空と言う単語が脳裏に浮かぶたびに先程の行為が浮かんでしまい赤面する。

「白い彼岸花ですか。珍しいですね」

「そうですね。所で、空の使いという事ですが。空は無事ですか？」

表情には出ていないが語気が強い。やはり同族としてかなり心配しているんだろう。

「秦 空は無事です。今は妖怪の山に現れた何かを討伐に行っています。伝言を受けていますがここで言うより読心した方が早いかと」

「無事ですか。本当に良かった。では伝言を受け取ります。端的でも構いませんので思い出して下さい」

さどりのサードアイが動くのを確認した後、地上で秦 空に救助してもらった事、竜を殺したこと、恐らく鴉天狗から拷問を受けた事、彼の負った酷い傷の事を順に思い出していく。

「そうですね、そんな事が…でも。空ならきつと何とかするでしょう。何せ彼は相当強いですから」

まるで自分の家族を誇る様に胸を張っているさとりを見てそのギャップに少し笑ってしまった。

「な、何で笑うんですか？」

「いえ、すこしおかしくなってしまつて。でも、彼が本当に強いのは事実ですから、引き時も知っていますでしょう。きつと何もなかったかの

様に帰って来ますよ」

どこから湧いてくるのか、全くわからないが。何故か彼なら大丈夫だと、そう思ってしまう。それに、彼が私を置いて行ったのも全力を出す為だろう。

「そうですね。お茶でも飲みますか？待っていていれば紫も来るでしょうし」

「いえ、私は集落を守りに行かなくては」

そこで、少し辛そうな顔をする。

「それはやめた方がいいと思います」

「何故です？」

彼はなんとかすると言ってくれていた。ただ、今思うとあの発言の根拠は一体どこにあったのか。

「地底を出る際には、勇儀さんの試験をパスする必要があるんです」

「勇儀様の？内容は」

「想定はしていると思いますが。戦って勝つことです」

戦慄した。勇儀様は元妖怪の山の四天王。昔、勇儀様と同じ種族の鬼が暴れた際には竜の同等の被害が出たはず。それに私1人で勝つのは無理がある。

「じゃ、じゃあ、私は地上に戻れないんですか？」

「いいえ、そこはきつと空が何とかするでしょう。ただ、帰って来るまでは出れないでしょうね」

「そんな…」

さとりは肩を落とす白狼をみて多少可哀想だとは思ったが。彼女にはどうもしようもない。私と一緒に動くという条件ならば地上に連れていくことはできるが。永住はできない、必ず帰ってこなくてはいけない。

「でも、空が何とかすると言ったのならきつと大丈夫でしょう」

一応励ましてはいるが、空が本当に一度降りると2度と上がれない事を理解した上で言っていたかは彼女にもも分からない。

「空が言ったんですから。きつと大丈夫です」

未だに心配そうな楓をさとりはそつと励ます。だが、それ以上

にさとりも心配を抱えていた。正直、それ以前の問題だった。空が本  
当に帰って来てくれるのか。無事で帰って来てくれるのか。もし、彼  
が死んでしまったら。私はまた、1人残されてしまう。やっとなの孤  
独から逃れられた。もうあの孤独には戻りたくない。

「紅茶です」

お燐が扉を開け机の上に高級であろうカップを洗練された動  
きで置き、その中に湯気をあげる液体を注いでいく。2人分の紅茶を  
注ぎ終わったところで砂糖を机の中心に置き、茶菓子を並べた皿を置  
き。一礼して部屋を後にした。

「そう、きつと彼なら帰って来ます」

一体誰に向けて告げられたのか。地底に残された2人の少女  
は互いに不安を抱えながらお燐によって机の上に置かれた紅茶を啜  
り茶菓子を摘む。

彼ならばきつと帰って来る。そう信じて。

闇に支配された森の中、彼は1人音を頼りに銀杏と呼ばれる白狼を追っていた。

草木を掻き分け、木の根を飛び越え、暗闇を疾走する。

何処かに誘導されている。そんな事はとうにわかっている。だが、それでも彼は追わなければならなかった。

音が消え、引き摺られていた白狼が止まった。気付けばそこは少し開けた森の中。木々の間を抜けた月光が注ぐ。

「一体、何のつもりだ？糸繰り」

一切の感情がこもっていないはずの言葉。だが、そこには対象を殺すという彼の意思がこもっていた。

「何のつもりですか。お迎えに上がったんですよ。【新月の彼岸花】…さん？」

「懐かしい名前だな」

右手に握った短剣を眺め、頭上に浮かぶ月に目をやる。

「おっとこれは失礼。ここでは秦 空。と名乗っているんでしたね」

少年は何も答えず、何も言わず。ただ、空に浮かぶ月を眺めている。一体何を思っているのか。それは恐らく彼しか理解できないのだろう。

「迎えと言ったな。どういう意味だ？」

「そのままですよ。父がお呼びです」

「何の為にだ。それに、何故ここがわかった？」

「貴方は駒ですから。そのの管理をするというのは当然でしょう？」

森に年老いた老人の声が響く。その声に驚いた鳥が一斉に木から飛びたち月を一瞬覆い隠した。

「成る程」

少年は首元に手を伸ばし、そこにある異常な感覚に初めて気付いた。不覚だったとでもいいだけに顔を強張らせる。

「そういうえば父が貴方を呼ぶ理由ですが。それは貴方にとある命令を下す為です。まあ、父もこの様な状況になる事は見越していた様です

から。声を残していかけました」

「聞かせろ」

機械がレコードを読み込む音独特な摩擦音が響き、正面の木から彼は聞き慣れた男の声が響いた。

「マイクテスト、マイクテスト。あー、あー、どうやら大丈夫みたいだね。失礼、始めよう。これを聞いているという事は糸繰りが彼岸花を見つけたという事だね。」

やあ、彼岸花。久し振り。これを聞いている頃にはきつと私は死んでいるんだろう。実は君が逝ったあと私も重病に侵されてね。もう虫の息というわけだ。だからここで君に依頼を出そうと思う。きつと最後の依頼になる。申し訳ないが、その糸繰りを殺してくれないか？」

少年は音源である闇の中に跪き。忠誠を誓った騎士が王に謁見するかの様な姿勢をとる。

「yes. my master」

「何：：？まさか裏切るのですか！私にショーをしろと言ったのは貴方だったはずだ！」

想定外の命令に、老人は狼狽し。森の中で叫ぶ。しかし、録音にその声は届く事はない。頭を抱え、呻くその体が次の瞬間、2つに割かれ。まるで噴水のように血飛沫を上げる。

「もう良い、やってやる！そうだ、私が彼岸花をやればトップになれる！頂点になれるのだ！」

切断された老人の体から糸が溢れ出し、身体をつなぎ合わせた。

「：：？」

目の前で起きた光景に彼岸花の様に赤く染まった彼は首を傾げる。

「この世界に来て、人間を辞めたのはお前だけではないという事だ！」

「――」

何をいうでもなく、彼は拳銃で老人の身体を打ち抜き、蜂の巣にしていく。一発一発が確実に肉を抉り、肉体を削って行く。

彼はおもむろに右手をあげ、そこからフックを飛ばし、老人の立つ木に急接近、ゼロ距離で瞬時に作り出したショットガンで身体を吹き飛ばす。

その血をすぐさま可燃性に変更し火を放った。その火が木に移り、周囲が赤く照らされていく。

「人形か」

焼けただけ、千切れたフードからのぞいた顔を確認しショットガンを虚空に還す。

「やはり、戦闘力では格が違いすぎる。流石は彼岸花。一部で伝説とまで言われているだけはある。だが、その強さはどうやって手に入れた？何を犠牲にすればそんな力が入る？」

醜い声が赤く輝く森に響く。火の勢いは止まらないかと思われたが、突然火が消えた。あの老人は結局人形だったという事だろう。再度闇に包まれた森の中赤く染まった

少年の姿だけが浮かび上がる。

「私は知っている。いや、想像出来るといっておこうか！」

「まあ、その想像の通りだろう」

遮る様に告げられた少年の言葉。それは未だに彼を想う少女と本人しか知らない秘密だった。

「まだ、話の途中だが？」

「いや、もう良い。だいたい理解した。それに俺は命令に従い貴様を殺さなくてはいけない。早急にな」

少年は一発の拳銃を闇に向けて放つ。響く銃声に隠れ何も見えない筈の森の奥で1人の男の悲鳴が響く。

「無駄だ、俺も人間では無くなっている！」

森の奥から肉塊が現れる。無論ただの肉塊では無い。少年が仮面の様な無表情を向ける先には醜い獣。身体中に頭皮を極限まで伸ばされ強引に縫い付けられた顔。その1つ1つが虚ろな目をしながらも嘆いている。胸には大量の乳房が、背にはタテガミの代わりに手足が蠢いていた。

「こうなるとマリオネットでも無く、ただの肉塊だな」

少年が無常に言い放った直後、不協和音を生み出す獣の顔達から一斉に純白の糸が吐かれ。少年を捕縛しようとする生物の様に動き出す。しかし、彼は一切動じず、糸に包まれていく。その糸がまるで赤い絵の具に漬けたのかと思われる程赤くなつた後、突然発火し糸が導火線の様に火を伝え、肉塊を焼き上げていく。

人の肉の焦げる独特な臭いの後、残されたのは炭化し何の音も発さなくなつたただの塊だけだった。

「こうも切り札を破られると、自信を失いますね」

燃える糸の中、ほぼ無傷で少年が現れるのと同時に背後から白狼が白狼刀片手に襲いかかる。しかしそれすらも即座に少年の手に出現したメイスによって遙か上空に叩き上げられる。その胸からはサードアイが白狼を見つめていた。

「これも弾きますか。本当に一体何者なんですか？」

「想像がついているんじゃないのか？」

白狼に何らかの手段で取り憑いた糸繰りを見下ろす様にして告げた少年の顔はまるで何か、新しい玩具を見つけた子供の様に、悪魔が目の前に現れた人間で遊ぶかの様に歪んでいた。

「悪魔か何かなんですかね。何にせよ、恐ろしい」

少年の前で白狼が淡々と言葉を紡ぐ。

「悪魔か、そうだな。なら、悪魔らしく殺すとするかな？」

糸繰りが空中に飛んでいった白狼刀に糸を巻きつけ少年を叩き切ろうと自らの指で糸を操ろうとした時だった。

「ア？」

「一体どうしたんだ、糸繰り？」

悪魔、そう形容するのが最も良いと思われる様な笑みで顔を歪ませた少年の手には糸が煌めいていた。

「キサマアアアアア！」

「糸繰りは暗殺の技だぞ？俺が使えない訳が無いだろう」

少年が指を動かすと白狼の身体が持ち上がり。宙に吊られていく。

「そうだ。悪魔から良いことを教えてやろう。お前の取り憑いている

その白狼。どうやら能力持ち。そしてその気になる能力だが道連れにする能力だそう。もし、俺が白狼を殺したらどうなるかな？」

「ならば俺がこの身体を捨てればいいだけの事！」

「何を言ってるんだ？道連れだぞ？お前がどこに逃げようと俺がこの白狼を殺せばお前も死ぬ」

何か、道端にいる虫でも見る様に。彼は突然無くなった表情で語る。

「だが、お前にこの白狼が殺せるのか？お前は俺を追う時に此奴を助けてくれとでも言われたんじゃないのか？いや、もし言われていなかったとしてもお前には殺せないだろう。此奴は何の関係もないただの被害者だ」

まさか殺す訳が無い。どこからその愚かな考えが出て来たのか。彼は少し考える様な素振りをしてジッと取り憑かれた白狼を見据える。

「そうだな。それもそう。だが、俺が躊躇すると思うのか？俺に出された正式な依頼はお前を殺す事だ。俺がどんな手を使おうとお前を殺せば俺の依頼は達成。俺は自由になれる」

「お前は依頼達成のためなら部外者の死は気にしないと？」

まるで人間では無いものを見るかの様な視線が彼に向けられる。だが、彼は全く動じることなく。その無表情を崩さない。

「無論だ。あのオーダーに、部外者を巻き込むなという指示は入っていたか？」

まるで奇妙なものでも見る様に白狼に取り憑いた何かを見る。

「お前。本当に人間か？」

「ああ、元はな」

そう言った口からは笑みがこぼれることもなく。やはり無表情が張り付いている。

「という事だ。死んでもらおう」

暇つぶしは終わった。そう言いたげに息を吐くと手を握る。

瞬間正面の白かった白狼の体が赤く染まる。

「暗殺完了」

そう言つて、物言わぬ白狼に歩み寄る。

「すまないな。俺の力不足だ」

その顔にはやはり無表情が貼りついてるが。その声音はなにかを労るかの様だった。

「大丈夫……です。これで……良かった、これで良かったです。無能……と言われた私が……最後にはこうしてみんなの役に……立てたんですから」

身体中がまるで刃物で斬り付けられたかの様に無残に裂かれ、裂かれた腹からは臓器が顔を覗かせている。そんな状況で何故話するのか。彼には理解できない。

「ああ……私も……役に……立てましたか？」

そう言つた白狼は泣いていた。赤く染まった顔を二筋の透明な液体が血を巻き込み朱色に染まつてから地面に落ち、血の海に消えていく。自らの死が怖いのか？彼は一瞬そう考えたが読心によりすぐさま違ふと判断し、この状況で掛けるべき最適解を導いた。

「ああ、お前は英雄だ。きっと誰も馬鹿にできないだろう」

こんな時の表情はどうすればいいのか。笑えばいいのか？泣けばいいのか？彼にはわからない。死を見る機会は多かった。それが仕事だった。だが、死を看取るのは初めてだ。

「それは……良かった……ああ……こんなことになるなら……伝えておくんだ……」

「遺言か？俺が伝えよう」

もう既に、話す事すらままなら無いだろう。しかし、白狼は未だに口を開く。

「これ……は……私が……伝えないと……ダメ……ですから」

そこまで言い切つて、白狼は口から凝固した血を吐き出した。「だが、もう伝えられないだろ？俺が代わりに」

正面の白狼はそれには答えなかった。目は閉じられ、顔には一筋の涙痕。その顔は何かを果たしたかの様に笑っていた。

「訳が分からない。何故笑っているんだ？」

少年のその疑問は解かれる事なく命の気配の無くなった闇に

吸われて行く。

「お兄さん。一体何してるの?」

そんな時、背後から声が掛けられた。その声はあの男の物ではなく、無垢な少女の物。先ほどの戦闘の後だったからかも知れないが。まるで天使の様な声だと彼は感じた。一層の事、天界か地獄にでも連れて行って欲しいと考えたせいもあるかも知れないが。

「英雄を看取っていた」

そう言っただけ振り向いた先には金髪のもろで精巧な人形の様な顔の少女。だが、人間では無いらしい。背中からは枝の様なものが二本はえ、その下には妖しく輝く様々な色の宝石がぶら下がっていた。服はまるで欧米の姫様の様に豪華だった。

「えいゆう? まあ、いいや。所でお兄さんお名前は?」

「秦 空だ。所で君はこんな夜中に何をしてるんだ?」

「そっか、お兄さんがそうなんだ。新しいおもちゃなんだね!」

おもちゃ、その言葉が聞こえた瞬間距離を取り。短剣を生成する。それと同時に正面の少女の手にも紅く燃え上がる剣が握られていた。

「私はフラン。フランドール・スカーレット、今からお兄ちゃんて遊びま

そこまで言い切らないところで彼は拳銃を撃ち放った。その弾道は確実に少女の心臓部分を貫いた筈だが。血すらも出ていない。だが、確かにあたってはいる様で服には傷が付いていた。

「酷いおもちゃね…。私がたっぷり遊んであげる! 壊れるまでね!」

そう言った刹那少女の姿が掻き消え、背後から少女の物と言うよりか大砲にでも打たれたかの様な衝撃が走り、吹き飛ばされた。抵抗もなく飛ばされた先の木に衝突、鈍い音と共に、骨が数本折れたという確信。

「これ以上骨を折りたく無いんだが」

いつのまにか上空に移動していた少女の顔が狂気に歪んだかと思うと、羽の残像と共にまた彼の背後へ。2度同じ手は食らわず、少年は身体を捻り、背後に短剣を振る。が、リーチのせいか服を軽く

裂く程度に留まった。

「もう見切るんだ！凄いやお兄ちゃん！」

また、姿が掻き消えた。背中の宝石の残像を追うが、今度は羽根の残像が見えない。彼は目を閉じ、音と気配に集中し短剣を身構える。

「アクセラレート……！」

目を開き、正面で紅く燃える剣を振り下ろそうとする少女の姿を捉えると。即座に背後を取り、振り上げられた右手の下に手を通し、左手の補助を入れて首を絞め上げていく。

「覚妖怪が力で敵うわけがないでしょ？」

そう言い放たれた瞬間、細腕にいつも容易く右手を外されてしまった。到底少女の物とは思えない剛力によりそのまま身体を地面に叩きつけられる。身体中に衝撃が余す事無く伝わり臓器を破壊していく。

「化け物かよ……」

彼はこの世界に来てから連戦に次ぐ連戦で満身創痕の身体を無理に起こし、血を吐きながらある決心をする。

「ダツキング・スツール！」

突然、尻をすくい上げる様に現れた椅子に少女は強引に座らされる。危険を感じ、離れようとした時には椅子から突如として現れた鎖によって雁字搦めに拘束されていた。それをすぐさま破壊しようとするがその時には椅子ごと地面に落下していく。何事かと上を向いた時、絶望は訪れた。水がその穴を埋めようと何処からか流れ出していた。ただの時間稼ぎのつもりだった。この程度すぐに破壊されるだろうが、そうすれば逃げながら次の器具を使えば良い。そうして地底まで逃げればまだ希望はある。

「や、やめっ……！」

少女の願いとは裏腹に水は残酷にも穴を満たしていく。その水が少女の足に触れ、染みた時だった。少女を突如火で炙ったかの様な激痛が襲う。足先だけでもこの痛さ、もし水が身体を沈めるまで脱出できなかつたとしたらどうなるのか。そんな不吉な予想が脳裏を

横切る。

「た、助けてー！ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい！」

まるで狂人の様な反応に彼は眉を顰める。しかし、彼は能力を解くことはしない。あれだけの戦力、もし解放してしまえば自分の身が危ない。

「あああああああつ！あああああああ！痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

まるで、拷問を受けているかの様な反応。ここで待っていれば勝手に気絶する。かれはその結果を予測していた。その予測通り、数分も経たぬうちに声は無くなる。

「おい、起きろ」

水を消し、糸繰りの技術で椅子を地面に釣り上げると警戒しつつ涙を流す少女に声をかける。

気絶したと思っていたがまだ意識はある様だ。あれだけの悲鳴をあげたのだから相当辛かったんだろうが、まだ水かさも深くは無かったはずだ。そうなると本当に何故あそこまで悲鳴をあげたのか。そう言えば痛いと言っていた。水アレルギーか何だったのか？

「やめて・・・もう水は・・・」

先程までのあの雰囲気は何処へいつてしまったのか。彼の正面で椅子に拘束された少女はただ、目の前の少年に怯えていた。体は震え、目からは涙が溢れている。

それを見るとやはり中身はただの少女だったと言うことがわかる。例えどんなに強かろうが精神が少女なら話ははやい。

「もう、攻撃はしない。お前がしないと約束出来るならな」

椅子に拘束された少女は潤んだ目で何度も頷き敵意が無いことを表す。それをみた上で更にサードアイを使い嘘ではないかを確認。経験や深層心理を読もうとするがノイズがかかった様な風景しか見れないので諦め、少女に向き直る。

「選択肢をやろう。ここで俺の質問に答えて貰って、家に帰って俺の伝言を伝えてもらうか。俺と一緒に地底に来てそこでゆっくり質問に答えてもらうか。地底に来てくれればある程度の接待は出来るし、

お前が望めば守ってやってもいい」

正直、前者は選んで欲しくない。だが、帰ったところでこの少女を派遣した奴に殺される危険性がある。当然だ、gpsが埋め込まれている可能性もあればスパイになった可能性もある奴をわざわざ置いておく必要はない。

それ位なら殺して死体を何処かに埋めてしまった方がいい。そうすれば情報の流出が最小限に抑えられる。

それに、あれだけの戦力。地底に引き込めれば地底自体も防衛しやすくなる。

「何で？」

「どういう意味だ？」

「私はお兄ちゃんを殺そうとしたんだよ？それを何故逃がしたりするの？」

「そちらの方が俺に利益が出るからだ」

事実、これは慈悲でも慈愛でも恩赦でも無い。ただ、彼にとってこの選択が最も有益であるという判断から来たものだ。

「だって、私は悪魔の妹だよ？」

「お前が悪魔だか何だかは正直興味がない。俺も今さつき悪魔と言われたばかりだしな。何にせよ早く決めてくれないか？」

少女は少し考えた後、口を開いた。

「出来ることは何でもする。だから私をお姉様から守って」

その発言を聞いた少年はゆっくりと頷くと、少女の拘束を解いた。

「契約成立だ。それでは地底に来てもらおうか。付いて来てくれ」

そうとだけ言って、英雄の死体の周りにネリネを咲かせ、飛んでいく。輝く月の下少年と少女は地底を目指し、白狼の死体を囲い咲き乱れる白いネリネは静かにそれを見送るかの様に風に揺られた。

### 39話

### 帰還した少年、寄り添う悪魔

秦 空とフランドール・スカーレットは妖怪の山を抜け、地底へと続く巨大な穴の前まで来ていた。

「お兄様、地底ってどんなところなの？」

これまではお互い無言だったが、それに耐えかねたのかフランが空に声を掛けた。目の前に広がる巨大な穴、いつ見ても中はどこまで続いているのか全くわからない暗闇に支配されている。

「どんなどころ、か。俺もまだここに来て日が浅い、それに地底に住んでいると言っても天狗に拷問されたりとあまり地底に居れなかったからな。着いてからのお楽しみだ」

そういうと、空は地底へと続く穴に飛び込んだ。

「えっ、えっ?!」

命綱もなしで飛行もせず、何のためらいもなく巨大な穴に飛び込んだ彼の後をすぐに追う。しかし、相手は重力により、加速し続ける。いくら吸血鬼のスピードを活かしたところでいつ衝突するか分からない地面の恐怖もあって、追いつけない。

「焦るなよ?別にそんなに急いでない」

その状況に薄々勘付いていたのか、自然落下している彼は大声でフランに声をかける。

「は、はい。お兄様!」

しばらく落下していると到着点が見えて来た。空はいつもより早めのタイミングで飛行に移り、ゆっくりと慎重に下降していく。無論それは傷付いた身体に極力負荷を与えない為でもある。

「お兄様、怖くないの?」

対するフランはかなりの速度で降りて来ていたようで、直ぐに頭上の闇の中から虹色の残像とともに現れた。

「そうだな、怖くはない」

正確には怖がれないが、フランにその事実を伝える必要は無い。何せこの少女は俺に情報を聴き出され、護られるだけの物だからだ。そこに信用も、信頼も互いの過去を知る意味は無い。ただ、こち

らの事を一方的に信用させておけば後々有用そうではある。

「行くぞ、付いて来い」

最低限の言葉を告げ、砂漠の先に見える街へと飛んで行く。想像以上にスピードが出ない。慣れていないという事もあるだろうが、それでも遅い。恐らくは力が尽きかけているんだろう。だが、別にどうという問題は無い。俺は地霊殿に戻りこの少女から情報を聞き出し、楓に銀杏という英雄の話を伝えれば良いだけだ。それが終われば休めるだろう。それに、いざとなればまた感情でも食えば良い。

「お兄様は外から来たんだよね？」

「ああ、そうだ」

無言というのがやはり気まずいのか、純粹に彼への好奇心なのか、またフランが口を開いた。

「外の人はみんなそんな強いのか？」

「いいや、普通は弱い。首を締めても死ぬ、精神を狂わせても死ぬ、四肢を腕いでも死ぬ、血管を二、三個切っただけでも運が悪ければ死ぬ。それほど脆弱だ」

「じゃあ、お兄様は特別？」

「ああ」

そんなたわいも無い話をしてしていると街の付近にさしか掛かった。そこで飛行をやめ、街に入って行く。初めてここに来た時のような視線を周囲から感じる。

その視線が怖いのか、フランが彼の横に縋るように近づいて来た。秦 空はそれを一切気にせず歩みを進める。

周囲の視線に晒されながら歩き続ける。今思えば、初めてここに来た時もそうだった。

「到着だ」

そこに建っていたのはここに来て、住む場所をくれた少女の館。豪邸、というのが相応しいその館は初めて来た時と同じような威厳を保っている。白を基調とした洋風の外見、地上には和風の建築ばかりだったせいか、地上での騒乱のせい、それほど日には過ぎていないはずだがかなり懐かしく思えた。

「空…！」

扉に手を掛け、開けようとした時、扉が突然開かれ。彼に愛を告白した少女が現れた。

「すまない。遅くなった」

無言で抱きつき、彼の温もりを確かめる少女。彼は少し悩んだ後そっと抱き返す。数秒の間続けるときとりは離れ、少し潤んだ目を袖で拭う。それを彼の後ろから見ているフランはまるで性行為でも見たかのように頬を赤らめていた。

「心配したんですよ？私、空が死んでしまつたら… また1人に…」  
「ああ、悪かった。ただ、楓から聞いていると思うが、色々巻き込まれてな。帰るに帰れなかつたんだ」

あえて、暗殺者にあつた事はここでは伏せておく。ここは幻想郷、外の常識は通じない。なら、糸を操る程度の能力を持つ者が居ても可笑しくはない筈だ。今ならそう言う言い訳がつけられる。

「ええ、聞きました。ところで、その子は？」

さとりは彼の後ろで未だに頬を赤らめて居る少女を見つめる。

「フランドール・スカーレットだそうだ。突然襲われたからこれから色々聞き出す」

「フランドール・スカーレット?!」

さとりは目を見開き少女を見つめる。ただ、一方の見つめられた少女は怯えながらさとりの次の発言を黙って待っていた。

「ああ、そうだ。知ってるのか？」

「知ってるも何も、彼女は悪魔の妹と呼ばれる幻想郷でも屈指の実力者ですよ?!それを捕まえて来たんですか？」

やはり、かなりのやり手だったらしい。あの時水に恐怖を覚えなくてはならぬくらい殺されていたと言う確信はある。あの速度、あの攻撃力。種族によってここまで差があるのかと正直驚愕した。あの破壊力はたとえどんなに身体能力を向上させようが、覚妖怪では出せないだろう。それにこの少女はあの戦闘の際に恐らく能力は使っていない。どんなものかは知らないが使われていればここにいる事はなかっただろう。

「捕まえた、と言うよりか降伏してきた。と言うのが正しいな。何にせよ、俺も無事では無いのは事実だ。出来れば早く聞く事を聞いて、休みたいんだが」

流石に、体にも限界が来ているようだ。時々、正面の景色が歪んで見える。先のフランの攻撃によって折れた骨や神経の修復に想像以上に持つて行かれたらしい。やはり、細部まで気を使う変更はまだ燃費が悪いな。慣れれば、楽になるかもしれないが慣れないうちは連発しない方が良さだろう。

「わかりました。続きは部屋で」

やはり、ここは読心を出来るようにして状況を知ってもらおうべきか？いや、それはまずい。さとりには政府に仕えていた時の話ではない。それに糸繰りとの戦闘も見られるわけにはいかない。

前に進んでいくさとりを追いながら対策を考える。ただ、血が少ないせいか頭が回らない。

「お兄様、大丈夫？ 凄い血の匂いがするよ？」

地霊殿に入って数分。後ろを歩いていたフランが心配げに前に入って覗き込んで来た。その特徴的な赤い瞳は不安そうに潤んでいる。揺れる金髪がその瞳を強調し、目を離せなくなる。これも魔力か何かだろうか？

「大丈夫だ、何とかなるだろう」

やはり、限界が近いか。最低限歩ける程度の変更以外は戻した方が良さだろう。

少年が息を吐き、歩く為に必要ではない変更を解除していく。一気に充満する血の匂い。滴り落ちる彼の血が廊下を赤く濡らしていく。流石に気付いたさとりが驚いたように振り向く。

「そんな... そんな傷を負っていたんですか?!」

「流石に、無傷は無理だったと言うわけだ。逃げる事は出来ない拷問、強者との連戦。拷問の傷を治す時、既に変更がままならなくなって来た。活動に必要な最低限の変更以外は見た目だけ変更していた。後でそういつた力についても教えてくれ」

「わ、わかりました。でも今日はもう寝て下さい！」

さとりが目の前で突然満身創痍になった愛しい人を見てまだ涙目になりながら一気に頬を赤らめ、ほぼ叫ぶように言う。目の前まで来ていた部屋に3人が入ったタイミングで扉をしつかり閉めた。「だが、俺が休むとフランの処理に困るだろう?」

喋ると振動で骨が揺れるのか痛みが増す。出来れば話したくないのだが。にしても何故突然この2人は俺を見なくなったんだ?

この部屋に入ってからフランも彼の事を見た瞬間に頬を一気に紅潮させ、顔を隠しさとりと共に壁と睨めっこを始めてしまった。

「あー、なんだ。何があった、何かあるのか?」

少年は不思議そうに壁を向くさとの肩を叩く。驚いたように体が跳ねるが目は決してこちらを見ない。

「貴方、自分の姿をよく見なさいよ」

突然何も無いところから呆れた様な声が聞こえたかと思うとその空間が裂け透けるような紫水晶の様な髪をなびかせながら、この幻想郷の賢者 八雲 紫が現れた。

それを見た少年は、突然現れた賢者には触れず。自分の姿を見たあと、部屋にあったバスタオルを腰に巻きつける。

どうやら、服の変更まで解除していたらしい、破れた服が、辛うじて部分は隠していたもののかなり際どい服装になっていた。

「少しは気をつけなさいよ。もしも今の状況でこの2人に襲われていたら何も抵抗できず犯されていたわよ」

「そんなことしないで!!」

ほぼ同時に2人の少女の鈴のような声が響く。確かに性的な意味合いでなくても今襲われれば抵抗できない事は明白だ。

「ああ、そうだな。頭が回っていなかった」

少年は苦笑いを浮かべ、ベッドに腰掛ける。ベッドに血が付く赤くなるが、仕方が無いだろう。後で変更すれば良い。

壁とのにらめっこを終え、彼に向き直った2人の少女は未だに頬が赤い。

「まあ、それだけの出血をして未だに元気に歩いて動いているのがおかしいのだけれどね」

紫はスキマから全身を出し、置いてあつた机の椅子に腰をかけ、肘を置きながら彼に方に顔だけを向ける。

「能力の乱用だ。実際にこんな怪我していたら動けないだろうさ。あと、頼みがあるんだが」

物珍しいものでも見るように紫の視線が空に向く。

「何かしら。貴方は表立つては居ないけど地上も地底も救つたヒーローだものね。幻想郷の賢者として出来る限りのことはするわ」

「どうやら読心に対しての対策は踏んでいる様で紫の心は一切読めない。ただ言葉とは裏腹にかなり警戒されているのは理解できる。」

「ヒーロー……か。まあいい。俺の頼みは、八意 永琳だったか。そいつに俺の治療とある事を頼みたいのと、地上に俺が避難させた楓という白狼天狗を返す事だ」

楓はここで拒否されても強引に返すつもりだが、許可が貰えるのならもらった方が良い。

「成る程ね、良いわよ。ただ、永琳に関しては条件を付けられても私は責任を取れないわ」

「それで構わない。さととり、楓は何処にいる？連れてきてくれ」

意外にも快諾した。気が変わらないうちに事を済ますべきだろう。

部屋の壁際で話に入るタイミングを失って居たのか。立っていただきとりに声をかける。

「わかりました」

そうとだけ言い残すとさととりは部屋を後にした。そして一人壁際に残されたフランが居心地悪そうにしていたので手で合図をし、横に座らせる。すると彼女は猫のように血で塗れた彼の体に頬を擦り付け、血を赤い舌で舐め取っていく。鋭い痛みが走るが気にしない。

「ところで、何故ここに悪魔の妹が居るのかしら、返答次第では色々あるわよ？」

要は理由次第では殺すという事だろう。それはフランにも伝

わったように横に座る彼の血塗れの裾をキュツと握る。彼の血が付いたせいか綺麗な金髪は彼の血で一部赤く染まっている。

「単純な話だ。俺が地上で襲われた。だからこうして連れてきて誰に、どうして俺を襲えと命令されたのか聞き出そうとしただけだ」

圧倒的な威圧感を出す紫に対し、空は無表情、無感情、まるで人形のように淡々と告げる。それを間近で見ているフランは怯えながら両者の出方を伺っている。

「貴方、悪魔の妹に勝ったというの？万全の状態で無いのに？」

「勝った。と言うと語弊があるな。正しくは怯えさせた。トラウマを植え付けたと言うべきだ」

紫は特に何の反応も示さず、少し苦笑いしながら告げる。

「随分と覚妖怪らしくなってきたわね。それなら近々、血気盛んな吸血鬼一行が来るかもしれないわ。しっかりと接待して」

吸血鬼一行。吸血鬼が群れで襲ってくるという事か？出来れば遠慮したいな。だが、彼はそんな内心の考えは今は置いておく。

「覚妖怪もこの体に何とか馴染んできたからな。だが、接待か。苦手分野だ」

空も苦笑で応じる。知らない人間からすれば彼が感情を失くしているとは全く思えないだろう。それ程までに、出来上がった苦笑いだった。

「まあ、確かに苦手そうね」

「だろう？」

ははは、と空が笑えば紫もふふと瀟洒に笑って返す。お互いにすべき会話を失い、静寂が訪れるがそれはすぐに破壊される。

「空、連れてきましたよ」

扉が開くとそこにはさとりと楓の姿があった。元気そうだ。

正直、さとりが何かした可能性も考えていたが、大丈夫だろう。

「また、酷い傷だね」

楓は少し不安そうに少年を見つめた後、その彼の血を舐め取っている少女を見て目を見開いたが。本心では結局大丈夫なのだろうと思っっていることが少年には筒抜けだった。

だが、事実だ。結局どうにかなる。死にはしない。そして、怪我を治し何事も無かったかの様に復帰する。最後にはこの罪人には最高に見合わない生活に戻ってくる。やはり、罪人は最後には裁かれ、吊られ、大衆の前で憎まれながら、恨まれながら、斬首されるべきなのだ。

「あの時でさえ、それなりに大げが

だっただろう？」

しかし、少年はそんな自分の考えは明かさない。冗談の様に傷ついた両腕を上げ、やれやれとため息を吐く。

「それとーつ、どうしても伝えたいことがある。俺は銀杏を救えなかった。あいつは自らの能力で敵を道連れに死んでしまった。完全に俺の下手際だ。本当に申し訳無かった。と、權といつたか。あの白狼に伝えてくれ」

彼の頭に浮かぶのは、あの白狼。血の海に抱かれ、笑顔で涙を流しながら命の灯火を自ら吹き消した銀杏という白狼。矛盾だらけだった、感情は交錯し、困惑し、混濁していた。今思えば走馬灯でも見ていたのかとも思う。

「銀杏が… そうですね。能力、使ってしまったんですね」

「今回はあいつがいなければ、俺もマズかっただろう。死んでいたかもしれない」

もちろん嘘だ。マズイ訳が無い。いつでも凄惨に、冷酷に、非情に、殺す事は出来た。だが、事実、彼が糸繰りを殺した。親愛なる同族を守る為に、たとえ命に代えても護りたかった家族を守る為に。

俺の様な奴がヒーローとして語られるべきでは無い。後世に語られるべきはあいつの様な者だ。罪人がヒーローなど、冗談にもならない。俺のこれは善意では無い、自らの贖罪のためという私欲を満たすだけの行動だ。純粹に、護りたかったあいつとは違う。

「わかりました。伝えておきます」

「紫、送ってやってくれ」

その回答を聞くや否や、空は紫に先に楓を地上に送ってもらう様に頼む。

「あなたの方が、先の方が良いんじゃないかしら」

当然といえば当然だろう。

特に傷も負っていない者と明らかに重傷の者なら重症の方を先に送るべきというのが一般的な考えだ。だが、彼は読心で楓がここに居にくいという事も分かっている。それに銀杏が死んだと言うことで椀が誰にも支えられず1人泣いている姿を想像している事もわかっていた。

「いや、先に楓を送ってやってくれ。突然ここに連れてきた俺に責任があるからな」

「わかったわ。ほら、白狼天狗入りなさい」

諦めた様にため息を吐くと楓の正面に作ったスキマに彼女を入れた。以上。ただそれだけだった。そうして、空の方に向き直る。

「以上よ。次は貴方ね」

「本当に今ので送れてるのか?」

流石にさとりを目線を合わせ答えを求める。だが、そういえば俺が地上に行きたいと言った時も同じ穴に入られた気がする。

「あら、聞いていなかったのかしら? 私の能力は境界を操る程度の能力。地上とここを繋ぐなんて容易いことよ。次は貴方ね、立てるかしら?」

成る程、まだ3回しか会っていないはずだが。確かにどちらも現れ方が奇妙だった。境界を操れば自分のいる場所から自らの向かいたい場所へ一瞬でいけるといいう事か。その移動をする際に使うのがあの裂け目という事か。

「ああ、立てる。だが、その前に1つ」

空は自らの横に座るフランの脇に手を入れ、自分の膝の上に移動させ、頭を撫でる。

「フラン、お前を派遣して俺を殺せと命令したのは...誰だ?」

頭を撫でられるフランは気持ち良さそうに目を細める。そして、ゆっくりとその赤い瞳を開き、彼を見つめ、特徴的な牙をちらりと見せながら口を開いた。

「それはね。私のお姉様...だよ」

「姉……？」

姉、だから悪魔の《妹》だった訳か。ならば吸血鬼一行と言うのはフランの姉、と父母だろう。だが、それだと……

「あともう一つ。これで質問はおしまいだ。お前は……帰りたいか？」

彼は微笑みながらフランに告げる。それはまるで、聖女の様で、本当の家族の様で。夢に誘う『悪魔』の様でもあった。

向けられた笑み。それはとても暖かくて。優しくて。もしこの人が家族だったらなんて思ってしまう。きつとこの人なら私を閉じ込めたりしない。私を大事にしてくれる。そう信じたい自分がいた。でも、それは危ないと、まだ会ってから1時間も経っていないと、警告する理性がいる。

「私は……」

相変わらず少年は優しい笑みを浮かべている。目が離せない。どうせ戻ってもまた閉じ込められる。それはきつと間違いない。お姉様は、もう私を家族とは思っていない。咲夜も、メイドも、美鈴も、パチュリーだってこあだつて。誰も私を愛していない。

「私は」

理性が、危険だと、何かがおかしいと声を上げる。少年はいつまでも待つとでも言いたげに傷だらけのまま微笑んでいる。

理性が叫ぶ、だつて私はこいつを殺そうとしたんだ。そんなすぐに許すわけがない。これは罠だと、きつと酷い目に合うのだと。

「わ、私……は」

酷い目に合う？でもそれは戻っても一緒。ならどちらに転んでも結局酷い目に合うのなら。お兄様と暮らした方が、幸せかもしれない、それにお兄様が私を酷い目に合わせるという確率は100パーセントじゃない。でも、帰ってしまったら間違いない、酷い目に合う。「ゆつくりと時間をかけて良いんだ。何も今ここで答えを出してくれとは言わない。フランは悪魔の妹と呼ばれているみたいだが、良く考えてみる。ここは忌まれ、嫌われた妖怪が集まる場所だ。地上より、過ごし易いと思う」

お兄様の暖かすぎる一言一言が頭をぐるぐる回る。もう口は閉じているのにまだ話している様な、そんな気がする。優しい、でも何処か違う不思議な感じ。

「お兄様はなんで私に優しくするの？そんな、家族みたいに扱ってくれるの？私はお兄様を殺そうとしたんだよ？」

お兄様はそれを聞いて満足そうに頷く。ただ、その顔はまだ聖母の様に笑っている。まるで全てを許すとても言いたげに、優しく包み込む様な笑顔。

「簡単な事だ。純粹に考えてフランにはこっちが良いと思った、だからここに住まないかと聞いてみたんだ。でも、フランが家に帰りたくなら止めはしない。帰りたいたいと思ったタイミングで紫に頼めば良い。それに、俺を殺せと命令されたんだろ？なら仕方がない。それに命令は基本的に絶対だったと思う。俺は少々経験したことがあるから多少は理解できる」

彼の口から綴られたのは純粹な優しき、それ以外の何でもない。ただ、彼には感情がない。それをフランドールが知る余地はなかった。ならば何故、彼はフランドール・スカーレット、幻想郷で悪魔の妹と呼ばれ忌まれ嫌われ。遂には家族からも暖かさを感じれなくなった少女に地底で過ごさないか？と伝えたか。

それは、単純な話。地底を護りやすくしたかった。それだけだ。彼女は今心が衰弱している。そんな事は読心をせずとも挙動でわかる。そんな精神状態の者に突然頼る当てを渡したら。きつと受け取るだろう。きつと、喜んで継るだろう。眼前に突然たれ下げられた蜘蛛の糸、もう2度と来ないだろうと思えば思う程、心で葛藤が起きる。

きつと理性が言うのだ、いや待て危ないと。

きつと理性が叫ぶのだこれは罠かもしれないと。

だが、これは彼女が酷い扱いを受けていれば、心が弱っていればそれだけ簡単に黙る。感情があれば幸せななりたいたいと思うのが生物だ。酷い状況から脱せるかもしれない。そう思うと状況が酷ければ酷い程、盲目的になる。例え騙されているとわかっけていても、きつと今よりはマシだろうと思うからだ。救われるかもしれないと思うからだ。

「私は…… 帰りたくない……」

目から大粒の涙が溢れる。この判断が果たして正しいのか。

それは分からない。けれどきつと幸せになれるだろうと今よりは楽しく過ごせるだろうと思ってしまった。

「わかった。さとり、良いか?」

さとりは無言で頷く。正直、心からの賛成は得られていないだろう。だが、これはさとりの為でもある。後々伝えればきつと変わるだろう。

「取り敢えず、流石に傷が痛くてそろそろ意識が飛びそうだ。俺は紫に送ってもらう。面会できそうになったら紫に伝えてもらうから来てくれ」

そう言う少年は真横に座っているフランドールの触り心地の良い髪を少し撫でてから、紫の開いた裂け目に向かい、産まれたての子鹿のような足取りで歩き出す。しかし少年はその裂け目の横を通り過ぎると未だに壁よりいたさとりの元へと歩いていく。

「空...?」

足取りからしても既に満身創痍すらも通り越しているのは目に見えている。だが、空はなんとかさとりの元へと歩いて行くと。そのまま抱きついた。

「え...?」

突然の彼の行動に一時的に思考回路が止まってしまう。心臓が跳ねる様になり、音が耳までも聞こえてくる。段々と、頭が回り出し、今の状況を把握してしまい顔が紅潮する。

まるで、それを見越したかの様に空はさとりの頭の後ろに手を回し、そのままさらに強く抱きしめる。そしてさとりの耳元で呟いた。

「その短剣はお前にあげよう。俺にはもう、必要無い物だ。だが間違ってもそれで自分を切らない様にしてくれ、大百足の溶解液が混ざっている」

さとりが予想していた物とは大きく逸れた言葉。もしかするとあの回答をくれるかもしれないと期待してしまった自分が恥ずかしい。

「ありがとうございます。空。すぐに治してくださいね?」

抱きとめる腕を離し、スキマへ向かう空へさとりがまた別れを告げる。

「出来るだけ頑張ろう」

そう言っ、彼は振り返り。さとりに笑顔を向ける。それはまるで幼い少年のもの様だった。スキマに入る直前、彼は指を鳴らし、残された体力でさとりの服に付いた血を水に帰るとそのまま倒れこむ様にスキマの中へ入って行った。

「よろしくお願ひします」

残された紫にさとりが頭を下げる。

それを見た紫は少し躊躇う様なそぶりを見せた後意を決した様で口を開く。

「彼、何者なのか知っているかしら？」

いつか来るだろう。そう思っていた質問だった。無論、さとりは知っている。だが、言うことは出来ない。何故ならこれは彼女だけが知っている彼の秘密なのだから。私だけが知っている彼の大きな秘密。それを知っている時点で、彼は私を手放せない。

「私も知りたくて探ってはいるんですが、どうも掴めないんです」

嘘を吐いた。だが、彼女に後悔や罪悪感はない。何故ならこれは愛しい彼を護るためだから。

残された、数少ない仲間を護る為だから。

「そう。あなた何故、そんな男と恋仲になれるのかしら、他人を疑いやすい気質ではなかったかしら？」

「彼は優しいですから」

たった一言。ただ、それには狂信的なまでの愛が込められていた。初めて優しく接してくれた家族以外の存在。そんな彼を彼女は愛していた。心から。

「そう。じゃあ、面会可能になったら知らせに来るわ」  
「分かりました」

さとりの返答を背中を受け、八雲 紫もスキマへと入って行く。その姿を見送るとさとりはフランの横に座り、談話を始めた。

一方、空は椅子に座らされていた。正面に座るのは相変わらず

奇妙な配色の服を着ている八意 永琳。赤と青のツートンカラーの服を着こなし、艶やかな銀髪は三つ編みで束ねられている。

「取り敢えず寝て貰えるかしら」

スキマから出るなり、彼は血塗れの体で横にあるベッドではなく。彼女の正面の椅子に座らされていた。正しく言えばスキマから出た先が椅子の上だった。

「ああ、すまない」

そう言うと彼は血まみれの体を起こし寝台に横になる。永琳は立ち上がり彼の体を観察し、怪我の状況、深刻さ、どの処置をするのが最善かを考えていく。

「想像以上に酷いわね。取り敢えず能力はもう解除していいわ。優曇華！」

そう呼ぶと部屋の扉が開き、優曇華と呼ばれた者が入ってきた。

「何でしょうか、お師匠様」

まるで高校生の制服の様な物を着こなし、腰まで伸びた紫髪は手入れをされている様でお師匠様と呼ばれた永琳と同様に艶やかだ。しかし、特徴的なのはその頭部から生えた兎の耳だろう。

「急患よ。取り敢えず、能力で痛覚を薄れさせて頂戴、その間にわたしは薬と寝台の準備をして来るわ」

「分かりました」

そう言うと、空の寝かされている寝台に近付き、目を見開く。

「空さん?! 一体何が…」

「鈴仙か、戦闘で無理をしただけだ」

「だけって… 取り敢えず。私の目を見て下さい、多少妙な気分になるかも知れませんが安心して下さい。痛覚を飛ばすためです」

「ああ」

鈴仙の指示に従い、彼は彼女の瞳を見る。まるで紅色の宝石の様な目が妖しく光ったかと思うと彼の体から力が抜ける。

「凄いな、痛みが無くなった」

力が抜けた四肢を広げ、空は口を開いた。その声を聞いた鈴仙

の光が消えかけていた目が見開かれる。

「通りが悪いですね。今度はもう少し強めでいきます」

先程よりも強目に、ただ狂わない様に。そのギリギリを攻めた。本来、患者に対しては使ってはいけない出力だ。目の光は先程より増し、空の瞳に鈴仙の赤い瞳が映し出され、彼の瞳も赤く染まる。「これで大丈夫です。安静にしています」

赤く染まった目を見開いたままの空の頭を撫で、椅子に腰掛けようとした時だった。

「何となく、意味は掴めたがやめた方がいい。催眠術の類は昔から耐性が強くてな」  
「え？」

思わず声をあげてしまった。寝台に横になっっている彼の瞳は未だに赤い。要は狂気は解けていない。ならば何故、彼はいつも通りであるかの様にいられるのか。

「どういう事ですか？」

狂気に落ちているはずの彼からは想像も出来ない程落ち着いた声が響く。

「これ以上する必要はない。麻酔の効果が得られれば十分だ」

そこで彼女は最悪の解答を見つけてしまった。信じたくはない、それにありえる訳が無い。不可能だ。でも、事実それ以外に証明ができない。

「そう、ですか」

これは効いていない訳では無い。効いているけれど効果が無かった。と言うことは、常に狂気に染まっていると言うことになる。そうなれば、狂気は通らない。

いかにも焦っている。何かに怯えている。その様子を見て把握出来ない空ではない。当然のように、胸元に浮かぶ第3の目が彼女を見据える。瞬時に鈴仙の心を読み、一体何を考えているのかを見つけ出す。

「大丈夫だ。狂ってなど無い。安心してくれ、覚妖怪になったせいも随分と精神攻撃に強くなったのかも知れない」

空は当然のように嘘を吐く。正直、強くなってなどいないだろう。もし、強くなっているのだとすれば古明地　こいしが眼を閉じる事はなかったはずだ。

ただ、この回答には決定的な落ち度がある。彼は先程、昔からと言った。その昔からに1週間も経っていない此処で始まって生活も含まれるのか。

「そうですね。成る程」

鈴仙は少々疑いながらもその説明を信じる。当然だろう。正面にこの少年が常に狂気に染まっているなどと考えたくは無。それに、前にも彼とは会っている。その時も異常では無かった。少し薄情だと言う印象は抱いたものの、それだけだ。少し大人びた少年だと思っただけだ。だが、彼女も直ぐには信用しない。彼は外来人と聞いていた。ならば。《何故、これほどの傷を負って気を保っているのか》これほどの出血と傷だ、失神しても、其れこそ痛みに悶え、発狂してもおかしくは無い。いや、そうか。彼が無意識に発狂している可能性もある。そうなれば彼には狂気は通らない。その愚かな考えが彼の嘘を霧の奥に隠してしまった。

「そこまでにしてくれ」

彼女の考察は寝台に寝かされている少年の声によって遮られた。慌てて顔を上げ、師匠である八意　永琳を待つ。

「あまり詮索しないほうがいい。きつと後悔する事になる」

空は椅子に座り、彼に背を向け顔を見せ無い様警戒している鈴仙に忠告をする。

勿論、空も彼女が事の真相。彼には感情がないと言う事には気づく事はないだろうと思っている。だが、それよりも彼が懸念していたのは間違った解釈をする事だ。常に狂気に染まっている可能性があるなどと言うことを広められれば《やはり覚妖怪は狂っている》などと語られ、排除する動きが本格化してもおかしくは無い。

事実、空は既に排除された。今でさえ、覚妖怪は嫌われ、排除対象になっている。そんな所に、狂っているなどの噂が流れれば間違いない《大衆の正義》の名の下に処されるだろう。異端は死を望まれ、

消えることを望まれ、民衆の前で吊る事で王は支持を得る。これは、昔から一切変わらない。人間の罪悪の1つだ。

いつの時代も、罪なき異端は排除され、排斥される。ただ、異端というだけで。なんの罪も犯していない。何の危害もこちらからは加えていない。ただ、平和に、自由に、平穩に生活を送っている。それだけだというのに、ある日突然、《大衆の正義》が危害を加えにやってくる。抵抗すれば、やはり此奴らは危険と吊るされ殺される。なにもしなければ、一方的に、凄惨に、嘘を吐くまで拷問された末、殺される。ならば逃げるしかない。だが、逃げた所でやはり奴らに罪悪感があるから逃げるのだと謳われ。止まることはなく《大衆の正義の名の下》殺し尽くされる。

人間は、人間の惨めで、愚かで卑劣、他に害をなすその本質は石器時代から一歩足りとも進歩していない。

相変わらず無言の2人の空間を裂くように、扉の開けられる音が響く。

「優曇華、麻酔は終わった?」

扉を開け、籠を持った永琳が現れる。籠は手作りなのか、少々不格好だが役割は果たしている。

「はい、終わりましたが、痛みのせいですかね。意識は落ちませんでした」

「まあ、その傷の量ならわからなくも無いわ。取り敢えず手術室まで運んでくれるかしら」

淡々と、告げられた鈴仙は能力の効かない覚妖怪の寝かされた寝台を押し、部屋から出る。

「そうだ、あともう一つ頼みがある」

突然、空が口を開く。

「何かしら?」

「x線検査をして欲しい。どうやら戦闘で体内に金属片が入ったらしい」

「わかったわ」

ただ一言、そう返すと木の扉を押しあける。

そこに広がっていたのは外の世界にもあるような手術室だった。薄暗い室内にスイッチの音と共に明かりが灯される。

「ここを使うのも久し振りですね」

「ええ、最近は平和だったものね」

ただ、今の言葉が信じられないほどに、嘘だと主張するように部屋には埃の一つも落ちていない。

彼女はまるで、シャボン玉でも手に取るように慎重に持ち上げ彼を手術台へと移す。

「服を切るわ。構わないわね？」

「ああ」

彼の反応の直後、鈴仙と永琳は彼の赤く染まった服を傍らに置かれたハサミを使い切り取っていく。

「これは……」

そこに広がっていたのは、桜色の肉、空の能力によってなのか、妖怪としての治癒力の所為か。彼の出血は完全に停止し、その傷を塞がんと無色透明の汁が染み出している。ただ、どれも酷い傷ではあるが、古傷も混ざっているようだ。

「優曇華、貴方は私の助手をしてちょうだい。まずは彼をうつぶせにして」

「了解しました」

彼をうつ伏せに返すとそこに広がっていたのは更に凄惨な傷跡、皮膚は原型を留めないほどに細かく引き裂かれ、その傷がまるで何かに焼かれたように一部白くなり、肉が剥げ落ちたのであろう場所には筋肉が露出していた。肋骨に繋がる辺りには丸太にでも殴られたかのような打撲痕が広がっており凹み過ぎている。臓器も無事では無いだろう。それに加えて彼の能力で強引に作られた筋肉のみがほぼ無傷で、かえってこの状況の異常さを物語っている。

「この傷……臓器は無事なの？」

「まあ、何とかと言った所だろう。だが、臓器は俺が何とか出来る。もつと言えばこの傷も万全なら変えることが出来るんだが、消耗が激しくてな。不完全になるだろうと覚悟しながらやった結果がこれだ」

敢えて、どんな能力を持っているのかについて彼は公言しなかった。だが、これでも永琳には傷の修復では無く、自然治癒力をあげてくれということの旨は伝わっていたようだ。

「これは彼の妖力回復を急ぐのが最善手ね。取り敢えず、今から妖力を直接薬を使って上昇させるわ。ただ、かなり副作用が大きいわ。覚悟はあるかしら？」

「ああ、無論だ。だが、この傷がある間にレントゲンにかけて、体内の金属を確認して取り出してくれ」

特に副作用を聞くこともなく、空は傷では無く先に体内にあるであろう金属を摘出してくれと依頼した。

「能力で何とかならないのかしら？」

「位置がわかれば問題ないだろうが、位置が分からない。そんな無茶苦茶に体内を変更すると壊れかねないからな」

うつ伏せになりながらまるで、肉塊のような状況の少年は淡々と話し続ける。やはりこの覚妖怪は常軌を逸している。そう思うが、事実彼の依頼は理にかなっている。

彼が体を変えてしまえば彼の体に埋められていたであろうgPsがまた肉と皮膚の下に埋まってしまう。そうなると、今度はメスを入れる羽目になる。

「わかったわ。優曇華、X線投射の準備をするわよ」

「わかりました。師匠」

そう言うと、鈴仙は手術室の奥から白い機械を引っ張って来る。その瞳は彼をしつかりと見つめている。

「随分としつかりとしたものがあるんだな。外から持ってきたのか？」

彼の前に出されたそれは相当忠実に作られたX線照射器だった。白い機体にX線を放射する為の照射器が取り付けられている。

「いいえ、私の自作よ。多少の素材は外から貰ったけれどね」

「成る程、よく出来ているな。これ以上起きていると手術にも支障が出そうだな。ここで眠っておく。摘出した金属は後で俺に見せてくれ。じゃあ、頼んだ」

そう言う少年は意識を切断する。流石に今回は無理をし過ぎたのか。少年の技術力の高さか。数十秒も経たぬ間に寝息をたて始めた。

残された鈴仙と永琳は目を見合わせると息の合った動作で次々と施術を始めていく。その中で寝息を立てる彼の寝顔は極々普通の少年のものだった。

## 41話 選択

空は、何も無い世界で眼を覚ます。色彩も無く、物体も無く、音も無く、色がない故に距離感が狂い、物が無い故に何の為に生まれた世界なのか分からず、音が無い故に残酷なまでの寂しさがある。無論、生物もおらず。動くものは自分のみ。

そんな世界を彼は一人で歩き出した。足元を踏みしめても音はなく。声をあげても虚空に消えていく。

「やあ」

そんな世界で彼は突然声をかけられた。

誰もいないはずの世界。振り向くとそこには黒い外套を纏い、仮面とも言い難い黒い何かを身に付けた男が立っていた。

「お前は、誰だ？」

「俺はユウ」

仮面の男は静かに答える。表情は全く分からない。

「此処はどこだ？」

「此処は君の心象世界。私は君にお話しに来たんだ」

移り変わる一人称。話し方も声色も固定されていない。その為、年齢も、性別も判断出来ない。

「話？」

「そうよ。何一つ恐れることは無い。怯えることもねえよ。ただ一つだけ」

警戒の為、短剣を作り右手に握る。

「恐れるなど言っただじゃねえか。まあ、良いですわ。言いたいことはたった一つ。申し訳ないが、幻想郷をこれから訪れる悲劇から護れ。その為ならば自分を含む一切の犠牲は仕方がない」

「了解した」

気づけば勝手に口が動いていた。彼にとって、拒否はあり得ない強制的な命令。彼はまた、いつかのように跪き指示を受けていた。

「あと、テストをしよう」

「テスト？」

「そうですね。非常に簡単なテスト」

そうとだけ言い残すと、世界が揺れた。純白の世界に次第にヒビが入り床が崩落する。足元にあったのは無限の闇。純白とは真逆の全てを吸い込む漆黒。

空は無抵抗にその中に落ちていく。

気づけばまた白い世界にいた。ただ、違うのは白とは別の色があること、目の前にはこの空間を嘲笑うように赤い何かで文字が書かれていた。

《正しい判断を》

ただ、それだけ。

少し経つと、その文字の下に扉が生成された。彼は無言でその中に入っていく。

その先も白い空間。ただ、そこにもまた物があつた。

二つの船の模型とテレビ。なんの前触れもなく、テレビが機械独特の音を立てたかと思うと砂嵐を少し起こした後、ユウを映し出した。

「君は船を直すことが出来る唯一の人間だ。右の船には100人、左の船には1000人の人間が乗っている。だが、困った事に二つの船が同時に座礁してしまった。今から急いで救急隊が向かうが、此処は太平洋のど真ん中。着いた頃には船は海の底だろう。船から落ちればそこは海、勿論助けられなかった方は皆死ぬ。だが、助けられる力を持っているのは君一人。しかし、君の力では片方しか助けられない。さて、どうする？君が助けられない方の船を今手に持っているナイフで破壊してくれ」

そういうと、テレビは突然プツリと音を立てて落ちた。残されたのは二つの模型と、空のみ。

彼は一切迷うこともなく、右の船に短剣を突き刺し、地面に叩きつける。すると、コミカルな悲鳴が響き、壊れた模型から赤い液体が噴き出す。その噴き出した血を彼は浴び、赤く染まっていく。

「正解だ。次の部屋で会いましょう」

何処からか声がしたかと思うと、正面の白い壁に音もなく扉が

あらわれる。

空は赤く染まったまま、次の扉を開く。あつたのは黒い十字架と地球儀。十字架には傷だらけになり、頭には荊の王冠、手足に杭を打たれたさとりが吊られていた。

「では、次の質問だ。彼女はこの世界を滅ぼすウイルスを持っている。もし、彼女を放置すれば地球上の生物は皆死滅する。だが、君がそのウイルスに感染する前に彼女を殺せば地球は救われる。さあ、どうする？」

空はゆつくりと十字架に吊られたさとりに歩み寄る。

「空：…ですか？助けてください、私は何も、何もしていません！彼らが勝手に、また私を殺そうと…！いつも彼奴らは、何もしてないのに。何もしてないのに！」

「ああ、わかっているよさとり。彼奴らはそういう奴らだ。全くもって許せない。ごめんな」

空は微笑むと、短剣を持った腕を深々とさとりの胸に突き刺す。肉の切れる独特な音と共に鮮血が噴き出す。

「え…なん…で」

胸から血を吹き出しながら涙を流すさとりはまるで信じられないとでも言いたげに驚愕を浮かべる。

「即死出来なかったか。妖怪は難しいな」

対する空は短剣をさとりの体から強引に抜くと、腹に突き刺し引き裂く。ブチブチと肉の避ける音が響く。

「アアアアアアアアアアツ！痛い、痛い痛いイタイイタイイタイツ！なんで、なんでツ?!」

引き裂かれた腹から生々しい臓腑が零れ落ち、地面に果実のように、生まれたての胎児のような生々しきで転がる。

「何故か？この世界の全ての生物と1人の命を天秤に掛ければどうなるか、わかるだろ？」

例え、その1がどれだけ大事な者だったとしても。どんなに愛しい者だったとしても。彼は根本的に感情がない。それ故に全ての状況において、論理的な判断を下すことが出来る。彼にとってその1

は一でしか無く。それ以外はどれだけ憎かろうが、どれだけ妬ましかろうが、どれだけ邪悪であろうが。それもまた者でしか無い。

100人と1000人。ならば当然1000人を取る。1人と全生物、ならば尚のこと全生物を取るだろう。それならば、世間は彼を非情だと貶すだろうか？ いや、恐らく世間は彼を持って囃すだろう。我々を救った英雄だと。だが、それは真実だろうか？ 万人にとつての英雄などいない。見捨てられた100人は彼を赦すだろうか？ 殺された1人は彼を赦すだろうか？

当然許せないだろう。悪人にとつての英雄とは正義の英雄と敵対するものであり、世間にとつての英雄とは、自らを含む大多数を救った者だ。自らが救われる対象から外れれば当然英雄などとは思うことはない。

「呪つて…やる…いつか必ず…殺してやる…！」

口から血を零し、臓腑がほぼ抜け落ちた腹を開いたままさとりは恨みに身を任せ、口を開ける。滴り続ける血が白い世界に大きなシミを作り上げていく。

「ああ、それで構わない。お前には俺を呪う資格も、殺す資格もある。俺は、それを理解した上で全ての行為に望んでいる。どこまで行こうが、どんな関係を持つのが、どんなに想いを寄せていようが。俺は全てに無情に判断を下す。それが俺の生き方だ」

ピンポーン

まるで、クイズ番組で回答を出したような。その答えの意外性を笑うようなコミカルな音が響く。

「いやはや、素晴らしいね。流石だ。合格だよ。そんな君にちよつとしたプレゼントを贈ったよ。枕元を見てみるといい。ただ、極力使わない事をオススメするぜ？ イヒヒ」

悪魔のようなと表現するのが一番似合うであろう声をあげ、彼の後ろにユウが現れる。

「あまりにもつまらないな。久し振りに時間を無駄にしたと思ったよ」

「そんな事は無いさ、取り敢えずワタクシにとってわね。それでは、サ

ヨウナラ。また会いましょう?」

「拒否する」

彼は当然だろうとでも言いたげに首を振り、物言わぬ肉となつたさとりを見据えた。その瞳に後悔はなく、懺悔もない、例えるならば道端の石でも見るかのよう。

そんな彼の足元が割れ、暗い底に落下していく。先程の世界とはうって変わり。そこには闇が広がっていた。夜目がある程度は効く彼でも全くもって何も見えない。光の概念を失った世界。自らの手がどこにあるのかも分からず。叫んだとしても闇に吸われるだけだろう。

「成る程」

彼は能力で即座に発炎筒を作り上げると。キャップをひねり、マッチの要領で点火すると地面に転がす。その行為を4回ほど繰り返し四方に灯をともし、周囲を確認する。深い闇の中から中から照らし出されたのは山の様に積み上げられた死体だった。死体はどれも首から上がなく、ある者は吊られ、ある者は手足があらぬ方向に曲げられ、ある者はどうすればそんな風になるのかと疑問に思う程に綺麗に皮を剥かれていた。その他にも大量の変死体と言わざるおえないものが転がり、人の数十倍はあろうかという歪な山を複数個築いている。

「ここは一体…:」

周囲に転がる死体を漁り、何か本人を特定できそうな物を探す。しかし、どれも損傷が酷く、9割が身ぐるみを剥がされた後に放棄されているため、全く判断がつかない。そして死体の数が余りにも膨大すぎる。山の上部に向かうにつれて死体の損傷は悪化しており、最早原型すら留められず、赤黒い肉塊となっている。そんな山の中の一つの頂に登り、最後の肉塊を漁り終えた時だった。彼の頭部に何がぶつかり、山の頂から転がり落ちかける。彼は反射的に右足を前に出し、半ば強引に肉塊に埋めることで転倒は防ぐ。

(なんだ…?)

彼はその疑問を解消するため、右手に懐中電灯を作り上げ、上

を照らす。そこには大量の生首が釣られていた。ある者は目を抉られその空間に男性器を植え付けられ、口内に目を移植されたのか口から大量の目がまるで虫のようにこちらを覗いていた。ある者は顔の皮膚を剥がされ、そこに人の指が縫い付けられている。ある者は強酸か強塩基の液体に付けられたのか顔の過半数が溶け落ち、残ったわずかな肉が何とかへばりついていていた。

どの首にも共通して言えるのが、原型をとどめていない事だろう。一体どのような神経をすればこんなに行為が出来るのか。そう思う程に悲惨な首が人間の尊厳を踏み躪られ、遙か上から吊られている。

「良い趣味とは… 言えないだろうな」

常人では失神しかねない様なそんな状況で、彼は腰を下ろす。手近にあつた顔中に歯を埋め込まれた生首を一つ強引に引くと、生々しい音と共にズルリと脳が抜け、脳だけが吊られた。彼は手の中にあるの生首を観察すると、回し、触り、死後の概ねの経過時間を確認しようとする。だが、彼は息をつくとその生首を山の頂から投げ捨てる。今思えば、全てが可笑しかった。これだけの死体だ、虫は湧かないにしてもひどい悪臭はする筈だ。だが、それが無い。と言うことは、此処には時間の概念が存在しないか、空気が無いかと言うことになる。ただ、そんなことはあり得ない。この事から此処は夢の中だろうと判断できる。

それに気付いた瞬間、視界が明るくなったかと思うと、木製の天井が現れた。胸元には何か生暖かいものが乗っている感覚。ゆっくりと下を見るとそこには見舞いに来たのであろうさとの無防備な幼さを残した寝顔があつた。

「やはり夢だったか…」

だが、もしも夢でなかったとしても俺はきつと同じ選択をしただろう。その言葉を胸にしまい。彼は胸元のさとの頭を愛しそうに撫でる。

「…ん… うん…」

さとりもそれが心地良い様で、顔を少し綻ばせると猫の様にそ

の手に縋ってきた。

だが、今はあのような選択の状況も、選択を強いられもしない。此処にいるのは、意味もなく迫害され、恐怖に怯え、大切な妹をほぼ失ったとも言える。孤独な少女。もしこれが、神が彼に与えた慈悲だとしても、はたまた罰だとしても。

彼は今、平和に暮らせている。多少の戦闘はあるにせよ、多少の死人は出るにせよ。それは自らの意思だった。彼女は、生きる価値のない、存在の意味のないと思っていた少年を、初めて家族として扱い、初めて大切な者として扱い。彼にとって初めて恋慕を抱いた妖怪だった。

「なんで、俺なんかを愛するんだよ…。」

深い眠りにについているのか、そんな彼の小言は彼女の耳には入らない。ただ、何も言わず、彼に無防備に寝顔を見せて眠っている。それを見た彼は溜息を吐き、また眠りに落ちた。

## 42話

### 贖罪譚

目を覚ますとそこには木製の天井。そういえば、誰に邪魔されるわけでもなく、自然に目を覚ませるほど眠れているのはここに来てからだ。外では平日は学校に一般人と共に行っていた。無論、学校の人間に彼の本職は一切告げられていない。

ただ、家族を失った一人っ子と説明されていたはずだ。学校の無い日は、政府の人間の車に乗せられ体のメンテナンスを行われていた。それが終わって、家に帰れば武器のメンテナンスがあった。その時の彼は政府公認の暗殺者だったため、警察からのお咎めは一切なく。家の地下は武器庫のようになっていた。RPGから手榴弾、拳銃、狙撃銃まで、彼が必要だと告げれば政府から自衛隊の武器が少々彼の身体に合わされた状態で送られてくる。彼は暗殺者といえど身体は小柄な少年だ、その彼が妖怪の力も得ていなかった外にいた時は当然使用できる武器にも限りがある上に多少の大きさの調整が必要なものがあつた。

「空… 起きたんですね。体は大丈夫ですか？」

彼は体を起こし、少し体を動かすことで身体に痛みや違和感のない事を確認すると、少し伸びをした後さとりの方に体を向ける。どうやら、先に起きていたようで、さとりは病室に設置された椅子に腰掛けて座っていた。

「ああ、大丈夫だ。ところで、俺はどれくらい眠っていたんだ？外は夜のようにだが」

「今日が2日目の夜です」

彼は頭を抑えると、一つ大きなため息を吐くと。体を動かす上で少し邪魔な包帯を気体に変えていく。

「まだ、安静にしていして下さい！あれだけの怪我なんですから…と  
りあえず永琳さんに目を覚ましたと伝えてきますね」

そう言つて、部屋を出て行こうとするさとりの後ろ姿を見  
て、彼は反射的に声をかけてしまった。

「なあ」

「どこか痛いんですか？」

「いや、一つ聞きたいことがあるんだ」

部屋を出ようとするさとりを引き止め、彼はさとりをベッド  
に腰掛けさせる。

「何故、俺の事を愛するんだ？家族として大切にするんだ？どんなに  
俺に愛を伝えても、どんなに大切な者として扱っても俺はそれを一切  
返せない事をお前は知っているはずだ」

さとりはそれを聞くと、なんだ。そんな事かとてもいいいたげ  
にクスリと笑うと。彼の目を見据え、語り出した。

「確かに、知っています。でも、私にとって貴方はそれでも私は貴方を  
愛したいし、家族として大事にしたいんです。何故なら、貴方が初め  
て私の能力を恐れなかった人だから、初めて私を守ってくれた人だか  
ら…。。恐れる事が出来ないんだと、そう言われれば、ただの恩返し、  
そう言われればそれだけかもしれません。でも、それでも凄く…嬉  
しかったんです。他の妖怪には、人には一体どれだけ恩をうっても返  
してくれませんから。逆に恩を返したいから家に来てくれと言われ  
てそのまま陵辱された事もあります。それ程までにこの能力は恐れ

られているんです。私も心を閉ざそうかと考えた事も何度かあります。でも、それをしてしまえば、こいしが孤独になってしまう。残された唯一の家族を自ら置き去りにする事は絶対にしたくなかったです」

さとりはこの場にはいない筈のこいしを見えているかの様に、窓の外に広がる世界を眺める。

そんなにも辛い過去があつたなんてと、そう告げることは彼には出来ない。彼に同情は不可能。何故なら、もしも自分が同じ境遇だったらどれだけ辛いだろうか？という思考が出来ないからだ。どれだけの状況に陥ろうが彼は何も思わない。ただ、淡々と受け入れるのみ。

「だが、生まれてからずっとその扱いを受けてきたなら。お前も感情がわからないんじゃないか？お前の今抱いている感情は恋なのか、それとも別の何かなのか」

彼はまた、さとりに問いかける。確かに、それだけの境遇なら、絶対に他人を好きになることなど出来ない。恋をするだけの心の余裕も無いだろうし、してしまつた後、その対象がどうなるかなど。考えずとも想像に容易い。

「そうですね。私も最初はこの感情が恋だとは思っていませんでした。最初は尊敬だろうと、そう思っていたんです。でも、時間が経つに連れてそれは違ふとわかつてきたんです。何故なら、

何故か、さとりはそこで言葉を切り、空のベッドに腰を掛け、靴を脱ぐと、空を押し倒し、その上に馬乗りになる。

「貴方にあうたびに、慣れないお洒落をしてみようと思つたり、少し派手な下着を着てみようと思つたり、胸が痛くなるほど高鳴つたり、そ

れに

そこでまたさとりは言葉を切ると、彼の顔に近付き、その唇を強引に奪った。さとりは顔を赤らめながら目を瞑り、キスを終えると小悪魔の様な笑みを浮かべて彼を見下ろす。

「こんな風に、少し淫らになってしまいますから」

そのキスを受けた空は特に何も言わず。状況を整理していた。正直、上手いとは言えないキス。ただ、それにはこれまで感じたことのない暖かさがあった。

「そうか、なら俺も少しは答えてみようか？」

空はそういうと、馬乗りになっているさとりの首に手を回し。体を起こし、顔を極限まで近づける。

「何を…？」

「いや、何でもない」

空は頭を2、3度おおきく振り、体を捻るときとりの位置を入れ替え、寝台から立ち上がる。それを見たさとりは不安そうに口を開く。

「まだ寝てて下さい」

空と位置を入れ替えられたさとりも寝台から立ち上がり、空の手を取り、彼を引き止める。

「本当にもう大丈夫だ」

少し笑顔を浮かべながらさういうと、空は枕元にあつた紙袋に手を伸ばし、何の躊躇いもなく乱暴にこじ開ける。

「なにがあるんですか？」

「薬だな。恐らくは」

紙袋に手を入れ、その中に入れられていた透明な液体の入ったボトルと、それを打ち込む為にあるのであろう傷ひとつない注射器を光に晒し、不純物の有無を確認する。

「貰つておくか」

「永琳さんが置いてくれたのでしょうか？」

空は、さとの読心に警戒しつつ夢であろうものに出てきたユウを思い出す。彼は確かに枕元にプレゼントを置いておくと聞いていた。ただ、それが本当に置かれていたとなると、あれは夢では無かったという事になる。そして、何よりも危惧すべきなのは。ユウは空が昏睡状態の時に枕元に物を置けるほどの距離にいたという事だろう。

「まあ、そう取るのが無難だろうな」

「それは、本当ですか？」

さとりから返つて来たのは想定外の答え、訝しげに彼の瞳を覗き込むさとの目に、曇りは無い。

さとの読心に対する警戒を一瞬でも忘れるような失敗はしていないはずだ。ならば、なぜバレたのか。いや、これは鎌をかけて

いる可能性もある。

「なんで、そう思う？」

妙に時間を開けるのも怪しまれる。という事で、バレかけている理由を模索しながら彼はさとりに怪しまれないであろう問いを投げ返す。

「人は嘘を吐く時癖があるんです。ただ、外見上のもものでは無いんですが。心が妙にブレるといえるか」

「成る程、ある程度読心の警戒はしても心の挙動程度なら見えるか」

空は無感情に告げる。そこにはやはり怯えもなければ恐怖もない。

「気味が悪いでしょう？これが覚妖怪です」

自嘲気味な笑みを浮かべながらさとりは言い放つ。

確かに、驚異的な能力だ。これで腕力まで強ければ本当に対抗勢力がいなくなるほどに強力だろう。

「1つ俺からも伝えておこうか。折角さとりから愛の告白を受けたんだからな。俺も少しぐらい語ってもいいだろう。俺の思いという奴を教えてやろう」

自らが言ったことだが、当の本人に面と向かって言われると流石に恥ずかしいのか、さとりは少し頬を紅潮させながら少し真面目な表情になる。

「まるで、俺がお前を気味悪がって逃げるんじゃないかと思っただけだよ。それは無いとここで言っておこうか。確かに、最近さとり

の近くに居れなかつた事は悪いと思つてゐる。ただ、少し考えてみてくれ。俺には感情が無い。という事はだ、全てを論理的に、一切の情を挟まず考えられるという事だ。そしてお前は俺に住む場所を提供してくれた。なんで態々お前から離れて自分で暮らそうとするんだ。例えさどりの読心で俺の過去がバレるなんて事は正直既にどうでも良い。それに、警戒さえしていれば同族なら読心は防げる。ということだ、お互いにある程度のプライバシーは守られるわけだ」

そこで空は一息吐くと、さどりの手を取り戸を開け、部屋を後にすると空高くに飛び上がる。背中に視線を感じたが、恐らく見なかつた事にいしてくれたのだろう、追ってくる気配も声もかけられない。一直線に迷うことも無く夜空へ、眼下に広がっていた竹林は気づけば暗闇に紛れ形を失い、空の灯りが近付いてくる。妖怪の山と竹林の先には明かりが灯っているがそれすらもすでに星の様に小さく輝くのみ。

「空をこんなにしつかりと見たのは久しぶりです。夜はどれだけ経とうがこんなにも綺麗なんですわね」

星のような輝きに囲まれ、さどりはいつか見た景色を眺める。それを共に見る空は何も言わず、そつと夜空に手をかざし、目を閉じる。

「続きを話そうか」

手を下ろし、さどりを見つめ、ゆっくりと目を開く。

「1つ忘れていたようだが、俺も覚妖怪だ。経験は浅すぎると思うが、それでも、同じ種族なんだろう？なら、感情の無い俺が言うのもアレだが、お前を苦しませたく無い」

さどりは冷静に状況を判断していた。感情が、ブレている。読心

の警戒はしているようだが、少しおかしい、初めて会った時には、最後に会った時にはこんなブレはなかった。

「それは、告白として受け取っても良いですか？」

「駄目だ。俺にお前を愛する資格は無い。愛されるのは仕方がないだろう。だが、俺は罪人だ。到底許されるべきではない。せめてもこの罪を贖い終えてからにしてくれ」

「では聞きます。何処まですれば、あなたの罪は贖い終わるんですか？」

「やはり、嘘が通じなくなってきたいな」

空は少し悲しそうに笑うと。さとりの手を両手で強く握る。

「何処までもだ、きつと満足する事は無いんだろう。どれだけ贖っても俺の罪自体は消えない。永遠に残り続ける。まるで火傷の跡のよう」

「なら、もう良いじゃないですか」

「良くないさ。俺が殺した者の中にはきつと、愛する人がいた者も居たはずだ。愛しい家族が者も居たはずだ。その全てを奪った俺に、それを手にする権利は無い」

無駄な事だとはわかっている。例え、そんな事をして俺の罪が消えるわけでは無い。当然だ。だが、それでも気休め程度にはなる。

「贖罪…：その為なら自らの全てを捨てれますか？」

「ああ、捨ててみせよう。全て、この命すら。この呪縛から解かれるなら」

「人に不幸を与え続けたなら、それだけ他人を幸せにすれば良いじゃないですか。幻想郷に来て、何人の人を救いましたか？感謝される事は素晴らしい事だと、気付けたんじゃないですか？」

空は口を閉ざす。

思わなかったわけでは無い。事実そう思った事もある。だが、そこには死があった。人を救う為に人を殺した。そうして感謝されたところで、救われた側は幸せになったかも知れない。だが、殺された側にも家庭が、仲間がいただろう。この世界に、絶対的な正義は存在しない。一方を幸せにすれば一方が不幸になる。まるで天秤の様に。

「だが、俺は……」

さとり腕を引かれたかと思うと、強く抱きしめられる。

「もう、良いんですよ。貴方は充分過ぎる程に自らを傷付けた。もう、幸せになっても良いんですよ」

おかしい、何かが頬を伝って落ちる。雨でも降っているのかと思いい、空を見上げるが、星の輝きがぼやけて見えるだけで、雲一つない。その何かが、さとりの肩を濡らしていく。

「ああ、なんだよこれ。おかしいな、感情は無かったんじゃないのか？」

さとりも何故か泣いている。いつからだったか、読心の警戒を忘れてしまっていた。きつと、過去を読んで、俺と同じ経験を体感したんだろう。バレたくないことまで、全てバレてしまった。面白い話だ。

感情のなかった少年が、忌嫌われた少女と出会い。感情を取り戻す。こんなにもありきたりな、まるで何かの物語の様なことがあるだろうか？

「私と一緒に始めましょう。貴方の贖罪譚を、どれだけ時間が掛かったとしても私は貴方の側にいます」

空もゆつくりとさとりを抱きしめる。さとりの少し、甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

「ああ、負けたよ。俺の負けだ。どうか、その物語が終わるまで、俺のそばにいてくれ。俺も、お前の側に居続けよう。終わりの時まで」

闇に包まれた空の中、抱き合う2人の妖怪を。星々は祝福するかの様に見守り続ける。だが、地上の光はもう寝る為か消えていく。

ああ、やってしまったと。自らの信じた贖罪の形を捨てた少年は苦笑いを浮かべ、涙を流す。対する忌嫌われた少女は、幸せそうに笑いながら涙を流す。これから、どれだけ残酷な未来が待とうとも、この制約は2人を縛る。ああ、それはそれは滑稽で、残酷で、愉快で、愚かな。あまりに寛容なこの世界に沿った出来すぎた話。

## 43話 平和

あれから、既に数日の時が経つ。彼の傷は完全に癒え、今となっては妖力の回復を待つのみとなっていた。

「妖力の回復といわれてもなあ。今だに妖力というものを実感したことがないからよくわからないんだが…。」

生い茂る竹を見上げながら、うつろはさとりと談笑している。

「確かに、そうですね。うつろは弾幕ごっこせずに純粹な力で戦っていましたからね…。」

要は脳筋であったと言う事を暴露され、うつろの顔が軽く歪む。言われて嬉しいものではない。

「名前、本当にそのまま良かったですか？私が考えることも出来ましたけれど」

うつろは、あの夜空で誓った後。名前を古明地 うつろと言うものに変えていた。さとりは秦 さとりと名乗りたいと言っていたが。まずまずそれは偽名であり、本当の名は無いと告げ。古明地の姓を空が貰い。さとりやこいしに習い、うつろとひらがな表記に変えることで落ち着いた。

「いや、突然名が変わると周囲が困惑するだろう？だから平仮名に戻すだけで良かったんだ」

それに、と言って。付け足そうとしたが、敢えて飲み込み。言わなかつた事がある。さとりはネーミングが壊滅的だった。地霊殿にいた際、歩いていた犬のネームタグにわんわんと書いてあった時には衝

撃を受けた。たしかにわんわんで間違いは無いが、それを名前にするかと言う話だ。その勢いで名前をつけられれば何が起きるか。うつーの様な、聞き返したくなる様な名前が付けられかねない。

「今、凄く失礼な事考えてないですか？」

「い、いや。そんな事は無い」

気付けばさとりが進行方向に立ちふさがり、頬を膨らませながらサードアイと共にこちらを見上げていた。まるで、子供の様な仕草に少しの違和感も感じないのはその風貌の所為だろうか。

「嘘ですね」

「聞くと傷つくからやめておけ」

腕を振りながら苦笑。なんでも無いさとても言いたげにはぐらかす努力をする。

平和な、あまりにも平和な日常。笑い合う人がいる事も、自由に外を歩く事も、昔では考えられなかった。俺の様な罪人が、こんな日常を過ごして良いのかと、未だに悩むが。さとりの幸せのためだと、他人の幸せの為だと思えば、それも贖罪だと。そんな、利己主義的な考えが、贖罪意識をかき消していく。

「そんな変な名前にはしませんよ！」

「例えばどうする気だったんだ？」

「そ、それは… うつつーとか」

「やめてくれ…」

全く嬉しくは無いが、勘が当たった。うつつーと言う名前の人間は聞いた事がない……。なにかのゲームのキャラのニックネーム的な感じならば許されるだろうが。本名にするのは流石に駄目だろう。

「もう存分にいちやついた？」

迷いの竹林と呼ばれるここの散歩にはやはり妹紅が居なければならぬらしく。先程から、ずっと前について居たが特に何も言っていない。後ろを振り返る。

「い、いちやついてなんかいませんよ！」

さとりは顔を真っ赤にしながら、否定するが、説得力がまるで無い。そういえば、さとりは、あの告白を俺が受けてからと言うもの、よく笑うようになった。いや、笑うだけでは無い。様々な感情が表に出て来ている。

「そうかい、そうかい」

そうして、苦笑しながら正面に向き直った妹紅が突然片腕を広げうつろとさとりを制止する。

「おい、どうした」

何があったのか不思議げに前を見ようとするとさとりを制し、少し屈んで妹紅の視線の方向を見る。そこには、四つん這いになって何かをしている人間型の者の姿があった。

「様子を見てくる」

そうやって、四つん這いになっている何かに向かっていく妹紅の服の袖を引き、引き留める。

「いや、俺が行こう」

「私は不老不死だ。あれが何であつても絶対に死なない」

「いや、不老不死であつても、洗脳は効くだろう？ いざという時に相手が不老不死では分が悪過ぎる」

突然うつろの口から発せられた洗脳という言葉に、妹紅の顔が引き締まる。確かに洗脳ならば不老不死は関係ない。だが不老不死というのは死なず、年を取らないというだけで。決して無敵という訳ではない。精神はあるし感情もある。そのため精神を病み自殺しようとしても死なず。人形のようになっていた時期もあつた。大切に思っていた人々が、寿命で死んでいく中、私一人取り残される。それを味わいたくないがためにこの竹林の中で今は他人との関わりを可能な限り遮断している。

「さとりを頼んだ」

そういうと彼は四つん這いになっているナニカに近づいていく、気づけば片手にはデザートイーグルが握られている。

即座に発砲可能な状態で作り上げたため、トリガーを引くだけで辞書一冊を優に貫通しうる銃弾が硝煙と共に敵対するものを貫く。勿論、一発でどれだけ強靱な人間でも死を迎える。

「おい、どうした？」

四つん這いになっているナニカは全く反応示さない。先程の距離では聞こえなかったが、咀嚼音が聞こえる。一体何を咀嚼しているの

か。

「おい、聞こえないのか?」

既に距離は5メートルを切った。銃を構え、いつでも発砲可能な状態で近づいて行く。どうやら頭を下げて、犬のように何かを食べているらしい。肉を千切る音が聞こえ出した。

「こちらを見ろ」

その直後、銃声が響く。鼻につく硝煙と、目を焼く銃口炎、腕をおりかねない反動が彼を襲うが、妖怪と化し身体が強化された彼には問題ない。

一方、それを始めて目にし耳にしたさとりと妹紅が背後で息を呑んだ。彼が、威嚇で撃った銃弾は近くの竹の根元に直撃し、土埃をあげていた。

「ああアaaaaa?」

流星に背後を振り返ったナニカの口とは真紅に染まっており、目は赤く充血し、口からは血の混ざった赤いよだれが垂れている、見た目は完全に人間だ。そしてその足元には人間の少女、喉が裂かれ、乳が食い千切られている。

「kokkokkokkokkokkokoolioos????su」

突如右手を振り上げ、彼に奇声をあげながら飛びかかる。振り上げられた右手が突然肥大化、木の幹にも匹敵するかの様な大ききになり、地面を叩き周囲の竹を揺らす。

「妹紅!動くなッ!」

瞬発的に彼を助けようと動きかけていた妹紅を、うつろは制止。瞬間、4発連続で発砲音が竹林に響き、平穩を破壊された鳥たちが四方へ何の統率もなく飛び去っていく。その中で、ナニカは、器用に両手両足の付け根を撃ち抜かれ、まるで皮膚が糸の様に何とか繋ぎ止めてあるあまりにも滑稽な姿で仰向けに倒されていた。息をつく間もなく銃口を額に合わせトリガーを引く。装填されていた銃弾が、圧倒的な反動と共に火薬で一氣に加速し、額を貫き地面に脳漿をぶちまける。そのまま銃口を下ろし左右の胸に一発ずつ撃ち込み、完全に絶命したのを確認。

「妹紅、こいつは妖怪か？」

妹紅に振り返り、拳銃を下ろした瞬間だった。背後で食われていたはずの少女が突然動き出し。突如体から生やされた棘が、うつろの体に突き刺さり、直後その棘の中から何かが侵入してくる感覚。

半ば本能的に短剣を作り、刺さっている棘の部分を乱暴に切り裂く。肉が少し抉れた気がしたが気にしてはいられない。そのまま背に棘を残し妹紅の所まで下がる。

「すまない、気を抜いた。棘を抜いてくれ」

行くぞ？という確認の後、棘が引き抜かれる。鋭い痛みが走るが、特に問題は無かった。即座に、損傷した部分を正常に変更していく。

「傷が…」

目の前で起きている現象を信じられないとでも言いたげに、さとりが呟く。

無理もないだろう。側から見れば、傷が跡形も無く消えたように見えるだろう。覚妖怪に超回復は備わっていない。どちらかと言われ

れば回復が遅いほうに分類されるだろう。

「能力の応用だ。心配するな」

「能力は超回復？」

妹紅が少し警戒しながらうつろに、声をかける。表情と声色には出していないが、覚妖怪の前では無意味。だが、その感情は見なかった事にした。今はそれよりも優先されるべきことがある。気づけば、少女だったものは膨張し、黒い塊となっていた。そのナニカに対し、うつろは短剣を投擲、宙で回転しながら凶器が塊に触れた瞬間。シャボン玉のように破裂し、赤黒い水が地面を穢していき、その中から完全に少女の形を失ったナニカが現れる。それは産まれたての胎児の様に地面に伏していたかと思うと、赤黒いものを滴らせながらゆっくりと立ち上がる。両手は黒く変色し、死神の鎌のごとく艶のある凶器に変貌し、首は異常に引き延ばされ重力に耐え切れなかったのか、前に垂れている。頭部と思わしき場所には黒髪が垂れ、その隙間から赤い複眼と、人間の口がのぞいている。足は人間だったころの面影か、二息歩行だが、重さを支え切れていないのか、骨が肉を割いて露出し、そこを筋肉が覆っている。

「化け物だな」

ちらりと後ろに目をやると、さとりが地面にへたり込んでしまっていた。恐らくは、読心をして痛みを悶えるあの少女を見てしまったのだろう。まるで、凌辱された聖処女のように自らの腕を抱え込んでしまっている。その横にいた妹紅は眼前で起きている事態を信じられないのか。口を開けて放心している。

「妹紅」

返答なし。

「妹紅ッ！」

怒号にも似た声を上げ、妹紅を現実世界に引きずり戻す。逃げるにしても、戦うにしても妹紅には意識を保ってもらわなければ困る。幸運か不運か正面の化け物はまだ、こちらに興味を示してはいない。だが、時間の問題だろう。いざ、戦闘になった後に他人をかばいながら戦える相手ではないと気づいてもそれは意味がない。まだ、この元少女がどれだけのスペックを秘めているかわからない。警戒は最大限に、考えられる可能性はすべて考慮する。

「ごめん、逃げる？」

「いや、恐らくこいつは殺されるか何かで感染するんだろう。ここで誰かが食い止めないと恐らく村に降りて状況が悪化する。さとりを連れて、永琳に状況を伝えてくれ。俺も後から追う。もし、俺がこいつに喰われたか、感染していると判断した場合は、殺してくれ。死んでいたらすまなかつたと伝えておいてくれ」

さとりは未だに震えている。この声は届かないだろう。無論、死ぬ気はないが。念には念を入れることに越したことはない。

「気を付けて」

「ああ、行けッ！」

その声に押されるかのように、妹紅はさとりを抱き上げ竹林の中を走っていく。それに反応して異形が鎌首を上げ、追いつがろうとする。だが、その行為は失敗に終わり前に倒れこむ。

「俺が相手だ」

地面に寝たまま顔を上げその顔についた紅い複眼に正面に立つ小さな少年を映し出す。

「んんんんんんんんんんん?」

声を上げ、黒い鎌を振り、少年を切り裂こうとするが、次は視界が封じられる。いったい何が起きたのか。理解が追いつく前に激痛が走る。目が見えない、視界が封じられたのではない。複眼が、彼の手にした銃に撃ち抜かれ、鮮血を噴き上げている。すぐさま回復し、視覚を取り戻すが、そこにすでに少年の姿はない。刹那、腕の関節部分から先が切断される。背後を振り向いた瞬間、そこには銃を二丁両手に構え、待つていたかのように目の位置に置いてる少年。危険だと判断し、ちぎれた腕を戻すまでの時間を稼ごうと後ろに飛ぶが、それすら見越されていたのか、足元にピアノ線が張られており、またしても転倒。視界の端で少年が両腕を引いたかと思うと関節部分にピアノ線が滑り込み、両足を切断。接近を拒むために、回復した両腕を振り回す。周囲に立って竹がまるで冗談のように切り裂かれ、様々な方向に倒れこみ、地面は抉られる。そんな中で少し感覚が違うものを切り裂き、液体状のものが付着し、勝利を確信し回復した足を使い立ち上がる。

「ははははははhahaha」

周囲にもたらされた、圧倒的破壊を目の当たりにし、満足そうに雄たけびをを上げる。だが、自らの鎌の手入れを始めたときに異変に気付いた。味がおかしい。鉄の味がしない、あの血液の味が全くない。初めて感じる味だった。これが妖怪の血かと自己解決し、手入れを続行する。手入れを終え、先に逃げたあの妖怪を追おうと竹林を歩き出す。そんな畏敬の背後から、金属音、その後ポンという軽い音が

響いたかと思うと。爆炎に身を包まれる。

「は？ハハハハhahaあつい、あついアツイアツイ!!」

身もだえしながら、鎌を振りまわし、火を消そうと試みるが全く消える気配がない。自らの体が焦げていく感覚。周囲に焦げ臭いような酸っぱいような独特な臭いが漂う。そんな中、一瞬見えた黒い影に、口を開き、針を突き刺す。しかし、刺さった感触がない。

「対策しないわけがないだろう？やはり、異形になっても焼かれた後のおいが変わらないあたりそこまで大きな県下ではないのか」

針がしまえない、そう思った時にはすでに遅く、火の勢いが収まり少しずつ視界が開けたときそこにはマッチをもった少年の姿。そして、少年の周りに突然水が現れる。刹那、体が内部から爆裂、周囲を巻き込みながら、竹を焼き、地面には肉片が飛び散り、その中に水から解放された少年が降りる。重力に逆らえなくなった水が触れた地面の温度とつりあおうと、蒸発していく。

「まあ、この程度か」

周囲に散乱している肉片を確認し、自らにできた裂傷痕を能力で消し去っていく。一通り傷を治し、永遠亭を目指そうと歩き出した時だった。背に激しい痛みが走る。声もあげれずに蹲り、血を吐き出す。

「なんだ？ナンダ？」

思考が定まらない、目の焦点が合わず世界が歪む。激しい頭痛、腹痛、体中の筋肉が、臓器が悲鳴を上げる。

しかし、それは数秒後に嘘であったかのように消えた。能力の副作

用を疑ったが、それならば天狗の拷問の際に起きるはずだ、あの時の方が確実に無理をしていた。となると、考えられる可能性は一つ、自らが感染した可能性。だが、それならばこの姿を保っていられるわけがない。先ほどの少女の様に異形と化すはずだ。となると、感染までに必要な量を入れられる前に、切り取れたことにより奇跡的に回避したか、根本的に免疫を持つていたという二択になる。だが、外の世界であるような症例は見たことがない。となると、やはり前者だったと考えるのがいいだろう。どちらにせよ、感染は回避できた。

「こんにちわこんにちわコンニチワ、こんコンコンニチわワ？ w a w a ?」

咄嗟に背後を振り返り、目が追いつく前にデザートイーグルを発砲。銃声が轟き、対象を四散させる。だが、それはミスだった。四散し、周囲に飛び散った破片が蠢き、個々に動き出す。

「次から次へとッ！」

周囲の温度を強制的に上昇、竹が炭化し周囲が自然発火する程の高温。その中で、破片が干からび、完全に生命活動が停止したのを確信した後に解除。直後、背後から蜂独特の羽音。背後に振り返り、長剣に変更したデザートイーグルで眼前に迫っていた毒針をいなし、胴体を二つに切り裂く。蜂の顔に付いた人間の目が驚愕に見開かれ、そこに長剣を突き刺し、確実に命を刈り取る。

「さとり…！」

突然妹紅の向かった方向へと走り出し、両の手にはデザートイーグル。彼を止めようとするかのように飛びかかり、斬りかかる虫が次々に硝煙と共に血飛沫をあげ、断末魔と共に命を散らす。全ての銃弾はまるで吸い込まれるかのように急所に撃ち込まれ最低限の労力で最

大限の破壊をもたらしていた。やがて、正面に虫の群れを見つけ、両手のデザートイーグルを巨大な鎌に変更。走り込む勢いで独楽の様に1回転、周囲の虫が一瞬にして二つに裂かれる。間髪置かず鎌を消し、気色の悪い声をあげながら前方に行進する群れに破碎手榴弾を3つ投げ込み、妖力を使い飛翔。肉片の雨の中を虫の体液で染まった竹をかわしながら前へと進む。

前方で紅炎が空を焼いた。

「そこか」

一気に速度を上げ、両の手にデザートイーグルを作り直す。その足に、何かが絡みつき、彼の四肢が地面に叩きつけられる。突然の攻撃を受け身も取れず、血を吐き足に絡みついた蔦を切り裂き、傷を元の姿に変更し、無かった事に。正面に立つ、人間の顔面を最大限大きくし、その口をウツボカズラのように抉り深くした状態で極端に小さな足で歩行して居る異形を睨みつける。言葉もなしに、髪が突如として異常な成長を遂げ、彼の四肢を拘束しようとするが全てが無駄のない短剣の動きで切り裂かれると、一瞬で異形に肉薄。四肢を切り落とす。

バランスの取れなくなった体が倒れ込み、ウツボカズラのように発達した部分からこぼれ出た液体が肉の焼ける音を発しながら本体を溶かしていく。

それには一切目もくれず、彼は繰り返して爆裂する紅炎に向かい駆け出す。

「耐えてくれよ」

脳の回転速度を2倍、心拍をそれぞれ2倍にし一気に遅く見える様になった世界を神速にも似た速度で駆け抜ける。

一瞬で妹紅とさとの姿を捉え、必死に光弾を放って抵抗するさとりと爆煙を吹き上げながら不死鳥を身に纏い、敵を焼き払い、前線を守る妹紅の姿が目に入る。だが、人間の胴体を強引に伸ばし、大量の

腕と足が百足の様に生え並んだ巨大な異形に苦戦していた。

「妹紅、さととりッ！伏せろ！」

その声に気付き、うつろの姿を見て目を見開いた妹紅が一拍遅れていたさとりを押し倒す事で伏せる。

怒号にも似た声を聞き、こちらに気づいた百足の異形が人間の歯が歪に並んだ百足らしくない口を打ち鳴らしながら向いた瞬間、彼の手から何かが放られ、口の中に吸い込まれていく。うつろはそのまま百足の横を走り抜け、妹紅のとさとりの居る場所に滑りこむと、周囲を巨大な石の壁で覆い、左手に握ったボタンを押し込む。

刹那、爆音と激震が簡易シエルターと化した場所を襲うが、シエルターには奇跡的に爆風も超高温の熱波も侵入せず、3人の身を守りきる。

周囲からの音が静まったのを確認し、能力を解除。人の肉の焼ける酸っぱい様な臭いが3人の鼻腔を襲う。地面は深く抉られ、上部が吹き飛ばされ、爆発しきる事が出来なかった百足の下部分が地面に倒れ、未だに燃える荒い断面からは人間の赤い血が転んだコップの様に溢れ続け、未だに残った手足が痙攣を続けている。周囲の竹は大変が爆風によって地面に倒れ伏し、熱波で炭化した表面には大量の肉片と人体の一部が付着、閑静だった竹林をキャンバスとして、まるで前衛芸術の様に色とりどりに彩っている。

その中で、うつろは能力による心拍、脳の回転数を元に戻す。異常なまでにさえわたっていた脳と軽すぎた体が大きな変更の影響で悲鳴を上げるが顔色一つ変えず、さとりの手を取る。

「さととり、地底に戻るぞ。嫌な予感がする」

さとりの手を引き、空を飛ぶ。さとりはただでさえあの少女だったものの感情をみて精神に重大な傷を負ったが、それに追い打ちをかけるように異形の群れ、そして前衛芸術じみたあの死体の山。さとりは

覚妖怪である故にあの量の敵、それと戦うとなればサードアイを使わざる終えなかつただろう。一人であれだけのダメージを負つたのだから、あの量ともなれば心への負担は計り知れない。しかし、サードアイを閉じていないのは俺との約束があつたからだろうか。何にせよこれ以上の心へのダメージは絶対に防いだほうがいいだろう。地底も安全とは言えないだろう、だが地底の住民は自分たちが忌避されていた事もあり、あの異形が現れても警戒しない可能性がある。そうなれば感染者が出ることは必至だろう、それに加え地底の住民は同じような境遇の者が多いこともあり仲間意識が非常に強い。感染者を殺せず、その元住民によつて感染者が生まれる。そうなれば即座に地獄が具現することは想像に易い。間に合えばいいが、間に合わずすでに感染者が出ていた場合は、俺が殺すことになるだろう。となれば、地底の住民は異形への理解が浸透するまで戦力としては期待できない。

俺が全ての異形を殺し尽くさない限りは事態は収束しない。幻想郷を、地底を、さとりを守り切ることはできない。例え、この身が異形になつたとしても、覚妖怪に対しては同族意識も薄いはず、躊躇いなく殺せるだろう。それに、異形となる過程で、間違いなく庇われている感染者を殺すことになる、そうなればその家族から間違いなく恨まれるだろう。それならば、尚のこと殺すはずだ。感情は単純で明白で、悪意ある感情は一人の妖怪などすぐに殺すことだろう。

未だに、放心状態で虚空を見つめているさとりの手を彼は愛おしうに、存在を確認するように少し強く握ると。地底への穴へ向かつていく。

俺に下された命令は、幻想郷を己がどうなろうが護り貫くこと。俺の生死は関係ない。この問題を解決したときに、俺がここを護る側にいるとは正直…… 思えない。そうなれば、さとりはどんな感情を抱くのだろうか。だが、護り切つた世界の住民に、愛された人に殺されるという筋書きは俺にはふさわしいかもしれない。

これは全人的な英雄の英雄譚ではなく、あまりにも大きな罪を背

負った少年の贖罪譚なのだから。

## 44話

### 異形

さとりの手を引き地底への穴を下降していく。空が遠くなり、地底の生暖かい光が勢力を増していく。

「さとり……大丈夫か？」

先程の爆殺現場からここまでの間、やはりさとりは気を失ってはいないものの、自我を失っている。此方が語りかけても返事はなく。何処かを虚ろな目で見つめている。

今考えると。あの爆殺の影響だろうと思う。もし、異形になることで生命力も見た目の生物レベルになるというなら。虫によく似たあの異形達はあの爆撃で即死しなかった可能性はある。まだあの体人間だったか妖怪だったかの意識があれば、自らの行動に対し激しい嫌悪を覚えるだろう。例えば意識がなかったとしても、走馬燈が流れればその情報量は計り知れない。そう考えるとサードアイを閉じられていないだけまだ状況は悪くないだろうか。

なんにせよ、さとりを庇いながら地霊殿に向かう他ない事は確かだ。地底が襲われていなければベストだが、最悪の事態を想定しなければならぬ。地底はすでに陥落、勇儀が異形になっている可能性もあり得ないだろうか。

穴を降りきり、地面に着地、これからは飛ばず歩いて向かう方が得策だろう。空中ではもしも飛行が可能な異形がいた場合。地面の異形と空中の両方に襲われかねない。一人ならまだしも、今はさとりを庇いながらの戦闘。あまり過激な動きはできない。

うつろは足を止め、さとりを背負い、ロープで固定。なすがままにされるさとりはあつという間に彼の背に負ぶわれ、しっかりと固定される。さとりを背負ううつろの両の手には二丁のデザートイーグル、弾の装填は能力で行われる為、必要はない。左右の腰には短剣を皮製の鞘に入れて納める。右の太腿にはSMG11というサブマシンガン。それなりの重装備をし、その場で軽くジャンプ。重量を感じない

事を確認すると地面から約5センチ浮上。能力でさとりを覆い隠せる大きさの薄茶色の迷彩柄のフード羽織り、息つく間もなく最高速で地底の街へ向かう。

遠目からでも黒煙が上がっているのが見えるあたり、既に状況は良いとは思えない。

「ねえ?」

声をかけられ、背後を振り向くと。そこには闇があつた。第六感が危険を伝え、瞬間的に銃口を向け闇に発砲。奇声をあげながら倒れる異形の足元から無数の針が飛び出す。上空へ飛ぶ事でそれを間一髪のところまで躲すが、空中も安全ではない。黒煙が上がる町から黒い塊の様な異形の集団が向かってきている。

まさか既に町は異形に食われ尽くされたのかとも思えるような量の異形。これだけの量が一体何処から沸いたのか。このまま、町に帰っても既に異形の手に落ちていけば。ただ餌を連れて肉食獣の巣に入る事と変わらない。

(地底に帰ってきたのは失敗だったか?)

もし地上にいれば、まだ生きている妖怪もいた。そいつらと手を組めば抵抗のしようはあつたはず。

だが、俺の様な最近来たばかりの顔の広くない覚妖怪が来たところで信用はされず。騙されて餌にすらされかねない。となれば、やはり。まだ住民が生きていることを信じるしかない。

デザートイーグルを腰に納め、RPG7を肩に構え前方に見える異形の群れに標準。弾頭は対戦車弾。それだけの威力があれば確実に殺しきれるだろう。

「ファイア」

引き金を引く事により、強烈な反動と共に弾頭が射出。硝煙を吹き上げ、空を切りながら異形の群れに衝突。大規模な爆発と共に砂漠に様々な色の花が咲き乱れる。

しかし、全てを殺しきるには至らず、殺しきることのできなかったものが一齐に飛来。各々が何処かを損傷、欠損しているがそれでもなお。眼前の抵抗する餌に襲い来る。

だが、その料理にありつく事はなく全ての異形は頭部に穴を掘られ地面に落下。その振動に反応し、大量の針が異形を貫き絶命させていく。

うつろは周りを見回し、一通りの異形の殺害を確認すると、再度街へと飛行。本来ならば全滅を狙いたいが今は妖力の温存が最重要事項だ。もし、妖力が切れればさとりを連れて逃げ切る事は限りなく不可能に近くなる。飛ぶ事は出来ず、武器を作ること出来ない。あの異形の群れに短剣1本では太刀打ち出来ないだろう。

「邪魔だ」

街から異形が一匹。飛んでくる。ただ、小山かと作家葉ほどの巨体には一切の羽毛は生えず。その代わりに羽の様に人間の指が生え並び、眼球からは腕が生え、その腕の先についた指に眼球が並ぶ。嘴は無く、開け続けられた口の中は人間の顔面が限界まで引き伸ばされた状態でひしめき合い、各々が怨嗟の声をあげながら涙を流し、口内に残る肉片を貪っていた。足は不恰好にも2本の人間の足。

「ああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアア！」

咆哮により、大地が震撼し口内から食べカスが地面に撒き散らされる。その揺れを餌と勘違いしたのか砂漠のあちらこちらで棘がまるで芸術の様に生え並ぶ。

「全滅が見えて来たな」

手元にあつたRPG7を通称スティンガーと呼ばれる対空ロケットに変更。独特な左側についたサイトを覗き込み、狙いを定める。引き金を引き、即座に装填された2発目も続けざまに射出。異常なほどの速度で接近していた異形の口内に2発の着弾を確認すると同時に、砂を偏向する事で作った簡易的な防壁を正面に作り。正面から四方へ飛び散る爆炎と爆風、肉片を防ぐと変更を残したままその壁の横を抜け町へと飛行。

(残り半分、と言ったところか……)

妖怪の山での一件の後から多少は妖力の使用可能量もわかって来た。だが、まだ町までは半分もいっていない。このペースで敵と遭遇するととなると妖力が持たないだろう。敵を引きつけながら逃げる事も念頭に置かなければならないだろう。いざとなれば、異形の感情を読むのもありだが、さとの状況を見るに極力避けた方が良い。

そんな時だった、突然足になにかが絡みつき、地面に引き摺り下ろされ、足が砂に埋められる。地面に足が埋まる一歩手前で状況を判断し、さとのとの接続部分の変更を切り、人1人入れる大きさの鉄製のボールでさとりを防衛。砂の中に手を入れ足に絡んだ何かを切断しに掛かる、切断しようとした瞬間待っていたかのように、一気に胸まで砂に埋められる。ここに棘を生やしている異形がいなかった事を幸運に思うのもつかの間、太腿になにかが刺される感覚。針は大きく無く、外の注射器程度の太さだろうか。地上で刺された時とは何かが違った。直後、なにかが流し込まれたかと思うと体が痺れ始め、危うく頭まで砂に飲み込まれかける。それをとっさの判断で開いた腕で回避するが、それでも良いと判断したのか下半身に大量の針が刺される感覚。

奴らの今わかっている性質上、この後なにが起こるのか。それを予想した瞬間抵抗を強めるが。麻酔と思われるものが差し込まれた身体は無様にも全く力が入らず。次の瞬間流し込まれた大量の十二カ

を受け入れてしまう。

「お……い……」

「じ…よ…うだ…ん…じゃ…ねえ…」

30秒が過ぎたあたりだろうか。抵抗を嘲笑う様に流し込まれた大量のナニカが身体を回り始める。心臓が狂ったようにリズムを奏で、体が熱を持つ。通常の熱さを通り越したそれは悪寒となり襲いかかる。いまだに体に力は入らない。さとりを入れた鉄製のボールは砂漠で転がっている。さとりは無事だろう。

「お兄様ッ！」

さとりが無事だっただけでもまだ良かったとかんがえはじめたそんな時だった、確実に終わったと確信した瞬間うつろ以外の周囲の砂が突然消滅、足元に現れた異形が姿を見る事もなく突然無残にも爆発。砂の上に投げ出された下半身は真っ赤に染まり、注入途中だったのだろうナニカが溢れ、砂を濡らしている。

だが、助けられたのは良かったが。身体は異常を告げ続け、視界が紅く染まり始める。身体中の血管が浮き出し、体がむず痒くなり始める。次々と始める異常にもう長くは持たないという確信を得た。

「さとりを連れて逃げろ。フラン」

「間に合わなかった…？」

そこにいたのは服を真紅に染め、不安そうに目には大粒の涙を浮かべる吸血鬼の少女、フランドール。所々が破け、出血しているところを見るとあちらも状況は良くないらしい。今、かなりの戦力であるはずの彼女が居なくても持っているという事は勇儀や他の地底の主要

メンバーも無事と考えても良いだろう。

「さとりを連れて戻ってくれ！」

能力を解き、鉄製のボールからさとりを外に出し、フランがそれを抱える。先程よりも幾らかマシになった身体を起こし。デザートイーグルを両手に持ち、立ち上がる。

「でも…それじゃあお兄様が！」

「踏ん張って見せる。早く行け」

不安そうではあったが、それ程危篤では無いのでは？と思う程の彼の言動と行動にフランは騙されさとりを連れて妖力を一気に解放、瞳が真紅に染まったかと思うと一瞬にして赤い残光を残し、姿が消える。

前方には、既に異形が群れを成し未だに抵抗する傷ついた餌を喰らわんとゆつくりと距離を縮めている。目につくものだけでも、100はいるだろう。この量がそのまま町に流れ込めばすでに疲労している町の住民が処理しきれるとは考えにくい。そのうえ、いま目の前にいるものだけで全てでは無いはず。妖力も足の回復で既に2割あれば良いほうだろう。

状況は絶望的としか言いようがない。だが、彼に与えられた命令は、【自らがどうなろうと】幻想郷を護り抜くこと。

うつろに空を見上げるが、そこに空はない。月もない。太陽もない。星もない。視線を下ろし、漆黒の外套を纏い。腰から下げた銃を地面に置き、左手に銃、右手に短剣を持つ。当然今、この瞬間も十二力による浸食は進んでいる。長くは戦えないだろう。

「約束は、命令よりは弱い」

まるで、自らに言い聞かせるように囁くと。短剣を逆手に持ち直し、異形の群れに歩み寄る。

身体中に悪寒が走り、動くなと脳が危険信号を出す。それを無視。視界が常に赤く染まる。砂漠はいつしか赤土の様に染まり。異形の目は色を失う。体から流れ落ちる血は、赤土を湿らせるのみ。

## 45話 黒いサードアイ

空に赤い残光を残し、フランは吸血鬼の能力をフルに活用。さとりを運ぶ。さとりは未だに自我を取り戻せず、虚空を虚ろな目で眺めていた。

無論、フランドールも今のさとりが正常ではないということは気づいている。

僅か数秒、その間に地霊殿に到着。開け放たれた窓から中に入り、さとりを寝台に寝かせると。すぐさま門の前へ、そこでは既に戦闘が始まっていた。

「お姉さん、どう?」

「少し厳しいね。流星にこの量で、相手はまだ増えるんだろう?」

そこにいたのは、勇儀。後方からはヤマメ、お隣などが援護で弾幕を張り、キスメは桶を落とし敵の動きを一時的に止め、弾幕が当たりやすいように調整している。その一度動きが止まった者達をお空の手に装着された多角柱の制御棒から発せられた最大火力の熱線が薙ぐ。

「その心配はないわ。兄様が、砂漠で1人で…」

「空が帰ってきたのか! 一体どれだけの量を相手にしているんだい?」

「少なくとも200」

勇儀の表情が暗く曇る。正面から回転しながら一直線に突っ切つて来たダンゴムシの様な異形をフランは片目で睨むと、手を握る。すると即座に肉片になった異形が臓物を散らせながら余力で横の家屋

に直撃、赤いシミを残す。

もう一匹の同様の異形は正面から勇儀の正拳突きを受け、その場で爆散。臓器がとび散り赤い大輪の花が咲く。

「勝てそうだったかい？」

フランは少し黙ると静かに首を振る。

「今は、あいつに任せよう。こちらから救援に人を出す余裕はない。事実、お前さんを送った後、前線をかなり下げた」

フランは今の戦場を眺める。所々に死体が転がり、家屋は破壊され、わかりにくくはなっているがたしかに前線はさつきより。家で言えば、3つ程下がっている。勇儀の体もかなり傷ついている。それに加え、こちらの人数の消耗が激しすぎる。今は、弾幕が撒けているから敵が一気に入ってこれないだけ。弾幕も無限に撒けるものではない。もしも妖力が切れ、弾幕が止まれば一気に流れ込んでくるだろう。そうなれば、もう終わりだ。お兄様が倒れるまでに今町にいるものは全て倒しきるか。お兄様が全てを倒しきり、協力に入ることしかこの状況を打開する策はない。けれど、お兄様は感染寸前だった。足止めになるかどうかすら怪しい。

「どうしたんだい？」

勇儀は、包帯を傷口に巻きながら何かを必死に思惑するフランに声をかける。

「もし、お兄様が感染したら。どうなるかしら？」

これは、最悪のパターン。それは分かっている。だが、それも想定

しなければならぬ状態だったのは確かだ。

「わからないな。私もお嬢ちゃんも鬼だった。全力を出したはずだ。それなのに勝てなかった相手が。理性を失って強化されて来るわけだ。下手をすれば幻想郷が終わるだろうね。でもまあ、あいつのことだ。そう簡単には逝かないだろうさ」

包帯を巻き終え、勇儀は前線に向かう。

「どうでしょうね」

今、この場で既に感染寸前などと告げるのは。この場にいる全ての妖怪の戦意低下に繋がる。ここでは伝えられない、何よりもそれをお姉ちゃんが聞いてしまった場合にお姉ちゃんが壊れてしまう。それは、少しの間でもさとり近くの近くにいたフランが最もわかっていた。

「さあ、いっちょ始めようか！」

「ええ、始めましょう」

街での戦闘は非常に過酷なものであったが、入り組んだ路地や、水路をフルに利用することでなんとか抑え込んでいる。だが、水路は既に異形と妖怪の死体で埋まりかけ、路地は家が壊されている影響で徐々になくなってきている。

決して状況は良くない。絶望的だろう。だが、ここで殺されれば皆が死ぬという確信。やられれば自らが傷つける側になるという確信が戦意を保っていた。仲間意識の高い地底の住民であったから戦えているということもある。

「二度私達が請け負う！一旦怪我人は下がって応急処置しな！」

勇儀が大声で告げ、各々が様々な方法で異形を一度怯ませ、素早く前衛と後衛が入れ替わり先頭を再開する。あるものは武器を手に、あるものは能力で異形を狩る。後方から波の様に襲来する異形をお空の熱線が薙ぎ払うが物量で押し切られ、大量の異形が襲来。相手が妖怪ならば鬼と吸血鬼の戦力をもってしてその中に飛び込んで抹殺できるが、感染するとなれば話は変わってくる。

「まずいね」

完全にくんずほぐれつの戦いになってしまった。こうなれば後方からの援護射撃は誤射を恐れる為期待できず。これまでなんとか1対1を保っていたはずが1対多数になる。強者は置いておいて、それほど力のないものが多数を相手するのは難しい。すぐに、周囲から悲痛的な悲鳴が聞こえ始める。

「勇儀、任せてもらえる?」

どこからともなく現れたパルスィが勇儀の肩を叩く。

「パルスィ?!下りな!」

パルスィに関しては、勇儀の意思もあって地霊殿で怪我人や重体の妖怪のケアに当たっていた。だが、パルスィの能力は回復向けでは無い為。ただ、包帯を巻くだけの様な状況になる事は当然といえば当然だった。

「全く、私だけサボってるのも落ち着かないのよ」

刹那、パルスィの妖力が爆発的に高まる。翡翠色の炎にも似た濃厚な妖力がパルスィを覆い。左目に収束。

その光景に勇儀が息を飲む。

「今日は、いい天気ね。」

鳥は歌い、花は咲き誇る。

こんな日にはあなたたちの様な化け物は。

嫉妬に狂って、死んでもらうわ」

突然周囲の異形の目もパルスィ同様に翡翠色に染まると。付近の異形を喰らい始める。

「パルスィ、お前……」

「ここは戦場よ。本来私の能力が最も強まる場所の1つ。さつきから、何度か妖力が溢れて暴走しそうだったのよ。今のうちに漁夫の利を狙って狩ることね。私のこれも無限ではないわ」

今この瞬間も、異形の放つ嫉妬がパルスィに収束しそれを利用したパルスィが同士討ちをさせる。

「わかった」

フランと勇儀は頷き合い、異形を殲滅する。あるものは胴体を千切られ、あるものは頭部が破壊される。

悲惨な死を遂げ、肉塊と化す。だが、いくら同士討ちさせ、人数を抑えているといつてもいつか同士討ちは終わる。

妖力を持て余したパルスィはスペルカード舌切雀《謙虚なる富者への片恨》により自らの数を2人に増やし、嫉妬に狂わせることのできる数を増やす。

「きりがないわね」

フラン、勇儀、妖怪、異形。それぞれが大量に殺しているはずだが、

数は一向に減る気配はなく。逆に増えているとも感じる。そして、先程から同じような見た目の蜘蛛のような異形が増えていた。

「おかしい」

「奇遇だね。私もそう思っていたところだよ」

その時だった。砂漠から爆音とともに黒煙が立ち昇る。それにより、砂漠に巨大な蜘蛛のような異形が突然姿を表し、奇声とともに足元を攻撃、砂埃をあげていた。

「お空ーあれを撃ちなー」

大声で即座に状況を判断した勇儀から指示が入り。お空が制御棒に妖力を集中。熱戦が空を切り蜘蛛の異形に直撃。黒煙をあげながら倒れ伏す。

「あいつもまだ頑張ってるみたいだね」

地底の町の住民が徐々に優勢を取り始めた時、砂漠で孤独すぎる戦いを強いられていたうつろは絶望的な状況に立たされていた。

後方で子供を産み、機械的に増援を送り込んでいる元凶は町の住民に気づかせる事でなんとか処理したが。その腑にいたと思われる8本の人間の足を持ち、目は8つとも充血し、裂けた口から白い歯の覗く異形が数百という単位で後方から迫ってきている。前方にもまだ処理しきれしていない異形が50はいる。妖力はまだ1割は残っているがそれだけだ。

この状況をなんとかする策が浮かばない。

万全の状態ならばなんとかできる可能性はあった。だが、妖力は底をつきかけ、体には完全にナニカが周り痺れが酷い。銃を持つ手が震えて遠距離での射撃はほぼ不可能。短剣も強く握れないため、強引な攻撃は出来ない。それに加え、先程から視界が定まらなくなってきた

いる。

「( )までらしいな」

もう生きる事は諦めよう。可能ならばさとりと顔を合わせたかったが。この状況で生きて帰れる可能性は限りなくゼロに近い。

そんな彼に追い打ちをかけるように足元から蔦が飛び出し、再度彼を地面に埋める。足に麻酔が打たれ、抵抗力が削がれ。なんとか腕だけで耐えるがその後方から迫った蜘蛛もどうやら麻酔を持っていたようであろうを一瞬にして覆うと腕に大量の針を刺し込む。

彼の抵抗が完全に削がれたのを確認すると。四方からナニカを注入。先程とは比べ物にならない量の何かを流し込まれ、動かなくなつたうつろは地面に吐き出される。腹になにかを入れなければという謎の義務感に襲われ。視界が完全に赤く染まる。遠のく意識の中、腰に下げていた注射器に手が触れる。

彼から興味を失った異形は彼の上を通り町へと向かう。

当然、この量が町に向かえば崩壊する可能性は高い。そうなればさとりは確実に死ぬ。生きてきて、初めて彼を愛した少女は死ぬ。

その上、このままいけば自分もこの異形の仲間入りを果たす。こういった感染系の物の場合、元が強ければ当然感染後も強い。たとえば、あの異形を処理できたとして、自分を処理できるかどうか。そうなれば、自分がさとりをころす可能性もある。

「命令に従おう」

奇跡的に生きていたボトルを必死に掴むと、そこから注射器に液体を移す。腕に射し込み中身を流し込む。手が震える影響で大きく皮膚が裂けたが麻酔の影響で全く痛みは感じない。この薬で一体どうなるのかはわからない。だが、今よりも悪化する事はないだろう。空になった注射器を捨てると目を閉じ、大の字になる。異形はほぼ全て町に向かったらしい。地響きが遠くなっていく。

すぐに変化が訪れた、体が痛み骨が軋む音が身体中に響く。目を開き地底の天井を眺める。視界はやはり真紅に染まっていた。自分の血が白く見える。腕をあげるとそこには人ならざるものがあつた。黒い鱗が生え並び、指は変形し鉤爪が生える。足も同様に変化し、黒い鱗があつという間に全身に広がる。口が前に延び強靱な歯が生え並び。背骨のあたりが軋んだかと思うと黒い翼が二枚。翼膜は闇を吸う漆黒。完全に変態を終えた彼は立ち上がり。自らの姿を確認するように身体中を眺める。尾骶骨の辺りに新しい感覚がある。振り返るとそこには凶悪な棘の生えた尾があつた。

嘆きを叫ぶかの様に咆哮。前方で町に向かっていた異形と、町で戦闘していた者の動きが止まる。刹那、周囲に何百人と現れた精巧な人間の模型が。手に持った銃を発砲、圧倒的な破壊力を持ってして異形が撃ち抜かれていく。硝煙が立ち上り、驚いた地面の下の異形がこの竜の攻撃を止めんと砂の中から大量の針を突き出す。鏡写しのように作られた大量の剣が砂漠全域に雨のように降り注ぐ。数秒の間悲鳴と奇声が響いたがすぐに静寂が訪れる。

生命の鼓動が完全に停止した地底で1人残された竜は空を見上げ。蜃気楼のように姿を消す。

残されたのは一方的に虐殺された異形の死体。銃弾の雨を浴び前衛芸術の様になり、人間の肌の色を持った体は真紅に染まっている。砂漠は足の踏み場もないほどの大量の凶器で満たされている。その至る所で、糸の切れた人形の様に崩れ落ちた人型の模型が凶器に腰をかけ、腕に銃を抱き、まるで何かを守護する偶像の様に沈黙を保っている。

「大丈夫かい？」

うえに重なった異形の死体を押しつけ、銃弾に貫かれた右足を抑えながら勇儀は周囲を確認し、生存者を探す。

「私は大丈夫よ」

すぐに、横の異形の山から宝石の様な美しい羽から血を流し、フランが現れる。だが、流星は吸血鬼だろうか。すぐさま傷は治り、跡も無くなっていく。

殺戮の行われた直後の町には、まるで巨人に荒らされたかのような惨状が広がっていた。そこら中に妖怪と異形の遺体が転がり、無差別に発砲された銃による影響で家屋は倒壊し、地霊殿を囲む塀には大量の弾痕が残されている。

「パルスィは？」

慌てて周囲を探すが、姿が見当たらない。勇儀とフランは正面に異形がいたためそれがクッションとなりある程度の銃弾は防げていたが、パルスィに関しては正面には何もおらず。少し浮上していた為、盾もない。

周囲の異形を押しつけ、勇儀は必死にパルスィの姿を探すが。見当たらない。

「まさか、嘘だろ？」

顔が悲壮に歪み、最悪の事態を考えてしまう。異形の山を漁ること数分。周囲から無事だった妖怪が集まってきた。その異形たちにフランが状況を伝える、生存した妖怪たちによる大捜索が始まった。誰もが無傷では無かったが、仲間の為にと最後の力を振り絞る。

周囲は倒壊した家屋の瓦礫と、異形の腕や足、未だに艶やかな赤黒い臓器が散乱し捜索は難航を極めた。

捜索が始まり1時間が経過しようかとした時だった。臓器と人間の体の一部にまみれた道の中で、見慣れた髪型の妖怪が目についた。臓器を踏み潰しながら駆け寄り、抱き起す。そこには片腹を銃弾に貫かれたパルスィがいた。美しかったブロンドの髪は赤く血に汚れ、呼吸は浅い、貫かれた腹からは臓器が見えてしまっている。

「おい、死ぬな！死ぬなパルスィ！」

勇儀がパルスィを抱きかかえ、地霊殿に向かう。

「な…によ…。べつ…に、し…には…しない…わ」

途切れ途切れになりながら声を出し、得意でもない飛行を使って割れやすい陶器を運ぶ様に彼女を抱える勇儀の髪をなでる。

「もう喋るな！傷が開く」

パルスィを何とか地霊殿の救命兵に預け、フランと共にさとりの部屋へと向かう。部屋に入る直前、さとり以外の何かがあることに気づいた。慌てて扉を蹴り開けると其処には一匹の小柄すぎる二足型の竜。全身を鱗で覆い。漆黒の外套を羽織ってはいるが。翼は外套を突き破り、尾が地面に付いている。まるで闇の中から現れた様なその外見は死神を思わせる。

「おい、さとりから離れろ」

寝台で横になっているさとりを覗き込んでいた顔がゆっくりとフランと勇儀に向く。

「キュっとしてー！」

フランが即座に敵と判断し、能力を行使。対象の目を引き寄せ、それを破壊する。だが、破壊されたのは竜ではなく、背後の扉だった。

「えっ？」

間違いなく必中必殺の一撃を躲されたことに疑問を抱きながらも  
う一度繰り返す。だが、次は自らの羽根が破壊された。

「ッ?!」

突然の激痛に膝を折り、羽根を抑える。どうやら付け根を破壊した  
様で目の前に見慣れた羽根が対になって落ちていく。

「お前ッ！」

勇儀が鬼の力を持って踏み込み、右のストレートを放つ。当たれば  
無事では住むはずのない一撃がクリーンヒット、しかし微動だにせず  
立ちすくんでいる。ならばと、連打を放つが10発を過ぎたあたりで  
正面から消えたかと思うと背後に現れ、振り向いた瞬間にアッパーが  
入る。

冗談の様に体が浮き上がり、世界が暗転する。そのまま頭部から落  
下、軽い脳震盪を引き起こし蹲る。

一瞬にして強者2人を屠った漆黒の竜は、外套の中から黒いサード  
アイを出現させ、2人にターゲット。そのサードアイを見たフランの  
表情が凍りつく。

「そんな、それは」

何かを言わんとしたフランの前に突然現れた竜が腹に拳を叩き込  
む。肉を叩く鈍い音が響き、フランは力無く地面に倒れこむ。

そのまま、寝台に横たわるさとりを抱きかかえると漆黒の竜は闇に  
溶けた。

## 46話 ケツイ

目を開けると、そこには白い天井。外は既に明るく、日差しが照っている。寝ぼけながら被っていた布団を退け、周囲を見渡す。

ここは何処だろう。いや、それ以前に私は誰だろう。

「おはよう」

声の主人を探し周囲を見回すとベットの横に置かれた椅子に見慣れた筈の黒髪の少年が座っていた。髪に艶はなく、彼の黒い瞳は彼女のみを写している。

「すいません、ここは？」

「ここは俺と君の家」

茶髪の髪の少女は寝台に横になりながら少年を見つめる。

「すいません、何も思い出せなくて」

それを聞いた少年は、少し考える様なそぶりを見せる。

「名前も？」

「はい」

「成る程」

目を瞑り、悲壮に歪んだような表情を浮かべる。だが、そこに感情は無かった。

「君の名前は秦 さとり。そして俺の妹」

疑う要素はない。別に危害を加える様な雰囲気も無い。少年から悪意は感じ取れなかった。だが、善意も感じる事ができなかった。正確には、何も感じ取れなかった。

「状況を説明しておこうか。俺たちは化け物に襲われて。今は逃避行中。さとりはその時のショックで多分記憶を無くしたんだろう」

「化け物、ですか？」

到底信じられない話だ。熊などは聞いたこともあるし見た事もあるけれど。この世界に化け物なんていないはず。

「でも安心してくれ、俺が何としても護り抜く」

少年は軽く微笑む。随分と自然な笑顔だが、その瞳に色はない。  
い。

「ありがとうございます。お兄さん」

護つてくれると言ってくれるなら大丈夫だろう。それに、やはりどこかで見ることがある様な気がする。関係までは思い出せないけれど、きつと大事な人だったんだろう。もし、兄で無かったとしても悪い人ではない筈だ。

「お兄さ………。まあ、いいか」

少年は頭をかくと立ち上がり、なれた足取りで扉の前に向かい、ノブを引く。

「お兄ちゃんの方が良いですか？それと……… 貴方の名前も思い出せないんです」

お兄さんの動きが止まる。ノブから手を離し、顔だけ振り向くと無機質な笑顔で告げる。

「俺は秦 うつろ。呼び方はお兄さんのままでいい。家を案内するから動こうか。立てる？」

頼むからやめてくれと言わんばかりの拒否。どうやらお兄ちゃんと呼ばれるのは少し気恥ずかしいらしい。

「はい、大丈夫です。お兄さん」

そう言つて立ち上がり、うつろの後に続く。開けられた扉を通るとそこには優しい勾配の階段があった。左にも1つ部屋があるがきつとお兄さんの部屋だろう。その部屋には案内されず。階段を降りたお兄さんの後を追う。階段を降り切ると、そこはリビングで少し大きめのテレビと革製の白いソファ。そのまま、簡単に風呂場と冷蔵庫の位置を教えられた。

どれも2人で暮らすには充分すぎるものだった。風呂場は清潔感に溢れ、部屋には埃1つ落ちていない。食器も十分にある。

「外に出なければ、何をしてもいいよ。何か食べてもいいし、お風呂に入っても良い、テレビを見ても良いよ」

「わかりました。お兄さんはどうするんですか？」

そうだね、という腕をまくり腕時計を見て何かを考えたかと思うと。

「仕事まではまだ時間あるから自室でゆっくりしてるよ」

じゃあ、と一言言った後、そのまま自室に階段を1つ飛ばしで登って行ってしまった。

そのお兄さんを見送り、部屋を見回す。特にお腹が空いているわけでも無いのでおもむろにソファーに腰掛け、テレビのリモコンを持ち、電源と書かれた赤いボタンを押す。心地のいい機械音の後、テレビに灯がともり、色とりどりのライトが映像を映し出す。どのチャンネルも興味を惹かれる様な内容ではなかった。天気予報、子供向けの教育番組、批判だけする人々。息を吐いて電源のボタンを押すとプツンという音と共にテレビは黒を映し出す。

少し体が怠い。立ち上がり、階段を登り先程自分の寝ていた部屋に入る。そのままベットにダイブ。枕を抱くと、そのまま目を閉じた。

「取り敢えずは、成功だな」

一方のうつろもベットに横になっていた。

体は人間のものになっている。あの後、さとりを連れて外の世界に逃げて来た。幻想郷がああ状況なら外の方が安全だろうと言う予想の上だ。あの量の異形相手に守る者を置きながらでは戦いにくい。紫がいつか外に出れば消えてしまうと聞いていたが。覚妖怪ならばそれは問題無いだろう。サードアイはどこかに消えたものの読心は健在だ。当然だろう。覚妖怪は人間の心を読みたいという願望と、読まれるという恐怖から生まれた妖怪だ。未だに人間にはそれは克服できていない。となれば当然消えるわけもない。

さとりに関しては予想通り、心の自己防衛が働き記憶喪失の状態になっていた。心が壊れる前に記憶喪失になるという情報は本当だったらしい。取り敢えず、常識を変更し、外の常識に合わせた。

この家は俺が暗殺者をやっていた時の物だ。今だに残っていたことが驚きだが、まあ。まだ俺が行方不明になってから一ヶ月は経って

いない。そんなすぐに取り壊す訳にもいかなかったのだろう。だが、メーターが動いたとなれば何かがあると思われることは避けられない。司令は死にかけと聞いているが俺の存在を知っている者はアイツだけではないだろう。誰かが来てもおかしくない。だが、その時は記憶を変更して返してやれば問題ない。俺にとつて都合のいい情報を流させるか、尋問した上で俺の存在を知っている者の名前を聞き出し、そいつの記憶から俺の部分を変更して適当な物に変えておけばいい。

そして、ここでさとりと暮らしつつ、夜になれば幻想郷に行き異形を狩る。

もう一つ、あの謎の薬はどうやら異形化をコントロールする物だったようだ。異形化してわかったことは3点。

能力の強化

骨格の変化に伴う身体能力の強化

妖力の喪失

事実上、俺の能力はどうやら、全てを変更できるようになった。妖力を喪失した為、もう使えないかとも思ったがどうやら別の部分から持つて来ているようで能力をどれだけ乱用しようが倦怠感はない。実質使いたい放題だ。だが、何を消費しているのかわからない為、やたらめつたらに使うのは良くないだろう。全ての事象、動作は何かを犠牲に機能する。動作であれば動力。建造であれば素材、労力。平和であれば、死。

そんな事を考えてこれなら先の事をぼんやりと考えていると、既に時計は9時を指していた。そろそろ一度仮眠をとるかと思った時、扉がノックされる。

「すいません、入ってもいいですか？」

「うん、良いよ」

直ぐに一度思考を放棄。兄の仮面を被り、さとりを部屋に招く。

だが、さとりは扉から体は出さず。頭だけを出している。

「どうしたの?」

「服は、何処にあるんですか?」

ああ、成る程。忘れていた。ここには俺の服はあってもさとりの服は無い。今この場で幻想郷で見たさとりの下着のサイズを頼りに作る事も出来るが、それをすれば幻想郷の常識を失ったさとりに少しでもあちらの常識を戻すことになる。今のさとりはただの少女なのだ。なんの力もないただの少女。

「今日ここにきたばかりだからね。明日買いに行こうか。今は取り敢えず俺の服を着ていてくれる?」

「は、はい」

そういうと、部屋の奥のクローゼットから適当にとったワイシャツと寝間着のズボンを取り出し、扉を開けてさとりに手渡す。さとりは裸にバスタオルを巻いた状態だった。突然出てきたことに驚いてタオルを落としかけ真っ赤に染まるさとりを気にもせず、ごめんね。とだけ言い自室に帰る。

「ひと眠り、するか」

目を覚ますと外は既に暗い。時計を見ると2時を指していた。音もなく扉を開け、リビングへと降りさとりがいない事を確認すると扉を開けて外へ、外から能力で追加した鍵穴を使い鍵を閉め指を鳴らす。

目を開けるとそこは森の中、ただ、命の息吹は全く感じられない。鳥は泣かず、花は萎れている。月すらも厚い雲に隠れ闇が支配してい

た。

「始めようか」

瞬時に姿が戻る。黒い竜になり、闇に姿が溶けていく。

少し飛ぶと眼下に異形の群れが見えた。指を鳴らす。突如空に生成された様々な凶器が重力に従い落下。悲鳴が、嗚咽が、叫びが木霊する。だが、そんなものに反応する情を彼は持ち合わせていない。漆黒の羽を広げ目についた異形を殺戮していく。例え、何があつても生き残らない程、凄惨に、冷酷に、残虐に。残されるのは壊れた異形と血液の滴る凶器。

日が昇るのを合図に、竜は人へと戻り、大切な者の場へと帰っていく。

家の前と自らのいる位置を変更し、未だに明かりの差し切らない住宅街へと出現。鍵を開け、自分の寝室へ、風呂に浸かり一仕事終えた体を癒すため、眠りにつく。体には変更でも何故か隠しきれない鱗が残っていた。

「おはようございます」

目を開けると、目の前にさとりの顔があつた。部屋に置かれた時計を確認すると10時を回っている。寝すぎだ。

「うん、おはよう。買いに行こうか」

片目で、さとりを確認する。クマもない、疲労感も感じられない。どうやら、問題はないようだ。だが、問題があるとすれば服装だろう。上には少し大きめのワイシャツ、下は寝間着という妙な格好な上、ワイシャツは身長も大差なかったので大丈夫だろうと思っていたが手が出ていない。下着に関しては履いているか分からない。

「今、下着履いてる？」

「えっ……?!は、履いてないです……」

別にスカートを履いているわけでもないのに真っ赤になつて下着のあたりを押さえている。そんな光景を無感情に眺めながら立ち上がり、ハンガーにかけてあったフード付きの白い上着を手に取りさとり投げ渡す。

「まあ、良いや。取り敢えずそれ着て。行っちゃおう」

「まあ、良いや?!」

「ほら、置いてくよ?」

後ろで驚いていたさとりを置き去りに、バックパックを背負い部屋を後にする。さとりは未だに顔が赤いがどうやらついて着てはいるようだ。さとりを先に出させ、玄関を施錠。歩いていく。

当然のように電車に乗り、次の駅へ。そこで下車し、駅前にあるショッピングモールに入る。金は犯罪ではあるがいくらでも作れる。

「好きなの買っればいいよ。お金はあるから」

女性の常識のお陰なのかは少々疑問だが、やはりショッピングは楽しいようで1、2時間に渡り様々な店を歩かされ、やっと下着以外の服が決まった。

「お腹が空きましたね」

「うん、そうだね。微妙な時間だし取り敢えずクレープでも食べる?」

偶然前に止まっていたクレープの車を指し示し、頷くことで賛同したさとりを連れてさとりにメニューを選ばせる。様々な味がある、クレープは甘いものという認識だったが、それは違ったようでツナや、ポテトサラダなど甘味ではないものも含まれていた。

「お兄さんはなんにしますか？」

「俺はいいよ。お腹すいてないから」

「そうですか……」

何故か少し寂しそうにした後、指定されたチョコバナナを注文。500円を渡し、受け取ったクレープを目を輝かせるさとりに手渡す。渡されるや否や適当な席を探し、クレープを食べていた。

「これすごく美味しいですよお兄さん！食べなくて良いんですか？」

「俺は良いよ。さとりの喜んでる顔だけで充分」

そんな少し兄らしさを意識した発言にまたさとりは赤くなる。それからはお互いに特に何も話さず、クレープを必死に啄むさとりを眺めていた。

「食べ終わりました！」

「そうみたいだね」

そう言ってさとりの頬を指でなぞり、付いていた生クリームを舐める。

「たしかに美味しいね。よし、買うもの買って帰ろう」

すぐにさとりに背を向け、うつろは服の入った袋を抱えながら女性の下着があつた区画へと向かう。

「… おにいさんのほか」

囁くような声は風と周囲の喧騒に邪魔されてうつろには届かない。人混みに消えかける兄の後を追い茶髪の少女は駆け出す。それが兄ではないと、それは愛していた相手であるという事はもう思い出すことすら出来ない。

「早く決めて帰ろう、夜ご飯の準備もあるからね」

うつろはそう言って、店の前にあるベンチに腰掛け、スマホをいじりだしてしまった。それを見たさとりは、何とか此の無感情な兄を驚かしてやろうと必死に策を練る。案が浮かばず下着を選んでいる時だった、良い案が思いついた。そこからは早いものだ。まるで、悪事を企む子供のように意気揚々とうつろの前に立つ。

「決まった？」

優しい声で兄を演じる罪人はスマホから目を離す。

「それが、迷っちゃって。どっちが良いと思う？」

うつろの前に2つの下着を掲げる。どちらも非常に際どい物で、よく言えば大人の雰囲気か漂っているものだ。違うのは色だけ、右は黒、左は白。

「そうだね。どっちでも良いと思うよ」

優しそうに笑って、非常に曖昧な答えを出す。全く焦る気配も、恥じる気配もない。事実、顔も赤くならず。驚く様子も無く。慌てる様子もない。

まるで道端に転がる石を見るかのような。

「試着したら見てくれますか？」

「下着って試着できるの？水着じゃあるまいし。さとりが好きな方を選ぶと良いよ」

さとりは悔しそうに口を膨らませ、店内へと帰っていく。そんな後ろ姿を眺めて彼はまたスマホに向き直る。サイトをつかつて異形について検索をかけていた。この異形の件、情報が少な過ぎる。外で何か有力な情報を得られるとは思っていない。だが、自然的にあの異形が発生したとは考えにくい。もし、外の世界のものであったとしても流石に国家機密になっている可能性が高い。

となると実際全くもって意味はない行為だが、ちよつとした噂であつても今の彼にとつては大きな情報だ。それに、最近はネットが普及して触れる人間が増えた分、ハッカーも増加傾向にある。大抵のハッカーは政府に雇われるが、それでも雇われないハッカーは気まぐれに情報を漁る可能性も有る。また、頭のいい人間や、陰謀論を信じている者が異形に近いような情報を辻褃合わせでこんな可能性があると告げている可能性がある。

「お兄さんこれはどうですか？」

またさとりが店内から現れたかと思うと、今度は明らかに子供用の下着を持ってきた。白い生地にくマが印刷されているものと、黒い生地が印刷されているもの。

「まあ、さとりがそれで良いならいいんじゃないかな」

また、にこやかに笑って流す。何故こんなものを持ってきたのかと聞かれれば恐らく、俺の恥ずかしがっている姿を見たかったなどと言うだろう。恥ずかしがるべきかもしれないが、恥じるというのは難しいものだ。どの感情よりも難しいと思う。

「ううう……」

「一緒に選びたくても、女性用下着の店に俺のみたいな男が入るのは気が引けるんだ。ごめんね」

どうやら諦めたようで下着を持って店内に帰って行く。それを見送り、再度検索をかける。様々な都市伝説などの書かれたサイトを探すが、やはりそれらしい情報は見当たらない。ヒットする物はやはり、幽霊やUFOなど、くだらないものばかり。今日の夜はひとまず海外のサイトを使うか。

スマホから目を離し、店内に目をやる。まだ選んでいるのだろうか。そんな時だった、店内で客と店員が口論を始めたようで流れていた良い雰囲気は崩れた。通りすがりの人間は少し振り向く程度で見なかったことにしている。単純に嫌な予感がし、ベンチから立ち上がりスマホをポケットに入れ店内へ。物が倒れる大きな音がした。どうやらただの口論ではないらしい。音を頼りに足音を消しながら近づいて行くとそこには数人の男。どれも大柄で筋肉質だ。その横で突き飛ばされたのか柵にぶつかって倒れる女性店員。その奥に男に囲まれ怯えるさとり姿があった。

「へへへ、お嬢ちゃんかわいいね。ちよつと一緒に遊ばない？」

2人の男が壁を作るようにさとりを隅に追い詰めている。さとりは恐怖に足が震えて座り込んでしまっている。この状況を見て店員が流石に声を掛けて今の状況に至ったのだろう。

「すいません。俺の妹に何か用でも?」

「ああ? お前の妹なのか。悪いなあ、今日から俺らのおもちやだ」

醜い顔だ、醜い心だ。

あまり騒動は起こしたくない。大柄の男3人を小柄な少年が潰したなどと言われれば嫌でも瞬間的に知名度は上昇する。

「あんまり騒動は起こしたくないですよ。それにそんなことをしても警察にバレて捕まるだけです。それでも引いてくれませんか?」

「こんな可愛い子そうそういいねえからな。まあ、お前が地面に土下座するってなら話は変わるが」

これは嘘だ。土下座して頭を下ろした所にかかと落としを入れて昏倒させ、その隙に俺に対してもう何撃が決めた上でさとりを連れて逃走。成る程、いかにも無能の考える策だ。

「それでいいなら」

そう言って正座し、頭を下ろした直後正面の男が右脚を振り上げ、振り落とす。当然当たることは無い。右に転がって避け立ち上がり、正面の男に右ストレートを入れると見せかけ、左の拳で下から鞞丸を殴打。渾身の力で叩き込まれた一撃によって1人目は悶絶しながら蹲る。その頭にかかと落とし、頭を押さえる事でフリーになった腹に蹴りを入れずには立てない程度のダメージを与える。

「嘘は良く無いな」

「お前... 舐めんなよ?」

1人が倒されたことで、さとりが逃げることもどうでも良くなったようだ。残りの2人の男がうつろに襲いかかる。1発目は躲し、2人目の男から放たれた手刀を弾く。

「さとり、逃げて」

適当に躲し、逸らし、さとりの逃げる時間を稼ぐ。そのまま、さとりが必死に頷き店外に逃げたのを見送る。

「調子に乗んなよ、クソガキがつー！」

右の男から大振りで放たれた右の拳を躲し、少しジャンプし半回転する事で高さを合わせ、回転力を付け加えた肘で左の眼球の辺りを殴りつける。一切の手加減は無い。

当然右の男は出血した左の目を押さえながら蹲る。それを見た左の男が怒りに任せて右で蹴りを放つ。それを予備動作で見抜き目を押さえ苦悶の声を上げる男の体を支えていた右手を蹴り。バランスを崩させる。まずいと思った時には既に遅く、革靴による本気の一撃が右の男の顔面に直撃。僅かにその大柄な身体が浮くほどの攻撃に右の男は昏倒。一瞬驚いたような顔をした左の男の右脚が戻りきる前に左の足を払い、転倒させる。その男の上に馬乗りになり、両手で男の両腕を押さえる。

「お前は、何処をやられたい？」

まるで聖母のような温かな笑みを浮かべて不可視のサードアイを使用。経験を読み取り、トラウマを想起させる。

「や、やめてくれ。そ、それだけは……」

悲痛な声もすぐに消え、泡を吐きながら気絶する。親が暴力を振るっていたのか。だが、それで他人を殴ってもいいという理由にはならない。

その男の上から離れ、3人の男を放置。女性店員が何かを言っていたが完全に無視し、さとりの待つ店外へ。そこではベンチに腰掛け震える肩を抱くさとりがいた。そのさとりの横に座り出来る限り優しく抱き寄せる。

「大丈夫。俺が護るって言ったろ」

「怖かった……です」

さとりは急に安心したせいかわ彼の胸の中で泣き出した。そんなさとりの美しい茶髪を磨ぐ様に撫で、少し強く抱き寄せる。

その後、男の3人組を警備員が取り押さえ、うつろが一連のこの流れを説明。店員もそれに嘘偽りがなかった事を証言してくれたおかげで問題にならず。正当防衛だったということ収まった。

その後、その店でさとりの下着を購入。さとりは何を買ったのか見せることは無く。帰路に着いた。

「お兄さんは、何で私を護るんですか？」

唐突に沈黙を保っていたさとりが静寂を破った。外には電車から見える景色が走っていた。

「家族だからだよ」

嘘では無い。これは事実だ。さとりが好きだから護っていると言えどそれは嘘になる。何故なら俺には感情がない。幻想郷で少し取り戻した様な気がしたが、異形化の所為か、また完全に消えている。

「凄く怖かったんですよ」

「もっと早く助ければ良かったね。気付くのが遅れた。ごめん」

お兄さんは申し訳なさそうに顔を落とす。

違う、私が怖かったのは。

あの男を倒した時のお兄さんの顔だった。

笑みを浮かべるでも無く。憤怒に歪むわけでも無く。蔑むわけでも無く。眼前に出された仕事を片付ける機械の様に、子供がつまらないものを見るかの様に冷え切った目が。何も考えていない様なあの無表情が。恐ろしく怖かった。そして、すごく懐かしかった。

でも、お兄さんに抱かれた時、優しさを感じた。

「お兄さんは、」

「ん。どうしたの？」

不安げな顔でさとりは俯く。太陽は地平線に隠れてようとしていく。

「お兄さんは、良い人ですか？」

「…………… さとりにとっては良い人だよ」

全ての善行はその終局に利益があるから行われる。そこに利益が無ければ誰一人として助けることは無い。善意とは、すなわち利益を求める欲望であって。心の底からの、100%の善意など無い。

人間なんて、所詮は感情の犬。

「なら、良かったです」

笑みを浮かべるさとりをじっと見つめる。

俺は何が何でも、この少女を護り切る。もし、命令に背く事になつたとしても。幻想郷を敵に回すとしても。

幻想郷を壊したとしても。

## 47話 日常

電車は何事もなく目的地に到着。さとりの手とうつろの手にはそれぞれ風に揺られて愉快そうに踊る買い物袋が下げられている。うつろは全て持つと言ったが。私のものですし私が持ちますと言うさとりも引かず、最終的にうつろが二人で持とうと提案し、今に至る。傍から見れば微笑ましい兄妹か、カップルだと思われるだろう。

「ところで、家に帰ったら下着を見てくれますか？」

手に持った袋を揺らしながらさとりが俯きながら顔を赤らめている。

「いや、見せびらかすようなものではないでしょ？」

当然だ。下着とは、見せびらかすようなものではない。それに、今日記憶を取り戻して今に至って居るというのに、さとりは少し俺に対して心を開きすぎている。まさか、幻想郷での記憶がまだ残っているのか？と一瞬危惧したが、根本的に記憶が消えたのは精神に対するストレスが限界値を超えた為だろう。俺はそこに対して外の常識を植えただけだ。それ以上のことはしていない。となれば、記憶が完全に消えていなかった可能性だが、それは確実に証明出来ない。何とも言えないだろう。調べようがない、読心をしたとしても俺の技術ではまだ、そこまで完璧に心を読むことはできない。

「お兄さんにだけ見せたいんです」

「なんで？」

特に思いつく綺麗な返答もなかった為、単純な返答を返す。というよりか、あまり返答を考えていなかった。それ以降、さとりからの返

答はなく。ただ、無言で帰路を歩く。空を見れば、陽は地平線に逃げていき、月が自らの主張を始めるような時間になっていた。

それ以降は特に話すこともなく歩き続け、月の主張が認められた頃には家の前に到着していた。鍵を開け、部屋に入ろうとしたうつろの裾が引かれ、さとりの方に向き直る。その顔にはどこか不安があった。

「お兄さん… 異形は本当に居るんですか？」

「いるよ。今日もお仕事だから、早く夜ご飯を食べて寝よう」

即答し、家に入っつていったお兄さんの後を追う。何故だか、その背中が酷く小さく見えた。

時計は既に6時を指している。今から外に食事に行ってもいいが、少し面倒だ。それにお互いに疲れているだろう。わざわざ外に出たくはない。

手に持った荷物をさとりにも渡し、ソファに腰掛ける。

八雲紫の目もそろそろ警戒すべきだろう。ただ、八雲紫が来る来ないは別としてもさとりには幻想郷の記憶をどこかで取り戻してもらう必要がある。

腕をまくり、未だに体に浮かぶ忌々しい鱗を見つめる。

俺がこのまま正常で居られるのもいつまでかわからない。この鱗が俺の体を覆った時、常識的に考えればそこがタイムリミットだろう。あの薬のお陰で無効化出来たかと期待して居たが、まあ、世の中そう上手くは行かない。

「お兄さん、どうしたんですか？」

「いや、なんでも無いよ。夜ご飯はカップラーメンにしようか」

「はーん」

さとりは自分の服が入った袋を持って階段を軽い足取りで上がって行く。その姿を追った後、物置からインスタントラーメンを二つ取り出し、表層のビニールをハサミで剥がし、蓋を開ける。その後は、既に沸かされたお湯の入ったポットの水を入れるだけ。内側に記載された線まで熱湯を注ぎ、前もって出しておいた箸を重しに蓋を抑える。

「そういえば、お兄さんは。何のお仕事をしてるんですか？」

振り向けば、さとりが階段を降りて来ていた。いつの間やら服は買った物に着替えられて、手には着て居た服が下げられている。hopeと書かれた半袖のシャツに黒いフリル付きのミニスカート。初めて何を買ったのか見たが、センスは悪くはないんだと思う。

「服はお風呂場の前に置いておいてね、洗濯しておくよ。仕事は、みんなを守る仕事かな」

嘘は言っていない。これは事実だ。幻想郷とその住民を護っている。だが、最も守りたいのはさとりだった。

「だからあんなに強いんですね！」

「まあ、鍛えてるからね」

力こぶを作るようなジェスチャーをし、良いお兄さんの役を演じる。そんな彼を見て、さとりは笑みを声を上げクスクス笑う。平和な日常、平穏な日常、だが、非現実的だ。

さとりの記憶を戻せば、すぐに崩壊するだろう。あの異形に遭遇する直前までの記憶を戻すこともできなくは無い。だが、それでは、空

白《ブランク》が生まれてしまう。そこに気付かれれば、脳が処理不可能に陥る。あの時病室で寝ていたのがさとりであればどうでも適当な嘘をつけるが、寝ていたのは俺だった。となるとやはり、あの異形の記憶ごと戻す他ない。その際に、俺だけではさとりを支え切れる自信は無い。それに、俺にはタイムリミットがある。そしてその時間制限は悪質なことにいつ来るか分からない。そうなるとさとの近くにいた存在がもう一人欲しいが、お隣とお空は従順なペットというだけで正直のところ、さとりを一切恐れていないというわけでは無い。となるとやはり、こいししか居ない訳だが、

「お兄さん？ぼーっとしてどうしたんですか？」

「ううん、なんでも無いよ。ほら、こつち、食べよっか」

「はい…」

インスタントラーメンを手渡し、さとりの前に座ってラーメンを啜る。古明地こいしは、覚妖怪であつて覚妖怪ではない。まずまず、探すとしても。無意識を操るという能力の性質上、彼女から出てきてもらう他ない。無意識は、どうあがこうが生まれるものだ。例え、この部屋のどこかにいると情報を渡され、捜そうとも。恐らく見つけることはできない。それほどに、搜索となれば困難になる能力だ。元暗殺者としては、最高の能力だと思うが、彼女がこの能力を得るに至った経緯を知れば、そんなことはまず言えない。さとりが捜せば出てきてくれる可能性はあるが、あの地獄にさとりを連れていくことはできない。まず、俺も異形となる時点で却下だ。だが、唯一遭遇可能だとすれば、古明地こいしもこちらを探していた場合、だが異形となった俺を見ても、読心がなければ気づくことはまず無理だろう。最悪、戦闘になる。それは、避けたい。お互いに無傷では済まないだろう、さらにその騒動を聞きつけて、異形が集まる。俺は座標を変えれば、逃げることは容易だが、古明地こいしはわからない。一対一ならば、無意

識は通用するのだろうかそれが複数になった場合、果たして通用するのか。当然、異形一匹一匹で無意識が異なるはずだ。例えば、可能であったとして妖力の消費は激しいはず、その前に俺と戦闘していたとなれば尚の事だ。

「ひうつ?!」

妙な声が出た。なぜかと言われれば、恐らく俺が考え事をして視界が狭まった隙に立ち上がり、背後から脇を突いてきたさとりの所為だろう。不満げに後ろを向くと、さとりは噴き出すのを頬を膨らませて堪えていたが、俺の反応と表情によって、ついに崩壊。楽しそうな笑い声が響く。

「このやろお」

何も思えないが、不満そうな表情をしてさとりを見つめ返すと立ち上がり、涙を流しながら笑っているさとりの脇を突く。

「ひいつ?!」

「お返した」

悪そうに笑ってさとりから手を離す。さとりは真っ赤になりながら再度彼の脇を狙うが上手い具合に避けられて逆に脇を突かれてしまふ。気づけばさとりの方が地面にへたり込んでいた。

「まだまだだね、なんて言ってみようかな」

笑いながら、椅子に座り、食べきったラーメンの汁を流しに捨て、空になった容器を軽く濯いで捨てる。

「あー、楽しかったです」

「久しぶりに俺も楽しかったよ」

さとりに手を貸して身体を起こさせると、さとりは階段を登って上の部屋に帰って行った。

もしかすると、さとりにとってはこちらの方が幸せなので、記憶を戻さないという手もある。

幻想郷の住民は彼女を恨み、恐れ、排除した。だが、こちらにいればそんなことは無い。覚妖怪であるという記憶をこのまま奪っていれば、読心は出来ない筈だが、もし出来たとして口外しない限りは問題にならないだろう。古明地こいしもさとりを捜しているのなら、いつかは俺と遭遇する。恐らく、さとりを攫ったのが異形化した俺であることは察されている筈だ。

今なら、能力を使えば、さとりが一生活していくだけのお金は簡単に精製出来る、住民票も数値ごと変更してしまえば良いだけの話だ。そしてさとりには今のように違う場所に家を買えばいい。この見た目で買うのは少々危険だろうから少し変更するか。こいしがいれば、2人で仲良く暮らすのもありだろう。その分のお金でも簡単に作れる。だが、いつ円の価値が暴落するかわからない。宝石でも作って持たせておくか。

だが、それをすれば八雲紫が黙ってはいないだろう。ならば、一層の事幻想郷ごと潰してしまおうか？

少年は椅子に座りながら頬杖をつき、息を吐く。

いや、それは出来ない。俺は自分がどうなろうが幻想郷を護れと命じられた、その時点で幻想郷は破壊できない。逆に異形が幻想郷を破壊するのを待つというのもあるが、それも自らがどうなっても、という一文のせいで俺が死ななくてはならない。こいしを見つけた後に自殺というのも、あるが恐らくこの命令では自殺も出来ない。それに死ねば、この体は恐らく異形に乗っ取られる。そうならば止めれるものはそうそういない。幻想郷の者で勝てるかどうか、もし負ければ間

違いなく幻想郷は崩壊、外に異形が溢れ出す。そうなればさとりを外に逃がした意味がない。

この物語を幸せに終えるには、まず俺が異形を全員殺し、異形の元凶を特定し、最後には俺を殺してもらう必要がある。だが、あの異形の量からして恐らく遺体から発生しているわけではない。幻想郷にあれほどの人口はいなかったはずだ。あれを俺が異形になる前に殺すには幻想郷に留まる必要があるだろう。

「無理だな」

少年は一人。重すぎる枷をかけられ、足掻いていた。どうしても来るであろう時間制限。無限に沸く敵。元凶に関する情報は一切無い。情報集めもままならない。

「詰んだか、何処で誤ったんだ？俺はそれなりに動いた筈だ。感情がない人間の割には。それでも他人すら幸福に出来ないのか？」

「その通りだよ。暗殺者、いいや、新月の彼岸花。作られたものにして感情のない機械であり、生粋の大罪人よ」

顔を上げるとそこには夢で見た黒の外套を纏った男が立っていた。相変わらず顔はモザイクのようにぼやけている。

「一体、何処から入ってきた？」

即座に右に短剣を生成。椅子から跳びのき、構える。一切の気配がなかった。まるで無から現れたような。

「私は、ユウよ。貴方にこの世界の真実を教えてやる。君はきつと、成功する」

目覚めると見慣れない翠の髪をした少女に見下ろされていた。少しずつ見慣れてきた天井と、外から聞こえる戦乱の声。今この瞬間も異形は迫ってきている。だが、秦 空というたった1人の人間に大半の異形は串刺しに、あるいは鉄の塊に撃ち抜かれ絶命したためあの時ほどの勢いはない。事実、前線に回される妖怪は減り、今こうしてフランドール・スカーレットも睡眠を取れていた。

「こんにちわ。フランちゃんって言うんだよね？お話があるの」

見たことがない少女だった。なにを考えているのか全くわからない虚ろな翡翠色の瞳に吸い込まれそうになる。

「貴方は誰？」

「私はこいし。古明地こいしよ」

こいしはフランの上から降り、寝台に腰掛ける。

聞いたことはあった。古明地家は姉妹である、そして古明地さとりは姉である。その情報からこの前に現れた少女が何者であるか軽く把握し、体を起こす。

少しはだけていたネグリジェを直し、こいしの横に座る。

「おかしいと思ったことはない？」

なんの前触れもなく、突然話は始まった。

「何を？」

「なぜ異形の勢いが止まったのか。何故あの時の量が攻めてこないのか。本当にあの程度の進軍なら今いる面子で強行突破、地上の奪還を何故しないのかって」

思っていないはなかった。事実、今は1日に数体の異形が来るのみだ。あの時の勢いがどこに行ったのか。そこまで減ったのならなぜ八雲紫は地上へ進まないのか。

「そうだよね。思うよね。そこでもう一つ。死体も見つからなくて、そのまま行方不明になった人がいるよね」

「お兄様のこと？」

確かに、秦 空ことフランにお兄様と呼ばれ、慕われていた少年は死体も見つからず、古明地さとりは圧倒的な何かによって攫われた。現在、地底の管理はお燐と呼ばれる化け猫が行なっている。

「そう。でも、心当たりはあるんでしょう？お兄ちゃんがどうなっちゃったのか」

認めたくはない真実。これを認めれば、敗北は確定すると行っても過言ではない。ここ数日で異形になった場合どのような変化が起きるのが分かってきた。

まず、能力の超強化、身体能力の飛躍的向上、妖力、体力の概念の喪失。もしもこれが秦 空に起きた場合悪夢以外の何者でもない存在が顕現する。

「お姉ちゃんがさらわれた時、人型の竜がいたよね」

「何故それを？」

確かにあの時竜はいた。だが、それがなんであるかはわからなかったし、まずまず戦闘にすらもちこめなかった。それほどまでに次元を逸した敵だった。

「私は覚妖怪だから」

正面の少女の胸元には生々しい傷のついたサードアイが開けていた。充血した眼球からは常時、少量の血液が滴っている。

「その竜の姿をした異形が地上で毎晩突然現れて地底に向かう異形を大虐殺してるの。今地上は地獄の具現の様な状況。山の様に積まれた異形の死体。そしてそこに集った虫が異形化、その異形をその夜のうちに竜が狩る、これが続いている」

何故、その竜が異形を狩っているのか。それは既にフランにも理解できていた。あの竜はお兄様だったということだ。そして、自動的にさとりを連れ去ったのもお兄様ということになる。

「貴方に協力して欲しいの」

「何を？」

「お兄さんが正気かどうか確かめて、可能ならお話する」

「危険すぎる」

当然だろう。あの竜にお兄様の面影は一切なかった。異形化は完全に終了していると考えて間違いないだろう。となれば、理性が残っている可能性は非常に低い。他の異形を屠っているのも、まだ異形化前の意思が生きているだけという可能性が高い。

「私は今、この目を閉じたり開いたり出来るの。私の能力は無意識を操る程度の能力。目を閉じていれば他の異形には襲われない。でも、お兄さんが正気かどうかはこの目を開かないと分からないの。でも、

開くと無意識は使えない。その間、貴方に私を守って欲しいの」

「一体どれくらいの異形を相手すればいいの？それによって答えは変わるわ」

「多くて20くらい」

不可能ではない数字だった。当然、種類にもよるが、夜であるなら吸血鬼の能力も最大限使える。

「なら大丈夫。でも、何を話すの？」

「お姉ちゃんのところに行きたいの」

「なるほどね」

フランには理解できない感情だった。何故なら彼女は家族からの愛を知らない。姉は私を地底に閉じ込めた奴という認識だ。それに従う咲夜、パチュリー、美鈴、全てが憎かった。

「いつ始めるの？」

「今日」

「わかったわ」

フランにとっても、秦空が未だに理性を保って生きていていれば、それに越したことはない。異形となつて、能力が大幅に強化された彼なら、その気になれば彼1人で異形を滅ぼす事も出来るはずだ。だが、もしもそれだけの戦力が敵に回る場合。

果たしてだれが彼を止めることができるのか

## 48話 Under The Moon

「じゃあ、行ってくるね」

帰ってくるわけのない返答。彼はまたその日の仕事へと向かう。ユウに聞いた真実。それが本当であるならば。

いや、まずは異形を殲滅しよう。

一瞬頭を横切ったものから目をそらし、扉を開いて外側から施錠。自らのいる座標を変更、幻想郷へ移動する。

今回は竹林の様だ。だが、青々しい竹は全て血塗られ、所々に未だに鈍く月の光を返す肉片が転がっている。足元には臓器が大量にばら撒かれ、死後何日か経過した異形が腐廃、そこに集った蠅が異形となつて肉を貪っていた。

「なるほど、この生物全てを殺さないは無理か」

指を鳴らし、正面で肥大化、肉の塊と化した醜い蠅だった物が変貌を遂げる前に、少年もまた醜い異形となり、生えそろうた鋭い爪で引き裂き、食らい、数秒のうちに肉塊の小高い山を作る。

「... g a i u u u...」

どうやらこの身体ではヒトの言語が話せなくなるらしい。口に残った汚物にも似た腐臭を放つ血肉を吐き捨て、月に向かって飛翔する。

そんな彼を突如空間から突き出た刀が取り囲み、火球が直撃、黒煙に包まれる。その黒煙に向かい遙か上空から星屑と錯覚するほど大量の矢が降り注ぎ、更にその上から豪勢な寺の屋根が突然現れ落下。轟音と共に粉碎される。更に、眼前に2人の少女が現れ、刀を抜き、扇を構え。その前に真紅の目を輝かせたウサギが背に因幡の白兔を乗せ、ライトマシンガンを乱射、鼓膜を殴りつけるような銃声と共に硝

煙が上がり黒煙に大量の風穴が空く、兎が再装填のモーションに入るやいなや扇が振られ、その扇の作った風を浴びた直線上の物体が全て消滅。突如、竹林は更地となった。

「やったか？」

「まだよ」

薄紫の髪を黄色のリボンで止め、ポニーテールに固めた白くて半袖・襟の広いシャツのようなものの上に、右肩側だけ肩紐のある、赤いサロペットスカートのような物を着用し、腰にバツクル部分に剣の紋章があしらってあるベルトを巻き。また、右腕に金色のブレスレットを二つ着けている少女がとどめを刺そうと刀を抜こうとするが。それをその真横に立っている腰ほどもある長さの金髪。瞳の色は金色。服装は、白くて長袖、襟の広いシャツのようなものの上に、左肩側だけ肩紐のある、青いサロペットスカートのような物を着ている少女が右手で静止する。

黒煙が晴れた先には一体の黒龍。腕は千切れ、身体中には木片と矢、大量の風穴が空き。その穴から月光が差し込む。だが、落ちることもなく、これ必然と言わんばかりに微動だにせず飛んでいる。

地上から炎の羽を生やし、超臨戦状態で現れた妹紅が正面に大量の業火球を生成、一斉に照射する。

一切避ける様な仕草は無く、全弾命中、夜が明けたのではないかと錯覚するほどの熱量で竜を焼いていく。黒煙が上がるがやはり竜は落ちない。

黒煙が晴れるとそこには何故か無傷の竜がいた。

「超回復か？」

「なら、治癒できないほどに燃やすだけです。愛宕様の火」

薄紫の髪をした少女の右手が炎と化し、竜までの空間を焼きながら直撃。人類では作り得ない神の白炎に包まれた黒龍はその輝きの中に隠された。

「依姫様ッ！」

突然背後から鈴仙が依姫を突き飛ばす。刹那、頭のあった場所にラィフルの弾が通過、鈴仙は幸運にも擦過傷で済み、空中で体制を立て直す。切れた頬から血が滴るが気にしてはいられない。そんなことよりも、今の銃撃が気になった。あの超高温の中をどうやって通ってきたのかもそうだがそれ以前に、どうやって狙いを定めたのか。あの光は完全に竜を包んでいた、なのになぜ、あんなにも正確に依姫様の頭部を狙えたのか。乱射したならわかる。だがあれば、一発だった。その疑問に絶望的な回答がされる前に、彼女の意識はこちらに引き戻される。

獄炎を超えた神の炎で焼かれている竜の体が崩壊し、ヒトの形をした異形が現れる。まるで中世に作られた鎧をまとった様な滑稽な姿をし、その手には鎧には似合うことのない漆黒のライフルが握られている。

「助かりました」

「いえいえ、それより今は正面のアレに集中して下さい」

鈴仙は次に背にかけてあった、ガトリング砲を構え、一斉照射。最早ありえない様な弾道を描き、小さくなった標的に全弾向かっていくが発砲音はあっても被弾している気配が無い。数秒間打ち続けた後に諦め、ガトリングを放棄する。これ以上は逆に撃ち返されかねない。何も見えないような状態である精度の銃弾を放つような相手に下手なスキは見せないほうが当然身のためだ。

「アレの数センチ手前で消滅している様です。豊姫様」

発砲をやめ、鈴仙は銃を地面に落とし。拳銃を二丁構える。確証があつたわけではない。だが、命中音がしない、あの鎧にあたっているのなら多少でも金属音がするはずだ。

「炎の熱で溶けたのか？」

「失せろ」

黒龍が突然口を開き、彼の前の少女達に衝撃が走る。一部はこいつは話せるのか、と。そしてまた一部には恐怖、絶望、そして疑問。

「どうしたんですか？」

妹紅の顔色と、波長の変化に気づき、鈴仙が声をかける。正常では無い、これは、死を悟った者の波長だ。だが、彼女は不老不死、本来死に対する恐怖など昔に忘れてしまっているはずだ。でもこの声は、どこかで聞いたことがあるような…？

「嘘だろ…？」

「何を言っているんです？」

その様子を見た依姫があきれたように妹紅を見下し、男から目を離した。その瞬間だった。男の姿が消え、依姫の正面に現れ、首を絞め上げる。異形の力を持ってして締め上げられた首は一瞬にして悲鳴をあげる。もがくが当然その程度では異形の腕力にかなう訳もなく、手にもって刀で体を切断しようとするが刃がはじかれた。

その横で事の一部始終を見ていた金髪の少女が一瞬愕然とし、動け

なかったが直ぐに気を取り戻し、扇を振り下ろす。刹那、黒龍の体は木っ端微塵になり、依姫をつかんでいた腕以外が消えた。そのまま後方の竹林がまた更地と化す。

「あいつは、秦 空だ」

その発言を聞き入れた瞬間に鈴仙とてゐ、後方で援護している永琳にも戦慄が伝播した。なぜ、感染してしまっているのか。既に異形化による状態変化は知れ渡っている。そして、彼の能力は異形の現れた直後、八雲 紫によってなぜか突然幻想郷中に伝えられた。当然、その結果彼がどの様な生物になるか。それが理解できない様な知能の持ち主ではない。

「そんな、なんで空さんが?」

「引いて! 引くのよ!」

後衛で援護に徹するはずの永琳が竹林から現れ、豊姫と依姫に撤退の指示を出す。当然だろう。彼の能力は「変更する程度の能力」これに対する強化と言われれば、その効果を及ぼせる範囲の他にはない。そうなれば、彼の気分次第で、生を死に変更されるという可能性も最悪あり得る。能力の変更ですらしてきかねない。その時点で、彼の前では誰も不死身ではいられないだろう。不老不死すらも変更できる筈だ。なら、不老不死であることがばれなければいいと思うものもあるだろうが、彼はまずまずさとり妖怪だ。そのものが、どんな力を有しているかなど、見ればわかる。

「何を言っているんです?」

月の住民であったが故に幻想郷の情報に疎かった二人は理解できない。無理もない話ではあった。彼は幻想郷に着てまだ間もない。

情報は薄く、新聞で伝わっているといっても、月までは時間がかかる。

「邪魔だ」

闇に溶ける様な口調で放たれたその言葉の直後、10メートルほど先に突然彼が現れ、上空に様々な凶器が生成、一斉に落下を始め、彼の横に銃火器を携えた人形が並ぶ。

「fire」

竜の号砲の刹那、銃火器の銃口が一斉に向けられ火を噴き、この世にあるであろう全ての凶器が具現したかと錯覚するような鋼鉄の雨が、天の裁きとはこれであるとも言いたげに降り注ぐ。

「金山彦命」

降り注ぐ凶刃と鈍器、正面からの完全な制圧射撃。誰が見ても生き残れる希望はない。だが、凶刃降り注ぐ中から聞こえた声の直後、一斉に凶器が向きを変え、意思を手に入れたかの様に黒竜に襲い掛かる。竜は器用にも一本目に飛来した直剣を握り、それをういて凶刃を捌いていく。それが壊れかければまた異なった武器を握る。その繰り返しで、ついにはすべての武器を捌ききった。まるで、すべ

ての方向が、未来すら見えているかのような太刀筋にさすがの依姫たちも警戒を始めるが、あまりも遅すぎた。

「成る程、これまでと同じ様に戦うと痛い目どころか、死にますね」

凶刃の降り注いでいた中から無傷の依姫達が現れる。自らの作り上げた武器を捌ききり、最後に握っていたメイスを捨て、黒竜は平然と見返す。無言のまま、黒く歪んだ爬虫類の爪の生え揃った腕を突き出し、サードアイを胸元に復元する。

「想起」

短い言葉だった。本来はなかった物が突然現れればそこに一瞬でも注意が向く。敵対しているならば、尚更のことだろう。敵の一挙手一投足に警戒しなければ武人は名乗れない。逆に、それを利用した彼は、そのまま瞬時にトラウマを探し出し、幾度にもわたって想起する。狂った様な声をあげ、正面の少女たちが落下していく。それを追って、脅威は去ったと思われた。

視界が赤い、もう活動限界か。そろそろあちらに戻らなくては。いや、これは

気づけば自らの心臓部分に大穴が開いていた。

「見つけたわよ。秦 空。いいえ、今は異形と呼んだ方が良いのかしら？ 醜いものね」

視界が赤いのではない、月が、周囲が赤く染まっていた。腹から滝の様に流血、一般人では即死だろう。だが、彼はもう人間でもなければ妖怪でもない。

「次から次へと」

けだるそうな瞳が見つめる先には、赤い月を背景に蝙蝠の羽の生えた女とメイド服の女、魔術師らしき者、中国の戦闘衣装を着込んだ女が並んでいる。

「何の用だ」

「妹を返しなさい」

「断る。それに今は俺も何処にいるか知らない」

その返答を聞いた瞬間突如周囲にナイフの群れが現れ、胸に空いた風穴に殺到。爆散。金属片が体の内部を抉る。能力使用で回復を図るが能力が発動しない。限界が来てしまったのかと思ったがそうではないらしい。

「無駄よ」

後ろにいた魔術師の周囲には魔法陣が形成されている。封印系統である事は間違いない。だが、それがわかったところで、そこに行き着く事は不可能だろう。障害が多過ぎる。楽をするなら銃などで貫くしかないが。

背に蝙蝠の羽根を持った吸血鬼が真紅に輝く槍を再度投擲。右に躲すがそれを読んだかの様に槍も動きを変え、右腕を吹き飛ばす。恐らく和解は不可能。能力での反撃も出来ない。それにサードアイによるトラウマ想起も恐らくそろそろ克服される筈だ。となれば、今目の前にいる吸血鬼と、さっきの女達を相手にしなくてはいけない。やろうと思えば不可能ではないが、能力の過度な使用は避けたい。それに、彼女たちに物理攻撃を仕掛ければ、異形になってしまう可能性がある。それが最もまずい。

「抵抗はさせませんよ！」

一瞬で距離を詰めてきた中華服の女の正拳突きを右胸に受け、怯んだ隙に正面で回転、裏拳で左胸にも打撃。人間ならざる腕力でもって残っていた肋骨は砕け、肺に突き刺さる。呼吸は出来ず、口からは血が溢れ、腑からは白銀のナイフでズタズタになった臓物がのぞいている。生命活動を終えるには十分すぎる深刻なダメージだ。だが、彼は墜ちない。

「なるほど、さすがは異形。耐久力が高いな。だが、これで終いだ。聞いていたほどでも無くて残念だったぞ。秦 空」

再度生成された深紅の絶槍が彼の頭部に投擲される。赤い奇跡を空に描きながら回避不可の槍が頭蓋に突き刺さる。筈だった。

「まだだ、まだここで終わるわけにはいかない。なめるなよ、屑どもが」

上空で見下すように飛んでいた吸血鬼の目が見開かれる。無理もない、もう死にかけの魚のような人間が、残された左手で深紅の槍を捕らえていた。更に、浸食され黒く塗

りつぶされていく。

「咲夜、やれ」

しかし、こんなことではまだ吸血鬼は焦らない。銀髪のメイドが領き、能力を発動。瞬間的に彼の周囲をナイフで覆い、帰還する。静止していたナイフが一斉に動き出すがそれと同時に彼は龍に還った。厚い龍鱗にナイフは阻まれ刺さる事なく落下して行く。胸部には未だには大穴が開いているが、異形に戻ったことで即座に修復された。

「異槍 スピアⅡザⅡグングニル」

龍は握っていた槍を投擲、それは空間を割り、一切の残光も無く。音もなく、吸血鬼の体を貫く。あたたつた瞬間に体中の全神経に毒が回り、ただ吸血鬼は地上へと落下。竹林の中へ姿を消す。

「お嬢様?! 貴様ツ…!」

いつものように時間を停止、龍の周囲にナイフを撒くが。あろうこ

とか停止した時間の中で龍は動き出し、人間体に変移。右手に作り上げられた拳銃の銃口を魔術師に向け、発砲。停止した時間の中で弾はゆっくりと魔術師へと向かいその直前で停止。その銃弾がの陰から銃弾が生まれ、瞬時にナイフと同程度の量の銃弾と化す。

「異刻 ルナークロック」

大量のナイフが人間態に戻った彼に殺到するが全て蒸発していく。ナイフと同時に動き始めた葉茨は魔術師の眼前に立ちふさがったメイドの女によって弾かれる。だが、当然すべて弾ける訳もなく、カバの遅れた足にうけた銃弾の痛みに一瞬ひるんだ瞬間数発の銃弾に四肢を貫かれ落下。更に、魔術師の前に立ちふさがった女に銃弾がはじかれ、魔術師は無傷。

「封印が効いてない？」

魔術師は状況の割には至って冷静そうな声とともに再度魔法陣を形成、しかし効力を発揮しない。

「なんで？なんで効かないのよ！まあ、いいわ、日符　ロイヤルフレア  
！」

突如現れた業火が彼に向かって飛来。それをただ、見ると。

「異炎符　ロイヤルフレア」

全く同じような宣誓の後、飛来する業火の数倍はあろうかという蒼炎が業火を包み込み、そのまま魔術師を飲み込む。とっさに魔術で水を出して身を守ってはいしたが、大した意味はなく、黒く焦げたナニカが落下して行く。

「パチュリー様?!こいつは本当に」

「異想起　　テリブルⅡスヴニール」

人間の姿を装っていた鎧が崩壊。内部から体の半分が龍と化した少年が現れ、その胸元に浮かぶ黒く澱んだサードアイが怪しく光る。

「しま…」

残ったチャイナ服の女は気絶しそのまま落下、彼の周囲には再度静寂が訪れる。しかし、一方的な殺戮を終えた彼に近づく者がいた。

「お兄…さま？」

「成る程、無意識か」

1人は胸元に血涙を流すサードアイを、1人はドアノブのような帽子を被った少女達。彼女たちは警戒は緩めずに少しずつ寄ってきている。

「ちようどよかった」

ボソリと一言呟いて、少女達と少年は幻想郷から姿を消した。

周囲の情景が一瞬にして変わる。私はこの感覚を知っている。だが、ひとつ違うのは周囲の風景が違う事。あの赤くて暗い地下室では無い。白い壁に木製の床、そして正面には黒い外套を羽織ったお兄様。

「お兄ちゃん？」

こいしも連れてこられたようで周囲の変化よりも先に私達に背を向けるお兄様に対して読心が続けていた。サードアイから垂れた血が床を赤く染める。痛くはないのだろうかという単純な疑問が今更湧いたが、今はそれどころではない。この能力は時間停止。咲夜、紅魔館のメイドの能力だ。お兄様が使えはるはずが…

「ちようど良かった。フランはこの能力は経験があるみたいだね」

口調が違う…。？少し後ずさりして右手に目を集中、すぐ能力が発動するように構える。サードアイに見られていないはずなのにも関わらず、心が読まれた。外套の下に隠れている可能性もある、それでも完全に見えない事なんてあるのだろうか？

「フランちゃん…。大丈夫。わざとやってるみたい」

横で血涙を流すサードアイをフランに向けたこいしが手で能力を切るように伝える。それに無言で頷き、フランは能力を切った。

取り敢えずの不安は去った。だけれど。

「突然だけど。こいし、フラン、協力して欲しい」

「内容は？」

当然だろう。来ると分かっていた必然的な問い。だが、うまく言葉にする事が、今の彼には出来なかった。

「……」

3人の間に静寂が続く、外では怪我人なのか病人なのか、それとも虚偽の患者なのか。救急車がサイレンを鳴らし走っていく。音が遠ざかり、残響を残し、それすらも消えた後。彼は遂に口を開く。

「さとりが記憶を失った。恐らく俺が死んだという事実には耐えるために精神が保護のために行つた自然的な現象だ」

フランとこいしはあまりにも軽く伝えられたさとりの現状に目を見開くが、彼は淡々と続けていく。

「俺は能力を使って、さとりの記憶を戻そうと思う。その際に、記憶を少し弄って俺の身体能力を身につけさせる。その方が俺が護る上で楽だと判断した。そこまでは良いがここで問題が発生した。記憶をいじるのは精神に大きな負担が掛かる。誰かが付きつきりで診ておく必要がある」

「どうやって?」

単純な疑問だった。覚妖怪は記憶を読むことはできても記憶の変更は出来なかったはず。そんな事が既に来るなら、能力の強化が終了しているということになる。けれど、八雲紫は彼の能力をなにかを犠牲に物体を変更する程度の能力と言っていた。どちらの能力を使ったとしても記憶は物体では無いし、読心は変える事はできない。となると……既に彼は、本来異形と化すレベルまで進行しているという事になってしまう。

「鋭いな、フラン。その通り、お前の想像以上に俺はもう長くはない」

苦い苦笑を浮かべている彼を見て、フランは背筋に寒気が走る。異形化すればもうどうなるかわからない。なのに何故、彼はあんな表情を。今思えば、初めて戦ったあの時、彼は吸血鬼の私の攻撃を正面から受けたのにも関わらず、痛みに苦しむような事もなかった。ただ、冷静に傷を治し、向かってきた。表情も変える事なく。

「そこまでだ、フランドール・スカーレット。それ以上は辞めろ、お互いに一切得がない」

「お兄様……」

気づいてしまったか。

横目に表情の曇ったこいしを収めつつ息を吐く。まあ、構わない。俺は俺の役目を果たすだけだ。それにもう、俺の何を知らうがあまり関係はない。

「俺はそれまでに下準備をしておく。外の知識は既にお前らの記憶に入れておいた。いつ帰れるかわからないが、それまで待っていてくれ」

こいしに鍵を投げ渡し、それを受け取ったのを見て自らの座標を変え。幻想郷に飛ぶ。

場所は変わって幻想郷。

「あれが本当に、秦 空なの？ 紫」

「間違いないわ」

少し時は遡り、通常よりも多くの結界で囲われた博麗神社でスキマから秦 空の戦闘を眺めていた八雲 紫と博麗 霊夢。依姫、豊姫、藤原妹紅、八意永琳、蓬莱山輝夜。最強の面子と言っても差し支えなほほど強力な面子だった。それが、これといって苦戦させる事もできずに撃墜。その後に見れたレミリア・スカーレット、パチュリー・ノーレッジ、十六夜咲夜、紅美鈴は不意打ちに成功、能力の封印まで成功したにも関わらず撃墜された。どうやら彼に殺す気は無かったようで、全て殺すまでは至っておらず。医師である八意永琳に関してはほぼ無傷だった。裏を返せば、それだけ余裕があったという事だ。

「月のあいっすらでもあんなやられ方するのに、私達で勝てるの?」

博麗神社の巫女にして幻想郷最強と謳われる彼女でさえ、依姫と豊姫には敵わなかった。その2人があかも簡単にやられればいつもは気丈な彼女でも幻想郷の未来を憂い、少し弱気になるのも仕方がない。

「取り敢えずは、まだ敵ではないようね」

あの感じだと、殺そうと思えば簡単に殺せた筈。それにあの最後の消え方。恐らくは時間停止。十六夜 咲夜の能力に自らの能力を変化させたとしても能力で時間ごと止めたとしても、異形化の侵攻はかたり進んでいると見て間違いない。時間ごと変更で止めたとすれば既に、生と死を変更してくる可能性も十分高い。最も恐るべきはそれだ。死を生に変更されれば、死人が蘇り、生を死に変更すれば、誰一人として彼に敵対すら出来なくなる。不老不死すら変更されれば意味を成さない。だが、最も恐ろしい使い方は死という概念を変更して無くす事。それだけはさせてはいけない。

勝算がなくなるなんてレベルの話ではない。単純な怪物の誕生だ。そんなものが生まれれば、幻想郷どころか世界が危うい。

例え、核の雨を浴びようと、溶岩に沈めようと、宇宙空間に飛ばそうと、死ぬ事はない。そんなもの、止めれるものはない。

「彼の理性と彼の異形化、どちらが勝つかによって全てが決まるわね」  
「でもあの感じだと異形化は既に…」

「分かっているわ」

倒すだけであっても能力を乱用すれば楽に出来た筈だ。それなのに何故、能力を使う事を極力避けたのか。

彼の真意に触れかけた時。空気が突然凍った。何が起きたのか理解する前に、闇色の外套を羽織った少年が現れる。あまりに濃い鉄の匂い。彼の外套をからは赤い血が滴っていた。

「ああ、その通りだ」

「一体どうやって入ったのかしら？」

後ろに跳びのき、霊夢をスキマに詰める。完全に入り、スキマが閉じるまで庇った後に彼に向き直る。

「俺のいる座標を変更した」

「とんでもないわね。でも、会話の成立する辺り案の定大丈夫と踏んで良いのかしら？」

血に濡れた外套、顔すらあげない少年の一挙手一投足に警戒し、八雲 紫は質問を投げかける。理性が既に無いのなら、今は逃げる他ない。

「ああ、異形化は恐らく理性を消して感情を暴発させるものだ。見た目の変化は正直おまけと言ってもいい。そして、これ以上異形を殺す事は意味がない。無尽蔵に増えすぎだ。死肉に集ったハエすら異形化していた。俺の殺すスピードでは追いつかない。殺しきる前にどう計算しても俺の理性が尽きる」

外套から血を零しながら彼は続ける。

「俺の能力は何かを犠牲に物体を変更する程度の能力、それとサードアイによる読心だ。俺はこれまで体力を使って前者の能力を使用して来た。だが、異形化によって体力ではなく強制的に理性を使わされている。通常なら理性は回復するが、異形化の影響で一度理性が無くなればそれは補えない。もっと早くに気づくべきだったが、既にかなりまずい状況まで来ている」

「自分の本来の能力まで理解したのね。まあ、いいわ。それは具体的にどれくらいかしら？」

既にまずい状況とは言ってもどれほどなのかは分からない。既に血に濡れた外套を変更しないあたりそこまで危険なレベルまで来ている可能性もある。

「俺も分からない。というのが答えだ、理性は確認のしようがない。だが、俺が体を人間態に戻した時の異形化の侵食具合で判断できると思っている。外の異形で人間や妖怪の姿を留めたままのものは居なかった。予想でしか無いがな」

「既にどの程度まで進行しているのかしら？」

少年は無言で外套を落とす、布の落下音とは異なる肉塊が落とされたような鈍い音がし、彼の体が露わになる。右の眼球は赤く染まり、

右腕には既に人の名残はなく、黒い鱗で覆われていた。足は隠れて見えないが、既に右半身は異形化していると捉えて問題無いだろう。

「さっきの戦闘で修復に使わされたのがマズかった」

「想像以上ね。で、何か策はあるのかしら？このままだと幻想郷は壊滅するわ。あなたに策が無いなら私達も最終手段に出る他ないのだから」

「一体最終手段とは何なのか、少し気になったが敢えて触れずに心も読まず放っておく。」

「古明地 さとりの記憶を弄って戦闘力を俺と同等まで引き上げる。その上で、俺に関しての記憶を消して、俺も名を変え、さとりに従僕する」

「同じ覚妖怪だからいけるだろうという事かしら？けれど、古明地さとりは貴方と違って武器は作れないわよ。貴方が従僕するからといって貴方の強みの武器の無限生産は出来ないわ。それに、貴方はイレギュラー、古明地 さとりににはきつと貴方の代役は務まらない」

「それに関しては俺が作る。従僕としての役割としてな。物体から物体の変更なら消費も軽い。肉体面も変更して筋肉量も俺と全く同じにする」

「成る程、確かに。それが成功すれば、まだ抵抗は出来るかもしれないわ。けれど、わざわざ貴方に関しての記憶を消す意味はあるのかしら？」

彼は異形化した右目を瞑るとのんびりと口を開く。外では相変わらず人の形を、元の形を失った肉塊の悲鳴が、嬌声が、欠伸が、響い

ている。

「さとりは記憶を失った。そのトリガーは俺が死んだか異形化したからと確信したからだ。俺に関しての記憶を何とかしない限り戻しても俺の姿を見た瞬間にまた記憶が飛ぶ可能性がある。そこまで膨大な量の記憶の変更は消費がキツイ筈だ。一度でも失敗すれば俺が異形化する可能性がある。それはお互いに避けたいだろうか？」

「そうね。でも、貴方はそれで良いのかしら？ 彼女は貴方のことを愛してくれていた筈よ。それに貴方も彼女のこと嫌いではないんでしょう？」

異形化した目を開き、体の後ろから半分鱗に覆われて、異形化の響が色濃い歪なサードアイを回してくる。そして彼は苦笑した。

「これは英雄の武勇譚じゃ無いんだ。八雲 紫、これは罪人の贖罪譚、1人の少年の罪滅ぼしなんだ」

紫は悲愴を顔に浮かべるが、口には出さず、ただ受け入れた。そうする他無かった。

「そう… わかったわ。貴方、名を変えろと言っていたわね。何にするの？」

少年は考えていなかったようで頭に手を当てて考えるが、少しすると軽く頷く。

「エルドラで行こう。これ以降俺はこの姿でいる事はお前らへの連絡以外無くなる。さよならだ、八雲 紫。幻想郷は、彼女の居場所は俺が必ず護ってみせる」

このさよならの意味を、八雲 紫は直感的に理解していた。これまで幾人もの人々、妖怪が戦場に出向く所を、死に至る所を見てきたがこれはもう……帰ってこれないと確信している者の顔だ。死を、覚悟している者の目だ。

「ええ、短い間だったけれど、また話せる事を祈っているわ。秦 空」

もうないと、分かっているの返答。ここで、彼の心配をするのは無粋だ。彼は既に覚悟を決めていた。もう、誰が何を言っても止まらない。

「ああ」

一言残すと、彼は再度座標を変更。こいしのいる場所へ飛ぶ。

「話がついた。今からさとりの記憶を変更する。ただ、その時に俺に関する記憶は全て消す事にした。そして俺はもうここに戻らない。さとりだけは戻すが」

「え?」

余りにも残酷過ぎる結論。

さとりは彼を愛してしまっていた。だが、それが裏目に出るのなら。この物語をハッピーエンドにする為に邪魔なら排除すべきだ。

「お兄様はそれでいいの?」

フランが慌てて彼の決まっていた決断を変えようと足掻く。

「ああ、これが俺の決断だ」

「お姉ちゃんは？」

ソファに腰掛けていたこいしが背を向けながら口を開く。

「お姉ちゃんは、どうなるの？お兄ちゃんは良くてもお姉ちゃんは良くない。だってこんなの酷いよ。外で皆で幸せに暮らせば良い！幻想郷の奴らは酷い奴らばかりだった。お兄ちゃんが異形から戻る方法もきつとあるよ！」

たしかにその通りだ、だが。

「すまない。それは、出来ないんだ。俺は幸せに暮らせない。いや、そんな資格はないんだ」

こいしがソファから立ち上がりうつろに詰め寄り、涙で潤んだ瞳で彼を見据える。

「みんな幸せに暮らす資格はあるよ！何でそんなこと言うの？」

彼はこいしを見返すと苦笑い。古明地　こいしの翡翠色の髪を撫でると静かに語る。彼の過去を、彼の罪を、彼の贖罪を、彼の揺らぎと共に。

暗い暗い森の中、少年は1人。月に照らされ立ち竦む。右手には真紅に染まり、落ちることのないであろう血肉が付いた短剣。左には紫の硝煙をあげる拳銃が握られている。

「素晴らしい!!成功だ!我々の実験は遂に成功した!」

彼は被験体であった。内容は、人間の記憶、感情、経験、全てを度重なる拷問の末に消し去り、その上に記憶を書き入れる。要は洗脳である。

例え、どれだけ強靱な肉体を持つ者も、どれだけ知識の多い者でも。殺し合いでは情が少なからず入る。だが、感情を持たず圧倒的な能力を持った者がいれば。それは、人の形、体をとった何かであり、ただの殺戮人形だ。

「総理に報告を!すぐに!」

広がった惨状を嬉々として眺め、騒々しく騒ぎ立てる白衣の男。顔は老け、目にはクマが広がって居るがまだ二十代といったあたりだろうか?だが、明らかに異常者だった。

「ドクター、次の任務は?」

少年は短剣を鞘に収め、ドクターと呼ばれた白衣の男に声をかける。

「今日はこれで終わりだ。よくやった、コードネーム彼岸花、君には次からこの国の総理に従ってもらおう」

「了解しました」

その後、少年はドクターに連れられ、首都のとある建造物に連れられていかれた。賑やかな繁華街を抜け、人の海を車がかき分け、目的地に到着する。直ぐに中に迎え入れられ、豪勢なシャンデリアの垂れた客間へと通される。

「ドクター、よくやった。これで私の国は護られる。君の力をどうか、この国の為に使わせてくれ」

笑顔で黒い服を着た男に握手を要求される。少年は無言で返し、椅子に腰掛けた。他人から見ればかなり無愛想、かつ礼儀のなっていない者だが、総理にきにする様子はない。

「ドクター、彼は一体どれだけのスペックを持っているんだ？」

総理の質問を聞くやいなや、痩せこけ、目の下にクマのできたドクターがおもちゃを買い与えられた少年の如く口を開く。

「まず、今ある全ての銃器を扱えます。それに加え、武器の使用、拷問、暗殺。その全てを確実にこなせるだけの記憶と経験を入れました。極め付けには、こいつには感情が無いんです」

「ほう」

総理が興味深そうに、顎に生えた薄い髭をなぞり、少年を見据える。顔は一般人、見た目は中学生程度。こんな少年が本当にそんなスペックを持ち合わせているのか。そう思うのも当然だった。

「証拠はどこだ？」

「ハイハイ」

ドクターは右手にぶら下げられたキャリアケースから誇らしげにCDの入れたプレーヤーを取り出すと再生ボタンを押して総理に渡す。総理はそれを受け取り、画面に目をやった。

そこには数十人の武装した男に囲まれたこの少年が映っていた。状況は正直厳しいだろう。幸いなことに男たちは銃器は持っていないようだが、彼の持っている拳銃では全員を撃ち抜くには弾が足りない。リロード用の弾を持っていてもこの量ではその際があるかどうか。

そこでドクターが動画を一時停止、状況を説明する。

「この男達は全員殺人を犯し、殺人などを犯した罪人です。日本だけでは無く海外からも連れて来ました。この少年を殺害すれば罪を免除し、1000万の金を渡すという餌で釣って戦わせています。人数は丁度30人、武器は銃器以外の好きな物を取らせています。対する彼には一発の銃弾と一振りの短剣のみを持たせました」

「成る程、続けたまえ」

ドクターが再生ボタンを押し、動画が再開。一斉に男達が彼に襲い掛かる。一人は雄叫びをあげながら、一人は無言で駆け寄り、目の前のただの少年を我先に殺さんと殺到する。だが、勝負は特に激戦となるわけでもなく、簡単に決した。一人目の男のナイフを躲し、そのまま背後から迫っていた男にぶつける。バランスを崩した男達を片目に、正面から刀を振りかざして来た男の剣戟を短剣で受け流し、懐に飛び込んで喉を引き裂き、その男の裏から来た男に男を蹴りわたし、その男の刀を奪い、裏の男ごと串刺しにする。地面に突き刺すことで行動を封じ、刀を強引に左に振り抜く。いとも簡単に大の男二人の体は裂かれ、臓腑が飛び散る。最初は観戦に徹するという判断をした男達が目の前で起きた地獄に怯え、逃げ始めるが、一人の男が思い出し

たように叫ぶ。

「逃げるな！全員でやれば希望はある。このガキをやった後には研究員も皆殺しにすればいい。それに、逃げた所で俺たちは死刑囚だ」

それに励まされたのか、残りの男が再度彼に敵視を向ける。だが、そこからは一方的だった。数分とも経たないうちに男達は抹殺され、森には静けさが帰る。誰一人として生かされず、死が芽吹いた森の中、少年は無傷でただ立っている。

そこでビデオは終了した。

「なるほど、素晴らしい。まさしく私の求めていた人間の殺戮人形。この世を正す為に生まれた人だ」

総理はにこやかに笑うと、彼の情報を手短かにドクターから受け取り、ドクターを下がらせる。総理は軽く、その書類に目を通すと頷き。彼に微笑みかける。まるで自分の大切な玩具を守る子供ような目だった。

「君には、今日からわたしの部下として働いてもらう。申し訳ないが初仕事だ。まず、あの白衣の男を今日の夜、殺害しろ」

「了解しました」

それが、彼に与えられた最初の任務であり、殺しだった。それ以降、彼は国に従事し、国を乱すものを殺していった。そこに慈悲はない。彼はただ、過去に犯した事にされた罪を贖う。その果てに、彼は自害を命じられ、今に至った。

## 51話

?????

目を開くと、何も無い。純白の部屋。風もなく。景色もなく、際限なく広がるセカイ。そこに一人、漆黒のフードを被った少年が一人。呆然と立っていた。

「こんばんは、こんにちは、おはよう。傍観者諸君。私は、キミ達にとってにはアザーズ。彼にとってはユウだ。おや： 傍観者と呼ばれるのは癪に触る？すまない、なにも責めるつもりはないのさ。挨拶は基本だからな。しようかと、そう思ったただけだ。それにしても…既にこの物語はかなり進行している。もう、この物語を変えることは出来ないだろう。取り敢えず、主人公である。彼が居るうちは。

だが、考えた事はないか？余りにも都合が良すぎると、こんな奇遇は現実ではあり得ないと。例えば、真つ暗で、光一つ刺さない洞窟の中で偶然歩いた方向に出口がある事。洞窟だぞ？当然、いくつもの道があつたはず。しかし、彼は出口に到達した。もうしつこいほど見たと思うが、これは英雄の物語では無く、罪人の贖罪の物語。まるで神に守られているかのようなあんな偶然、起きると思うか？

答えを教えよう。

あり得ない。

神の加護などある訳が無い。君たちが傍観して居るのはただ、運良く当たりくじを弾き続けている少年。もしかすると、どこかでは洞窟で死んだものが、あの百足の餌になったものが、勇儀に敵対と判断され殺された者がいたかも知れない。

失礼、余談だったな。彼は遂に贖罪が果たせるかもしれないところまで来たラッキーな少年だ。

しかし、一つ考えて見てほしい。

英雄譚はハッピーエンドであるのが基本だ。いや、そうであるべき

だ。当然だろう。何せ、英雄と呼ばれるものはそれだけの善行を積んでいるはずだからな。都合よく物語が進んでも、神の加護を受けているのだろうさ。だが、贖罪譚はどうだ…？ハッピーエンドを迎えられると思うか？

答えは恐らくノーだ。神は罪人には微笑まない。とれだけ罪を償おうと、どれだけ善行を積もうと、どれだけあがこうと。神はすべてを見ていらっしやる。だがもしも、彼以外の全てが幸せに終わりを迎えて。彼だけが不幸に終わったなら？」

突然、フードの男は壊れた人形のように笑い出すと。咳払いをし、何事もなかったかのように何処からか現れた椅子に腰をかける。

「まあ、神など。元からいない訳だが」

男は苦笑すると手を合わせ、目を細める。

「失礼、神がいると信じている者がいたなら申し訳ない。だが、これまでも神が人を救ったのを見た事があるだろうか？おっと、これ以上は様々な方面から攻撃を受けかねないのでね。やめておこう。私も敵はそう作りたくない。早く本題に移ろうか。」

昔話をするとしよう。

あるところに、善良な市民の少年がいた。裕福な家庭で生まれ、妹と弟がいた。だがある日、その家に強盗が押し入り、友人と遊んでいた外出していた彼以外の家族を惨殺、それも机に臓器を並べ、風呂場に首を並べ、腕と足を縫い合わせるなどした果ての猟奇的殺人だった。幸運だったのは、彼が帰った時には家にはもう犯人はいなかった事。ただ、並べられ、結われ、食卓に飾られた家族の臓器を見ることになった。当然、少年の心は音も立てずに崩壊。発狂。視界が真紅に染まり、これまで抱いたことの無い感情が彼の脳を走る。

殺したい。ころしたい。ころしたい。ころしたい。

だが、彼は善人であった。心の何処かで、そんな事はしてはいけな

いと思っていた。罪人は法廷で裁かれるべきだと、そう考えていた。だが、机の上に「見てね♪」という添え書きと共にスマートフォンに録音されていた映像をみた後にそんな理性すら崩壊する。

画面には宙に四肢を吊るされた妹と弟。どちらも恐怖に顔が歪み、泣き叫んでいる。その後ろでは腹を割かれ、真紅の体液を流し、動かない父親。犯人の足元には猿轡を被せられた母親が座らされている。そこからは惨劇だった。妹の服を破り、未だに小学生であった妹の身体を数人の男達が貪るように吸い、弄り、汚物を挿入。最後には弟を脅迫し、妹を犯させ。それを笑いながら鑑賞していた男達は最後に弟と妹の皮膚を生きたまま剥ぎ、四肢を切断、弟と妹の体をデタラメに縫い付けた。その一部始終を見せられた母親は発狂し、男達に暴言を吐き続けるが、その母親も男達に犯された末に殺害された。

そして動画の最後に、4人の男達は画面に並び、笑顔で

「おにーさん見てる？どんな気持ち？」

と言い、豚のように笑ったところで終わっていた。

少年の中で完全になにかが壊れる音がした。スマートフォンを全力で叩きつけ、叫ぶ。それは既に獣の咆哮に近かった。その尋常では無い声を聞いた近隣住民の通報によって警察に拾われた後も、彼はただ犯人への呪詛を唱えるのみ。そして犯人は見つからない。顔は割れていたが、巧妙に逃がっているらしい。そんな状態で、行き場を失った彼は孤児院に入れられるが、当然呪詛を吐き続けるような者に寄ろうとするような物好きは居ない。そんなものがあるのは、どこかのファンタジーだけだ。だが、彼の前にある日、白衣のドクターが現れこう言った。

「君の身体、記憶、その全てを私にくれるなら犯人を君の手で殺させてやる」と。

答えなど、既に決まっていた。少年は即答し、誓約書を書き、時々

うざったく思うこともあったが、心の底では尊敬していた親を、時々生意気だったが仲の良かった弟を、可愛げの残っていた妹を殺し、汚した犯人に会うことになった。

「おいおい、なんの真似だよ！」

潜伏していた古びた廃屋をドクターの部下が取り囲み、中から四人の男達を連れ出してくる。確かに、動画で見た男達だった。連れ出されるまでは驚いたような素振りをしていたが。外で待っていたドクターの横に並んでいた、屈強そうな男達の中に顔色の悪い少年が立っているのを見つけると反応が変わった。

「あー、なるほど。そういう事か。ねえ、どうだった？あの動画、母親は興味ないだろうけど、君の妹のナカ、気持ちよかったぜ？」

体つきの良い男が、そういうと、周囲に取り押さえられた男達が豚の様に笑う。

「口を開くなよ。お前の声なんて聞きたく無い」

冷たく、色すらない瞳。ただ、そこには殺意を通り越した黒い感情が渦巻いていた。

「別でやるんだろ？連れて行ってくれ」

笑い続ける男達を気にも留めず、色の死んだ目でドクターに向き直ると、車に乗り込む。

「聡明だね。それに以外と冷静だ」

そんな少年の背を見て、ドクターが笑いながら男達に指示を下し、

犯人を車に乗せ。山奥の小屋の地下に連れて行き、彼と犯人四人を残し、立ち去る。

「こっわーい。こっごっこだよ」

主犯格であろう男が少し苛立った様子で口を開く。

「もうお前には関係ない」

手始めに四人の寝台に横に並べられ、拘束された男の腹を全力で一発ずつ殴る。

「ククク、いやあ、甘いなあ。あの時の快樂と比べたら全くだよ」

やはり主犯格の男が、拘束された状態で笑い出し、それに共鳴するように周囲の男も笑い出す。

「なにを言ってるんだ。簡単に殺すわけがないだろ？いくらでも時間をかけて、お前らが壊れるまで、狂うまで続ける」

四人の男は気づくことはできなかった。この少年は、もうすでにおかしくなっている事に。壊れ果ててしまっていることに、心をすでに失ってしまっていることに。

手始めに少年は、男たちの全ての爪を剥がし、何故殺したのかを吐くまで顔にタオルを当てた状態で水を当て続ける拷問を繰り返し、足と手の指をペンチで潰し、気絶すれば水に頭をつけさせ強制的に目を覚まさせた。終始、その行為の最中、少年に感情という感情はなく、表情もない。その余興を終えたあと、最初に、主犯格の男を薬物で発狂させたうえで、麻酔を刺し込み生きたまま皮膚をはがし。臓器を掻き出した。それを見た共犯者は、命乞いを始めたが、全員目隠しをした

うえで、体のいたるところにダーツを刺し、麻酔をかけて目玉をダーツの矢で抉り取った。それでも、未だに生きていたので、四肢をひとつづつ切り落とした。

全てが終わった後静かになった小屋の地下の薄暗い光の中、少年は自らの血に染まった手を眺め、血の湖に映った自分の顔を見てしまった。

笑っていた。醜悪に、劣悪に、凶悪に。

だが、初めて自分のそんな表情をみたが不思議と、何も感じることはなかった。

「これで君は私の物だ。来い」

少年は左右から屈強な男二人に抱えられ、肉塊を残し連れ去られた。

これが、彼の真の過去であり。彼の原罪。彼が感情的になり、明確な殺意を持って殺した最初で最期の殺人だった。

彼は間違いなく罪人だ。だが、彼はそれを記憶していない。そして彼は人類の始祖であるアダムとイブの犯した禁断の果実を食べたという罪の先にあつた感情もまた忘れている。

となれば彼こそは、人類というものの原型。神の求めた人のカタチ。

感情がある故に、物事を面倒だ、などと感じ。

その果てに、人は怠惰に落ちて行く。

感情がある故に、他人を妬み。

感情がある故に、他人を恨む。

その果てに争いは起き、人が権力者の欲によって殺される。

感情がある故に、人は恋をし。

感情がある故に、独占しようとして願ってしまう。

その果てに、強姦が起きる。

感情がある故に、力を欲し。

感情がある故に、優越感に浸る。

その果てに、奴隷は生まれた。

人とは、自分以外のなにかを供物に捧げることではしか生きていけない余りに愚かな生物だ。おぞましい事に人はそれを疑問に思うことはない。

何故なら、人類は自分たちが生態系の頂点のその上にいると勘違いしているからだ。そこにはなにも存在してはいけない。あるべきなのは神や悪魔といった形を持たない者。

人とは進化しているようで進化していない。進化するのは技術と他の種とは違うという意識のみ。

故に、人は神に背負わされた罪を償う気の無い、生粋の罪人である。

真っ白い部屋、一人立ち竦む貴方の前で少年は立ち上がり、右手に握った銃口を無言でこちらに向け。笑った。

「まあ、ここまでで良いかな？ 私は去ろう。君も傍観に戻れ。これはたった一人の罪人の罪を贖う物語」

銃声が、何も無いセカイに響いて消えた。

## 52話 護るといふ事

明るい部屋で、彼の口から放たれた光の差さすことのない過去に、フランとこいしは当然動揺するが、同時に納得もしていた。

「お兄さんが？」

だが、それなら確かに納得がいく。辻褄が合う。彼の能力は変更する程度の能力だった。だが、そこには武器の使用方法を覚えるというものはなかった。だが、彼は出した武器はどれも完璧に扱っていた。それに、戦闘における立ち回りも常人のそれではなかった。現に、力では敵うはずのない鬼の勇儀、吸血鬼のフランに勝利を収めている。確かに変更する能力も心を読む能力も強力だ、だがそれだけではさとり妖怪の最大の弱点である身体能力のデメリットを打ち消すほどのアドバンテージにはなりえない。ならば、なぜ、どのようにして彼は勝利を収めたか。単純だ、技術、知識、経験、これで埋めるほかはない。相手が傲慢であるならそこにつけ込み、移動が速すぎるなら拘束、こちらの体力が尽きそうならば拘束の上に拘束を続け、自ら以外の自然の力に頼り逃走する。

「これからさとの記憶を変更。筋肉量と戦闘経験を俺のものにする。さとりに俺と一緒に幻想郷で異形と戦ってもらうが、こいしとフランには最後に頼みたいことがある。外の世界で身を守っていてくれ。さとりも、俺の任意のタイミングでこちらに帰すしな」

「ふやふ」

だろうなとは思っていた。フランが拒否、続いてこいしも首を振って拒否する。だが、ここで本当の理由を伝えれば全力で阻止してきかねない。

「お前らを護りきる自信がないんだ。異形は感染型、一撃でも受ければ異形化する。幻想郷でも屈指の実力者であるお前らに異形化されれば戦況はさらに悪化する。それに、お前らは切り札だ。必要になった時に八雲 紫を迎えに来てもらうように伝えておく」

こいしの読心はやはり通らない。こいしは読めないながらも、その中で確信していた。これはきつと嘘だ。真実の織り交ぜられた嘘。何割が真実なのか、どこが嘘なのか、わかりはしないが。

「そう…ずるいね。お兄ちゃん。私にはお兄ちゃんが嘘を言っているように聞こえるの。でも、確証がない。私にお兄ちゃんの心は読めない。だけどひとつだけ言わせて。外の世界でお兄ちゃんがなんだったのかは関係無いの。生きて」

こいしは瞳を潤ませながら賛同に回る。だがフランは未だに納得しきれていなかった、彼の言っていることは確かに事実だ。ただでさえ劣勢なものにも関わらず、そこから敵に強力な駒ができればさらに勝率が薄くなる。地底で戦っていた時、彼が異形化してから突然襲撃の量が減った。それはやはり、地上で彼が異形を殺して回っていたからなのだろう。そんな彼が、今になってさとりと共に戦うと言い出した。単純に考えて、理解ができない。なぜ、さとりを危険にさらすようなことをするのか。異形の処理は追いついていたはずだ。彼が異形化すればそれはまずいことになる。だが、そこで戦わせるとはならない。自らの経験を上乘せなどする意味がない。それではただ、危険に晒しているだけだ。お兄ちゃんが何も考えずこんな行為に及ぶとは思えない。

「ああ、死ぬ気は無いさ」

死ぬ気は無い。だが、この物語を幸福に終わらせる為には。

「お兄さん?」

フランが疑問をぶつけようとした直前、階段の上から鈴の様に幼いようで、しつかりとした女性の声が不意に飛んでくる。

「さとり、ごめん。起こしちゃったか」

階段の最も高い所で、目をこすりながらショッピングモールで買った寝巻きを着たさとりが立っていた。服は着崩れて少し危ういが、別にどうでもいい。

「降りてきてくれるかい?」

「はい」

おぼつかない足取りでさとりが彼の前へ。そんなさとりを彼は愛しそうに抱く。

「ごめん。さとり。さよなら」

能力を行使して、さとりの肉体と記憶を変更していく。一度彼と出会ったところまで読心、そこからの彼が関わった記憶を一つずつ消していく。肉体の変更は体の大きさが違えばかなりの痛みを伴うだろうが、あまり体の大きさは変わらない事もあり。くすぐったいくらいで済んでいるようだ。事実、さとりは体を震わせるだけで済んでいる。

抱き続けること数分。数分というにはあまりにも長く感じた時間。一切のミスは許されなかった。一つ構成を間違えれば全てが壊れる。人間とは脆いものだ。彼の腕から解放されたさとりは呆然と立ち尽くし、横に立つ彼に声を掛ける。そこにいたのは間違いなく古明地さとりであり。そうではなかった。

「エルドラさん。行きましよう、幻想郷を守らなくちゃ」

「了解」

エルドラと呼ばれたかつての彼女の大切な者は、彼女を連れて戦地へと飛んだ。

場所は変わって幻想郷。

紅魔館付近の妖精の森。当然異形はそこまで進出してきた。

「ルーミアちゃん、もう危ないよ！一回逃げよう！」

地獄の中、少女が二人、空を駆けていた。いつだったか彼が教鞭を取った寺子屋の生徒。既に戦闘をいくつかこなしたようで、体には傷が出来ているが。未だに異常は見られない。

「でも、見捨てられないよ。大ちゃん。チルノちゃんもみすちーも危ない」

そんな彼女たちの前に、突如漆黒の竜が現れ夜空に吠える。絶望的だった。

「嘘でしょ……大ちゃん！リボンを壊して！」

「う、うん！」

大妖精から弾幕が放たれ、ルーミアの髪止めの役割を果たしていたリボンを布が壊れたとは思えない、まるでガラスが割れたかのような高音と共に破壊された。

直後、闇が一挙にルーミアに集中。光の侵入すら許さない闇がルー

ミアを球体状に包む。

「ルーミア…？まずいですエルドラさん。今破壊されたのは…彼女の封印。彼女は昔強力過ぎたために先代の博麗の巫女に封印された空亡と言う妖怪なんです」

空亡…聞いたことはある。確か百鬼夜行の最後に付く大妖怪。闇を操るといふのは見れば分かるが。

「仕方がない、さとりに、撃て」

さとりの手元にサブマシンガンを用意する。

「fire」

正面の収縮が始まった球体に対し、さとりがサブマシンガンの連射力を用いて闇の何処にいても当たるように発砲。だが、闇からはなんのダメージも受けていないルーミアだった者が現れる。腰まで伸びた闇の中映える金髪、瞳は猟犬のごとく赤く輝き、身体つきも子供のものから成人の女性のものへと変化していた。

最悪だ。ついてない、だが、今の俺はあまり機嫌が良くない。

【さとりに、ハンコで止まれ】

さとりを空中で静止させ、ルーミアの精神に干渉、トラウマを幼少期のものから全て20回ずつ同時に再起させる。当然、脳がショートし、ルーミアは地面に落下、それを待っていたかのように口を開いてスキマに吸い込まれ、大妖精もそのあとを追う。

【行くぞ】

「はい」

黒竜はさとりを乗せ、地面に着地する。

森からはすでに生物の反応はない。あるのは暴走した感情。竜の背に乗った少女を一匹の異形が棘を飛ばすことで強襲。だが、その棘は首を傾けることで躲され、逆にサブマシンガンから放たれる大量の鉄が殺到し、肉片に返した。

「多いですね。どうしますか?」

【殺し尽くす】

「ですよね」

非常に短い会話、だが今はこれがベストだ。それはもうお互いに理解できていた。

闇の中、一人と一匹は目を合わすことも無い。一匹はそれを悲しいとは思わず、一人はなんの疑問にも思わない。ただ、目の前の異形を殺し、屠る。例え、いかなる手段を使おうとも、他人から見ればあまりにも残酷だと思われるも。

「いきましよう」

一匹は返答すらせず、ただ一つ吠える。それを合図にか、さとり武器が支給された。小回りの効く短剣、ハンドガン、背中にはARも担いでいる。どれも一切の装飾は施されておらず、可憐などこか幼さの残る彼女とは全く不釣り合いなものだった。

「ところで、どのタイミングで今日は帰還しますか?」

【帰還するのはお前だけだが、取り敢えず今日はもういい】

「いくらなんでも早すぎませんか?」

まだ、こちらに来てから30分も経っていない。あまりにも短すぎる。これでは異形を殺しきることなど不可能に近いだろう。今この瞬間も、異形は際限なく増え続けているのだから。死体を食らう生物が、襲われた生物が。異形と化していく。

【ああ、だが今日はこれでいい】

竜はさとりの座標を変更し、返答も聞くことなくあちらへ帰す。何も、意味もなく返したわけではない。彼には彼のいる場所へ風を切り、土を巻き上げながら向かってくる影に気付いていた。そして、それが何であるかも。

竜は翼を広げると、一気に上空へ浮上。そのまま妖怪の山へと向かっていく。

「エルドラさん！」

さとりは声を上げて手を伸ばすがもう遅く、既に転移が完了しており、暖かく、平和な家に着いていた。こいしは、ソファアに腰かけており、フランはそのすぐ横で眠っている。

「おねーちゃんどうしたの？」

突然現れた姉に驚くこいしだったが、それ以上に、さとりの言葉が気になった。エルドラとは今の彼の名前だった。それにあまりにも帰ってくるのが早すぎないだろうか、2人になっただけでこれほどまでに変わるものだろうか。彼が返ってこないのは知っていたが、まだ30分もたっていない。何かが起きることを予見して彼が予定よりも先に帰したと考えるのが一番辻褄が合うけれど。

「何かあったの？」

「ううん、大丈夫よ。返事も聞かれずに飛ばされてちよつとびっくりしただけだから」

姉は何知らないのかと、聞いてみるが。答える気がないのか、単純に知らないのか。非常に曖昧な答えが返ってきた。

「そっか、ところでき、おねーちゃんは体調とか大丈夫？何か変なところとかない？」

「え…？突然どうしたの。私は大丈夫、それよりも私はこいしの方が心配。ソードアイまた開けたんでしよう？開けてくれたのはとっても嬉しいけど、無理はしないでね。戦闘はエルドラとお姉ちゃんに任せて。時間はかかるかもしれないけれど」

姉とは、年長者とは、自立するか、自らが壊れるまで弟たちを護る義務がある。当然だ、強者は弱者を護るべき。家族ならなおさらだ。だが、彼は護ることができなかつた。それもまた、彼の罪であり、後悔だった。もし、あの日に友人と遊んでいなければ、家にいれば、弟か妹、どちらかを救えた可能性がある。どれだけ過去を呪っても意味がないことは彼も理解していた。だが、人間とはそんな生き物だ。どうしようもなく愚かで、醜い。過去に執着し、喜び、後悔し、怒り、恨む。

幻想郷の上空を飛行する彼は、竜から姿を人型に戻していた。やはり後方から何かが、迫っていた。

## 53話 贖罪の果てに

彼は、妖怪の山で超速で迫ってくるものの追撃を受けるつもりだったが、それ以前に問題が起こった。当然といえば当然、自分の街に怪物が襲ってきたら勇気ある市民と戦闘員が自らの家族を守るために立ち上がる。

「迎え撃て！ 奴は強力だが一匹だ！」

眼前には、十数匹の白狼天狗、上空にも同程度の鴉天狗、それでもどうやら今あるすべての戦力を集めたようで鴉天狗にも白狼天狗にも、装備はそろってはいたが鍬、手斧など質素な武器を持ったものが散見された。確かに、何も知らないものに下手に武器を持たせるよりは、平時使うようなものを持たせたほうがいいのかもしれない。それほどまでに兵力も人員も無いらしい。

誰の目から見ても地底に退くのが最善だが、恐らく大天狗が戦うこともせず、拒否しているのか、彼らのここに対する無駄な土地愛か。なんにせよ、これだけ人数がいらないということは半数以上は異形になっっていると考えて良いだろう。仲間内で処分した可能性もあるにはあるが、彼らの仲間愛の強さからしても怪しい。

「まずは、地面に落とします！ 風神様、私にお加護を、嵐瀑布！」

いつか、取材をしてきた記者が、戦闘服なのであろう、黒い巫女のような服装で現れ、彼に扇を振るう。突如、竜を取り囲むように竜巻が巻き起こり、逃げ場をなくした竜は仕方なく地面へ、そこには大量の白狼天狗。各々が武器を手に雄たけびを上げながら彼に襲い掛かるが竜特有の強固な鱗によって傷をつける事すらできない。

「皆さん離れてください！ 大狼様、どうか私にご加護を、狼牙九十五の型 神裂炎！」

聞き覚えのある声と共に凜々しい白狼の女が現れ、身体が消えたかと思うと上空から白く燃え上がった白狼剣を振り下ろし、竜の鱗を焼き切ると傷口から発火、竜が白炎に包まれたかと思うとすべての鱗が溶けかかり、竜が思いもしなかった猛攻に怯む。見逃さず上空の鴉天狗が弓を放ち、彼の身体に矢を突き刺していく。既に竜巻は消えていたので上空の鴉天狗から眠らせようと浮上しようとするが、身体が動かない。恐らく矢じりに塗り込まれた神経毒かなにかの類だとは想像できるが、恐らくあちらの世界にはまだないような物だろう。久々に毒が回るといふ感覚を味わった。

「今だ、白狼部隊突撃！」

掛け声とともに大量の白狼が各々の武器で彼の身体を痛めつける。鱗の溶けた竜の装甲は非常に柔らかく、殴り、裂き、穿ち。竜の身体は次第に闇の黒から深紅へと染まっていく。勝利は確実と思われたその時だった。突然白狼の動きが止まり、ざわめきが起こる。正面の黒竜ではない、山の木々をなぎ倒しながら高速で接近する何かの気配。

その中で、竜だけが内心舌打ちをする。面倒なことになった、と。

「おい、何だ？」

彼らの後方から、どこかで見た一匹の白狼が姿を現した。だが、一つ違うことがあるとすれば、白狼の原型が残っていない事だろうか。右手は異常に発達し、膨張した筋肉が腕の肉を突き破っており、その先には凶悪な爪が歪に生え並んでいる。すでにナニカを引き裂いたようで赤黒い肉片が付着していた。顔は狼のものに近付き、鼻は高く、口は耳元まで裂け、生え並んだ歯の間から長い舌が垂れている。

「あはははははははー！」

狂気、その言葉しか当てはまらないような笑い声が怒声のように響き、白狼たちは耳を抑えうずくまり、鴉天狗も動けない。その中で唯一動けていた椀が同胞を庇うように前に立つ。

「貴様は何者だ？」

動けない竜を半ば放棄し、椀が白狼剣を掲げ、威圧。そう聞いてはいたが、ここにいる誰もが気付いていた。これは異形だ。そして言葉は通じない。

「私を裏切り、馬鹿にしたものを許さない。イヒヒ、我が主人を愚弄した者を許さない」

凶悪な顔立ちから、少し暖かさの残った声がこぼれる。聞き覚えのある声だった。

「誰だ貴様は、立ち去れ！」

この状況で、竜だけが異常に気付いた。この異形は銀杏だ、だがあいつは死んだはず。それは間違いない。その上、この椀という白狼は仲間思いだったはず、それなのになぜ彼をこの数日で忘れている？いくら何でも早すぎだ、となると、銀杏は。なにかを察した竜が咆哮を上げ、再度白狼天狗をひるませ、その隙に自分の位置と、体を人間態に変更、銀杏と椀の間に入り、椀が振り下ろした白狼剣を短剣で受け流すが、神経毒の残った体では受けきれず、後方に吹き飛ばされる。

「なぜなぜ??とめた？愚弄したな?！」

そこに、異形化した白狼が激怒しながら追撃、彼は地面に半ば埋まるようにして攻撃を受け、口から血を吐く。体中の骨が複雑にへし折

れた気がするが、すぐさま健康体の身体に変更、だが、未だに神経毒が取れず、動くもののぎこちなさが残る。

「お前…。」

神経毒の残った体で生まれたての小鹿のような状態で立ち上がるが、その首元を異形化した白狼がつかみ、小柄な彼はたやすく持ち上げられる。

「愚弄するなあああ！」

話を通じないならば殺すしかないが、こいつの能力は道連れだった。異形化しているとなると当然こいつの能力も強化されていると考えて間違いない。だが、道連れという能力の強化がどのようなものになるのか見当がつかない。しかし根本は揺るがないはず、ならこいつを殺すことはできない。つまり、この戦闘は、こいつが白狼及び鴉天狗に攻撃しないように注意しつつ、動きを封じる以外彼にとっての勝利はない。その上、彼はこれ以上無駄に能力を使えない。例えば、この異形を殺してしまった場合、道連れが発動し、何が起きるかは想像がつかないとしても、道連れが発動し、対象として死ぬことは確実。ここで、死の概念を変更などすれば彼は間違いなく異形化がかなり進行することに間違いはない、さらにそれで異形化などすれば幻想郷の住民が、彼に勝つことが不可能になる。不死身の異形の完成だ。彼は能力を発動、自らの座標を異形の上に変更、腕に作り上げた大剣を振り下ろす。だが、大剣は異形の右手に易々と受け止められ、碎かれる。その直後、彼の上空に白狼が移動、地面に彼を叩きつけ、首元に噛み付き異形ウイルスを流し込む。

「こいつ、そういう事か」

すでに異形になりかけの者には異形ウイルスを流すことは無いの

ではないか？と哀れな期待をしていたが、現実はそう上手くはいかないらしい。彼は今一度座標を変更、上空高くに変更、周囲に星屑の様に武器を作り上げ、一点に降下させる。更に、上空から重力に任せて落下する彼は巨大なスナイパーライフルを構え、地上の白狼に対して時間を止めて二度発砲、右手、右足をつぶし、時間を再度動かし、異形の回避の手段を奪いつつ武器を降下。地上の白狼は逃げ惑い、鴉天狗は蜘蛛の子の様に散っていく。

轟音と共に土煙が舞い上がり、それが晴れた先には武器の山、その中から異形を見つけ出し首元をつかみあげ、拳銃を額に当てる。四肢はちぎれ、お互いに体中から赤い血が垂れており、周囲の武器を伝って流れ落ちる。ここからどうするか、彼が迷った瞬間だった。

「なぜ、愚弄した??？」

突然、切断された手足が地面に転がった武器の中から液体のように滑り出し、彼の足を掴み、地面と癒着。怯んだ隙に腕の生え変わった異形が彼の眼前で、大口をあげる。

「成る程」

位置を上空に変更するが足には癒着した異形の腕が絡みつき、上へと広がり始める。状況を確認すると空中に刃を作り、膝より下を切断。すぐさま足を作り直す。

早く戻らなければ異形がいつ白狼天狗に興味を示すか分からない、逆に白狼天狗が異形を襲う可能性もある。位置を変更、再度地面へ。彼の帰還に遅れて彼の足が上空から落下、鉄くずの山に落ちる。だが、そこに異形の姿はない。

「これが異形同士の戦い・・・」

白狼も、鴉天狗も息を飲む他なかった。次元が違いすぎる。なによ

りも、あれだけの攻撃をお互いに行った筈なのに、お互いにまるでダメージを負った様子が無い。外套を纏ったほうが劣勢には見えるが、だいぶ余裕があるようにも見える。

「あの能力、まさか」

一部の白狼は気づいてしまった。彼の手元に突然現れる武器の数々、そしてそれを自由に操る姿。これは、変更する程度の能力で間違いない。となれば、あの外套の中身はある日幻想郷に現れた覚妖怪、白狼の村を救った元英雄、今となっては幻想郷中から指名手配とされている異形。

「まさか、撤退！撤退します！私達に敵う相手では……ッ」

「英断だな。早く行ってくれ」

そう言った元英雄の上に異形が現れ発達した右腕で叩きつける。それを闘牛士が躲すように器用に避け、右手の拳銃を連射。全弾命中を確認しつつ距離を取り、有効部位を確認するが特に有効打は無く、弾倉に新しい弾を作り続け撃つ。それを見た直後鴉天狗と白狼天狗は撤退を始めた。

「愚弄……？」

しかし、その距離が一瞬で詰められ、異形が薙ぎ払うように右腕を振るう。躲せないで即座に判断し、腕に合わせて後方にステップを踏み、衝撃は弱める。

「愚弄デスね？・ねネ？」

吹き飛んでいく彼を見た白狼は喜劇を見た少年のように笑いなが

ら、親の死を見た少年のように号泣し、白狼は発達した足で地面をめぐりあげながら彼が吹き飛ぶ速度に合わせて移動、彼を抱きとめると体を癒着させつつ彼に噛み付く。

「知能も高めかよ。いいご身分の異形だな」

先程の転移の際に彼の体から癒着した部分は取れていなかった事を踏んでの行動だろう。更に、その状態で異形化させる為に異形ウイルスを流し込む。彼は迷わず異形化、竜に戻った体で異形の拘束を強引に解除する。

「愛宕様の異炎」

彼の口から闇と錯覚する程の炎が吐かれ、怯んだ異形を焼いていく。そのまま、業火に悶える異形を磔にし、人間に戻り空に叫ぶ。

「八雲 紫！どうせ見ているんだろう、作戦変更だ。出てこい！」

「貴方…。」

空間に裂け目が生まれ、彼の背後に紫の髪を称えた女性が現れる。

「わかっているようで何よりだ。こいつを利用する事にする。幻想郷の異形化していない住民は何人くらいだ？」

「100もいないわ。何故？」

彼は荒い呼吸を繰り返し、地面をほぼ人間の原型がない手で掴む。

「わかった。集めてくれ。帰ってきたときに俺が異形化していたらここにいる俺ではなくなった者を全勢力で殺せ。それと大天狗の屋敷

にいるものは連れて行かなくて良い。これで何人だ？」

「50くらいよ。貴方…まさか」

「これは賭けだ、今から残っているものを一箇所を集め始めてくれ。さとり、こいし、フランも忘れるな。俺は三度大きな変更をする。もし、1度目の変更で異形化した場合は殺せ。2度目でも同様だ。3度目は、俺から全力で逃げて住民を移動させてくれ。頼む」

早口に彼が言葉を吐く。先程よりも息は荒れ、寒気を抑えるかのように体を掻き抱いている。

なにかを察した紫はスキマを通して早急に行動を開始する。彼も立ち上がり、黒炎を消し、異形に手をあて能力を行使。この異形の間を死ぬ直前まで戻し、傷を修復する。

「秦 空?!その傷は一体…!」

「おはよう、英雄。お前はこれから本当に英雄になれる。良かったな」

返答など待たずに彼の能力を変更。十字架から解き、そこで吐血、楓が彼に駆け寄った直後、八雲 紫が現れ秦 空を確認。声をかける。

「まだ大丈夫だ。今から俺が指定する所スキマで繋いで住民を移してくれ、俺が幻想郷のパラレルワールドを作る。環境は現代のものにする。行くぞ」

体から力が抜けていくのを感じる。意識も朦朧としてきた。だがまだ、意識はある。まだ、人間らしくしぶとく、妖怪のように強く生きていく。まだ、死ねない。

「秦 空…。」

「住民はどこにいる？」

「このスキマの中よ」

彼は返事すらせずに、その隙間に頭だけをいれると、そこでも能力を行使。現代を生きる知識と彼の作った記憶を与え、銀杏と紫を除いて幻想郷の記憶を消す。仕事を終えた彼は頭を引き抜き、地面に仰向けに倒れる。

「なんとかなったか…。」 八雲 紫。このスキマの先に世界を作った。この世界に住民を」

そこで言葉を切り、目を瞑って悪寒に耐える。最悪だ…。最悪…。？彼はそこで初めて気づいてしまった。気付く必要の無かった事実。そして、あまりにも遅すぎた事実。あと数日気付くのが早ければもっと他の可能性はあった。

「移したわ」

八雲 紫はもう何も言うことは無い。銀杏もまた状況は理解出来無いものの、黙っている。

「もしも、幻想郷を思い出したら全勢力で攻めて来てくれ。そして銀杏、お前には英雄になってもらう。ここからはお前の英雄譚だ」

「何を言って…。」

「機会があったらさとりくに謝っておいてくれ。楓にも」

彼は血を吐きながら笑う。

「八雲 紫。ありがとう。幻想郷はいい所だった。久し振りに他人に愛され、初めて尊敬され、感謝された。最後の最後に気付くなんて間抜けだな・・・色々思い出したよ」

涙を流しながら笑みを浮かべる。流れた血が彼の鱗に覆われた頬を伝って地面におちる。彼の表情に後悔はない。あるのは揺るぎない覚悟と、決意。

「後は任せた。ここから先は俺の戦いだ。銀杏、申し訳ないが。次会った時は俺を殺してくれ。行け、八雲 紫」

紫は無言で頷き、銀杏の手を取るとスキマの中へ、その後ろ姿を見送りながら能力を行使。彼らの記憶からも幻想郷を削除する。

「酷いもんだな。ハッピーエンドはあり得ない。知っていたさ。だが、どこかで期待もしてた。なあ神さま。ここまでしてもまだ駄目なのか？おれは幸せになれないのか？」

「当然だ」

彼の横にゆうが現れる。相変わらず、顔は見えない。

「来ると思ってたぞ。神さまよ。youと名乗るなんて随分とムカつく真似するな。分かりにくい」

「事実だ、神とは常に無情に裁かなくてはならない。もう、君はユウではないようだがね。だが、これこそ、君の終焉に相応しい。罪は清算されるだろう。喜べ、貴様にはハッピーエンドはあり得ない。ならば他人にだけでもと言う意思は尊重してやる」

「でも、結局お前は俺だろ。成功してしまった俺だ。当然だ、こんなスベックを持った少年は簡単には死なないだろうからな。洞窟にいても脱出は経験からして容易だろう。心が無いのだから異形化なんてしない。まずまず、心がなければさとりを庇わない。そうなれば彼にとってハッピーエンドになるだろう」

「その通りだ。奇跡的に、さとりに出会う。奇跡的に感情を見つけた。そしてこれがこの果てだ。最後に聞こう。本当にこの終幕で良いのか？我々はいくらでもやり直せる。違ったエンディングも有る」

彼は声も出さず微笑むと、空を見て、周りを見て、記憶に想いを馳せる。

「ああ、これで良い」

「この先にあるのが地獄だとしても？」

「ああ。これこそが家族を殺され、全てを捨ててまで恨みを果たした男の贖罪に相応しい」

「了解した。もう俺も現れる事もない。止めるものはいない。さようならだ、俺」

ユウの姿が虚空に消える。残された罪人は一人、雲のかかった夜空を眺め、意識を手放した。

これこそが、家族を殺された恨みで心を焼かれた少年の心に種を蒔き、育んだ少女と彼の物語。

片時も贖罪意識から解放されることのなかった一人の罪人とその願いの物語。

その果てに、彼は笑っていた。満足したと、そしてここからは俺の戦いだ。贖罪だと。

幻想郷に残された異形では無いのは彼一人となった。となれば、全ての異形はたった一人の生存者に襲いかかる他ない。彼は、愛しいものの居る世界へと繋がるスキマを閉じ、立ち上がる。

気付けば、妖怪の山を囲むように異形の気配を感じる。嘆き、怒り、悲しみ、喜び。様々な感情の濁流が彼のサードアイを伝って流れ込む。その中で、彼は立ち上がり右手に短剣、左手に拳銃を構え発砲。音に連れられ彼の周囲の至る所から埋め尽くすように異形が現れる。

「かかって来い異形共！お前の相手は俺ただ一人だ。この罪人を殺してみせろ！」

次の瞬間、彼は異形の波に吞まれ、消えていった。

## 54話 罰

まるで雪崩のように異形が彼を襲う。人間では抵抗出来ないことを察した彼は異形となり、空へ。そこに空を飛ぶ異形が強襲するが、彼の周りを円を描くように回り始めた長剣に体のいたるところを切断され、血飛沫を上げながら地面に落下。その肉を地面でそれをただ見上げるだけだった異形が食らい啜う。醜悪に、凶悪に、純粹に。

「おいしいよお、おいしいー！」

地上の光景を見た彼は、顔をした歪めると口から黒炎を吐き出し、異形の肉ごと焼き払う、肉の焼けるのは異なる酸っぱいような異臭が漂う。だが、その程度では異形は減ることすらない。炭のように焼け切った肉を後から後から湧くように現れる異形が喰らう。軽い絶望感が彼を襲うが、既に外とのスキマは閉じているため、もし彼が負けても異形がさどりのいる世界に流れることは無い。滅ぶのは、この幻想郷と、外の世界。幻想郷を護れなかったのは残念ではあるが、住民は無事、彼女たちはきつと古明地 うつろの作った世界で新しい違った幻想郷を作る。ここはもう用済みだ。ある意味はない。いつか帰ってこれるといったが、それは無理だろう。八雲 紫に、幻想郷の記憶はないとなれば、奇跡でも起きない限りここに戻ることはできない。それに、帰ってしまえば、異形になった彼との戦闘は避けられない。その事態も想定して彼は銀杏の能力を変更したが、必ず犠牲は出る。それに、彼の異形が戦闘時に相手の能力を変更してしまったら彼の工作も無意味になる。それに生と死の概念の変更を異形になった彼がしないという保証はどこにもない。

彼の周囲では相変わらず大小さまざまな異形が群がっては回転する長剣に切り裂かれ落ちていつていた。地上に降りれば地上の異形に体を食い尽くされるか異形にされるか、と言っても逃げ場はない。この幻想郷には今大天狗を除けば彼以外の異形になつていない者はいない。大天狗はあの城に籠城しているだろうからそう簡単には食

えない。そうなれば、異形がねらうのは彼一人。幻想郷という狭い土俵では逃げるにも限度がある。どこに逃げようと数十分も経たぬうちに追いつかれるだろう。だからといって戦って勝つこともできないだろう。彼が異形化するほうが間違いなく早い。彼は、暗殺者であつて勇者ではない。依頼ではどのような手を打つても殺すがこうなつては無理だ、多すぎる。それに彼の能力は変更であつてそれ以上でもそれ以下でもない。どうあがいても戦闘を経なければ敵は殺せない。対象の生と死を変えることもできるが、その変更をこの数に行えばまず間違いなく異形になる。

朦朧としていた意識が遂に途切れ、剣の回転が止まった隙に大量の異形が彼の翼を食いちぎる。抵抗するにはもう遅く、飛ぶすべを失つた罪人は地に落ちる。

その姿を周囲の異形が醜く噛い、かれの翼に黒い液体を吹き掛ける。それは、白煙を上げながらの傷口に侵入し、回復を妨げる。そんな彼の前に一匹の異形が歩み寄り、噛み付きにかかる。咄嗟に右にかわすが、既に立つことすらままならない体では限界があり、異形の群れによつて作られたリングにぶつかつてしまう。そんな彼を異形たちは嘲笑しながら突き飛ばし、再度リングの中に戻す。

彼は再度正面から突つ込んできた異形の身体をやつとの思いで爪で引き裂く。その異形は動かなくなつたが、次は俺だと言いたげにまた一匹の異形が歩み出る。既に肉塊でしかないような体を左右に揺らしながら彼にタツクル。それを殴り飛ばし、異形のリングの外に吹き飛ばした。だが、まだまだ異形はいる。一匹の異形が前に出る。他の異形とは明らかに違うそれは黒い甲殻に覆われており、地面から生えるようにして飛び出している。更に腕として大量の腕や足が生え並んでいた。口からは常に黒い体液があふれ出し、悲痛な泣き声を上げながら甲高い声で笑い、彼に襲い掛かる。

既に満身創痕の彼に覆いかぶさるように倒れこみ、手足の一本一本から体液を吹き出す。十秒ほど彼を体液漬けにした後、異形の上部が大きく開き、大量の肉でできた腸の様な内部が明らかとなつて、彼を飲み込む。頭から飲み込まれ、頭、胴体、脚。と、あつという間に彼

は異形の中へ、だがそれだけだった。一切の攻撃はなく。肉に体を揉まれ、黒い体液をしたたらせた彼は吐き出された。だが、異変は起きていた、身体が竜ではなくなっていた。人のものに戻っていた。

飲み込んでしまった体液を吐き出しながら右手に長剣を作り、正面の異形を切断。黒い体液を吐きながら笑ってその異形は死んだ。当然それでは終わらない、彼の前には黒い海のように異形がいるのだ。次が前に出る。だが、今回は一匹ではなかった。全裸の人間の女の姿をした異形が数十匹現れると無言で彼にとびかかる、最初の数人を切り伏せ、なぎ這うために構えた剣を切った筈の異形につかまれ、剣の動きが止まったその隙に後続に剣を持っていた手を外され、蹴り上げようとした足をその後続につかまれ、押し倒されると地面に大ノ字に拘束されると白濁した体液を囲むようにして立った異形に股からかけられる。服のみが白煙を上げながら消え、全裸にされると心拍数が上がり始める。まるで、長距離走をした直後のように呼吸が荒れ始め、身体が火照る。そんな彼の上に、異形が跨り、腰をふる。抵抗しようにも異形化が解かれては異形に腕力でかなう訳もなく、されるがままに。もう一匹の異形が彼に口づけをした後に性器を彼の口にあてがう。更に、数匹の異形が彼の姿を見ながら自慰を始め、喘ぎながら体液を絶えず、かけ続ける。そして、数時間に及んで彼の身体をもてあそび続けた。満足したようで、彼から離れた異形を、ふらつきながら長剣を拾い上げて処理。全裸で、体液まみれの彼を見て、異形たちはさらに嬉しそうに、愉快そうに笑う。

「くそ……が！」

未だに薬の回っている彼が剣を作り、反撃に転じようとした瞬間にその身体を糸が捉えられ、空中に磔にされる。異形の中からさきほどの女の異形が三人現れたかと思うと、姿が変わり、フラン、こいし、さとのものになる。その異形も糸で釣り上げられ、空中に磔の様に吊られる。

その前に彼は歩かされ、一人ずつに挿入させられた。声までも真似

た悪趣味な異形に彼の心は磨り減るが彼の壊れた心はその程度では動じない。糸を焼き切ると、姿を真似た異形を切り殺し、再度彼を捕らえようとした糸を引く事で糸を出していた蜘蛛のような異形を見つけると銃殺。

「あまり舐めるなよ？俺は弱くない」

だが、限界は来ていた。既に能力の維持は出来ていない。次異形ウイルスを入れられれば確実に異形になる。どうせ異形になるならと彼は告げる。

「終焉を、終幕を、この悲劇に歓声を！始まり終わり、回りまわって巡りめく世に喝采を！これが最後の能力だ、異形という概念ごと消えろ」

彼を中心に花畑がつくられていき、そこに触れた異形は草木に変わる。雲は晴れ、暖かい陽光が差し込む。数分にわたってその変化は続き、彼の周囲から異形が消え、いつかの幻想郷が復活する。その最後に一人このされた彼の身体はまるで霧のように消えかかる。そんな彼の前に、一人の天狗が現れた。

「はあ、やってくれたね」

「楓…？」

いつかの白狼天狗だった。なぜ、紫に連れていかれなかったのか。だが、もう彼は思考すら回せない。確認できるのは事実だけ。正面に血まみれの楓がいる。

「こんな世界、消えれば良かった。なんで邪魔した？」

「なるほど、まさかのって感じだなあ」

消えかけの身体ではもう彼女に抵抗することは出来ない。だが、すでに住民は逃した。ここで死んでも問題はない。

「なんで救ったのって聞いてるんだけど」

「これが俺の罪滅ぼしだからだな。そっちはどうしてこんな事したんだ？」

相對するは二人の罪人。張り詰める空気。だが、戦闘となれば勝敗は見えきつているため、彼女は手を出さない。

「私は幼い頃から忌子として迫害を受けてた。父親はそんな私を殺そうとして、それを庇った母親が殺されて、父親は私がこの手で殺した。一人で泣いていた私を助けてくれたのは権だけ。私はこの能力のお陰で白狼の女戦士になった。でもそこで見たのは下の者を同じ妖怪なのに駒同然に使うクズ共。知ってるよ、外の戦争もこんな感じなんだよね。そんなの、野生動物よりも愚かじやない？だから、いつその事、感情を暴走させて、野生動物のようにしてやろうと思ったの。でも、何故か貴方が邪魔をしちゃった訳、なんで？」

彼女の過去は知らない。興味もない。だが、一つ言えるのは彼女の言っている事は大まかには間違っていない。人間は石器時代から精神性は一步も進化していない。弱者を虐げ、強者がのさばる。これを解決するには確かに、感情を暴走させてしまうのも手だ。だが、

「それなら感情を消すべきだったな。感情が暴走したところで感情がある故に愚かなのだから、逆にそれが悪化しかねない。だが、感情をなくせばわかるが非常につまらない。人間も妖怪も愚かだ、だが諦めろ。お前もその妖怪の一部だ」

「私は愚かじやない！この世界を修正しようとしただけ」

「で、修正出来たか？」

怒鳴る楓を遮るように言葉を返す。虫の一匹もない世界はやけに静かで風の音だけが響く。

「結果はこれだ。何も修正出来ず。この異形の攻撃で損害を受けたのは弱者達だ。抵抗の術を持たない者達だ。そしてお前の真に変えたかった強者は逃げ切った。お前は失敗したんだ」

「果たしてそれはどうかかな？」

何か含みのあるような発言。まるでまだ奥の手があるかのような。

「何かおかしいとは思った事はない？私の能力は感情を操る能力。私は異形化してないからこの能力のまま。さて、普通の人間だけを襲うように出来るでしょうか」

「知らんな。だが、この世界の異形のごとく俺が飛ばしたんだ。異形はもういない」

何を言いたいんだこの女は。だが、確かにこの能力では異形が正常な人間を狙う理由にはならない。どのように感情を操っても、一般人と異形との区分がつけられないだろう。できて親族を殺すくらいだ。それに彼女の能力は操るのであって新しい感情を生み出すものではない。

「それに、妙だと思わない？さっきの異形はなぜすぐ殺さずに遊んだのか。感情が暴走しているはずなのに何故あれだけ統率が取れてい

るのか」

「お前が操ったんだろ」

「私が操れるのは感情だけ。言ったでしょ。今回は感情が暴走するようにしただけ」

ならば確実に楓一人の犯行ではない。となればもう一人協力者がいる？何処に？

ここまで頭が回ったところで、全身に冷や汗が浮かぶ。彼は八雲紫に幻想郷の全ての生存者を送らせた。と言うことは。

「私以外にもいなかったっけ？この世界を恨んでいる住人が。恨んでも可笑しくのない。妖怪が」

「まさか…」

一人浮かんでしまった。確かに妙だった。今考えればおかしかった。全てが、何故気づけなかったのか。

それは間違いなく幻想郷と言う新しい土地だったからと言うわけではない。俺自身の気の緩みもあった。

「こんにちは、うつろ。元気ですか？」

懐かしい、心が落ち着く声だ。だが、今この瞬間にこの声が聞こえた時点で。俺の計画は破綻したことが明白になった。

「その通りです。でも、私は貴方がいまだに好きですよ」

振り向くとそこには黒い外套を被った少女。その外套からは何か真っ赤なものが滴っている。何なのかは考えたくもない。右手には

いつかにわたした

神さま、神さま。いるのなら答えてくれ。これ程までに俺に救いは与えられないのか。俺は確かに罪人だ。だが、これは。これはあまりにも。残酷過ぎる。

## 55話

外套を取るまでもなくわかっていた。そこにはいるのは彼の恋してしまった少女。妹を幻想郷に壊された姉。たった一人残され、耐えてきた忌み嫌われた妖怪。

「さとり…」

少しの沈黙。花々はただ風に揺られ、木々はそれを見守っていた。

「やっと気付いてくれましたね」

いつもは落ち着く笑顔だが、今は何の安心も得られない。あちらに駒が揃ってしまった。俺はもう能力は使えない。彼女たちは俺を異形にすることは出来る。更に、俺は感情を取り戻した。となればもう、抵抗のしようが無い。感情が無かったという、これまでが奇跡だった、今はもうその奇跡はない。

「確かに、おかしかった。百足が俺を砂漠までは追って来なかったのにわざわざ地底の街に突入し、さとりを襲った事。羅刹が襲撃しているのにペットが誰一人主人を庇おうとしなかった事。そして、覚妖怪同士では読心は出来ないと言っていたのに出来た事。おかしいことばかりだったんだがな。なぜ気づけなかったかな」

皮肉った笑みを浮かべながら、たった一本の短剣を握る。

今思えば、その時から好きになっていたのかもしれない。恋は人を盲目にするとはどうやら本当だったらしい。

そんな彼とは対照的にさとりは外套を脱ぎ捨て、突然彼に優しく抱き着く。まるで壊れやすい陶器でも扱うかのように、生まれたばかりの赤子を守るかのように。

「ああ、こんなに傷ついて。もう無理はしないと書いていたのに、でももう大丈夫です。私が守りますからね」

彼をしつかりと抱くさとりをほほえましそうに楓は眺め、花畑に寝る。彼女達にはもう、言葉は届かない。

彼に残ったのは悔恨。誰も救えなかった。自分の存在までも賭けに乗せたのにも関わらず。愛した少女に裏切られ、逃した者も、恐らく異形にされたか、殺されたかした。これから彼は異形にされるか軟禁されるか、感情を操られるか、記憶を操られるか。なんにせよ、何もしなければ、彼女たちの物になる。

「ごめんな、さとり。これだけは。これだけはダメなんだ」

抱きついていたさとりを突き放し、短剣を投げつけ、躲した先に飛び込み両の手で首を締め上げる。すでに半分以上消滅しかけている体では人くらいしか殺すことはできない。きつとさとりは殺せない。それは理解していた。なぜなら覚妖怪も妖怪、いくら妖怪の中では弱いといっても大の男が数人がかりでやつと捕らえることができる程度。そんなものを弱り切った同族が首を締め上げた程度では殺せない。

これがきつと、最後だ。これまでの話が間違っていた。罪人にはハッピーエンド以前に。幸せになる権利も、愛される権利も、正義の味方を演じる権利もない。にもかかわらず、彼は英雄と称えられ、恋人ができ、幸せになった。この結末は彼からすればハッピーエンドかもしれない。記憶を良いように改ざんされ、感情を取り戻せば、彼はきつと古明地 うつろとして、幸せになるだろう。だが、それが空ではないからと言って罪人であることに変わりはない。それに、古明地 さとりも楓も罪人だ。人の感情をもてあそび、多くの妖怪を、人間を殺した。となれば、この結末は罪人の作った世界で、罪人が幸せになるというものだ。

故に、この終幕は認められない。

きつと、神もお認めにならない。  
ならどうすべきか…

無かったことにする他ない。

どうすればこの現状を打開できるか。答えは一つだった。もう一度この世界をやり直せば良い。だが、今の彼にはもうすでに能力を使う余裕はない。

遅れて異変に気付いた楓が跳ね起き、彼を異形にする為に感情を操る。

元から異形にする気ではあった。これはさとりも同意の上。それに、今の彼の体が透けている状態からして、異形化でもさせなければ肉体を維持できない筈。能力をフルで発動し元英雄を狂わせる。

能力の対象となった彼の中では怒り、喜び、哀しみ、苦しみ。色々な感情が暴発するほど高まり、理性を七色のペイントで塗りつぶしていく。

「楓！やめてー！」

読心で彼の考えに気付いたさとりが楓を止めるが、もう遅い。一度沸き起こった濁流のような激情は留まることはなく全てを洗い流す。だが、その直前、彼は能力を使った。異形化の直前の一瞬、その時ならば能力を使えるかもしれないという賭けだった。

大きな賭けに勝利した彼の体は実体を取り戻し、いつかの漆黒の竜へと変わっていき、空へと昇る。その果て、幻想郷の全てが見える場所。罪人は能力を行使。世界が少しずつ崩れる。地鳴りと共に地面が崩落し、天が堕ち、底のない闇が口を開き全てを飲み込み始める。

「うつろ… どうしてですか？」

崩壊する世界の中で、竜は二人の少女と対面する。彼の事を愛し、愛された罪人が悲しそうに笑う。

「貴方ならわかってくれると思ったのに、私は家族をこの世界に奪われたんです。私達は何も悪い事はしてないんですよ。ただ、ひっそりと暮らしていただけ、なのにあの醜い奴らは私達を執拗に追いかけて回して捕まえては老若男女関係なく殺し、見つかった女は年に関わらず犯された後に殺されました。私達姉妹は両親が命を賭けて逃してくれたおかげで生き延びれたんです。でも、その時はまだ、覚妖怪の読心という能力が他人からすればどれだけ恐ろしいかを考えてなんとか納得しました。でも、そうじゃ無かったですよ。怖かったからじゃ無かったです。ただ、邪魔だったただけなんです。邪魔だった、それだけの理由で私の家族は妹は……！」

何もいえなかった。彼が今の暗殺者となつてからは家族などいない。故に、大切な人を失うという感情がわからなかった。だが、今はわかる。彼は家族を殺された復讐を果たす為に自らを犠牲にした。どこか彼女と似ている。しかし、決定的に違うのはその結末。まだ彼女は救える。だが、今の彼女は救えない。救つてもその先がない上に、彼女も罪人だ。罪人は救えない。

「お願いですうつろ。私と一緒に過ごしましょう？私は何も失いたく無いんです」

甘い言葉だ。それが俺自身にとっては最も幸せな選択である事に間違いはない。

崩壊する世界。少しずつ崩れ、壊れ、消えていく。もう既に崩壊はかなり進行し、彼女達の周りは無くなりかけていた。

「無理だ。俺は幸せになれない。だから、さとり。お前だけでも。幸せになれ」

そう言い残した竜に手を伸ばすが、その手は絶望的なまでに届かない。また救えなかったという虚無感。自らの存在に対する無力感を

実感する。

「どうして…？どうして貴方はいつも自分を犠牲にするんですか？」

遙か上空で崩壊する世界を見守る竜に涙を流して問いかける。

「俺が、英雄じゃないからだ。これは俺という罪人の贖罪譚。ひとりのバカな男が守りたいものを見つけて守るお話だからだよ」

竜の姿が崩れ、懐かしい彼の姿が落ちてくる。黒いサードアイ、黒い髪。何もかもを見透かすような黒い瞳。彼女の手と彼の手が触れる直前、世界は堕ちた。

## 56話 少年はやり直す

目が覚めるとそこは闇の中、少年は目を覚ますとおもむろに転がっていた岩を掴む。ふれられた岩が安いマジックの様に棒に変わり先端に火が灯る。当然、周囲が照らされ、湿った冷たい岩が光を反射、煌びやかに周囲を照らす。

「成功か」

突然現れた少年は、ただ一つつぶやくと、姿を消す。とり残された火種は重力に従い地面に落下し、洞窟の地面で煌々と燃えた後に少しずつ勢いを失い、消えた。

地底にたたずむ白い大理石のようなもので作られた荘厳な館、地霊殿。その一室では、珍しいことに白狼天狗と地底の主である覚妖怪が秘密裏に会談を開いていた。内容はこの世界の破壊、彼女達だけが知っている筈の秘密。彼女たちを苦しめたこの世界への報復、復讐、それはすでに最終段階に突入していた。

それは古明地 さとりが最初の異形となること。だが、楓がさとりを異形にする直前。

「こんには」

突然としてそんな彼女たちの前に現れた少年は気さくな挨拶を投げかけてきた。

今日は、作戦の実行日、私が異形になる日。迷いはしたが、この世界に復讐するためならば、この体なんて惜しくはない。守れるのなら惜しくない。

「すいません、どなたですか？ 今は取り込み中なのでまたあとで来ていただけるとありがたいんですが」

今、邪魔されるわけにはいかない。この少年がただ会いにいただけならば。

そこまで考え、彼の胸元につながっている黒い球体が目に入る。そこまでは平静を保っていたさとりの心が崩れる。

「え？」

「残念だけど、その作戦は遂行させるわけにはいかない」

思わず声が出た。サードアイだった。もう妹以外には居ないと、心を読む覚妖怪はいないと思っていたのに。

彼の胸もとに浮かぶそれは間違いなく覚妖怪の妖怪たる所以であり、迫害され、恐れられていた理由。

「さとり、こいつは」

楓も彼の胸元に浮かぶ眼球に気づいた。だが、問題はそこではない。右手で白狼刀を抜き、臨戦態勢に入る。

覚妖怪などどうでもいい。気にすべきはこの少年の発言だった。間違いなく敵だ、それにどうやってこの場に現れたのか、どのように作戦を知ったのか。覚妖怪とはいえこの一瞬で作戦の内容まで知ることができないだろうし、侵入者が来ない様にかなり警戒はしていたはず。どうやって入ってきた。いや、そんなことよりも今は、こいつを殺すしかない。覚妖怪であること以外に情報があまりにも少な過ぎるが、覚妖怪は腕力だけで言えば弱いはず。さとりが戦力として期待できないとしても、私だけで簡単に殺すことはできる。

「相手になると思ってるのか？ ただの妖怪が？ ただの天狗が？ たった一匹で？」

一体何を言っているのか、理解に苦しむ。

それも無理はない。覚妖怪は心を読めるという大きなアドバンテージの代わりに腕力が妖怪の中でもかなり低い。弾幕勝負ならば心を読めるといふのは大きなアドバンテージに成り得るが殺し合いでは意味がない。読んだところで妖怪の動きに身体がついて来ない、どこから来るかはわかる、だが人間に毛の生えた程度の身体能力で、妖怪の殺意を持った攻撃は躲せるほど妖怪は甘くない。もしも、楓が覚妖怪ならまだしも、彼女は白狼天狗。腕力は鬼には及ばないものの、覚妖怪よりは遥かに高い。

「死んで」

狼の脚力を使い一瞬で距離を詰め、白狼刀を振り下ろす。覚妖怪なら確実に躲せない速度、確実に命を奪う威力。だが、彼に外傷はなかった。

突如何もない空間から現れた鎖に四肢を繋がれ釣りあげられる。少年はゆつくりと近付くと彼女の記憶を変更。彼女を縛り上げる鎖ごと巨大な氷柱を作り、彼女を幽閉する。

「貴方、本当に覚妖怪ですか？」

本来覚妖怪同士なら読心は通らない。なのにも関わらず、彼女に彼の心は鮮明に読めた。ありえない話だ。これまでもあまりにも長い間この妖怪をしてきた。故にこの例外はあり得ない。それに、覚妖怪は読心が能力、あの鎖は？ この突然現れた氷は？ なぜ、彼女の攻撃を受けたはずなのにダメージがない？ 二つ目の能力？

あまりにも不思議な点が多すぎる。

「ごめんな。さとり」

そう告げた彼の目を見た彼女は、その場に倒れこみ、長い永い夢を

見る。

「後は、罪人用の結末。と行きますか」

巨大な氷柱と床で眠り込む少女を見た彼は不自然に笑う、それはまるで、親が子を逃し死を覚悟した時のような。

彼女達を強襲した少年は眠ったままの彼女を愛おしそうに抱き上げると寝台に寝かせて、たった一つのおまじないを掛けると消えた。

「異変、よね」

そこに遅れて登場した八雲 紫は氷漬けにされた白狼天狗と長い夢の中の地底の主を確認する。

だが、どこか違和感があった。傷一つ付けず戦力を奪う。これだけの戦力差、何故殺そうとしなかったのか。わざわざ、氷漬けという面倒な手段を取ったのか。白狼天狗を殺す必要が無いのはわかる。けれど、覚妖怪を生かす意味がわからない。一つあるとすれば覚妖怪の能力を知らない場合。これなら納得がいく。しかし、それなら何故この場所を知っているのか。ここを最初に狙ったのか。それに加えて、この館は大量のペットがいる。にも関わらず。その全てに気づかれること無く、さどりの部屋に侵入して一瞬でこの状況を作り上げて、また気付かれることなく、どこに行ったのか。

「ダメね、謎が多すぎるわ」

とりあえず、これ以上何かをすれば手を打ちましょう。

正直のところ、幻想郷の賢者の心すら読むことのできる妖怪は彼女にとっても邪魔だった。白狼天狗に関しては能力までは記憶していないまでも、かなり危険だったことは覚えている。彼女達は幻想郷を運営する上で不都合の方が多い。彼女達は言わばここで退場してもらってもなんの問題もない者達だった。

その頃一人眠り姫となった古明地 さとりは夢を見ていた。

どこまでも続く白い世界。しかし、地面には雪が積もっている訳でも、霧がかかっているわけでもない。命を感じることものない世界が永遠と続く。そんな中にぽつりと一つの円卓、見覚えのない影。その影は軽くこちらに会釈してくる。それに形はなく男か女も分からない。

「やあ、さととり」

声は男だった。徐々に形が集約し始め身長の低めの少年の姿を形どる。黒いコートに黒いズボン、白い世界においてあまりにも目立ちすぎるその恰好は異様という他ない。下半身から順に形が整えられ、数秒後には彼女を襲撃した覚妖怪が現れる。

「あなたは何者なのかしら」

まずは確認をしなくてはいけない。この世界は何処なのか、どうすれば帰れるのか。この世界には彼しかいない、ここは恐らく彼によって造られた世界、彼に逃げられればここから逃げるのは難しいだろう。下手に争えば二度と戻れなくなる可能性もある。

「ただの罪人だよ。ところで、世界が、人が、妖怪が、憎いかい？」

少年はそう言って、右手を正面に差し出し、座れば？ とでも言いたげに笑顔を浮かべる。

「当然、私は許せないもの」

少年は、そうか、と一言漏らすと座る彼女を見届けたあと、紅茶の入ったコップを持ち上げその水面に浮かぶ小さな波を眺める。

「あと一度だけ、世界にチャンスをくれないか？」

「あなたも覚妖怪が何をされたか知っているんでしょ？　なのに許せと？　こいし以外の家族も仲間も殺されたのよ、限りなく尊厳を奪う方法で」

彼女は不機嫌にティーカップを揺らす。無理もない、どれだけの仲間が、家族が他の者に傷つけられたか。殺し方も、理由もすべて感情のある者のすることとは思えないものだった。

「その通り、許して欲しい。まあ、でも許さなくてもいい。だが、もし許せるなら君が起きたら、この剣で俺を刺してほしい。もしも君が俺を殺さなければ俺が幻想郷を代わりに破壊する」

彼は、自分がなにを言ったのか理解しているのだろうか。

だが、彼女が状況を理解する前に少年は机に質素な革の鞘に納められた、黒いバラの精巧な彫刻が施された短剣を置く。

「残念だけど、貴方にここを破壊できるとは思えないわ。貴方が鬼ならともかく、私と同じ覚妖怪、腕力も無いし、妖力も低い。読心が強いのは弾幕勝負だけよ、殺し合いでは意味がないの」

呆れたように息を吐く彼女を彼は貼り付けたような笑顔で眺めた後、紅茶に砂糖を入れ、かき混ぜる。

「別に幻想郷を壊すのに殺し合う必要はある？　俺がするのは征服じゃない、破壊。ただ、ここの結界を破壊すれば済む事、壊すだけなら簡単さ、でも、多少の抵抗はあるだろうね」

砂糖が溶けきった紅茶を口に入れ、ゆつくりと飲み込んだ彼は紅茶を消すと甘いなと言。

「まあ、良いわ。壊せるとしましょう、でもそれ以前によ。例えば私が貴方を殺したとして何になるのかしら？ 私を英雄にしようとするなら無駄よ、よく考えなさい。覚妖怪を覚妖怪が殺したところでそれはただの同族処理、あなたが覚妖怪であることを隠しても覚妖怪に対する見方は変わらないわ」

彼女の批判を頷きながら聞いていた彼は確かにとでも言いたげに頷く。

「確かにその通りだ、でも当然それだけじゃない。さとりが俺のことを刺した瞬間に能力で覚妖怪の概念を皆の記憶から消そうと思う。俺の能力は何かを犠牲に変更する能力だ。さとりに刺された瞬間に俺の存在を犠牲に能力を発動すれば良い。そうすれば皆の印象はさとりが幻想郷を救ってくれたというものになる。でも、覚妖怪のことを忘れたというだけで、能力は残ってる。もし、この先世界を救ってくれたのにも関わらず、この住民がさとりやこいしに危害を加えれば、もう滅ぼしてもかまわない。無理だとは思うけれど、できれば俺も協力する。まあ、慈悲なんてかけない、消す。というのなら何もしないでここにいい。でも、忠告するなら。幻想郷がつぶれても覚妖怪は大丈夫と考えているなら辞めたほうがいい。君は無事でもこいしはきつと他の妖怪と同様消える」

「貴方も覚妖怪よね」

なんの関係もないような一言。だが、その一言は最も彼が求めている物だった。覚妖怪は総数が極端に少ない。そこから更に身内を犠牲にするという選択が出来るのかは正直疑問だった。だからこそ、少しでも切り捨て易いように突然襲撃した。だが物事はそう上手くはいかないらしい。

「そうだな」

「貴方は男よね」

「そうだな」

「しかも貴方は強い。そんな貴方と外に出れば覺妖怪の一族はまた再興できるんじゃないかしら」

「ダメだな。俺はその選択肢は作っていない。表層だけでもいい奴を演じようかと思っていたがそうだった。読心が通っているんだろから意味などないか」

「じゃあ、貴方は何の為に私を救おうとするのかしら？ 貴方になんの得がないわ。そこが信用ならないのよ」

「何故か？ 簡単だ。俺は醜悪で、愚鈍な罪人だからだ。俺の物語にハッピーエンドは存在しないし、誰かを幸せにする事も叶わない。自らが最も救われない方法で、物語の幕を閉じなければ罪は永遠に贖えない」

赤黒く濡れ、膨大な数の遺体の上で泣くわけでもなく、笑うわけもなく、苦しむわけでもなく、電話をかける少年。

それが彼女に見せられた罪人の心象だった。

「起きたら殺せば良いのね。わかったわ、受けるわよ」

「物分かりが良くて助かる。じゃあ、起きたらまた会おうか」

そういつた瞬間、白に染まった世界が音を立てて崩れ始める。地面も壊れ、崩落した天井が崩れ落ち。気を失った。

「紫、これは何かしら？」

幻想郷の賢者と博麗の巫女。彼女の前に広がっていたのは村だった。一見何も変わっていないが。明らかにおかしい事がある。村の人間は皆泣き崩れ、並ぶ死体に花を添えていた。

「妹紅！ 一体何があったのかしら？」

家の全てから搬送された死体が村の中央に集められているのを屋根の上から眺めていた妹紅に紫が声をかける。

「分からない。昨日の夜、私はこの村にいたんだ、慧音と一緒に。でも、悲鳴の一つも聞こえなかった。なのに起きたらこれだ、村のみんなも起きたら死んでいたと答えてる」

「犯人の予測はついてるの？」

「いいや、それが誰も見てないんだ」

「見てない？ そんなわけないでしょう。もう一度聞きなさい。これだけの人数よ、一人くらい見ているもおかしくないわ」

「紫、ちよつと」

その頃、村の中央に並べられた物言わぬ者を見ていた霊夢が上空で妹紅と話していた紫に手招きする。

「何かしら」

「これを見て」

そう言つて彼女は遺体の傷口を指差す。それは死因とは言えないほど小さな穴だった。

「私は最初、咲夜の犯行を睨んでたのよ。あそこの主人は吸血鬼だしね。血を欲してもおかしくはないでしょ。でもこれは違うわ。これはそんな代物じゃない。ただ、人を殺すという事に特化した物よ。どの遺体も抵抗の形跡がないの」

確かに、抵抗もなく殺されたと言うなら妹紅の発言も理解できる。だが

「幻想郷にそんな技術を持った者は居ないわ。それに多少なり声を上げたりは出来ないのかしら」

「そこなのよ。でも、これだけの技術を持っていれば可能性はあると言うのが事実ね。きつと声を出せても他人をおこすような大きな声は出せない。咲夜は時を止めれるけれど、それ故にこんなに綺麗に殺す必要が無い。妖怪は根本的に恐怖を糧に生きてるのだからもつと派手に殺すはず」

理にはかなくなっている。でも最も重要な問題が残っていた。

「ならなぜ殺したのかしらね。恐れを抱かせるにも少しは姿を見せた方が良く、この村を単に滅ぼしたいなら狙うべきは子供、それ以前にそれだけの力量があるなら残す必要が無い。この死体の共通点は子供じゃ無いという事だけ」

目の前に並ぶ大量の遺体。そして、その亡骸に泣きつく子供。とても見えていて心地の良いものではない。そんな賢者の元に式神である藍から一報。

「犯行声明らしきものが送られて来ました」

「霊夢、一旦ここは任せるわ。私は籃と話してくる」

そう言い残しスキマの中に入り、藍に合流する。

「犯行声明？ 誰が」

「見てください」

彼女の手に置かれた紙の束のようなものを受け取り、広げる。そこに書かれていたのは固まりきった血液によって擦りつけたようにただ一言。

幻想郷を破壊すると。

彼女は手にしたその紙を握り潰すようにして纏めると捨てる。

「受けて立ってやろうじゃない」

珍しく感情を露わにした主人に藍は怯えつつ、見送るのだった。

赤く紅く、血液で黒く染まった外套を纏った罪人は幻想郷の果てにいた。手に持った短剣と、外套の下に隠された大量の暗殺用具はどれも真紅の涙を流している。その感情あらわな装備とは対照的に彼の表情は穏やかだった。

まるで道端の蟻を踏みつけるように一晩で大量の命を奪った。これほどの虐殺をしたのは久々だったが、彼に迷いは無かった。夜の村に侵入し、サードアイを利用した読心で覚妖怪に負の感情を持つものを音もなく殺す。

当然理由はあった。もしも、さとりが彼を殺してくれたとして、彼

の能力で覚妖怪に関する記憶を除去したところで読心される事に不快感を覚える人間が居たのでは結果は変わらない。また、迫害されるだけだろう。

それに、彼の存在を犠牲に覚妖怪の記憶を消したとして、一人の犠牲でどこまで消せるのか、根本的に消せるかどうかも怪しかった。ゆえに彼は総数を減らすことにした。妖怪は殺せないこともないが、生命力の強さと人ではないという条件でバレずに殺すのは難しい。だが、人であればこれまでの経験上、静かに殺すことができる。

だが、欲を言えば読心に不快感を抱く妖怪も殺しておきたい。妖怪を殺せばそれだけ彼のヘイトも高まる。その状態で覚妖怪だったという事がバレれば周囲からの覚妖怪に対するヘイトも上がる。そうなれば全てを殺すなどという事になりかねない。だからこそ静かに確実に殺せる人間を選ぶのは妥当だった。

それに、妖怪は人間からの恐れで強くなると聞いた。ならば、人間を殺し、恐れを集めれば彼自身の強化にも繋がる。そして総数が減った分他の妖怪は弱体化する。そうなれば圧倒的に立ち回りやすくなるだろう。

「貴方ね。いったい何のつもりかしら？」

「何のつもりか？ 当たり前だろ、この腐った物どもを破壊するただそれだけだ」

悪びれる様子もなく、少年は笑う。

「わかったわ。貴方は幻想郷に仇なすものね」

全力で処分するわ

直後、目に見える程強大な妖気が噴き出す。

「おいおい、落ち着けよ。お前がどんなに強いからと言って俺のこの

拳が握られる間に殺せるか？」

もうすでに結界の破壊は容易い。それに握る事など必要ない。ここでは敢えて嘘を伝えておく、これでこの賢者が引かないのであれば座標を変更して幻想郷の反対側に飛ぶ。まだ、さとりも合流していない上に観衆の目もない。まだ殺されるには早すぎる。

「良いわ、私にもきつと無理ね。でもこれだけは聞かせて頂戴、貴方はなぜ腐っているといったのかしら？」

「この世界、という表現は甘いな。俺は幻想郷の外を含めた全ての感情を持つ生物が腐っていると考えている。理由は至極単純だ。大多数が勝つからだ。政治も戦争も正義も。それは全て大多数が勝つ。平等とはほど遠い。だが、愚かな民衆はそれが正しいと、美しいと言い張る。無理もない、そこで否定すれば自分は少数になる。そうならば周囲からは敵だと認識される。怖いのだ。だが、何よりも虫酸が走るのさ。そう言った大多数の上に立つものは皆一様に様々な意見があり、様々な考えがある。それは素晴らしい事だと言うんだ。それとはほど遠いことをしているのにな」

「そう、ね。理解はできるわ。でもここは破壊させない」

足元が突然開きスキマに身体が落ちる。その瞬間座標を変更、幻想郷の反対側に移動する。

「なにかを犠牲に変更する程度の能力。厄介ね」

無駄に開いたスキマを閉じると、賢者は幻想郷の各所に連絡を入れる。それは政治であり、戦争の合図であり、正義の執行。圧倒的多数による蹂躪の合図。

幻想郷始まって以来の地獄が幕を開ける。だが、その地獄には終わ

りが約束されていた。

## 最終話 幕は降り、罪人は星を望む

彼を殺すと約束をした。

殺さなければならぬ。

でも、もし殺さなかつたら？

彼は世界を壊してくれる。

私の願いは叶うのだろうか。

でもきつと、世界は私を許さない。

「見つけたわよ」

大勢の気配が来ていることには気付いていた。

これ以上逃げたところで意味はない。

きつと直ぐに見つかるだろう。

けれどもさどりの姿はまだない。

なら逃げなければ。

これできつと、世界は俺を許してくれる。

「おねーちゃん、起きたの？」

目を覚ますと、そこには愛しい妹がいた。大切な家族。

彼がここを壊す前に殺さなければ、私は大切な家族を見殺しにした

事になる。

「いつまで逃げる気なのかしら」

いつまで俺を追う気なのか。

そんな言葉を返したい。

けれども、彼にはもう、そんな余裕はない。

「おねーちゃんを襲った奴を幻想郷中の人を追ってるよ。もうきつと

死んじゃうね」

この迷いはなんだろうか、ただこの手で殺せば良いだけ。間違いな

く、彼とは初めて会った。でも、彼は私を間違いないと知っていた。

「あそこに出るわ」

もう既に、逃げる場所すら読まれている。これ以上は逃げられない

い。けれどもさどりはまだ来ない。もういつそ、ここを壊してさどりと二人。外の世界に逃げようか。

そんな思考を放棄して、次の手を考える。俺にそんな終幕が許される訳がない。

「おねーちゃんも行く。一緒に戦おう?」

なんの迷いも無いはずだ。

私は一体何を迷ってる。

私は彼をどうしたい?

迷う彼女は寝台の上、美しい短剣を両の手で握りしめ、あまりにも綺麗な刃に映った自分の姿を見ていた。

周囲に鬱蒼と茂る竹の中、彼は一人。

短剣を握り、覚悟を決める。勝てるとは思っていない。今思えば、さとりが来るまでにある程度追い詰められていなければおかしい。だが、死んではいけない。今前にいる全てを相手にすれば異形化してない俺に勝ち目は無いのは赤子でもわかる、一瞬で勝負はつくだろう。

だが、村の住民が俺を恐れているお陰かある程度の力はある。なら、一人ずつ、確実に。

「おねーちゃん、大丈夫?」

「こいし、手伝って欲しいことがあるの」

「うん! いいよ」

さとりはこいしの手を握り、地霊殿を飛び出す。

きつともう時間はない。

神さま、私は最期の家族を守る為に、家族を殺します。

覚悟を決めた少女の華奢な手に握られた短剣は、地底の夜景を映して輝いていた。

「迷いの竹林」

少年を追い、幻想郷の民を連れていた紫は竹林の前で足を止めていた。

逃げる場所としては完璧だ。だが、完璧であることこそが問題だった。

この疑問もおかしくない。何故なら、この少年はあまりにも幻想郷を知りすぎている。

彼は外来人だった。それは確定している。なのに何故、ここまで正確に幻想郷の土地を理解しているのか。先程までの瞬間移動は恐らく自らの座標を変更していた。となれば、変更後の座標も知っているということになる。

最初の数回の移動は幻想郷の最北端の結界前、その次は最南端の結界前。

偶然にしては出来すぎている。そして最後にここだ。迷いの竹林。身を隠すには丁度いいだろう。だが、あれだけここを破壊すると言っていた人間が何故逃げ回るのか？　まるでなにかを待っている様にも思える。能力関係ではなくないだろう。彼の能力は対象を変更する能力。時間は関係ない。ならばなぜ。

「紫、永琳に連絡を入れたわ。優曇華が行くみたいよ」

「わかったわ。今のうちにここを包囲、また移動したら連絡を入れるわ」

「了解」

博麗の巫女と白黒の魔女、人形の魔女が竹林の南側、西側に吸血鬼と七曜の魔女、東側に半霊の剣士と吸血鬼のメイド。

全員幻想郷では屈指の実力者。異変解決もかなりこなしている。だが、何故か不安だった。相手はただの人間。少し能力が強い程度。能力の強さなら吸血鬼のメイドの方が強力だし、腕力なら私の様な妖怪には敵わない。なのに何故、これ程に警戒しているのか。

「貴方ですね。異変の主は」

「そう思う？」

「ええ」

竹林の中では既に元凶が発見されていた。黒い外套に身を包み、握られた短剣は月光を赤く濡らしている。

「さようなら」

握っていた拳銃を構える。向けられた彼に一切の動揺は無い。異常だ、ただの外来人と聞いていたが。彼女もまた軍人だ、構え、動き、それらを見れば素人かそうで無いかを理解することは当然できる。その彼女が下した判断、それはこの敵は軍人では無いが腕が立つとい

う事。

竹林に銃声が響く。命中、頭に当たった。いくら腕が立つと言えどこの距離からの銃弾を躲す手は無い。地面に倒れた少年の生死の確認に入る。

その少年の腕が糸線に操られる人形のように跳ね上がり、手に握られていた拳銃が硝煙をあげる。

「忘れていた、ここはお前らの領地だったな」

想定内だ。いや、予定通りといった方が良いだろうか。

風だけが竹をゆすり、葉を擦らせる。この状況でもなければ静かに茶でも啜って寝たい。だが、状況はそんなに和やかではない。

「一体、なんのつもりですか？ 貴方も妖怪ならここを破壊するとうか事の意味はわかっている筈です」

「当然わかってるさ。でも俺はこの世の中が気に入らない。少数を虐げ、多数が勝つ。それに俺は人間だ。ここが壊れようとうなるうと意味はない」

「人間は、あの至近距離からの銃弾で死にます。貴方は人間じゃない」「人間でさえも、恐れを手に入ればこの世界では強者になれる。その為に、村人を抹殺した。今なら妖怪よりも俺の方が恐れられてるんじゃないか？」

嘲笑気味に言い放ち、短剣を握る。そうは言った物の状況は良くない。いくら畏れを手に入れたからと言ってそれほど脅威的に強くなる物では無かった。異形化の方が数十倍は強い。

「わかりました。貴方は明確に敵ですね。駆除します」

正面の少女も拳銃を構える。能力行使の動きはないが、彼女の能力もかなり凶悪だ。一度決まれば恐らく無事では済まない。だがこちらにはサードアイがある。いつでも一手先が読める。これは能力を主に使う敵にとっては言うまでもなく大きなアドバンテージだ。

「ハアッ！」

彼女の選択は近接戦闘。銃を持ったまま流れるように行われる蹴り、殴り。デタラメではない、一つの格闘術として出来上がっていた。「軍人か何か？」

「どうでしょうね」

確定だろう。捌けてはいるが、重い。このままいけば押し込まれるのはこちら側だろう。あまり好きではないが。仕方がない。

土を拾い、拳銃へ。右手に銃を構え、左手に短剣を構える。

「貴方もですか」

こちらを真似るように彼女もベルトから取り出した短剣を握る。

古明地さとりは地底からやつのことで地底からつながる洞窟から飛び出していた。地上も夜を迎えていたようで星明りが世界を照らし、暗い世界に僅かな明かりを与えている。

「彼はどこにいるのかしら」

「どこだろうね、でももうきつと戦ってるはず」

古明地姉妹が彼を探す間、彼は優曇華と格闘戦を繰り広げていた。組み合いながら続け様に放たれる彼の銃弾は彼女の狂気の瞳によって少し弾道をずらされ当たらず、また、彼女の弾丸も彼と衝突する瞬間に水に変えられる為ダメージになっていない。

お互いに一度距離を取り、再度睨み合う。

「キリがないですね」

「奇遇だな。俺もそう思ってる。だが、もうかなり時間も稼いだし、ここでお暇しようか」

「逃がしませんよ」

銃弾を放つと同時に彼に詰め寄る。動かない彼に短剣を突き刺し、横へ引き裂く。だが、その身体が泥の様に溶けたかと思うと背後に現れた彼によって意識を飛ばされた。

「覚悟は決めた。あとは体が付いてくるかって感じだな」

おそらく四方は囲まれている。どこから出ても結局外にいる奴らとの戦闘は避けられない。一人ずつ相手することはまず無理だろう、戦っているうちに援軍が間に合う。小細工も恐らく通用しない。なら、さとりが来るまでの間、耐える他ない。

「何？？」

竹林から上空に一つの影が飛び出した。空は既に黒に染められ、その黒いパレットに散りばめられた星だけが周囲を照らす。

「今俺に出来る事を全力で」

後方から光と共に虹色の光線が迫り、左からは燃え盛る火の玉、正面には賢者が現れ、次の瞬間には周囲をナイフに取り囲まれていた。絶望が迫る中、彼の表情に曇りは無い。そのまま、光に包まれていく。

「まあ、これでは死なないわよね」

光の中から現れたのは無傷の少年、姿を現した彼を四方から集まった住民が包囲する。

「諦めなさい、ゲームオーバーよ」

「それはそうだろうか？」

「何を今更するのかしら？」

「想起」

自らの記憶を呼び起こし、それを現実へと変更する。荒技に他ならないが、今はそれしかもう手が無い。呼び起こすのは当然異形化していた記憶。

「何よこれ、紫?!」

少年だった筈の物が変容していく、骨が折れ、血が吹き出し、肉が裂ける。筋肉が膨張し、形を失い、次第に形を帯び、最後には闇夜に溶ける竜となった。しかしその竜は奇妙に歪んでいた、大きさは少年のまま、鱗も全身までは覆っていない。まるで人になりきれなかった悪魔を彷彿とさせるようなその外見は見るものを恐怖に、絶望に陥れる。

飛びそうになる意識を必死に押さえつける。これは余りにも危険な賭けだったがする他無かった。それでもしなければさとりが来るまでの間、持ちそうにない。

「マスタースパークー」

少々離れた位置から魔法使いが腕を前に掲げ、宣誓と共に作られた魔法陣から虹色に煌めく光線が放たれるが、それを目視した彼の眼前に魔法陣が展開されたかと思うと、その光線に対してほぼ同威力の漆黒の光線が放たれる。

「何?!」

彼女が驚き、撃ちやめると同時に彼の光線も止まる。

「これならッ！」

停止した世界の中、メイド服の少女が彼の前にナイフを並べる。だが、突然その停止した時間の中でバケモノが動き出し、ナイフに合わせるように黒い短剣が並べられる。時間の解除の瞬間に大量の鉄のぶつかる音が至る所で響き、行き場を失った武器が落下していく。

それを見た吸血鬼が彼の背後に回り、首を絞め上げる。確実に決まっているように見えた、抜けることは出来ないはずだった。だが、誰一人気づかぬ間に吸血鬼と彼の位置が入れ替わり、首を締め上げられた吸血鬼は気を失って落下していく。それを見たメイドが時を止め、助けに入るが、その吸血鬼に手が触れる直前に少年が立ち塞がる。ナイフを持ち、襲いかかるが、受け流されると腹に鈍痛が走りそのまま意識を失う。

再び動き出した時の中で、気づいたように重力が吸血鬼とメイド地面へと連れて行く。ふと周囲を見ると周囲に火や水、土、木片、金属が漂っている。そしてその全てが意思を持ったかのように少年に襲いかかる。数分に及ぶ天災の様な攻撃の後、残っていたのは無傷の少年。少年は手を突き出すと、その下に灰色の球体が現れる。それは消えたかと思うと七曜の魔女の眼前に現れ、闇とともに影が一齐に襲いかかり、本能的に距離をとってなんとか応戦していた七曜の魔女も重力に運ばれていった。

急に体の自由が効かなくなる。彼の視線の先には人形の魔女、彼女の手から見えない様な糸が彼に放たれ絡みついていて。そんな状態の背後から煌びやかな灯りがさしたかと思うと虹色に輝く象を飲み込むほどの太さの光線が放たれる。だが、彼に当たる直前で彼女の手を持つ機械の様な物が少年の前にも展開され、漆黒の光線が放たれる。それは彼女の光を瞬時に呑み込み、白黒の魔女も呑み込んでいった。

それを見送った少年は黒いスキマを作るとそこに入っていった。

「終わらせない気らしいわね」

「みたいね」

残された巫女と賢者は追うことはしなかった。想定外すぎる戦力。とても幻想郷の猛者といえど二人でなんとかなる戦力ではない。

「一つ聞いていい？」

地面の落下した友人を助けに行こうとした直前で後ろを向いた巫女が声をかけてきた。

「彼、本当にここを破壊する気あるの？」

「さあね。ただ、なんにせよ危険人物。監視は続けておくわ」

「そう」

去っていく巫女の背を見送って賢者はスキマへ入っていく。

「ちくしょう。」

名もない森の奥、人の姿に戻った少年は血を吐いていた。

無事で済むとは思っていなかったが、ダメージが想像以上に大きかった。肉体に対してもそうだが、精神が最も危険だった。感情を持っていないなら未だしも、感情のある今はもう長く異形化は持たない。あれ以上続けていたらただの異形と化していただろうし、この幻想郷には異形がない。俺が本当の意味で異形化すればここもあの世界と同じ道を辿る。

「見つけました」

「新手か」

そんな彼の前にさとりとこいしが現れる。これ以上ない完璧な夕イミンだ。俺は弱っている、仮に俺が殺された所を見られたとしても、こいしが居る為、基本的には無意識と言いつく。訳が付く。

「さようなら」

消えたかと思うと突然眼前に現れ、胸部を渡した短剣で一突き、すぐに抜き、首へも短剣が深々と突き刺さる。呼吸は出来ず、胸元からは血が吹き出す。短剣が抜かれ、まるで生まれたての子鹿のようにふらつくと、地面に仰向けに倒れた。身体がだんだんと冷えていく感覚、末端から何も感じなくなる。

そこで能力行使、自分の存在を犠牲に、幻想郷の全住民から覚妖怪の記憶を消去。

目を閉じ、物語の終わりを待つ。さとりは罪を犯さなかった、それ

どころかここを救った英雄だ。きつと大きな宴が開かれるだろう。

そんな彼を見るさよりの目には薄っすらと涙が浮かぶ。その訳は彼女にも分からない。同族を殺した事による罪悪感なのか、何処かにあった彼との思い出なのか。その涙が彼の瞼に落ち、地面に滴り落ちていく。

「これでよかった」

聞き取れるような声では無かった。無理もない。喉が切断されているのだから声を出すことすら本来は不可能に近い。

終幕に満足した彼にこれまでの記憶が蘇り始める。それは草原を駆ける馬のように美しく、映える物ばかり。とても罪人の記憶とは思えない。自らの最後を感じ取り、目を閉じて、愛してしまったものにさよならを告げた。

## エピソード

幻想郷にとつての最大の悪魔を殺した彼女は当然讃えられ、地底にて大きな宴が開かれた。そして質問責めに会うことになる、内容は幻想郷の猛者を同時に相手にしながら返り討ちにしたような化け物をどうやって殺したのか。返り討ちと言っても不思議なことに被害者に怪我はなかったらしい。彼が存在ごと消した影響だろうか。それか彼自身に敵意がなかったのか。

「こいしの能力で無意識に入って不意打ちでなんとか倒せました。でも皆さんのお陰です。やはり相当体力が削れていた様で隙がありませんでした」

決まっていた答えだ。歪みのない純粹な事実。だが、彼が私に殺されるために手を抜いたというのも事実。抵抗すら無かった。

そしてそれ以降、こころを読む能力は確かに他人の記憶から消えていた。誰も私の能力は覚えていない。覚妖怪の能力自体をと言った方が良いだろうか。

退屈な時間が過ぎ去り、皆が酒に酔いつぶれながらもスキマで連行され帰っていく。最後に残った賢者には感謝を述べられ、また一人になった。正直、賢者には疑われると思っていたが、ただ、感謝しか伝えられなかった。

氷に閉じ込められていた楓は今現在河童によって救出作業が行われている。恐らく彼女も行き場がないだろうから地底で受け入れるつもりだ。

「おねーちゃん」

愛しい妹。彼女にも真実は伝えていない。でも、いつか気づくだろう。周囲に対応の変化によって、そしてこいしの瞳がまた開くことはあるのだろうか。ただの理想に過ぎない悲しい話だが。この彼の犠牲によってもたらされた変化は私よりもこいしに影響を及ぼすだろう。彼女はわたしと異なり、外との交流を望んだ。その結果、絶望し、後悔し、切望していた友人の側から一方的に切り離された。だが、今であれば、もしかすると彼女の夢が叶うかもしれない。酒に酔った妹

を寝かしつけ、その可愛らしい額にキスをして部屋を後にする。

皆が寝静まった館はとても静かで、地面で寝ているペットを踏まないように気をつけながら外へ出る。静かに水を出し続ける噴水を見た後に庭の端へ、そこには一輪の赤い花。その周囲にはまるで避けるかのようになにも咲かずただ一輪、孤独に咲いていた。

「彼岸花：：」

これが彼の残したものだとしたらなんという皮肉だろうか。彼は存在ごと消えた。恐らく彼岸にも辿り着くことは無い。どこに行くこともなく、彼は永遠に幻想郷にとっては最悪の悪魔として語られる。けれど、現実はまだ一度世界にチャンスを渡した英雄。その事実を知るのは私だけ、そして誰にも語る事が出来ない。

そう。これは私だけに綴られた最後の家族の【英雄譚】

東方贖罪譚

— 3人目の覚り妖怪 —

END